

博士論文

予持概念を手掛かりとした
フッサール時間論の包括的解明
(A comprehensive explication of
Husserl's Time-Theory
by way of the concept of protention)

2020年9月

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程

柳川 耕平

立命館大学審査博士論文

予持概念を手掛かりとしたフッサール時間論の包括的解明

(A comprehensive explication of Husserl's Time-Theory

by way of the concept of protention)

2020年9月

September 2020

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期課程

Doctoral Program: Major in Humanities

Ritsumeikan University

柳川 耕平

YANAGAWA Kohei

研究指導教員：谷 徹 教授

Supervisor : Professor TANI Toru

目次

凡例.....	3
0. 序論.....	4
0.1. 時間という事象の「近さ」、「多面性」.....	4
0.2. フッサール時間論の「複雑さ」「多面性」.....	6
0.3. 「補助線」としての予持 <i>Protention</i>	9
0.4. 本研究の目的、研究方法、構成.....	12
第一部 中期時間論における予持.....	14
1.1. 予備考察——舞台と基本的構造.....	15
1.1.1. 考察の舞台——ヒュレー的領域.....	15
1.1.2. 基本的構造——体験の自己意識的構造.....	24
1.2. 『ベルナウ草稿』における予持.....	27
1.2.1. 連続的把持（把持における二重の志向性）.....	27
1.2.2. 連続的予持.....	32
1.2.3. 予持と把持の「絡み合い <i>Verflechtung</i> 」.....	38
1.2.4. 予持・把持の無限性.....	41
1.3. 『ベルナウ草稿』における体験流の時間的秩序.....	45
1.3.1. 絡み合いについての詳細な検討.....	46
1.3.2. 絡み合いによる体験流の一貫的連続性.....	50
1.3.3. 時間様相の成立.....	53
1.4. 第一部のまとめ 中期時間論における予持概念と体験流の時間的秩序.....	62
第二部 初期時間論における予持概念.....	64
2.0. はじめに.....	64
2.1. 初期時間論における予持概念の特徴づけ.....	65
2.1.1. 予持概念の基礎的特徴と初期時間論の予持概念に固有の特徴.....	65
2.1.2. 初期時間論の予持概念に固有の性格の検証.....	68
2.1.3. 初期時間論の予持概念が登場する記述の検証.....	72
2.2. 初期時間論の性格、中期時間論の性格.....	80
2.2.1. 初期時間論の予持と中期時間論の予持の差異.....	81
2.2.2. 初期時間論における体験流と予持①（『時間意識講義』 §§34-39 の議論）.....	83
2.2.3. 初期時間論における体験流と予持②（体験流の二つの統一）.....	88
2.2.4. 初期時間論における体験流と予持③（予持の不在）.....	89
2.2.5. 1907年以降における暗黙的な自己意識的予持.....	92
2.2.6. 『受動的綜合の分析』における予持概念.....	94

2.3. 第二部のまとめ 初期時間論の主要問題と中期時間論の主要問題	102
2.4. 【補論】初期と中期における時間位置の個体化.....	104
2.4.1. 初期『時間意識講義』における時間位置の個体化（議論の背景）	106
2.4.2. 初期『時間意識講義』における時間位置の個体化議論の吟味	111
2.4.3. 中期『ベルナウ草稿』における時間位置の個体化①（明示的記述の確認） ..	112
2.4.4. 中期『ベルナウ草稿』における時間位置の個体化②（議論の再構成）	115
2.4.5. 初期と中期の時間位置の個体化の議論の比較、検討	120
第三部 後期時間論における予持	121
3.0. はじめに.....	121
3.1. 後期『C草稿』における予持概念.....	121
3.1.1. 後期『C草稿』における予持についての記述	122
3.1.2. 後期における予持の希薄さ	130
3.1.3. 中期時間論の予持と後期時間論の予持.....	135
3.2. 中期時間論と後期時間論における自我概念の比較.....	136
3.2.1. 『ベルナウ草稿』における同一的・単一的自我	137
3.2.2. 『ベルナウ草稿』における非 - 単一的自我.....	139
3.2.3. 『C草稿』Nr. 32における二種類の現在、二種類の「私」	145
3.2.4. 中期・後期における自我概念の比較.....	151
3.3. 第三部のまとめ 中期時間論における主要問題と後期時間論における主要問題..	153
結論.....	155
参考文献（直接言及していないものも含む）	159
1. フッサール全集（Husserliana. Edmund Husserl Gesammelte Werke）	159
2. フッサール全集資料版（Husserliana Materialien）	160
3. フッサール全集以外の著作	160
4. その他の文献（外国語→日本語の順）	160

凡例

- ◆フッサールへの参照ないしフッサールからの引用は、『経験と判断 *Erfahrung und Urteil*』からのものを除き、全て『フッサール全集』からのものである。引用・参照に際しては、全集の巻数を大文字のローマ数字で（『経験と判断』からのものは EU と表記、未公刊草稿からのものは草稿番号を表記）、頁数をアラビア数字で表記する。ただし、各巻の「編者序文」の頁数は小文字のローマ数字で表記する。
- ◆引用文中における〔 〕は引用者による補いを、〔= 〕は引用者による言い換えを、〔…〕は引用者による省略を、〈 〉は編者による補いを表す。（ ）はフッサール自身によるものである。また、「 」はフッサールによる強調符（““”）である。ただし、上の原則を外れる場合はその旨を適宜記する。
- ◆邦訳のある文献に関しては適宜参照させていただいたが、論述の都合などで訳文を変更させていただいた箇所もある。訳者の方々のご海容を乞う。

0. 序論

本稿はフッサール時間論の各時期における予持概念をそれぞれ特徴づけ、その予持概念の特徴づけをもとに、フッサール時間論の各時期の特徴づけを試みる論考である。しかし、なぜフッサール時間論を時期ごとに特徴づける必要があるのか。そして、なぜそこで予持概念に着目するのか

0.1. 時間という事象の「近さ」、「多面性」

そもそも「時間とは何か」という問いは哲学における最も困難な問題の一つであると言えるだろう。というのも、ここで問われている時間という事象には、特有の扱いにくさがあるからである。その扱いにくさの特徴をよく表現しているのは、やはり、有名なアウグスティヌスの言葉であろう。

もし誰も〔時間とは何であるかを〕私に問わないのであれば、〔時間とは何であるかを〕私は知っています。誰かにそれを説明しようとする、私は知らないのです。

(アウグスティヌス『告白』第11巻、第14章)

時間という概念は哲学に固有の専門的な概念ではない。むしろ我々は日常的に時間という概念を用いており、しかも不明瞭な概念として時間という概念を用いているわけではない。しかしそうであるにもかかわらず、いざ時間とは何かと問われると我々は絶句してしまう。この「絶句」の理由の一つは、時間事象の異様な「近さ」にあるのだろう。時間は確かに我々にとって身近な事象ではあるのだが、しかしあまりに身近すぎるのである。我々の日常的な知覚経験——音楽を聴く、映画を見る、食事をする、花の匂いに気が付く、握った小石の感触を確かめる、など——、それ以外の判断や意志や欲求などの経験も全て時間の中で行われると言って良いだろう。こうして見ると我々の経験や体験、生一般は余すところなく時間的であり、むしろ非時間的なものを探す方が困難なほどだ。しかし、近すぎるものほどかえって捉え難い。眼球表面の小さなごみの形を見ることができないように、耳の血管の音が分からないように、身に纏う衣服の感触や自分の体臭に無頓着なように、我々のまなざしは「身近」なものを素通りしてしまう。そして時間という事象の「身近さ」は上記のものとは異なる。時間は身近なのに謎めいているのではない。身近だからこそ謎めいているのである。

さらに、時間事象の扱いにくさは「近さ」にのみ由来するのではない。その「多面性」も時間という問題を哲学史上の難問たらしめている。時間に関する諸々の言語表現や概念、例えば「400m 走のタイムを計る」や「残された時間」や「時間に間に合う」や「時間旅行」の中で見られる「時間」という言葉は、相互に共通の要素、例えば、流れるという動性を持つ、我々がその中で生きている、何らかの計量を許容する（場合がある）、などを持ちつつも、相互に微妙に異なり合っている。この多義性は、他の多くの表現のような——例えば、

「水に流す」「水も滴るいい男」「水が合う」「水掛け論」のような——比喩による意味の広がりではない。上記の「時間」という言葉はどれも時間それ自体を指しながら多義的なのであり、さらに言えば、どれも（時間についてのある種の真理を言い当てながら）それ単独では正しくない。上記はあくまで「時間」という言葉の事情であるが、しかしこれは時間事象それ自体の事情を少なからず反映していると考えられる。すなわち、「時間」という言葉と同様（あるいはそれ以上に）時間事象は多様な側面を持ち、各側面はあくまで時間事象の「一側面」に過ぎず、それ単独では時間事象全体を代表することはできない。そしてそれぞれが「一側面」に過ぎないにも関わらず、どれも時間という事象にとってなくてはならない側面なのである。例えば、時間は過去・現在・未来という三つの様相を持つが、これらのうちのどれが時間にとって本質的か（反対の言い方をすれば、どれが無くても良いものか）という問いはナンセンスではないだろうか。あるいは時間の流れとして、それぞれの主観が感じる主観的なものと、時計によって一義的に規定可能な客観的なものとが考えられるが、しかしこれらのうちのどちらが仮象でどちらが真正か、ということに最終的な決定を下すことはできないだろう。もちろんこれらの問いに対し、一定の留保をつけて答えを出すことは可能なのかもしれない。しかし、そのようにして導出された「時間」なるものは何らかの見方を前提した際の「時間」であって、掛け値なしの時間そのものというわけではない。時間という事象は様々な側面が緊密に結び合うことで成っているのであり、それらの側面のうちのどれかを言い落ただけで、そこで語られたものは、本当に語りたかった時間、「誰も私に問わない」時に私が知っていた時間、言うなれば時間そのものとは別のものになってしまうのではないだろうか。この意味において時間とは部分部分が不可分的に連関し合った全体的事象であり、しかも極めて多くの側面を持った事象と考えられる。哲学的問題の中でも、時間のこの分割不能な「多面性」は特異と言え、この「多面性」は人を途方に暮れさせる。

このように、時間という事象の「近さ」と「多面性」によって、これに相対する者は目を眩ませられ、茫然とし、「絶句」する。「時間とは何か」という問いに取り組むとは、これらの「近さ」と「多面性」を克服し、「絶句」を退けようとすることを意味する。哲学史上には時間の問題に取り組んだ哲学者が多くいるが、彼らはそれぞれの仕方で「絶句」と格闘している。現象学の始祖 E.フッサールも「絶句」に立ち向かった哲学者の一人である。彼は1890年代初頭から最晩年の1930年代に至るまで約40年間、時間について記述を重ねた。もちろん、40年も記述を重ねたフッサールとて時間という事象を余すところなく語りつくせたわけではないし、また、時間の本質に関して、「（時間とはつまるころ〇〇である」というような）明確なテーゼを残せているようにも見えない。それどころか彼の思索は迷走や錯綜に満ちているとすら言えるが、それでもフッサールは時間という問題に粘り強く取り組み続け、数々の重要な知見を遺した。その意味でフッサールは「絶句」を討ち払い、それどころか、時間について「饒舌」であったとすら言えるかもしれない。

なぜフッサールは時間のもたらす「絶句」に抗うことが出来たのか、あるいは如何にして彼は時間の「近さ」と「多面性」を克服したのか。これは彼の創始した現象学という哲学に

依るところが大きいだろう。時間は確かに目を眩ませる「近さ」を持ってはいるが、しかし如何に捉えにくいとはいえ、これは決して我々から遠く隔たってはならず、間違いなく我々の日常的経験の中に横たわっている。また、時間は様々な部分が緊密に結びついた「多面的」な事象ではあるが、しかし裏を返せば、各部分が不可分に結び合っているがゆえに、(仮に可能であればの話だが)これを踏破しきるために何らの飛躍も必要としない。翻って現象学は、あらゆる前提を遮断して我々の日常的経験から出発し、目の前のありのままを一つ一つ記述していく哲学として特徴づけられる¹。このような現象学にとって、上記の特徴を持つ時間という事象は相性の良い問題なのではないだろうか。そして現象学者たちの中でも、その眼差しの鋭さ、歩みの地道さと執念深さ、そして時間事象の途方もない「多面性」に怯まない勇敢さにおいて右に出る者の無いフッサールであれば、時間の内奥に誰よりも接近できたのではないか。だからこそ、フッサールの時間論の中にこそ、時間という事象の正体に迫るための手掛かりが見出せるのではないか。フッサールの時間論を研究する意義はここにある²。

0.2. フッサール時間論の「複雑さ」「多面性」

ところが、フッサールの時間論を紐解けば時間という事象の正体がすぐに分かるというわけではない。確かに時間に関する彼の記述は極めて繊細であり、時間という事象そのものを見据え続け、安易なレトリックや思弁に逃げることのなかった誠実なものであるということは疑い得ない。だがその繊細さと誠実さ故に、フッサール時間論は極めて理解しにくい。すなわち、彼がそのつどの記述で捉えようとしているものがしばしばあまりに微細であるため、記述それ自体が難解になったり、さほど重要でないように見える記述が実は決定的な意義を持っていたり、あるいは同じ事柄を扱っているように見える記述同士が実は異なる事柄を扱っていたり(もちろん本当に同じ事柄を扱っている場合もある)、ということが散見される。そして、「多面的」な時間という事象の隅々を丹念に記述していったがゆえに、結果的に彼の時間論自体も多面的なものとなっている。時間という事象に対する真摯さゆえに、彼の記述は、時間事象の側面の数に合わせて多様化・肥大化し、また側面同士の連関の複雑さに合わせて複雑かつ難解なものになっている。彼の記述はあらゆる意味において時間の「正確な」スケッチだと言えよう。

¹ 谷[1998] (10-11 頁)、田口[2014] (14-20 頁)などを参照せよ。

² 近年、物理学の分野から時間の問題を扱う研究・文献が幾つか出てきている。例えば、ロヴェッリ[2019]や、吉田[2020]などである。これらはあくまで物理学的時間論の一部だが、興味深いことにこれらの研究は物理的に実在する時間を否定し、人間の意識こそが時間を作り出しているのだとしている。これらの研究が想定する〈意識〉と現象学の想定する意識との間には小さくはない隔たりが横たわっているのかもしれない。しかしそれでも、物理学的研究が時間の謎を意識研究に託していることは間違いないのであり、この文脈を踏まえると、現象学の担うべき役割はむしろ近年高まりつつあるのではないかと考えられる。

このような多様・膨大かつ難解なフッサール時間論に対し、これまでに多くの先行研究が解明を試みてきた。例えば Kortooms [2002]はフッサール時間論を三つの時期に分けつつ、時間論以外のテキスト(1904/1905年冬学期の知覚、空想、像意識についての講義草稿など)や、さらにそれまでの研究がほとんど扱ってこなかった『時間意識についてのベルナウ草稿』(2001年に全集 XXXIII 巻として公刊、以下『ベルナウ草稿』と略記)も含め、それぞれの時期のテキストを通覧している。また、フッサールの時間論に影響を与えた他の哲学者(ブレンターノ、マイノング、シュテルンなど)についても触れており、これにより、各時期のフッサールの問題意識に迫っている。研究全体の総括を行っていないためやや全体のまとまりを欠いているようにも見えるが、調査の詳細さという点での貢献度は高く、多様にして難解というフッサール時間論の特徴を踏まえれば、敢えて安易な総括を避けた彼の姿勢は誠実と言えるだろう。また、フッサール時間論のみに専門的に取り組んだ研究ではないが、谷 [1998] の論述にも注目すべきであろう。谷はフッサールの用いた概念に揺らぎがあることに注意を払いつつ、フッサールが扱った「時間」を、事象内容によって「(一) 表層、(二) 中層、(三) 深層」(377頁)の三つに区分した(「表層」は客観的世界時間に対応する「内在的時間」の層であり、「中層」は志向的体験そのものに内在する、知覚の把持 - 原印象 - 予持という時間的構造に基づく、未だ客観的ではない時間の層であり、「深層」は「中層」を成す予持・把持といった志向性の働きが「ぎりぎり最低限度」になった原受動性あるいは先時間の領域である(377-381頁参照))。そしてこれらの三層を自我の構造——谷によれば、自我もまた三層構造を持つ——と対応させている。谷の研究における時間論を扱った部分は、研究全体の一部(ただし重要な一部)でしかないが、しかし時間の各層がそれぞれどのような関係にあるかを明解に提示しており、事象そのものに迫った研究と言える。これ以外にもフッサール時間論における重要概念を扱った研究として、K. Held[1966]や L. Rodemeyer[2006]を挙げることが出来る。Heldは「超越論的主観性の存在様態」としての「生き生きした現在」を、当時はまだ未公開であった後期『C草稿』に則して明らかにしている。すなわち、超越論的主観性が流れつつ立ち止まるという特有の動性において自らを時間化していくということ、さらにこの「生き生きした現在」における超越論的主観性と世界、他者との関係が明らかにされていく。Rodemeyerは時間と間主観性との関係を、中期『ベルナウ草稿』や後期『C草稿』などの本格的読解に基づいて解明している。この研究においては未来へ向かう志向・予持が重視されている。すなわち、予持は新しい現出を受け入れる枠組みとして機能し、また触発性とも密接に関連しているのだという。そして予持のこのような性格により、主観性は他の主観性との関係を構築し、これにより主観性は間主観的になるのだという。Heldも Rodemeyerも概念の揺らぎに注意を払ったり、フッサールの記述を時期ごとに区別して扱ったりということにはあまり関心がないように見える。つまり、これらは超越論的主観性や間主観性をフッサール時間論の観点から扱った研究と見るべきであり、フッサールが時間という事象をどのように捉えていたか、ということは直接的には問われていないと言えるだろう。とは言え超越論的主観性も間主観性も、特にフッサール後期時間

論においては、時間と密接な関係を持っていることは間違いないのであり、その意味で彼らの研究の貢献が極めて大きいことには疑問の余地は無い。

以上のように、総じてこれまでの先行研究は、フッサール時間論の全体を一言で言い表すということ避け、彼の時間論を時期や事柄によって区分し、フッサールの思索の変遷やそれぞれの事柄の関係を示したり、あるいはそれらのうちの一部を取り出して別の問題との関連を論じたりするというものであった。先行研究のこのような方針は批判されるべきものではない。というのも、先述のように、フッサール時間論が時間という事象の「多面性」を反映している以上、「フッサール時間論は〇〇ということ述べている」や、「フッサールは時間を〇〇と捉えていた」といった単純、あるいは安易な総括は不可能であろうし、またそのような総括は、結局、時間の本質を捉え損なうものになりかねないからである。むしろ、単純な総括を避けた上記の諸先行研究は、フッサール時間論、ひいては時間事象そのものに対して極めて真摯に向き合っていたとすら言える。

しかし、フッサールの時間論が時間事象の真相に触れるものだとしても、フッサール時間論自体に時間と同じ「多面性」が残ったままになっているようでは、結局のところ時間事象の解明は進んでいないのではないだろうか。もちろん、フッサールの眼力の鋭さと事象に対する執念によって時間の「近さ」がもたらす捉え難さはかなりの程度無力化されたと言えるだろう。また、彼の記述の難解さに関しても先行研究によってかなりの程度が解消されたと言って良い。しかしそうは言っても、先行研究はフッサール時間論の各部分を解明するのみで全体の総括を行わないのであるから、彼の時間論の「多面性」は手付かずのままということになる。フッサール時間論の「多面性」は時間という事象そのものが持つ「多面性」に由来するものであり、時間事象の「多面性」こそが時間の問題を哲学史上の難問たらしめている根源である。そのように考えると、フッサール時間論の「多面性」を何とか扱うことができれば、少なくとも、時間事象そのものの「多面性」を扱ううえでの手掛かりは得られるのではないだろうか。

では、この「多面性」をどのように扱うべきか。先ほども述べたように、この「多面性」を「縮減」してしまうと、つまり、彼の時間論のどこか一部に彼の時間論全体を代表させる、あるいは安易な総括を行うなどの方策を採れば、彼の時間論が捉えた時間事象を矮小化し、その本質を取り逃がすことになりかねない。この「多面性」は確かに厄介ではあるが、多面的ではない「時間」はもはや本来の時間とは言い難い。だとすれば、我々はこれに何らかの「補助線」を引き、手に負えない「多面性」を扱いやすい「多面性」にするべきではないか。つまり我々が行うべきは、フッサール時間論の（ひいては時間事象自体の）「多面性」自体はそのままに、彼の時間論の各部を（その特徴を維持したまま）整理することであり、そのような各部分を相互に関連付けることであろう。このような処理を経て初めて、フッサール時間論は多様な、しかし相互に関連し合う諸側面を持つものとして、つまり、不完全にはあるが、まさしく時間事象それ自体を体現するものとしてその全貌を現すのである。くどいようだが、上記を完璧に遂行できたとしてもフッサール時間論の本質なるものが取り出せ

るわけではなく、彼の時間論は相変わらず「多面的」なままであり続けるだろう。しかし、上記の処理を遂行したとき、我々は、彼の時間論の各部分が如何に異なり合っているか、そして同時にそれらが如何に結びつき合っているかを目の当たりにするのである。つまり、フッサール時間論（ひいては時間事象そのもの）の「多面性」を、まさに「多面性」として目の当たりにすることになるであろう。

この整理と関連付けを行うためには、フッサール時間論の各部分（ひいては時間事象の各部分）の特徴を浮かび上がらせるような、しかしそれでいてそれらの各部分を統一的・共通的に見通すことが出来るような「補助線」を引くことが必要である。では、我々はいかなる「補助線」を引くべきか。

0.3. 「補助線」としての予持 *Protention*

上記の「補助線」として、本研究では予持という概念に着目する。つまりこの概念に着目することによって、フッサール時間論の各部分の特徴を際立たせ、同時にこれらの諸部分の間に一定の統一性を見出していくことを目指す。しかし、なぜこのようなことが可能になるのか。なぜ予持が「補助線」としてふさわしいのか。

そもそも予持とは何か。Rodemeyer[2006]の総括の際にも少し述べたが、敢えてもう一度最低限の定義を与えるならば、予持とは「未来へ向かう志向」と定義できる（これ以上の詳細な定義は本論で扱う）。この志向は、過去へ向かう志向である把持 *Retention*、および、顕在的現在の瞬間において生じたものを捉える働き（あるいはそのようなものが生じるといふことそのもの）である原印象 *Urimpression*・原現前 *Urpräsentation* と共に日常的知覚経験³において常に絶えず働いているとされている。すなわち、我々の日常的知覚においてはその都度の瞬間において絶えず新しいものが到来し、それが原印象・原現前の働きにおいて受け取られている。瞬間ごとに到来してくるものは絶えず過去へと「沈み込んでいく *versinken*」が、しかし完全に我々から離れ去ってしまうわけではなく、把持の働きによって保持される。また、これらは我々に対して到来する前から予持の働きによって予め捉えられている。このように、現在を志向する原印象、過去を志向する把持、未来を志向する予持が一体となって働き、我々の日常的知覚経験の時間的構造が成立している。フッサールはしばしば知覚経験を考察の出発点としており、その意味で知覚経験は彼の現象学にとって最も基本的な経験であると言える。この事情は時間論でも同様であり、初期から後期⁴に至るまで、フッサー

³ ただし、ここで言う「知覚経験」は〈対象を何かしらとして意味づける〉ような狭い意味での知覚経験ではなく、ただ何かを（場合によっては漠然と）見たり聞いたりしているような知覚経験をことを言わんとしているのであり、文脈によっては「体験」と呼んでも良いものである。

⁴ フッサール時間論の時期区分に関して、本研究では、フッサール全集 XXXIII 巻の *Einleitung* で R. Bernet および D. Lohmar によって提示された区分を採用する。すなわち、『内的時間意識の現象学』（以下『時間意識講義』と略記）（1904/1905）を中心として 1890 年代前半から 1910 年代前半までを初期時間論とし、『ベルナウ草稿』（1917/1918）を中心として 1917 年から 1920 年代

ルは多くの時間事象分析を知覚経験の分析から始めている、あるいは少なくとも知覚経験との連関において行っている。このような事情もあって、予持概念は、把持概念、(広義の)原印象・原現前/現在概念と共に、彼の時間論の全時期において見られる。

このように予持という働きは、フッサール時間論における最も基礎的な領域である知覚経験の基本的時間構造の一翼を担っているとされている。つまりフッサール時間論において、予持は最も基礎的・中枢的働きのはずであり、予持概念は、本来であれば、(把持概念や原印象/現在概念と同様)それなりに重視されるべき概念のはずである。ところが奇妙なことに、予持概念は必ずしも常に重視されていたわけではなく、さらに奇妙なことに、常に軽視されていたわけでもない。初期において予持は把持との類比によって扱われるのみであり、言及される回数も少ない。例えば、『イデーニ I』(1913)においてフッサールは我々の経験の時間的構造に関して、まず把持について、次いで予持について記述を行っている。もちろん、『イデーニ I』ではそもそも時間に関する記述自体が最小限なのだが、それを差し引いても予持および未来地平に関する記述の簡素さには驚かされる。

しかし、上記には諸々の変転の反対方向が付け加わる。すなわち、(以前に *Vorher*) には(あとで *Nachher*) が対応するのであり、諸々の把持の連続体には諸々の予持の連続体が対応するのである。

(III/1, 183)

ここでは、予持および未来地平が把持および過去地平と(志向の方向が逆とはいえ)同じ構造を持っているということが述べられている。そして直接的には述べられていないが、構造的な類似性を持つがゆえに、把持に関する記述は(志向の方向にさえ留意すれば)予持に関する記述に流用することが出来るという考えの下、『イデーニ I』における予持についての記述は引用のように極めて簡素に済まされている。『イデーニ I』ほどではないが、『内的時間意識の現象学』(以下『時間意識講義』と略記)における予持も、把持と同様の構造を持つとされており、固有の働きとして記述されていなかったと言って良いだろう⁵。

ところが中期時間論においては事情が一変する。例えば『受動的綜合の分析』の 1925/1926 の草稿に由来する箇所、フッサールは次のように述べている。

までを中期時間論とし、C 草稿群を中心として 1930 年代を後期時間論とする区分である (vgl. xvii-xix)。Kortooms[2002]もこれと同様の時期区分を採用している。

⁵ 初期時間論のテキストを収めたフッサール全集 X 巻において「Protention」「protentional」という言葉が用いられるテキストは、A 部(『時間意識講義』として 1927 年に刊行されたもの、元のテキストは 1904/1905 年の講義草稿、及び 1917 年のベルナウ滞在までに書かれた草稿) §14、16、24、40、43、44、補遺 III、VI、IX、XII、および B 部(『時間意識講義』には収録されていない、1890 年代から 1910 年代までの諸草稿) の Nr. 45 のみであり、言葉の使用回数も 20 回ほど(1917 年の『ベルナウ草稿』の直前に書かれた §24 を除外した場合は 15 回ほど)である。あくまで目安としての比較でしかないが、「Retention」「retentional」という言葉の使用回数は 200 回を優に超えており、このことから予持が等閑視されていたことが分かる。

この原発生の理論において、我々は把持についてのみならず、予持についても語らねばならなかった。知覚分析において——上記の観点においてそれは時間的所与様式の分析だったのだが——我々は、把持の役割に対して本質的に新しい予持の役割を既に観察したのであり、いくつかの動向においてそれらを記述したのである。

(XI, 73)

ここでは、予持の、把持にはない固有の働きについて述べられている。実際にフッサールは『ベルナウ草稿』（1917/1918）の時期から既に、時間構成における予持の固有の働きについて記述を行っていた（詳しい内容に関しては第一部で扱う）。これは『イデーニ I』や『時間意識講義』において見られた態度とは異なる。中期時間論において、予持の重要度は明らかに上がっている。しかしこの状況も長くは続かない。後期時間論において予持は再び（把持と共に）考察の中心ではなくなる。

このように、フッサール時間論において予持が占める地位と役割は時期ごとに変化しているのだが、この変化、あるいは変化の仕方には注目すべきであるように思われる。というのも、フッサール時間論が常に知覚経験に依拠し、かつ予持が知覚経験の基本的時間構造を成すのであれば、予持はどの時期においても一定の重要性を持つはずだと考えられるからである。実際、予持と同じく知覚経験の基本的時間構造を構成する把持は、後期時間論ではやや言及されなくなるものの、全時期を通してそれなりに重要視されている。また、（広義の）原印象／現在概念に至っては、全時期を通して極めて重要な概念として扱われていると言って良い。予持の重要度だけが一定ではなく、時期によって変化している。さらに、この変化の仕方も奇妙である。重要度の変化が一貫的であったのなら、つまり、最初は等閑視されていた予持が時代を追うごとに重要度を増していった、あるいはその逆であれば、これをフッサールの眼差しの深化（あるいは浅薄化）として考えることもできただろうが、実際はそうではなく、予持の重要度の変化は変則的なのである。中期で一度その重要性を強調された予持が、なぜ後期では淡泊な扱いを受けるのか、そもそもなぜ初期ではほとんど無視されていた予持が、中期では重要視されるようになったのか。これらの問いにフッサールの哲学的練度のみならず依拠して回答するのは難しいように思われる。

フッサール時間論のいずれかの時期を不純物として切り捨て、予持のこの変化について単純明快な一貫性を持たせる、という解決策を採らずに上記の変化を説明しようとするならば、それぞれの時期における予持の扱いの差はフッサールの「意図」によってもたらされたものだと考えるべきではないだろうか。つまり、たとえ全ての時期において知覚経験が扱われているように見えたとしても、彼はそれぞれの時期において知覚経験それ自体ではなく、それを透かしてそれぞれ別の事象を見ようとしていたのではないか。そして、その事象の相違が予持概念の変化をもたらしたのではないか。フッサールは予持の記述に関して気まぐれに手を抜いたり熱心になったりしたのではなく、常に自らが目標と定めた事象に真摯に向き

合っていたのだろう。初期にフッサールが相対した事象は予持に言及せずとも記述できる事象であり、中期の事象の記述には予持が不可欠であり、そして後期の事象を記述するためには予持（および把持）よりも原印象／現在に着目することが有効であったのではないだろうか。そして、フッサールの記述が常に事象に対して忠実であったがゆえに、上記のような各事象の事情を反映し、予持の扱われ方はフッサールの記述の真摯さ・過不足なさによってこそ変化したのではないだろうか。本研究はフッサールの哲学的な誠実さを最大限に信頼し、上記の仮説を採る。

この仮説を採る場合、予持概念の扱われ方の変化は「不当」ではなく、むしろフッサール時間論の各時期の性格を反映した「正当」なものだということになる。これこそが、本研究がフッサール時間論を読み解く「補助線」として予持概念に着目する理由である。再度確認しておく、本研究が求める「補助線」とは①フッサール時間論の各部分の特徴を浮き彫りにし、それでいて②これらの諸部分の間にある一定の統一性をも示すことが出来る、というものであった。これに対し、上記でも確認したように、予持概念の扱われ方の変化にはフッサール時間論の各時期の特徴が反映されている（これは①を解決する）。また予持は全時期を通して確認され、さらにフッサール時間論が常に考察の基本地点としていた知覚経験に深く関与している。したがって、文献的にも事象的にも、フッサール時間論の全時期の記述を貫いている（これは②を解決する）。本研究が予持概念に着目するのは、本研究の読解の方針（フッサール時間論を縮減するのではなく、まさに「多面的な」ものとして示すこと）と予持が持つ上記の二つの特徴ゆえであり、断っておくと、この概念こそがフッサール時間論の中心であると思いなしているから、という理由ゆえにではない。

0.4. 本研究の目的、研究方法、構成

したがって、以上で本研究の目的とそのための研究方法が概ね明らかとなった。

本研究はフッサール時間論を、時間事象の多様な側面とそれらの間の不可分な連関、一言で言えば、時間の「多面性」を忠実に描き出した「多面的な」思想であるとみなす。そして、彼の時間論の各部分、正確に言えば各時期がそれぞれに独自の特徴を持っていること、他方でそれらは互いにバラバラではなくそれぞれが連関し合っていること、したがっていずれかの部分に全体を代表させることも、いずれかの部分を切り捨てて考えることも不可能であること、以上の開示を目指す（目的）。この目的のために、本研究は彼の時間論の各時期の予持についての記述を調査し、予持が具体的にどのような働きとされているか、その働きによって何がもたらされるかを考察し、さらにそれぞれの時期においてフッサールが記述しようとしていたものに迫る。要約すると、予持を手掛かりとして各時期の特徴づけと相互の連関付けを行う（方法①）。

ただし、前節でも述べたように、初期・後期時間論において予持の記述は減少する。そのため、予持についての記述のみを追跡して各時期の時間論を特徴づけた場合、これら二つの

時期の特徴づけに際して根拠が薄くなってしまふ。ゆえに、これら二つの時期の特徴づけを補強し得るような補助的な視座を用意しなければならないだろう。本研究はこの補助的な視座として、初期時間論の特徴づけのために時間位置の個体化議論を、後期時間論の特徴づけのために原自我の問題を採用することにした。後でも詳しく述べるが、時間位置の個体化議論は初期 - 中期において、原自我の問題は中期 - 後期において確認され、しかも、本研究の見るところ、それぞれの時期で異なる仕方で記述されているからである。これらの差異も、フッサールの哲学的技量、ましてや彼の気まぐれだけでは説明できないものと考えられる。ゆえに本研究は個体化問題および自我概念の各時期における差異も、フッサール時間論の各時期の特徴の差異を反映していると見なす。上記に基づき、本研究は初期 - 中期における個体化問題、および、中期 - 後期における自我概念についての記述を調査し、これらと予持概念との連関と差異を考察し、そこから初期・後期時間論の特徴づけを行い、方法①を補助する（方法②）。以上が本研究の目的とそのための方法である。

上記の目的と方法に基づき、本研究は次の手順で進められる。第一に、そもそも予持とはどのような働きか、これがその本領を發揮したときに担う役割とは何かを明らかにすべく、第一部では予持概念が最も詳細に記述されている中期時間論『ベルナウ草稿』を扱う。予め述べておくと、『ベルナウ草稿』では自己意識的な構造を持つ予持が記述されており、さらにこの自己意識的な予持および把持によって体験流の時間的秩序が構成される様子が記述されている。第一部ではこの記述を追っていく。

第二部以降では、他の時期において記述されていた、必ずしも重要なものとしては扱われていない予持概念を確認していく。まず第二部では初期時間論の予持概念を確認する。この確認を通じて、中期では自己意識的予持が記述されていたが、中期においては将来における対象の与件内容を志向するような予持と、自己意識的な（ただし把持とは絡み合わない）予持が記述されていたこと、つまり中期とは異なる予持が記述されていたことを示す。また、中期『受動的綜合の分析』も確認し、初期で記述されていた予持は中期においても維持されており、したがって初期と中期の予持が異なるとは言え、初期の予持についての記述は決して誤りなどではないことも示されるだろう。そして初期と中期のそれぞれの予持を手掛かりとして、初期 - 中期の時間論で扱われていた問題を特徴付ける。予め述べておけば、初期時間論の前半では時間的対象の構成の問題が扱われ、初期時間論の後半では体験流の自己統一化が、中期時間論では体験流の時間的秩序が扱われていることが示されるだろう。

最後に第三部では、後期時間論の予持概念を確認していく。この確認により、後期時間論で記述されている予持は中期までで記述されていたものと同じ内容であること、そして予持は後期の議論においてはそれほど重要な役割を果たしていないことが確認される。これらを通じ、後期においては中期までで扱われていた問題とは次元の異なる問題（後の議論でこれは原様相的現在・自我と呼ばれる問題であることが明らかとなる）が扱われていることが明らかとなる。

第一部 中期時間論における予持

我々の意識経験における最も基本的な経験、知覚経験はそれ自体で既に時間的な構造——原印象(あるいは、第一部で確認する『ベルナウ草稿』の表現では原現前 *Urpräsentation*)・予持・把持——を持っている。すなわち、知覚は今この瞬間のみならず、未来や過去をも捉えているのである⁶。フッサールは初期時間論の頃から、経験一般の時間形式はこの知覚の時間構造に基づくと考えていたようである。しかし中期『ベルナウ草稿』(厳密に言えば、その直前に行われた『時間意識講義』の補完・編集作業)に至るまで、知覚の基本構造の一翼を担う予持が考察の俎上に載ることはほとんど無く、したがってこの知覚における時間構造、ひいてはそれによって成り立つ経験の時間形式についての考察は1917年までは不完全だったと言ってよいだろう。予持についての記述の欠落によって初期時間論の記述が具体的にどのような形になったのか、そもそも初期における予持と中期における予持がどのような点において異なっているのかに関しては後で述べるとして、この第一部では、知覚経験の時間構造を成す働きが全て出揃った『ベルナウ草稿』において、最高度に詳しく記述された予持はどのようなものとして記述されたのか、そしてそのような予持・把持・原現前に基づいて我々の時間的な体験流⁷、「流れること *Strömen*」がどのようなものとして記述されたのかを明らかにしていく。

第一部は以下のように進められる。まず第一章では『ベルナウ草稿』における議論を追跡するための予備考察に取り組む。すなわち、『ベルナウ草稿』においてフッサールが考察の舞台として選んだ「ヒュレー的領域 *hyletische Sphäre*」(XXXIII, 6)あるいは「根源的感覚性 *ursprüngliche Sensualität*」(XXXIII, 275)と、時間構成における予持・把持の基本構造である体験の自己意識的構造を確認しておく。続く第二章では、初期『時間意識講義』において既に明らかになっていた把持の働きも確認しながら、『ベルナウ草稿』における予持の働きを明らかにする。この考察において、予持と把持は互いに無関係に機能するのではなく、相互に志向し合う(「絡み合い *Verflechtung*」)ということが明らかになるだろう。最後に第三章では、第二章の成果を踏まえつつ、絡み合いが実際のところどのようなものか、そして、それによってもたらされる体験流の時間的秩序がどのようなものなのかを考察する。

⁶ 知覚におけるこの時間的構造は既に初期時間論でも言及されているが(vgl. X, 297 usw.)、中期においてもこの考えは放棄されていない。

⁷ 本研究の考察において、体験流 *Erlebnisstrom* と意識流 *Bewusstseinsstrom* とを区別する理由は特になかったと考えられた。フッサール自身も基本的にはこの二つを同義語として用いたようだが、例えば『時間意識講義』の補遺 VIII などにおいては区別されているようにも見える。すなわち、補遺 VIII においては「意識流」においては二重の志向性が見出され、体験流は「おのれの諸位相と諸区間」を持つとされている(vgl. X, 116)。仮にこの使い分けが意図的だとするならば、意識流というのは志向性の連関・連続に焦点を当てた表現で、体験流は志向されたものも含んだものとしての流れを表現しているのかもしれない。しかし、仮にそのような区別があるとしても両者が表現している事象は(注目している側面こそ違えど)同じであろう。そのため、本研究では体験流という言葉も意識流という言葉も基本的には同じ意味で用いている。

1. 1. 予備考察——舞台と基本的構造

この章では『ベルナウ草稿』における記述を理解する上で重要な二つの事柄、すなわち、『ベルナウ草稿』の考察の舞台である「ヒュレー的領域」と、『ベルナウ草稿』の予持および把持の働きの基本構造をなしている体験の自己意識的・自己知覚的構造をごく簡単に確認しておく。これらはさりげなく登場しているが、『ベルナウ草稿』の記述を理解するうえでは絶対に無視されてはならない。そこで『ベルナウ草稿』における予持および把持について考察する前にこれらを確認しておくことにする。

1.1.1. 考察の舞台——ヒュレー的領域

まず『ベルナウ草稿』の考察の舞台である「ヒュレー的領域」から確認しよう。そもそも、『ベルナウ草稿』においては「ヒュレー的な」ものや「感覚」といった言葉がしばしば登場する。以下の考察に関係がある箇所限定しても、例えば、予持が記述されている Nr. 1 では、冒頭で「ヒュレー的領域」や「ヒュレー的与件」(XXXIII, 7) などが登場しているし、また同じく予持を扱った Nr. 2 でも冒頭「ヒュレー的与件の連続」(XXXIII, 20)、「その時々

のヒュレー的原与件 *Urdatum*」(ebd.) という記述が見られる。Nr. 2 と同じ草稿群に由来する Nr. 11 においても「感覚対象性」(XXXIII, 216) や「ヒュレー的对象」(XXXIII, 222) などの表現が見られる。また、時間様相に関する草稿 Nr. 6, 7 においても同様の表現が見つかる⁸。このように『ベルナウ草稿』において、フッサールは考察で扱われているものがヒュレーないし感覚(与件)であることを殊更に強調している。では、彼が念頭に置いているヒュレーおよび感覚与件、ひいてはこれらが漂う「ヒュレー的領域」とは何か。また、なぜ彼はこれにこだわったのか。

「ヒュレー的領域」という言葉は Nr. 1, §2 に登場しており、フッサールはこの言葉に明確な規定を与えている。ゆえに、これがどのようなものであるかを確認することは難しいことではない。彼の実際の記述を見てみよう。

現象学的経過が、しかもヒュレー的な現象学的経過があらゆる注意的な自我関与無しに経過していくことを思い浮かべよう。それに際して、自我が確認的な仕方で *gewahrend* 何かしらの他の経過、例えば客観的、時間的経過に関与すると仮定しよう。それに際し、確かに、[他の] 客観的对象性への、例えば止まっている、あるいは動いている空間事物への注意も、諸々の呈示的な *darstellend* 感覚与件にとって、ある派生的

⁸ Vgl. XXXIII, 107, 108, 110, 113, 114, 118, 120, 121, 125, 131, 134, usw.。なお、全集 XXXIII 巻では Nr. 5, 8 も時間様相についてのテキストとして編集されているが、Nr. 5 は事象の記述というよりは問題提起的性格の強いテキストであり、考察の対象を感覚に限定する傾向は特に見られなかった。また Nr. 8 ではヒュレーや感覚という表現すら廃され、点 *Punkt* という、抽象性がより強い表現が用いられている。また、Nr. 6, 7 の後半では具体的な時間客観(「音」)の時間様相が考察されており、ここでは考察がヒュレーや感覚に限定されていない。

な注意の様相を意味する。〔しかし〕我々はこれ自体を範例として採るのではなく、ある背景的な経過を、例えば、我々がそれについて、空間的に（自然的に）客観化されているかどうかを未決のままにするような雑音を範例として採ろう。／その時、我々が今抜擢したヒュレー的な領域において、既に演じられた *inszenierte* 過程を続行していくようなヒュレー的経過と、新しく始まるヒュレー的経過が区別されうる。

(XXXIII, 6)

引用箇所では、まず「現象学的経過、しかもヒュレー的経過」なるものが想定され、次いでこれについての細かい規定が行われ、最後に「我々が今抜擢したヒュレー的領域」において二つの異なる事象が区別されると述べられている。この引用の後、フッサールはヒュレー的領域における区別から、予持についての記述を始めているが、これは後で扱う。最初の一文と最後の一文を見るに、「我々が今抜擢したヒュレー的領域」とは「現象学的経過、しかもヒュレー的経過」のことであると考えられる。では、これは具体的にどのようなものか。

フッサールはまず、このヒュレー的経過を「あらゆる注意的な自我関与無しに経過していく」ように想定している、つまり、自我によって注意を払われることなく進行していくような経過をヒュレー的経過としている。ただし、注意を払われないという状態には様々な種類があるだろう。例えば車を運転しているときに信号が赤に変わったとする。この時私はもっぱら信号を含めた前方の道路に対して主題的な注意を向けているが、しかしそれだけが私の意識の対象なのではない。私はそれ以外にも、例えばバックミラーに映っている後続車、サイドミラーに映っている横をすり抜けようとしている原付、カーラジオから流れ始めた流行りの曲なども、非主題的には注意を向けられていないものをも、いわば意識の周縁で捉えており、その際、それらを「客観的对象性」、「止まっている、あるいは動いている空間事物」として、空間的・自然的に客観化されて存在している対象（大きさや形や位置などの空間的規定を持つ現実的な実在）として認識しているのである。私は赤信号や前方の車などに対して（さしあたりは）主題的な注意を払いつつ、意識の片隅では横をすり抜けようとしている原付を現実的にそこを走っているものとして認識しており、どれほど明瞭かは別にして、原付の大きさや形状やこちらとの位置関係を認識している。

しかしフッサールは「これ自体〔＝上記のような空間事物への注意〕を範例として採るのではなく、ある背景的な経過」、具体的に言えば「雑音」を範例とすると述べ、この「雑音」を「我々がそれについて、空間的に（自然的に）客観化されているかどうかを未決のままにするような」ものだとしている。つまり、先の例（注意は向けられていないが空間的・自然的には客観化されている経過）も併せて考えるのであれば、フッサールがここで観察の対象にしようとしているのは、注意も向けられておらず、かつ空間的・自然的に客観化されていない経過、であると言える。

さらに「ヒュレー的 *hyletisch*」という言葉にもこだわってみよう。『イデー I』(1913年)

における「感覚的ヒュレー、志向的モルフェー」と題された§85の記述によれば、体験においては「素材」として機能する「諸々の感覚内容」(III/1, 192)と、そのような感覚的なものを何かとして意味づける「志向的な形成あるいは意味付与」(III/1, 193)の二つの契機が区別されるという (vgl. III/1, 191-193)。両者に関して、フッサールは次のように述べている。

我々は次のような具体的な諸々の体験与件を、より包括的な具体的諸体験における構成要素として見出す。すなわち、全体として志向的であり、しかも、例の感覚的諸契機に覆いかぶさる形で、いわば「生气づける」、意味付与する (あるいは、意味付与を本質的に含意する) 層が存しているという仕方で全体として志向的であるような、そのような具体的な諸々の体験与件を見出すのである。上記の層は、それによって、それ自身においては何らの志向性も持たないような感覚的なものから、まさに具体的な志向的体験が実現するような、そのような層である。

(III/1, 192)

感覚的諸与件は、様々な段階の志向的な諸形成あるいは意味付与に対して、〔別言すれば〕素朴な、そして独特の諸形成あるいは意味付与に対して自らを素材として与えるのである。

(III/1, 193)

最初の引用によれば、具体的な体験において我々は「感覚的な諸契機」と、それに対して「意味付与する」ような層を持つ。そして二番目の引用が端的に述べているように、感覚的諸契機は意味付与の「素材」として振る舞う。この感覚的諸契機が素材として志向性を担い意味を与えられ、体験は初めて「具体的な」体験となる。意味付与的志向性によって単なる視覚的刺激は意味を付与され、我々は「絵画」の鑑賞体験を持つ。裏を返せば、意味を付与されなければ感覚的諸契機が何ものかとして体験されることは無く、体験は「具体的な」体験にはならない。フッサールは上記のような区別を設けたうえで、それ自体では意味を持たない感覚的契機を「ヒュレー-ύλη」、ヒュレーに意味を付与する志向的契機を「モルフェー-μορφή」と呼んだ (III/1, 192)。つまりヒュレーとは未だ志向的に意味を付与されていない、いわば生のままの感覚であると言えるだろう。

したがって上記を踏まえると、ヒュレー的経過あるいはヒュレー的領域とは、注意も向けられておらず、かつ空間的・自然的にも客観化されておらず、未だ何ものとしても意味付与されていない感覚的経過であると解釈できる。誰かに言われるまで何の注意も向けておらず、どこで鳴っているかも、(物理的な意味で) 本当に鳴っているのかどうかも、何の音かも分からない「雑音」のようなものがその例であろう。

ただし、フッサールが上記の「雑音」を考察の舞台としたとして、彼が経験の中から条件

に合致する雑音を見つけ出し、それを扱った、とは考えにくい。何故なら、観察を行おうとするときの、あるいはそもそもそのような雑音を探そうとする際の眼差しそれ自体が既に「注意的」であり、このような注意的眼差しによって見出され観察された雑音は、定義からして既に上記の「雑音」であるとは言い難いからである⁹。上記の「雑音」は、これを探そうとする眼差しから、本質的に逃れ去ってしまうものだと言える。ゆえにフッサールが本当にこれを考察の対象としていたのだとすれば、彼がこれを経験から「探し出してきた」のではなく、むしろ、まず「メロディ」や「エンジン音」などのような、極めて具体的な諸々の音が現れ消えてゆく聴覚的知覚経験の経過を眼前に置き、しかる後に、この知覚経験から自我による注意、自然的・空間的客観化の作用、意味付与的志向性などを遮断することによって上記のような「雑音」を考察の素材として獲得したと考えられる。つまり、上記のヒュレー的領域はある種の還元によって獲得されたものだと考えられる¹⁰。

この「還元」について述べたと見られる記述を『ベルナウ草稿』Nr. 14において見つけることができる。

我々は現象学的還元を実行したのであり、しかも私によって状況づけられた *situiert* 方向において実行したのである。その際に我々は「世界」を遮断する。／ (a) 我々は今や完全に意識的にある種の還元を実行しよう。その還元とは我々が今までに既に行ってきたものではあるが、しかし明確な印なしに行ってきたものではある。[つまり、「根源的感覚性」への還元である。すなわち、現象学的還元によって我々が純粋な主観性の領域を獲得する場合、我々は二重のものを区別せねばならない、という事情が生じる。我々が思念し、そして我々に対してアプリアリに必然的な構造をもたらす還元は、一つ

⁹ また後年の『経験と判断』では、「経験の個別的対象について認識経験が行われる際に、この対象が最初に全く無規定の基体として与えられるということは決してない。[...] どの経験も、[...] それ自身で必然的に、まさにこの事物についての知識や付随経験を伴っている」(EU, 26-27) と記述されている。つまり、我々の経験に与えられるものは全て「何か」として意味づけられ、それどころか、当該の経験にはそれについての知識や他の経験が地平的に付随しているのだという。この記述からしても、『ベルナウ草稿』で扱われていた「雑音」が我々の日常的経験においてそのまま見出されるとは考えにくく、また少なくとも『経験と判断』ではフッサール自身もそのように考えていたのだと考えられる。

¹⁰ ただしこの場合の還元は、例えば『ゼーフェルト草稿』などのような初期時間論において見られる還元とはやや性質の異なるものであり、正確に言えば初期時間論の還元よりも徹底されていると言える。詳しくは後の章で触れるが、簡単に言えば、初期時間論の還元は(世界時間という意味での)客観的時間の遮断を行うものの、『ベルナウ草稿』のような自我のあらゆる注意的関与を遮断するものではない。また、『時間意識講義』§8の冒頭では、「あらゆる超越的統握と超越的措定を遮断し」、ある音を「ヒュレー的与件」(X, 24)として見るという記述が見られる。これは上で確認した『ベルナウ草稿』の還元と類似しており、谷[2016]の解釈(215頁の註24を参照せよ)もそれを示唆している。確かにこの記述は『時間意識講義』においてフッサールは既に『ベルナウ草稿』において行われたものと同じ還元を試みていることは窺えるが、しかしこれを実際に完遂できているか、また他の箇所でもこれと同じ還元を行っているかに関しては、本研究は検証の余地があると考えられる。

の自我と全ての自我的なものの抽象 *Abstraktion* なのである。確かに単なる抽象であるが、しかし重要な抽象である。その後で、我々は第一次的に内在的な時間の秩序づけにおいて、諸々の感覚与件、感覚的に感じられた諸々のものを持つのである。

(XXXIII, 275-276)

引用の直前においてフッサールは「二重の意味において第一の、最も根源的な時間系列」(XXXIII, 275) の存在を指摘しており、引用はその時間系列を記述するために必要な還元について述べたものである。引用においては、この還元が①「明確な印なしに」ではあるが今までの考察で既に行われていたこと、②これが「一つの自我と全ての自我的なもの」を抽象するものであること、③この還元によって「諸々の感覚与件、感覚的に感じられた諸々のもの」が獲得され、そして④それらの感覚与件は「第一次的に内在的な時間の秩序付け」の中にあることが述べられている。①の特徴から、この「還元」は(潜在的にはあるが)他の箇所でも行われていることが示唆されている。現に、Nr. 1, §2 において見られた手続き(本章 2 頁)は上記の②③④の特徴を共有しており、それゆえこの還元でも件の「雑音」が取り出されているものと考えられる。フッサールはこの「還元」を通じて、件の「雑音」のような経験において見出しにくい(というより見出すことが不可能にさえ見える)対象を考察の俎上に載せたのだと推定できる。もっとも、「明確な印無しに行ってきた」と述べられているように、はっきりと「還元」という言葉が用いられているのはこの箇所だけである。したがって、ここ以外の箇所においてフッサールがどれほど自覚的にこの「還元」を遂行していたのかは定かではないが、しかし手続きの実態はこのようなものであったろうし、それが無意識的であったにせよ自覚的であったにせよ、この手続きは件の「雑音」、つまり、意味付与や注意などの能動的作用を何ら被っていないヒュレー的与件、ひいてはそのようなものの領域を取り出すためのものであったことは間違いないだろう。『ベルナウ草稿』において散見される「ヒュレー」や「感覚」といった言葉は、以上の事情の下で理解されるべきであろう。

では、なぜフッサールはヒュレー的領域を考察の舞台として選んだのか。この問いに答えるためには、ヒュレー的領域が登場する Nr. 1 においてどのような問題が扱われていたかを確認する必要があるだろう。しかし、この草稿では明確に問いが立てられることなく考察が始まっており、直接的な記述に基づいてこの草稿での問題を特定し、ヒュレー的領域が考察の舞台とされた理由を解明することは難しい。ゆえに、まずはフッサールがヒュレー的領域を選び出した場面(上で確認した Nr. 1, §2)に戻り、その文脈を確認することにしよう。ここでヒュレー的領域を考察の舞台に定める直前、彼は次のような問いを立てている(以下の引用は本研究 15-16 頁の記述に直接つながっている)。

よく考えてみよう。原流れ *Urstrom*¹¹——「究極的な」超越論的な生の存続の流れ、それはいったい何だろうか？そこ [=原流れ] には現象学的時間のあらゆる出来事が属しており、その現象学的時間の出来事というのは、「存在する」が、しかし注意のあらゆる関与無しに、あるいは純粹自我によるあらゆる把握無しに経過しつつ構成される。また、知覚的な把握において構成を行う諸々の出来事に関しては、構成的な、注意の様態において生きている存続の流れ [も原流れに属している]。

(XXXIII, 6)

ここでフッサールが問うているのは「原流れ」であり、上の引用の直後でヒュレー的領域が登場することから、ヒュレー的領域が原流れを解明するために選び出されたものだということが分かる。またフッサールは、原流れには①「現象学的な時間のあらゆる出来事」と②「注意の様態において生きている生の存続の流れ」が属すと述べている。つまり、原流れはこれら①②に対してより根源的な地位を占めており、これら①②は原流れから理解されるべきものとされているのである。さらに①に関しては「注意のあらゆる関与無しに、あるいは純粹自我によるあらゆる把握無しに経過しつつ構成される」と記述されている。このことから、現象学的時間に関わるあらゆる体験は、殊更に意識されたり注意されたりしなくても自ずから生じてくるものなのだということが分かる。このような非能動的な諸体験が属しているところの原流れもまた非能動的なものとして理解されるべきであろう。「あらゆる注意的な自我関与」(ebd.)「一つの自我と全ての自我的なもの」(XXXIII, 275) が排除されるのも原流れのこの没能動性ゆえにである。

しかし、上の引用だけでは、原流れとは何か、そしてなぜ原流れが問われるに至ったのかが分からない。さらにこれよりも前の議論を見てみよう。

Nr. 1, §1 の冒頭では、まず「知覚客観へと向かうこと」が扱われている。これは、私が今主観的に知覚している対象から注意を逸らし、私を触発的に刺激してくるようなある客観として既に構成されている背景的な対象へと注意を向け変えることを指す (vgl. XXXIII, 3)。前節の自動車を運転する例の「後続車」や「原付」や「流行りの曲」などがこのような対象に相当するだろう。フッサールはこのような対象に対する注意の向け変えを、対象が構成されたタイミングよりも遅いか早いかによって二種類に区別している¹²が、注意の向け変えが如何に素早くおこなわれたとしても、「向かうこと *Sich-Richten* は、時間客観の構成が紡ぎ出された後からやって来るような何ものかであるような、そのような注意の変更である」

¹¹ 同じ事象を指す言葉として、他にも「原過程 *Urprozess*」(XXXIII, 6) などが見られる。また、*Ur-*という接頭辞のつかない「*Prozess*」「*Strom*」「*Fluß*」という表現も見られるが、フッサールはこれらをテキストの冒頭から、明確な定義も無く自由に使っている。そのため、あくまで Nr. 1 に限って、これらの表現同士の差異や接頭辞 *Ur-*の有無に大きな意味はないと考えて良いだろう。

¹² 「[注意を向ける先の] 客観が始まるや否や、すぐさま 客観に注意が向けられる場合と、他の対象にしばらく気を取られるなどして、客観の開始に対して注意が遅れる場合が区別されている (vgl. XXXIII, 3)。

(ebd.) とされる。つまり、対象として構成されたものへの注意の向け変えは、必ず対象の構成よりも遅いのである。運転の例で言えば、私の車をすり抜けようと近寄ってきた（それまでは注意を向けていなかった）原付に対して私が注意を向ける場合も、カーラジオから今まさに流れ出した流行曲に対してすぐさま注意を向ける場合も、いずれの注意もそれらをそれらとして構成する意識よりも遅れているのである。

注意の遅れというものを確認した後、フッサールは「新しい今それ自身」(XXXIII, 4) がどのように我々の意識に与えられるかを問うている。というのも、これまでの考察において登場したのは、注意と対象構成の二つであるが、注意よりも早い対象構成でさえ、今まさに登場してきたものを即時に捉えることはできないからである。運転中に「カリカリカリ」という音を聞いたとして、それが鳴り始めてからその音を「オーバーヒートを起こしかけているエンジンの音」として対象的に意味づけるまでには若干の時間的な隔たりがあり、対象構成もまさに「新しい今それ自身」を捉えるには遅いと言わざるを得ない。しかし我々の経験に立ち返ってみれば直ちに明らかなように、構成された対象に対して注意を払っていないときにも、ましてや対象構成を行っていないときにおいてさえも、意識はその都度の今この瞬間を捉えている。件の音を危険なマシントラブルの音として知覚・構成するよりも前に、「カリカリカリ」という音が我々の虚を突いて登場してきた瞬間があり、意識はそれを捉えていたはずだ。さらに言えば、特に何かしらに注意を払うでもなくぼんやりとしているときでさえ、我々は無音の中に居るのではなく、様々な音が我々に去来しており、それどころか全くの無音の中にいたとしても、我々にはいわば無音の瞬間が絶えず去来しているのであって、その時の我々の体験は決して無ではない。まとめると、いついかなるときも我々には絶えず今この瞬間それ自体が現前しているのであり（フッサールは「今」を「原現前 *Urpräsentation*」と言い換えている (vgl. Ebd.)), 我々は現にそれを捉えている。上記のフッサールの問いは、この根源的な意味での現前に照準を合わせていると考えられる。「今」が現れた後からこれに向かうようでは、まさしく現前したての「今」を捉えていることにはならず、「今」が根源的な新しさを伴って意識に与えられることは無い。ゆえに、この新しい「今」が現に我々の意識に与えられているのは、これが何らかの形で予め意識に捉えられているためだと考えられる。すなわち、意識は「開かれた未来地平を恒常的に所持している」のであり、原現前は「諸々の予期志向¹³の充実の様態において」与えられるとされている (vgl. Ebd.)。つまり、原現前は現在だけではなく未来や過去も含めた時間的な構造の中で捉えられているのである。では、この原現前を捉える時間的構造とはどのようなものか、あるいは、いかにして根源的な現前そのものが、絶えず、与えられるのか。フッサールが立っていたのはこのような問いである。

これまでの議論からも明らかなように、この絶えず現前してくる「新しい今それ自身」は

¹³ Nr. 1 においては「予期 *Erwartung*」が予持と同じ意味において用いられている。フッサールは §3 の題名を「現象学的時間の構成における『予期』(予持)の役割」としており、このことから予期=予持という関係は明らかである。

未だ客観化されてもいないし、注意を向けられてもいないし、その他の能動的、あるいは高次の働きを逃れ去っている（それらから逃れ得るからこそ、フッサールはこれを問題にしている）。つまり、裏を返せば、この「今」は上記も含めたあらゆる能動的な意識作用無しに生じているはずであり、したがってこの「今」が生じてくるメカニズムを解き明かすためには、上記のようなあらゆる高次の意識作用の働いていない場における現象を観察しなければならない。この場として最適なものこそ、これまで問題にしてきたヒュレー的領域である。フッサールはあらゆる高次の意識作用の影響を排し、現象の原始状態において「今」の根源的な現前そのもの、およびそれが与えられる構造を観察するためにヒュレー的領域を考察の舞台として選んだのである。彼はヒュレーが、「今」の現前およびそれに付随する「流れ」の中をいかに漂うかを観察することで現象の最も根源的な動性を観察しようとしているのであり、これはいわば、ブイなどの測定器具を漂流させ、その様子から海流を観察する気象学の測定法（ラグランジェ法）と同じであろう。言わずもがなだが、気象学者の関心がブイそのものに無いように、フッサールの関心も決してヒュレー的領域そのものに向いているわけではない。

『ベルナウ草稿』で記述されている意識構造は、上記のヒュレー的領域の特性を踏まえて理解されなければならない。この理解が最も必要となるのは予持についての記述である。詳しい内容は後で述べることになるが、ここでも軽く論じておく。

先行研究の多くはフッサール時間論における予持を、例えば何かしらのフレーズを途中で聞いてその続きを予想するというような、将来の具体的な知覚内容を捉える働きとして理解しがちであった。例えばローマー[2004]では信号の色が¹⁴、Rodemeyer[2006]ではまだ発語されていない文章が¹⁵予持されるものの例として考えられている。ただ、これらで論じられている「予持」は、例えば馴染みの曲を聞いている場合にはフレーズの予想ができるが、知らない曲の場合には一小節先すら予想できないというように、状況によって働き方にばらつきがある。さらに言えば、予想していたフレーズが何らかの理由で聞けなかった場合等では、この「予持」は幻滅を味わい得る（これに関しては第二部第二章第一節で論じる）。しかし、奇妙なことに『ベルナウ草稿』において予持の幻滅はほとんど（管見の及ぶ限りは「全く」）論じられていない。上記のような「予持」およびその幻滅は、我々の日常的体験においても容易に見出され得るものであり、それゆえ、もしもフッサールが『ベルナウ草稿』において上記のような「予持」を想定していたのだとしたら、その幻滅の記述が見られないことは極めて不自然である。これを踏まえると、フッサールが『ベルナウ草稿』で記述している予持は、幻滅とは無縁の予持であり、上記の「予持」ではなかったのだと考えられる。では、『ベルナウ草稿』の記述に登場するのは如何なる予持か。

¹⁴ ローマー[2004], 201 頁を参照せよ。なおローマーは 202 頁で、『ベルナウ草稿』における予持を「『何らかのもの』がやってくる」という「空虚な予持」として解釈することを「強すぎる」と退けているようだが、本稿の解釈はまさにその「強すぎる」解釈である。

¹⁵ Cf. Rodemeyer[2006], p. 144.

ここでは、『ベルナウ草稿』の考察の舞台がヒュレー的領域であるということを踏まえる必要があると考えられる。これは何らの注意も客観化も、そして何らの意味付与も受けていない「雑音」のようなものなのであった。ゆえにこのヒュレー的領域においては、例えば音階の区別やそれを演奏する楽器や音の大きさ、その他諸々の内容に関わる構成は全て無視（「還元」）されるであろう。このようなヒュレー的領域を舞台として考察を行う場合、ここで働く原現前、予持、把持の記述においては与件の内容を捉えるような働きは重要性を持たないだろう。つまり、これらの予持・把持・原現前は、知覚対象の内容を的中的に捉えたか否か、という観点においては記述されず、むしろ〈何かしらが現前する〉という、常に恒常的に生じている現象に対して如何に振る舞うか、という観点から記述される。端的に言えば、現前してくる対象に応じて変化するような特殊的構造が記述されているのではなく、いついかなるときも発動しているような一般的構造が記述されているのである。予持に関して言えば、『ベルナウ草稿』では、ただ将来における「原現前が生じる」ということだけに向けられた働きとして記述されていると考えられる。

現に、フッサールは§4の冒頭で、ある出来事の最初の点、すなわち原現前点は何らかの予持によって予め志向されていると述べたうえで、「しかし現象学的経過の開始点は、その開始点、その開始点の内容に向けられた、少なくとも一般的なものに関してそれを前もって意味づけるような予持が無くとも登場することができる。あるいはむしろこう言うべきだが、出来事それ自体は、前もって示すこと *Vordeutung* が無くとも、特殊な予期など全くなくとも『登場する』ことができるのであり、私に対して、現在として意識に適する仕方で構成されうるのである」(XXXIII, 11)と述べている。つまり、前もって意味付けられたり、特殊な規定を予め受けたりせずに登場してくるような、未規定的に登場してくる「開始点」の存在が述べられているのである。また同じ節では、かつての同様の出来事の経験によって将来の出来事のある程度具体的に予期できる可能性（フッサールはこれを「前想起 *Vorerinnerung*」(XXXIII, 12)と呼ぶ）が指摘されている。確かに、これが考慮される場合には出来事同士の類似性が問題になり、この場合に問題になる予持も、当然、出来事の内容についての予持であり得るだろう。しかしフッサールは、これが重要な主題であることは認めつつも、そのような前想起の介入を「混乱」と呼び、「ここではそのような混乱を含まないような根源的な構成が問題になっているのである。したがって我々はここで、前想起によって規定的な仕方で予描されることなく、[それでも]時間的出来事として...予描されるような諸々の出来事を想定する」(XXXIII, 12)と述べている。つまりフッサールはこの議論で、前想起を考察から排除しているのである。このことから、この箇所での予持は具体的な内容に無頓着なものだと考えられる。

以上のように、『ベルナウ草稿』においてフッサールは「ヒュレー的領域」を考察の舞台として選び、ここに見られる最も根源的な現前を扱っている。これは知覚における時間構造、すなわち予持・把持・原現前において生じてくるのであり、ここでの予持・把持・原現前は、〈何かしらが現前してくる〉という恒常的現象に相対する最も一般的な形式的構造として

働いている。では、これらはどのようにして働いているのだろうか。これを詳しく確認するためには、さらに体験の自己意識的構造について確認しておかなければならない。

1.1.2. 基本的構造——体験の自己意識的構造

自己意識、あるいはフッサールの言葉で言えば内的意識は『論理学研究』（1901）で既に見られ、初期時間論においても、『ベルナウ草稿』においても継承されている。フッサールはこれを、彼の師であるブレンターノから引き継ぎ、自身の哲学においてこれを鍛え、使いこなしていった。

ここで言う自己意識、あるいは内的意識は、例えば『論理学研究』においては次のように記述されている。

意識の第二の概念は内的意識という言い方のうちに明確に表現されている。これは「内部知覚」のことであり、この内部知覚は一般的にも、また特定クラスの諸事例の場合にも、必ず顕在的な現在の諸体験に付随し、そして内部知覚自身の対象としてのそれら諸体験に関係するはずである。

(XIX/1, 365)

この記述によれば、あらゆる意識体験には内的意識、あるいは内部知覚という意識が付随しているのだという。この内的意識はこれが付随しているところの体験それ自身についての意識であり、しかも「内部知覚」と言い換えられるように、体験それ自身・意識それ自身を知覚的に意識しているのである。このように①「何かについての意識」と一体的に働き、②その意識自体を、③知覚的に意識するような意識を、本研究では特に自己意識と呼ぶ¹⁶。

初期時間論『時間意識講義』においても上記と同様の記述が見つかる。

したがって、ある種の意味において全ての体験は印象 *Impressionen* によって意識されている、あるいは印象化されている。[...] 知覚することはある対象についての意識である。それは意識としていちどきに *zugleich* 印象であり、ある内在的な現在なのである。

(X, 89)

先に挙げた引用において見られた自己意識についての特徴が、ここでも見られる。一見して分かるように、この引用においても意識それ自身についての意識が述べられている。また、意識が意識を知覚的に捉えているということ、『論理学研究』では「内部知覚」と表現し

¹⁶ ただし、ここで言う「自己意識」は、(後の議論で明らかになるように) 自我によるあらゆる能動的作用以前に既に成立しているものであり、したがってこの成立に反省の働きは一切関与しない。

ていたが、上の引用では「印象化される」という表現でそのことを記述している。さらに、自己意識が意識する意識と一体的であるということに関して、『論理学研究』では単に「付随する」とだけ表現されていたが、上では「いちどきに *zugleich*」という言葉が用いられている。『時間意識講義』における *zugleich* という言葉は、宇宙的時間に依拠しない仕方での同時性を意味しており、例えば把持も原印象と *zugleich* だとされている (vgl. X, 80-83)¹⁷。この表現が用いられることで、知覚の遂行とその知覚それ自身についての意識が一体的・「同時」的であること、さらにその「同時」性が客観的時間に依らない、宇宙的時間よりも根源的なものであることが示されている。この引用では、意識とその自己意識との一体性の記述がより繊細なになっていると言えるだろう。ここにも、①その体験の遂行と一体的（「いちどき」的）に、②その体験それ自体を、③知覚的・印象的な仕方意識する、という上述の諸特徴が見出される。したがって、ここで記述されているものも『論理学研究』で確認された自己意識と同じもの（正確に言えば①の正確に関してはより繊細に記述されたもの）だと言える。

この自己意識はフッサールが独自に見出したものではなく、元々は彼の師ブレンターノから受け継いだものだと考えられる。ブレンターノは、例えば以下のような仕方自己意識を記述している。

我々は音を一次客観、聞くこと *Hören* を二次客観と呼ぶことができる。というのも、確かにそれらは両方いちどきに *zugleich* 登場しているのだが、しかし事象の性質に従って言えば音はより早いものだからだ。

(Brentano[1968], S. 180.)

引用によれば、知覚においては「音」、つまり知覚の対象である第一次客観と、「聞くこと」、つまり知覚することそれ自身である第二次客観が区別されるのだという。つまり、ブレンターノの枠組みにおいても体験は、通常の意味での対象、自分に相対するものとしての対象を捉えるのと「いちどきに」体験それ自身を捉えているとされている。ここにも①その体験の遂行と一体的（「いちどき」的¹⁸）に、②その体験それ自体を捉えるという特徴が見られる。また、この引用の直後でブレンターノは、上記の一次客観と二次客観の区別を踏まえつつ、「我々は、我々のうちに存立する心理的諸現象を知覚するのか」(ebd.) という問いを立て、これに肯定的に答えている (vgl. Ebd.)。つまり、ブレンターノは上記の一次客観・二次客観

¹⁷ この語に関しては、『内的時間意識の現象学』谷徹訳、ちくま学芸文庫、2016年の解説が詳しい。同書59頁の註65、230頁の註77、360頁の註58などを参照せよ。

¹⁸ フッサールは *zugleich* を *gleichzeitig*（これは客観的時間における同時性を指す）から区別しているが、ブレンターノにおいてもそのような区別やそれに伴って *zugleich* が担う含意が見られるかについては検討の余地がある。しかし、上記の区別の有無にかかわらず、少なくとも、ブレンターノも体験それ自体とそれに対する自己意識は一体的に生じていると考えていた、ということと言えるだろう。

の区別が(というより二次客観を捉える自己意識が体験に付随しているという事実が)心理現象を知覚するための前提だと考えていたようであり、これを踏まえると、ブレンターノにおける自己意識も③の特徴を持つと考えられる。

ブレンターノが指摘し、初期のフッサールも言及していた、この自己意識という事象は、『ベルナウ草稿』においても随所で見られる。

しかし内在的諸与件についての知覚が、事実、知覚されており、しかもそれらが時間的なものとして、それらと同一的ではない、それらを超え出るような諸体験において構成されるという仕方で知覚されているということが告げ知らされている場合、これ〔=内在的諸与件についての知覚に対する知覚〕はただ「内的意識」でのみあり得るのであり、その内的意識は、事実、統一的な知覚することなのである。

(XXXIII, 107-108)

各々の体験は「知覚可能」であり、各々はそれ自身で一つの現在的なものであり、その体験の現在において把握されるべきものである。原本において個体的なもの(ある体験、もしくは超越的個体)を把握することは、それ〔=把握することそれ自体〕を知覚し、そしてそれを現在において与えられているものとして所持すること、しかも原本においてそうするのと一体的 *einerlei* なのである。

(XXXIII, 221)

まず一読して分かるのは、いずれの引用においても体験それ自体を捉える意識が記述されている点であり、これは上で確認した自己意識の特徴②と合致する。また、体験それ自体を捉える意識が知覚として特徴づけられているという点も両方の引用において見られる特徴であり、これは③の特徴と合致する。さらに後者の引用においては、何かしらの対象を把握するという体験と、その体験それ自体を知覚することは「一体的」とされている。つまり、ある体験を把握する意識は、その対象であるところの体験に随行しているのであり、これは特徴①と合致する。また前者の引用に関しても、この引用の直後で「内在的与件についての知覚、つまりあらゆる諸作用は、体験の原流れであるような内的な意識の本質構造によって、[...] 内在的な時間の対象性として、そして内在的時間に対して構成されていなければならない」(XXXIII, 108)と述べられており、いかなる体験も、それが成立するためには内的意識によって知覚されることを必要とすると述べられている。ゆえにここでも体験を捉える意識・内的意識はそれが捉える体験と共に発動していると言うことができ、①の特徴と合致していると言える。以上より、両方の引用において記述されている体験に対する知覚は①②③の特徴を満たすものであり、これは、元々はブレンターノから引き継がれ、既に初期時間論の頃からフッサールによって鍛えられていた、あの自己意識と同じものだとみなすことができる。

ここで挙げたものは特に典型的なものであるが、『ベルナウ草稿』においてはこれ以外にもいたるところでこの自己意識と解釈できるものが登場している¹⁹。そして、詳しくは後述するが、この意識が自己自身を捉えるという構造こそが、『ベルナウ草稿』でフッサールが記述しようとした時間的な意識形式、端的に言えば時間流ないし体験流の成立に深く関与しているのである。譬えの不完全さを承知で敢えて言えば、合わせ鏡やマイクのハウリングのような無際限の広がりとある種の運動性が、上記の自己意識的構造によってもたらされるのである。ではどのような広がりや運動性をもたらされるのか。残念ながら、今の段階ではまだこの問いには答えられない。ひとまずは本研究の当初の手順に従い、次の問題に取り組もう。すなわち、ヒュレー的領域という舞台を意識の自己意識という見方で観察しながら、『ベルナウ草稿』においてフッサールは予持や把持をどのようなものとして記述したのか。

1.2. 『ベルナウ草稿』における予持

ここまでの考察では『ベルナウ草稿』における記述を理解する上での諸々の前提を確認してきた。では、これらによって記述される経験の時間的構造とはどのようなものか、それはいかんして予持と把持によって生み出されるのか、そもそも予持と把持とはどのような働きか。『ベルナウ草稿』の記述に則し、以下では予持を中心として上記の問いに答えていく。ただし『ベルナウ草稿』における予持についての記述は、それ以前の把持についての記述、特に『時間意識講義』の「把持の志向性における二重性」(X, 80)の記述を踏まえている。したがって、本研究はまず『時間意識講義』における当該の把持についての記述を確認する。しかる後にこれを踏まえ、『ベルナウ草稿』における予持についての記述を読み解いていく。予め述べておこなら、予持それ自体の性格、そのような予持と把持による「絡み合い Verflechtung」(XXXIII, 10)を明らかにしていく。

1.2.1. 連続的把持（把持における二重の志向性）

把持と予持とは共に志向性とされるが、具体的にこれらはどのような志向性なのか。まずは把持について確認しよう。これについては、『時間意識講義』において比較的明確な記述を見つけることができる。例えば同書において「把持 Retention」という言葉は第8節（これは1911年12月の手記に基づく）において初めて登場するが、そこでは次のような記述が見られる。

¹⁹ 例えば他にも「意識は、それ自身において、現在の意識についての意識であるような現在の意識である」(XXXIII, 45)や、「そのとき、この意識とその志向的内容それ自身へと向けられた把握することは現在化的なのである」(XXXIII, 224)などの記述が見つかる。

それ [=音] は始まり、そして終わるそしてその持続統一性の全体、その中において音が始まり、そして終わった、そのような過ぎ去った経過の統一性は、それが終わった後には、一層遠い過去へと「退いていく」。この沈下において、私はなおもその音をしっかりと「保持」しているのであり、私はそれを「把持」において持っているのだ

(X, 24)

引用においては始まりと終わりを持った一つの音を知覚する場面が考察されており、その中で、把持は過ぎ去っていった音をなおも保持する働きとされている。この働きにより、我々の知覚は時間的に延び広がった時間的対象を、一つの対象として捉えることができる。例えば「じかん」という言葉の「ん」を聞いているとき（フッサールの用語で言えば「ん」を原印象・原現前として受け取っているとき）、「じ」や「か」という諸々の過ぎ去った音が把持において「保持」されているからこそ、我々は「ん」という単音ではなく、「じかん」というひとかたまりの時間的対象を知覚することができるのである。このように、把持は知覚においてその都度の原印象・原現前と共働し、過ぎ去ったものを保持しているのであり、これが把持についての最小限の定義と言えよう。

当然把持はより詳しく規定することが可能であり、我々はその詳しい規定を同書 11 節²⁰において確認することができる。この箇所ではフッサールは、知覚されたある音が徐々に我々の意識において過ぎ去っていく様を、把持の働きに則して記述している。

しかし、〈音 - 今〉についての意識、〔言い換えれば〕原印象 *Urimpression* が把持へと移行する場合、この把持自体も再び一つの〈今〉なのであり、一つの顕在的な現存在なのだ。把持自体も顕在的である（しかし顕在的な音ではない）一方で、把持は過ぎ去った音についての把持でもある。思念の光線は〈今〉へと向かうことができる、〔つまり、それ自体が再び一つの今である〕把持へと向かうことができるが、しかし、把持的に意識されているもの、〔つまり〕過ぎ去った音へも向かうことができる。しかし、意識のいずれの顕在的な〈今〉も変様の法則に服している。意識のいずれの顕在的な〈今〉も把持の把持へと変転するのであり、絶えずそうなのである。上記に従って、各々の以後 *später* の点は、以前の *früher* 点²¹に対して把持であるというように、把持の絶えざる連

²⁰当該の節は時期の異なる二つの草稿を基にしている。フッサール全集第 X 巻の編者 *Boehm* によれば、「第 11 節の最初の段落のテキストは 1908 年と 1909 年の間に成立した手記に基づいており、その手記は以下の補完テキスト [=フッサール全集 X 巻 B 部] Nr. 50 において、その元々の形で完全に再現されている。特に S. 326, Z. 9 から S. 327, Z. 21 を参照せよ。——第 11 節の第二段落のテキストは 1905 年の講義草稿の紙片「35」に基づいている」(X, 29)。ちなみに、ここでの考察は 1908-1909 年の草稿に基づく箇所に依っている。

²¹この「以後」「以前」という表現は、継起における以前・以後という意味で用いられていないと考えられる。仮にこれをそのような意味で解釈すると、以降で挙げる例を用いれば、後から与えられた u「か」が、以前に与えられた（そして今把持的に意識されている）r「じ」に対して把持である、ということになるが、これは明らかに倒錯している。

続体が生じてくる。

(X, 29)

引用では、ある瞬間において顕在的に今知覚されたものとして与えられた音 - 与件が、如何にして、いわば、さっき知覚した音に変様するかが記述されている。音与件（「音 - 今」）は、最初に、つまり〈顕在的現在の音〉として登場してくる際には「〈音 - 今〉についての意識、〔言い換えれば〕原印象」によって捉えられるが、しかし次の瞬間には原印象の手を離れ、把持によって捉えられるようになる（このとき、当該の音 - 与件は〈さっきの〈顕在的現在の音〉〉として意識されている）。ところで、把持によって捉えられた音与件は変様され²²、言うなれば〈さっきの〈顕在的現在の音〉〉として捉えられるのだが、しかしこれを捉える把持自体は今発動しているものである、つまり、フッサールの言葉で言えば「この把持自体も再び一つの〈今〉」なのである。このことを確認した後、フッサールは「意識のいずれの顕在的な〈今〉も把持の把持へと変転するのであり、絶えずそうなのである」と述べる。これはどういうことか。

仮にある瞬間①において、「じ」という音を聞いているとする、つまり、この音を原印象によって捉えているとする。上で確認したとおり、この音与件は次の瞬間②においては把持によって捉えられ（ひとまず、この把持的働きを R「じ」(Retention vom 「じ」)、これによって把持された与件を r「じ」(retendiertes 「じ」)としておく)、さらにこの把持という働き自体が「一つの〈今〉」として顕在的なのだとされている。さて、次の瞬間③へと移行する際には、瞬間②における〈今〉全体が「変様の法則に服している」。すなわち、R「じ」自体も、瞬間③においてはそれ自体が把持されるのである（以下、この把持の働き自体を志向する把持を R 把持と表記する）。あるいは瞬間③において意識は R「じ」自体を把持しているのである（上に倣って、この R「じ」を捉える把持を RR「じ」=R²「じ」とする。R「じ」の志向的相関者たる r「じ」も再度把持的変様を被り、rr「じ」=r²「じ」となる）。当然この R²「じ」という働きも瞬間③における一つの〈今〉に含まれ、次の瞬間には再度把持的変様を被るのであり、この変様は無限に繰り返される。

フッサールは直前の 10 節において時間図表を用いた考察を行っており、論者の見るところ、上の引用の「以前」「以後」も図表を前提とした表現であると考えられる。すなわち、図表の縦線を上から下に眺めていった時に先に登場するものが「以前」と表現され、後に登場するものが「以後」と表現されている、と考えられる（実際、S. 28 において、ここと同様の用法における *später* という語が見られる）。したがって、ここで「以前」「以後」と表現されたものは、継起の順番に則して言えば「より後に与えられた（より新しい）」「より前に与えられた（より古い）」ということになるだろう。

²² この場合の「変様 *Modifikation*」は与件内容に関わるものではなく、与件の所与様態に関わるものである。〈今の [トランペットによる、ff の、ドの音]〉は、ゆくゆくは〈さっきの [トランペットによる、ff の、ドの音]〉、〈さっきの〈さっきの [トランペットによる、ff の、ドの音]〉〉になっていくが、しかし [トランペットによる、ff の、ドの音] の部分是不変である（サクソに変わったり、mf に変わったり、1 オクターブ低くなったりしない）。

他の音 - 与件も同様の変様を被る。例えば瞬間②において「か」という音 - 与件が与えられたとすると、これは瞬間③においては把持において捉えられ（ここではひとまずこの把持をR「か」と表記し、これによって捉えられた与件をr「か」とする）、この把持はR²「か」、R³「か」へと変様していき、これに伴って与件「か」もr²「か」、r³「か」と変様していく。つまり、ある瞬間における全ての働き（原印象、把持、把持の把持 etc.）、およびその相関者たる諸与件はみな一様な把持的変様を被るのである。より単純に言えば、把持は与件のみを捉えているのではなく、意識それ自体の有り様を、そのつどの瞬間ごとに、丸ごと把持的に保持していくのである。より正確に言えば、各々の瞬間の意識は自らの有り様を原印象的に意識しており、この意識それ自身に対する原印象が把持へと移行するのである。したがって、瞬間①から瞬間③までの変化を数式的に表現すると（瞬間③において音「ん」が与えられたとする）、

【意識の働きに関して】

[U「じ」（「じ」を捉える原印象）]

→ [U「か」、RU「じ」]

→ [U「ん」、RU「か」²³、R²U「じ」]

【意識が保持している与件に関して】

[u「じ」（U「じ」の相関者）]

→ [u「か」、ru「じ」]

→ [u「ん」、ru「か」、r²u「じ」]

となるが、これはつまり、

【意識の働きに関して】

[U「じ」（「じ」を捉える原印象）]

→ [U「か」、R [瞬間①の意識]]

→ [U「ん」、R [U「か」、R [瞬間①の意識]]]

= [U「ん」、R [瞬間②の意識]]

【意識が保持している与件に関して】

[u「じ」（U「じ」の相関者）]

→ [u「か」、r [瞬間①の与件]]

→ [u「ん」、r [u「か」、r [瞬間①の与件]]]

= [u「ん」、r [瞬間②の諸与件]]

ということになる。さて『時間意識講義』におけるフッサールの語法では、瞬間②におけるru「じ」は把持（厳密に言えば把持された与件）であり、u「か」は原印象（厳密に言えば原印象における与件）であるが、上記の与件に関する式から分かるように、それ以降の瞬間における把持的変様でもこれらの性格は消滅させられるわけではなく、把持的変様は、言うなれば、これらの関係に単純に付与されていく形でかかっている。つまりu「か」、r「じ」はそれ以降無限に変様されていくのだが、しかし瞬間②における両者の関係（u「か」（以前の点））に対してr「じ」（以後の点）が把持であるという関係はそれ以降も変化しない。これはあらゆる二つの与件同士の関係について妥当する。まとめると、各々の瞬間における意識のあらゆる働き（原印象および諸々の把持）は、意識それ自体を捉える原印象によって、

²³ U「か」に対する把持を厳密に表現したもので、R「か」と同義。

「一つの〈今〉」として統一的に意識されている。そして次の瞬間には、これらはその統一性を保ったままの形で把持され、ここに新たに生じる与件を捉える原印象が加わり、これらが再度一つの〈今〉として統一的に原印象的に意識され、以下これが無限に繰り返される。以上を踏まえ、瞬間 N から瞬間 N + 1 への把持の変化（瞬間 N における原印象の働きを U [N] とする）を数式的に一般化すると、

$$R [N] \rightarrow R [N+1] = R [U [N] + R [N]]^{24}$$

となるだろう。つまり各々の瞬間における原印象および把持は意識それ自身に対する原印象によって統一的に意識され、次の瞬間においては上記の統一が維持されたまま把持される。それにより、各瞬間において成立している把持は、それ以前の瞬間において成立している把持を把持的に変様された形で保持している。そして、より以前の把持ほど上記の把持的変様をより多重的に被るため、把持された諸々の働きおよび把持された諸与件は把持的変様の度合の軽重による順序的秩序を伴った統一的連続を形成する。意識の働きの相関者たる諸与件もこの連続性において秩序付けられる。かくして、把持されたものから成る「把持の絶えざる連続体が生じてくる」。我々は「じ」「か」「ん」という三つの与件だけではなく、これらがまさに「じ」→「か」→「ん」という順序で与えられたことをも把持しているのである。最初に定義したように、把持は知覚において原印象・原現前と共働しているため、この把持的連続体もその都度の原現前的・原印象的位相と結びついている。この把持的連続体は原現前的位相に対して過去の地平として振る舞う。

さて、把持についての考察を閉じるにあたり、上記の考察において対象とされていたものについて指摘しておきたい。上記の考察においては説明の都合上、「じかん」という平仮名の連続から成る時間的対象を扱ったが、前にも述べたように『ベルナウ草稿』ではヒュレー的領域が扱われており、時間的対象それ自体は問題になっていない。つまり上記を『ベルナウ草稿』の考察と接続する際には、上記の考察からこの時間対象の意味を排除しなければならない。すなわち、「じかん」が「時間」という日本語や、その他何らかの有意味な対象として構成されてくるといふことは問題になり得ないし、そのような含意は全て排除されなければならない。それどころか、当該の音声がその他の聴覚的刺激から際立てられて与えられるという事柄も問題になっていないと考えなければならない。ゆえに『ベルナウ草稿』の議論との接続にあたり、上で扱われていたのは、過去のその都度の瞬間におけるヒュレー

²⁴ たとえば『ベルナウ草稿』 Nr. 11, §4 ではフッサールによる同様の把持の数式化が見られる。上で行った数式化は基本的にはフッサールの数式化と同じだが、しかしフッサールの数式化においては把持が「過去統握 *Vergangenheitsauffassung*」(XXXIII, 219) とも表現されて数式に登場しており（「V」）、また把持される与件（「E₀」(ebd.) など）に、把持的変様を示すために「'」が付されている。しかし、記号 V は記号 R で十分代用可能であり、また把持されるものに「'」を付すと、与件内容自体が変様しているような誤解を与えかねない。ゆえに、上の数式化ではいずれの記号も用いなかった。

的与件（というより与件がそこにおいて与えられた位相²⁵）が時間的な順序を形成し、かつそれを保持したまま流れていくという現象であったと考えなければならない。

以上より、把持された諸与件は意識において一つの連続体を形成するという事、この連続体の根底には把持の働きそれ自体の連続体があること、この把持の働きそれ自体の連続体は意識それ自身に対する把持によって成立することが分かる。すなわち、各々の把持はそれ以前の諸把持を把持すること（志向的に内包すること）によって連続体を形成し、それによって、把持された諸与件は順序付けられて保持される。かくして、把持的された時間位相においては時間的順序が成り立っていることになる²⁶。

1.2.2. 連続的予持

前節では把持の働きを見てきた。今度は、把持と対をなす予持の働きを見ていこう。予め述べておくと、予持と把持とは志向の方向こそ反対であるが構造的には同じである。ただし、両者の相等性はあくまで構造に関するものであり、原現前という動性に関わるとき、予持は把持と同じ構造を持ちながら、把持とは異なる仕方で振る舞う。この振る舞いの差異は時間的構造の記述にとって欠くべからざるものである²⁷。

とはいえ、予持とはどのような働きか、まずはその構造を見ていこう。

予持も把持と同様、知覚において原現前・原印象と共働している。このことは初期時間論から記述されているが、中期『ベルナウ草稿』では、予持の志向的構造が詳しく記述されている。予持の構造についての記述が見られるのは、Nr. 1（1917年）、§3²⁸においてである。この節の冒頭では、「出来事 Ereignis が $E_0...E_p...E_n$ というようにある」（XXXIII, 8）という状況が想定されている。前に確認した通り、フッサールがここで考えようとしているのは原

²⁵ 本研究ではフッサール時間論における「位相 Phase」を、意識されている時点として解釈し、「瞬間 Moment」あるいは「時点 Zeitpunkt」を、客観的時間として客観化された位相として解釈している。時間図表に則して言えば、縦線上に並んでいる点が「位相」、原印象・原現前位相を繋いだ横線を想定した時、その線上に並んでいるのが「瞬間」ということになる。上記のようにそれぞれのことがはる程度一義的に定義可能だが、定義の性質上、フッサールが観察している事象に依って同じものが「位相」と呼ばれたり「瞬間」と呼ばれたりということは起こり得る。

²⁶ この把持的な志向的連続体については Larrabee[1994], p. 205 の図表が適切であろう。

²⁷ 予持と把持のこの構造的同一性に関しては真達[2006]も指摘している。ただ、真達は予持と把持の差異を「発生的観点」（173 頁）に基づいて、それが志向している内容の観点から説明しようとするが、これは本研究の言う予持と把持との差異とは異なる。

²⁸ 全集 XXXIII 巻の注記によれば（vgl. XXXIII, 396）、Nr. 1 の元のテキストは草稿群 LI 16 の紙片 2-9 である（この草稿群は全部で 15 枚の紙片から成る。紙片 10-13 は Beilage I として同巻に収録されている）。この草稿の一枚目の紙片には 1917 年 Bernau とあり（フッサールが 1917 年に Bernau に滞在したのは夏季休暇の間）、また表紙として使われた印刷物の日付は 1917 年 8 月 30 日になっており、場所は Freiburg になっている。いずれにせよ、この草稿は 1917 年の 9 月頃に書かれたものと考えられる。また、表紙には草稿群 LI 15（Nr. 2 として同巻に収録されている）に対する参照指示もあり、これらの草稿における密接な連関が示唆されている。

現前が絶えず生じてくるという、意識の最も根源的な動きである。ゆえにここで記述されている「出来事」も、今が根源的に生じてくるということ、つまり「原現前」の意味で解釈すべきであろう。また、前章末尾で原現前は何らかの「未来地平」において捉えていると述べたが、ここではそのことが「この系列 [E₀...E_p...E_n] を予持が貫いていく」(ebd.) と表現されている。

さて、上記の予持の様子は「連鎖的な仕方で *kettenweise*、つまり、位相から位相へと、絶えず充実される予期 *Erwartung*²⁹が進んでいくのである」(XXXIII, ebd.) と表現されているのだが、これはどういうことだろうか。フッサールは次のように述べている。

しかし、未来へと向けられた予期が、やって来ている出来事、あるいは流れゆく出来事区間に対して向けられている、ということがよく考えられなければならない。上記は、一つの点において生き生きした予期が、次の点、[つまり]一つの単なる境界のみへ向けられ、充実と共に、再び「次の点」のみへと向かうような一つの新しい予期が閃き出てくる、という仕方で生じるわけではない。[...] 我々が諸々の位相において連続体を考える場合、志向性はある位相から次の位相へと向かうのだが、しかしその位相を貫いて続く位相へと向かうのであり、その位相を貫いてさらに続く位相へと向かうのであり、そのようにして全ての位相へと向かうのである。

(ebd.)

引用においては予持が「位相から位相へ」向かう、二通りの「連鎖的な仕方」が示されると解釈できる。一つ目は、その都度の瞬間ごとに次の瞬間における原現前のみを志向する予持が生じる、というものである。この場合、予持は志向していた瞬間が到来したときには充実してしまい、この充実と同時にまた新しい予持が登場してくる。つまりこの場合は、予

²⁹ フッサール時間論における通常の語法では準現在化 *Vergegenwärtigung* の作用である *Erwartung* と現在化作用の一部である *Protention* は明確に区別される。しかし、この節にフッサール自身が付したタイトル「現象学的時間の構成における「予期」(予持)の役割」(XXXIII, 8) にも見られるように、この箇所ではその区別は機能していない(また§1において「今(あるいは原現前化)は二種の「準現在化する」作用、[すなわち] 諸々の把持と諸々の予持の境界点である」(XXXIII, 4) と述べられているが、これも同様の語法である)。つまりフッサールは、現在化・準現在化の作用として想定される働き、およびそれらの区別をここで一旦放棄しているように見える。ただし、Nr. 3においてフッサールは把持と想起をかなり厳密に区別しており、しかもその際にかつての自身の用語法を否定しつつ「把持(後現前化の意識)は正確に見れば決して想起ではないのであり、したがって把持は第一次想起 *primäre Erinnerung* とは呼ばれてはならない。把持は決して準現在化などではない。」(XXXIII, 55) と述べている(『時間意識講義』においてフッサールは把持のことを第一次想起と呼んでいた(vgl. X, 30ff.))。つまり、フッサールはかつての考察を忘れてあるいは捨てているわけではなく、それを踏まえると、上で見た予持と予期の区別の失効も観察や記述の未熟さなどに起因するものではなく、何らかの意図によるものと考えべきであろう。フッサールはその意図を明示していないが、これまでとは異なる時間論の問題圏に突入するにあたり、考察を一からやり直すためにこれまでの考察を敢えて用いないようにしたのはないだろうか。

持の登場と充実が絶えず点滅的に繰り返されるということになるが、フッサールはこれを予持の在り方としてふさわしくないと考えている³⁰。フッサールが予持の在り方としてふさわしいと考えているのは二つ目で、これは予持が将来の原現前の位相全てに向かう、というものである。予持は将来の原現前の位相を一つずつ順番に貫いていき、「そのようにして全ての位相へと向かうのである」。かくして意識においては、それぞれの瞬間において、将来の原現前の位相を連続的に予持していくような、そのような予持的連続体が成立することになる。

さらにフッサールは、「充実」と「進行 Fortgang」という観点から、この連続体としての予持をより詳しく記述している。

まず「充実」という観点から、予持は次のように記述されている。

我々は次のような一つの志向〔＝予持〕を持っている。その志向性は新しい原現前の与件の登場と共に充実されるのだが、しかしそれはその登場についての志向性の一つの位相に関してのみ充実されるのであり、それ〔＝一つの位相だけが充実されること〕によって一つの連続的区間が、一つの開かれた「地平」として充実されないままに留まるのである。

(XXXIII, 9)

上でも述べたように、予持は将来に生じる全ての原現前を志向しており、したがって全ての原現前は予持によって志向されていたものが充実されたものとして現れてくる。ところで、それぞれの瞬間に原現前が意識にもたらされ、それぞれの瞬間において予持は充実されているのだが、当然、ある瞬間における一つの原現前だけで当該の予持志向全体が充実されるわけではない。例えば予持が E_1 、 E_2 、 E_3 …という原現前の位相を志向していて、 E_1 という原現前が今与えられたとすると、当該の予持全体が充実されるのではなく E_1 を志向していた部分だけが充実されるのである³¹。そして残りの充実されなかった部分 (E_2 、 E_3 …) は「一つの開かれた「地平」として留まることになり、新たなる原現前 (E_2 、 E_3 …) はこの地平でもって待ち受けられることになる。

上記の、一つの位相に関してだけ充実され残りの部分に関しては空虚なままに留まると

³⁰ 明示的には述べられていないが、上記がふさわしくないとすることは明らかであろう。まず、上記のように予持の登場と充実が絶えず瞬間ごとに点滅的に繰り返されるというあり方はあまりにせわしなく、経験に照らしてみても、意識がそのような動きをしているようには見えない。また、上記のように次の瞬間のみを志向する予持同士は互いに無関係にならざるを得ず、したがって、このような予持は将来における時間順序を構成することができない（相前後する予持同士の関係に関しては後述する）。

³¹ Nr. 1 の考察においてフッサールは、本来は原現前（『時間意識講義』の表現では原印象）として考えるべき位相をも予持志向の一部（充実された予持）として考えている。Nr. 1 は原現前が生じてくる有様を記述しようとしており、予持もその文脈で記述されている。そのため、予持において原現前が生じることが分かりやすくなる表現が選ばれたのだと考えられる。

いう予持の構造を確認した後、フッサールはここに「進行」の観点を加える。すなわち、原現前が瞬間ごとに絶えず与えられてくるといふ現象の進行を考慮に入れるのである。

進行においては絶えず継起的な合致が存続している。すなわち、充實的なもの *Volle* が、空虚の中へと入り込みつつ、ある変様された作用を作り出すのだが、しかしその作用は、当該の新たな原現前化する位相に関して、充實として（そして上記 [=充實的なものが空虚へと入り込んできて変様された作用を作り出すこと] によってその作用は原現前的になるのだが）、空虚のうちの一つの構成要素に関して以前の作用と合致するのであり、しかもそれは、残りの空虚が先行した空虚と合致する一方でそうなのである。

(XXXIII, 9)

引用では、予持のそれぞれの部分の以前の状態との合致が記述されている。上でも確認した通り、原現前が与えられると（つまりあらゆる瞬間において）予持の一部は充實され、その他の部分は未充實の地平として留まっている。これを踏まえたうえで、連続する二つの瞬間（0, 1）を想定し、さらに瞬間 1 において原現前 E_1 が生じ、それによって瞬間 1 における予持が充實された一点 E_1 を持ち、空虚な地平として $E_2 \rightarrow E_3 \rightarrow E_4 \rightarrow \dots$ を持っているとしよう。さて、瞬間 1 における E_1 は「充實」（原現前）であるが、これは瞬間 0 においてもそうだったわけでは無い。瞬間 0 において E_1 はまだ予持されていたのであり、正確に言えば瞬間 0 における空虚な地平（ $E_1 \rightarrow E_2 \rightarrow E_3 \rightarrow E_4 \rightarrow \dots$ ）の一部だったのである。つまり瞬間 1 における「充實」と、瞬間 0 における空虚な地平の一点（「空虚のうちの一つの構成要素」とは対応し合っている（互いに「合致する」）のである。この「合致」が生じるのは E_1 に関してのみではなく、予持の他の箇所においても同様の合致が生じる。すなわち、瞬間 1 における空虚な地平 $E_2 \rightarrow E_3 \rightarrow E_4 \rightarrow \dots$ （「残りの空虚」）は、瞬間 0 における空虚地平から E_1 を除いた部分（「先行した空虚」）と対応している。したがって、瞬間 1 における予持の全体は、瞬間 0 における予持全体から瞬間 0 における原現前を除いたものと対応している。

フッサールはこれについて、より一般化した形で、把持を引き合いに出しつつ、次のように述べている。

各々の後続する把持が先行する諸々の把持の系列へと関係するように、各々の先行する予持は、予持的連続体において、各々の後続する予持に関係するのである。先行する予持は全ての後の予持を自身のうちに志向的に蔵している（それらを含意している）のであり、後続する把持は全ての以前の把持を志向的に含意しているのである。

(XXXIII, 10)

引用にもある通り、先行する予持、つまり、かつての瞬間において発動していた予持には、それ以降の瞬間において発動する全ての予持が含まれているとされている。ではこの含む・

含まれるの関係とは何か。

ここで手掛かりとなるのは、この予持同士の関係と類似的に語られている、相前後する把持同士の関係である。我々は前節において、この関係を既に確認している。ごく簡単にもう一度確認しておく、把持は与件のみならずかつての原印象および把持といった、意識の働きそれ自身をも把持するのであり、これによって各瞬間における把持は、それ以前の瞬間における把持を、把持的に変様された形で保持していたのであった。上記の引用では、この把持同士の志向的包含関係と類似的なものが予持においても成立するとされている。つまり、予持も将来の原現前を志向するのみならず、原印象および予持という意識の働きそれ自身をも志向しているのである（フッサールはこれについてより明確に「双方において〔＝将来の側にも、過去の側にも〕我々は間接的な志向性を持つのであり、各々の間接的志向性には二重の「方向」が属している。すなわち、第一次客観への方向と第二次客観への方向、つまり、「諸作用」〔それ自身〕とそれの所与様式の〈如何に〉における第一次客観への方向、である。」(ebd.)と述べている)。したがって、把持と同様予持も原現前および予持の働き自身を予持している（以下これをP予持と表記する）とされており、ゆえに予持の働き（および予持された諸与件（＝諸位相）³²）においても把持と同様の連続体が成立すると考えられる。すなわち、瞬間0における予持は $E_0 \rightarrow E_1 \rightarrow E_2 \rightarrow E_3 \rightarrow E_4 \rightarrow \dots$ と表現でき（ E_0 は原現前、充実された予持）、将来の諸位相 E_1 、 E_2 、 E_3 、 $E_4 \dots$ は順番に並んでいるのであるが、この順序はP予持によって成立しているものであり、例えば E_2 は、瞬間1において（ E_1 が原現前したときに）予持される、ということ（瞬間0）において予持されているのであり、いわば〈予持の予持〉されているのである。つまり、全ての位相を貫く一貫的な予持志向は、予持、予持の予持、予持の予持の予持... という、遠い将来の位相ほど志向的に重層的に予持されるという、志向的階層構造を持つ予持的連続体を形成するのであり、この階層構造に従って将来における諸位相は順番に並ぶことになる。ここまでの話では予持と把持とは同じ構造を持っていると言える。把持が原現前的位相に過去の地平として結びついていたのと同様、予持的連続体も未来的地平として原現前的位相に結びつく。

ただし、「困難は両方の側で同一ではない」³³ (ebd.)。ここで注意しなければならないのは、引用にもあるように、把持においては後続する（後の時点における）ものが先行する（以

³² ただし前章でも確認したように、『ベルナウ草稿』においては意識の最も根源的な働きを記述するためにヒュレー的領域が観察されているのであった。したがって、ここでも予持された諸与件それ自体が重要なのではなく、むしろそれらの諸与件を載せている将来における（原現前）位相が問題になっていると考えるべきであろう。注意も意味付与も客観化も向かわないような将来における与件の順序が問題なのではなくて、その与件が載っていることによってかろうじて可視化される将来の意識が重要なのであり、その将来の意識における意識位相が順序的秩序を成しているということが重要なのである。ここでは前節での記述に合わせてこのように述べるが、以降は必要に応じて「位相」という言葉を用いていく。

³³ 「何故なら原過程の流れにおいては、充実した（相対的に充実した）把持が先行し、相対的に空虚な把持が後続する一方で、空虚な（相対的に空虚な）予持が先行し、充実した予持が後続するからである」(ebd.) とある。

前の瞬間における) ものを含むのに対し、予持においてはこれが逆になっている、という点である。

確かに両者は共に自身を志向するという同じ性質を持ち、この性質により、同様の志向的階層構造を有している。それゆえ仮にある一瞬における意識の状態を、いわば、写真に撮ることができたなら、そこには同じ構造の(過去方向へ延びる)把持的地平と(未来方向へ延びる)予持地平が見出せる。この点に関して、『イデーニ I』におけるフッサールは半分だけ正しかったと言える。ただし『ベルナウ草稿』では、原現前が絶えず生じてくるという過程的現象(原過程、原流れ)の記述が目指されており、予持および把持もこの原流れとの連関において捉え直されなければならない。すなわち、まず位相に関して述べると、各々の瞬間においては予持が連続的に志向していた諸位相のうちの一つ(厳密に言えば、志向的に最も単純に予持されていた位相)が原現前になり、これと入れ替わるようにして、一瞬前に原現前だったものが把持される(厳密に言えば、把持的連続体のなかに、最も単純に把持された位相として組み込まれる)ようになる。単純に言えば、各々の瞬間においては、把持的地平における位相の総数一つずつ増えているのに対し、予持的地平における位相の総数は一つずつ減っている(フッサールの表現を借りるなら「短くなっていく verkürzend」(XXXIII, 9))³⁴のであるが、これはあくまで志向された位相に関しての話である。志向性それ自体に関して言えば、把持の場合はより後のものの方が志向的により多くを含んでいるが、予持の場合はより以前のものの方が志向的により多くを含んでいるのであり、別の言い方をすれば、より後の予持ほど志向的に単純化していく。先ほどの瞬間 0、1 の例で言えば、瞬間 1 における予持 ($E_1 \rightarrow E_2 \rightarrow E_3 \rightarrow E_4 \rightarrow \dots$) は瞬間 0 における予持 ($E_0 \rightarrow E_1 \rightarrow E_2 \rightarrow E_3 \rightarrow E_4 \rightarrow \dots$) の中に含まれている(網掛けは充実された予持位相を表す)。さらに瞬間 1 の直後の瞬間 2 を想定すると、瞬間 2 における予持 ($E_2 \rightarrow E_3 \rightarrow E_4 \rightarrow \dots$) は瞬間 1 における予持に含まれ、また瞬間 1 の予持を含む瞬間 0 の予持にも含まれている。把持の考察に倣って、連続する瞬間 N、N+1(瞬間 N+1 における原印象の働きを U [N+1] とする)を想定し、上記を数式的に表現して把持の式と並べると、

$$\text{【予持】 } P [U [N+1] + P [N+1]] = P [N] \rightarrow P [N+1]$$

$$\text{【把持】 } R [N] \rightarrow R [N+1] = R [U [N] + R [N]]$$

となる。まるでモーターと発電機のように、同じ構造を持つ両者が原流れにおいては反対の働きをしていることが見て取れる。この点に関して、把持の記述を予持の記述にも流用でき

³⁴ 「過程においてこの空虚意識が続いていくのだが、この意識は既に初めから遂行されていた inszeniert のであり、ただ絶えざる充実によって短くなっていく verkürzend だけである」(XXXIII, 9) と記述されている。ただし予持的連続体が「全ての位相に向かう」(XXXIII, 8) と記述されていたことを額面通りに受け取り、かつ時間を無限のものとして想定するのであれば、「短くなっていく」とは表現されていても、それによって予持地平がいずれ無くなってしまふということは含意されていないと考えるべきであろう。

ると考えた『イデー I』におけるフッサールは、間違っていたと言わなければならない。

以上から、『ベルナウ草稿』における予持が将来における諸々の位相を志向すると同時に将来における予持それ自身をも志向し、この自身に対する志向によって予持的志向は志向的連続体を形成し、これは階層構造を持つ。この階層構造に従って将来の位相は時間的順序を持つ。そして、把持とは反対に、予持のこの階層性は原現前が生じてくるごとに解消されていく。

上記で確認してきたように、『ベルナウ草稿』では原現前の絶えざる生起が問題になり、この説明のために予持（および把持）が登場しているのだが、しかし上記は依然として不十分である。というのも、確かにこれまでの記述では「予持的連続体において原現前が予持され、これを充実する仕方で原現前が生じる」ということと「もはや原現前ではなくなったものが把持的連続体に組み込まれる仕方で保持される」ということがそれぞれ示されているものの、厳密に言えば、両者は未だ二種類の動きとしてしか記述されていないからである。上記の記述では、ある位相を捉える予持の志向的重層性は原過程の進行において徐々に単純化されていき、これが完全に解除された時に当該の位相は原現前となり、他方で、把持的に全く変様されていない原現前は原過程の進行の中で把持的に徐々に重層的に志向されていくのであった。この記述に従うと原現前の位相は予持的にも把持的にも何ら変様されていない位相ということになる。しかし、このように原現前を予持と把持の間の「中立地帯」として記述してしまうと、（あくまで記述の上で、であるが）両者の間には断絶があるように見えてしまう。しかし、我々の経験を振り返れば直ちに明らかなように、原過程の経過、より端的に言えば意識における時間の流れ（「現象学的時間」）は恒常不断に生じているのであり、原過程を記述する上でこの恒常不断性は避けては通れないものであろう。つまり、原現前が未来地平の中を現在に向かって進んでいき、それが現在において一瞬間いた後、直ちに過去地平の中で無限に歩み去っていく、という時間的な流れが紛れもなく一連の同一の動きだと示すことができなければ、この記述は我々の体験に及ばないものと言わざるを得ないであろう。では、フッサールはこれを如何にして記述したのか。

1. 2. 3. 予持と把持の「絡み合い Verflechtung」

これまでの考察で、予持と把持は自分自身（および意識自身に対する原印象）を志向する働きを有しており、それによってそれぞれの側で順序付けられた連続体（志向性の連続体、およびそれに基づく志向された諸位相の連続体）を形成することが明らかとなった。さらに、原過程において両者は反対の動きをしていることも明らかになったが、しかし両者の間の連続性は明らかになっていない。ゆえに、さしあたっては、この予持と把持の間の連続性が見出されることによって初めて、我々の意識における未来→現在→過去という一つながりの時間（そして実際我々の経験において時間は一貫的な連続として与えられているのだが）

を記述することが可能となる。つまり、意識位相全体（予持的諸位相—原現前位相—把持的諸位相）の連続性は如何にして可能になるか、これを可能にするのは如何なる働きかということが問題となる。フッサールは次のように問うている。「諸々の把持と予持とは如何にして互いに絡み合う *sich verflechten* のか。それらはこの絡み合いにおいて、如何にして根源的な時間意識の統一を持つのか」（XXXIII, 10）。

この問いに答える上でカギとなるのは意識の自己意識である。第一章第二節、および本章第一、二節において確認したように意識は意識の働きそれ自体を知覚的に捉えている。それゆえ、把持は原現前および把持の働きそれ自身に向かい（R 把持）、予持は原現前および予持それ自身に向かうのであった（P 予持）。ところで、これまでの考察によれば、意識は連続的予持、（充実された予持としての）原現前、連続的把持という三つの働きで原現前の絶えざる連続（原過程）を捉えていたのであり、それゆえ各瞬間においてはこの三つの働きが見出されるのであった。これを踏まえ、把持および予持が意識の働きそれ自体に向かうものだというのであれば、これらの志向性は各瞬間において生じている上記の三つの働きにも向かっているということになるだろう。すなわち、意識はこの瞬間に生じている全ての働き（予持・原現前・把持）を原現前的に捉えている。そして、この意識全体を捉える原現前の働きそれ自体が把持へと移行するのであり、またこの意識に対する原現前は予め予持されている。そして、この意識の働きそれ自体に対する予持・把持において、予持が把持を志向し、把持が予持を志向するという「絡み合い」が生じる。さしあたり Nr. 1, §4 においては次のように述べられている。

我々は必然的発生原法則として、ここで次の命題を要求することができる。すなわち、ヒュレー的諸与件（さらにはあらゆる他の諸々の原体験）の原連続が経過してしまったとき、ある把持的な連関が留まる。しかし、それだけではない——ヒュームは既にそのことを分かっていた。意識はその動向において留まるのであり、[そのうえで] 更なるものを予料するのである。すなわち、一つの予持は同一の様式において系列が続行されることへと「向け」られているのであり、上記は、核与件として機能する原与件の経過に関して予持であり、また同様に、把持において機能している把持の諸射影を伴った把持の経過に関するも予持なのである。

(XXXIII, 13)

その際にはしかし、次のことがよく考えられなければならない。すなわち、過程の中途において、各々の把持は以前に充実された予持の把持であり、また、予持の空虚地平の把持でなければならないということ [...] である。

(XXXIII, 14)

上記のように、予持は将来の意識を、把持はかつての意識をそれぞれ志向しており、その中

で予持は把持（D. ローマーに倣い、以下ではこれを R 予持と表記する³⁵）を、把持は予持（以下ではこれを P 把持と表記する）を志向しているのである。

ところで、予持と把持とが「絡み合う」ことはなぜ可能なのか。この絡み合いを理解する上で着目すべきは、予持および把持の恒常不断性である。

具体的な内容を伴った時間的客観、およびその与件内容についての予持や把持が問題になる場合、これらの動向は必ずしも恒常不断的ではないだろう。例えば、知っている曲を聞いている場合には将来の与件内容に関する予持は比較的容易だが、知らない曲を聞いている場合、上記のような予持は極めて難しいだろう。そもそも、いずれの場合においても、演者のミスやアレンジ、あるいは突発的に別の音が鳴るなどの様々な要因により、与件内容に関する予持はいとも簡単に幻滅を味わう。さらに言えば、把持ですら、与件内容に関するものは失敗し得る。家の扉を出てすぐに鍵を掛けたかどうかを忘れて確認する場合がそれである。あるいは、何かしらのショッキングなもの（例えば、家の前で死んでいた動物など）を見てしまった場合、この把持された与件内容は、積極的に想起されずとも、把持的地平において強く留まり続けることが考えられる。このように、把持ですら与件内容に関わるものを想定する場合には、その動きに明確な不断性、恒常性は無い。1秒前よりも強烈に残っている5秒前の内容というのは十分考えられるし、もちろん逆も言える。予持に至っては、時間経過の様態（現在からどれだけ離れているかということ）と予持された与件内容の鮮明さは別問題であるし、その予持が充実するか幻滅するかはさらに別の問題である。予持・把持された与件内容は状況に応じて有り様が異なっており、それゆえ与件に関する予持・把持は恒常不断的とは言い難い。

しかし、繰り返しになるが、そもそもヒュレー的領域において問題になるのは原過程の絶えざる流れであり、それが如何に予持・把持されるかということであって、その内容は問題ではない。この場合に予持・把持されているのは新しい〈今〉が与えられたということ、原現前そのものであり、したがってここで問題になるのは予持・把持された内容の鮮烈さではなく、予持・把持された原現前の変様の度合いである。今知覚した〈鍵を閉める感触・音・光景〉が一瞬後にどれほど鮮烈に残っているかは分からない。しかし、今が一瞬後には一瞬分だけ沈下していることは疑い得ないことであり、しかもいついかなる時も疑い得ない。知覚において何が与えられるかは不確定だが、しかしそれを捉える知覚の有り様は恒常不断である。

意識の働きそれ自体が捉えられるということが言われるときにはまさしくこの恒常不断性が念頭に置かれている。5秒後に何を覚えているか、5秒前に何を期待していたかは定かではないし、意識がそういったものを常に捉えているとは言えない。しかし、意識はいついかなる時も予持・原現前・把持という同一の働きを持ち、しかもそれらはいついかなる時も同一の構造を持っている。予持が瞬間ごとに志向的に脱重層化していくこと、予持的位相の

³⁵ ローマー[2004], 197頁を参照せよ。

連続体において最も単純に志向されていた位相が原現前的位相として瞬間ごとに不断に生じてくること、把持が瞬間ごとに志向的に重層化していくこと。これらは、我々に対して何かしらが現前する限りは、つまり最広義の原現前が意識において生じている限りは決して途絶えることが無く、しかも「同一の様式において」継続される。この意識の恒常不断性があるからこそ、意識の自己意識も恒常不断的なのである。

かくして、予持と把持とは互いに志向し合うという仕方で「絡み合っている」ことが分かった。ところで本研究は、そもそも原過程における時間的な連続、つまり体験流を一貫的なものとして示すべく予持と把持との連続性を探り、その文脈において予持と把持との絡み合いを確認したのであった。しかし、予持と把持とが絡み合うということがなぜ連続的時間の解明に資するのか。意識において予持と把持との絡み合いが見られることは分かったが、これはどのようにして体験流の統一性・一貫性を可能にするのか、そもそもこの絡み合いは何を意味するのか。そして、予持・把持およびこれらの絡み合いが織りなす「流れること」、体験流とは如何なるものか。この問いには次の第三章で答えることにしたい³⁶。

1.2.4. 予持・把持の無限性

第三章の議論に移る前に、上記に加えて、フッサールが予持・把持の連続性を無限のものとして考えていたこと、つまり、予持的・把持的な志向的連続体を無限に延びるものとして想定していたことを指摘しておきたい。

例えば、本章第二節でも確認したように、予持は志向的連続性を形成しつつ将来における位相を貫いていき、「そのようにして〔将来の〕全ての位相へと向かう」(XXXIII, 8、傍点強調は引用者による)とされている。また把持に関しても Nr. 16 において「諸々の把持の終わりなき endlos 連続性」(XXXIII, 294、強調は引用者)という記述がある。また、予持・把持の連続体は未来・過去の地平を形成するが³⁷、『ベルナウ草稿』においては、上記に対応して、未来地平・過去地平の無限性が述べられている³⁸。これまでの議論でも確認したように、予持および把持は意識の働きそれ自体を志向することによって志向的連続体を形成してい

³⁶ なお、Mensch[1999]、和田[2003]、真達[2006]、武藤[2013]などは本節で論じた「絡み合い」を与件志向的に理解している、つまり、把持された内容によって予持が規定されるという場面を想定しているようだ。第二部第二章第六節でも述べるように、確かにフッサールは『受動的総合の分析』などでそのような問題を扱っており、また我々の日常的経験においてもそのような予持は見出されるのだが、それは『ベルナウ草稿』において論じられている予持と把持の絡み合いとは異なると考えられる。簡単に言えば、「絡み合い」を上記のように捉えると、考察の舞台がヒュレー的領域に限定された理由や、絡み合いのもう一面(把持によって予持が規定されるという事象の逆)などが理解できなくなってしまう。

³⁷ 本章第一節、第二節参照。

³⁸ 過去地平の無限性に関しては XXXIII, S. 293、未来地平の無限性に関しては XXXIII, S. 331 などを挙げるができる。また、過去と未来を含んだ時間それ自体の無限性については、例えば XXXIII, S. 93-94 において言及がある。

る。つまり、それぞれの志向的連続体が無限に延びているということは、無限の未来や過去においても意識の働き・構造の同一性を志向するということであり、未来や過去における無限の知覚与件を捉えているということの意味するのでもないし、また無限の過去・未来において同一の働きや構造が実際にあるということの意味しているわけでもない。おそらく、その都度の知覚において実際に無限の長さを持った予持的・把持的連続体が直観されているのではなく、両連続体を無限に延長できるという能力可能性 *Vermöglichkeit* があるのだと考えられる。フッサールはこれについて詳しく語っていないが、事情はおそらく次のようだと考えられる。まず、各々の連続体は意識の自己意識的構造によって成り立っており、例えば予持の連続体は、将来の予持に対する予持、つまり、将来の意識が予持志向を有しているであろうことの予持により成立している。さてそれを踏まえると、予持的連続体が有限で、その端と呼べるものがあるのだとしても、その端においても意識が見出されなければならない。なぜなら予持的連続体は将来における意識の働きを予持することによって成り立ち、これは連続体の端においても変わらないからである。この連続体の端の意識というものが何を捉えているか、そもそも実際にそのような意識があるかどうかを確定することはできない。しかし、意識があるのであれば、その意識もまた予持 - 原現前 - 把持という構造を持つと考えられる。というより、それ以外の構造を持つ意識はうまく想定されないのではないだろうか。だとすると、予持的連続体の端においてもその先の未来に延びる予持が見出されることになり、これは無限に繰り返され得る。つまり、意識は目下の知覚において見出される構造を未来に向けて投影し、しかもこの投影は無限に繰り返され得ると考えられる。この投影の正当性は、知覚の時間的構造が知覚にとって不可欠だということにその根拠を持つと考えられる。ただし、この投影自体は能動的な操作であり、常に可能ではあっても、常に行われているわけではないだろう。またこの投影は「もしそこに意識があるのなら」という前提の下では正当だが、この前提に正当性は無く、予持的連続体を無限に延長できるということは、意識が実際に無限の未来においても見出されること、つまり意識が事実に無限に続くことを意味するわけではない。把持的連続体の無限性についても基本的に事情は同じである。

この予持的・把持的連続体の無限性は、Nr. 2, §8 において印象的な仕方で述べられている。この箇所でもフッサールは、意識の自己意識的構造を確認しつつ³⁹、次のように述べている。少し長いが引用しよう。

³⁹ 上記の引用の直前では、意識の自己意識的なあり様が次のように述べられている。「意識は、それ自身において現在の意識についての意識であるような現在の意識である、そして現在の意識としてのみ意識は「現実的な」意識なのであり、したがってその [=意識の] 現実性の中にその [=意識の] 現実性もしくは現在を含むような、そのような「現実的な」意識なのである。そして意識は現在あるいは現実性であるのみならず [現在あるいは現実性] だったのであり、また、[現在あるいは現実性] であるだろう。そしてその [=意識の] 現実性における現在の意識として、意識はいちどき *zugleich* に過ぎ去った意識の流れについての意識であり、また、やって来ている、来たるべき意識の流れについての意識なのである。」(XXXIII, 45)

現在のものとしてのみ意識は現実性である。しかし現在は過去へと変転し、現実性は非現実性へと移行する。また、未来が現在へと変転し、非現実性が現実性へと移行する。そして、そのこともまた現在および現実性の意識の内に存している。非現実性はしかし無ではなく、真 - で - あった、や、真 - である - だろう、なのである。そして、以上の全てもまたその時々現在の意識に横たわっている。〔ゆえに、〕 現在とは全てを包括する意識であり、いわば、自分自身、そして意識の志向的な構成要素についての全知の *allwissend* 意識である——潜在的には、その〔=意識の〕構成は世界についての全知 *Allwissenheit* を蔵しているのである——〔もつとも、〕 理念的な可能性としては〔そのような意識なの〕であり、〔しかもそのような意識であるのは〕我々が次のことを考慮に入れる場合に限られる。すなわち、その内で意識流の過去と未来が霞み、意識の自己知覚の完全性に制限を加えるような暗闇の地平は偶然的な垣根であり、その垣根は「無限に」拡張されて考えられ得るものであり、それゆえ「理念」として、ある全知の「神的な」意識、すなわちそれ自身完全な明瞭さにおいて広がっているような「神的な」意識が生じる。「有限の」意識もまた全知であり、その〔=有限な意識の〕志向性もその〔=有限な意識の〕過去と未来の全体を覆っているのだが、しかしただ部分的のみ明瞭に覆っているのであり、その他については、明晰さと諸々の再想起の潜在性であるような暗さにおいて覆っているのである。

(XXXIII, 45-46)

この箇所では、まず、現在の意識において過去や未来における意識が意識される、ということが確認されている。ここまでは本章第二節までで確認したとおりであるが、さらにここからフッサールは、この自己意識的志向が及ぶ範囲と、自己意識的志向によって可能になる過去地平と未来地平の明瞭さを尺度として、『『神的な』意識』と『『有限な』意識』を比較している。上の引用を整理すると、神的な意識は自己意識的志向の及ぶ範囲も無限であり、さらにその意識の未来地平・過去地平においては「知覚の完全性に制限を加えるような」「暗闇の地平」は「無限に」遠くへ押しやられており、未来地平・過去地平は完全に明瞭な仕方と与えられているのだという。つまり、ここで想定されている神的な意識とは、無限に遠い過去・無限に遠い未来を明瞭かつ直観的に視野の内に収める、「世界についての全知」を実現した意識なのである。もつとも、このような意識は「理念」に過ぎない。実際に我々の意識がそうであるところの有限の意識の未来地平・過去地平には、多かれ少なかれ「暗闇の地平」の部分があり、未来に関しても過去に関しても全てを明瞭かつ直観的に把握しているわけではない。しかし、そのような有限な意識であっても、「その志向性も」神的な意識の志向性と同様「その〔=有限な意識の〕過去と未来の全体を覆っている」のだという。すなわち、たとえそれぞれの地平の大部分が暗闇に覆われているとしても、有限の意識の自己意識的志向、およびそれによって可能になる地平も無限の未来・過去まで延びているのであ

り、この意味において『有限の』意識もまた全知」なのである。フッサールが「全知」という異様な言葉に託して表現しようとしたのは、上記の予持的・把持的連続体の無限性、そしてひいては両無限性から成る体験流それ自体の無限性であったと考えられる。

ただし、予持的・把持的連続体および未来地平・過去地平、ひいては体験流全体の無限性は中期『ベルナウ草稿』で初めて主張された事柄ではない。例えば『イデー I』(1913年)においては「各々の体験は必然的に、あらゆる方向に無限に広がる充実した時間地平を持つ」(III/1, 182)といった表現が見られ、さらに§82では次のような記述が見られるが、これは本研究 42-43 頁の引用とも通じる内容と言えるだろう。

各々の体験の今は、たとえそれが新たに登場した体験の開始位相の今だとしても、必然的にそれの以前の地平 *Horizont des Vorhin* を持っている。けれどもそれ [=以前の地平] は原理的に、空虚な以前では決してあり得ず、内容の無い空虚な形式、無意味ではあり得ない。それ [=以前の地平] は必然的に、過ぎ去った今という意義を持つのであり、この過ぎ去った今は、この形式 [=過ぎ去ったという形式] において、過ぎ去った何かを、過ぎ去った体験を掴んでいるのである。新しく始まるそれぞれの体験には、必然的に [他の] 諸体験が時間的に先行してしまっているのであり、体験過去は連続的に充実されている。しかしまた、各々の体験今はそれの以後の地平 *Horizont des Nachher* をも持つのであり、そしてそれ [=以後の地平] もまた決して空虚な地平ではない。各々の体験今は、たとえそれが終わりつつある体験の持続の最終位相であるとしても、必然的に、ある新しい今へと変転していくのであり、そしてそれ [=ある新しい今] は必然的に充実したそれ [=充実した今] なのである。

(III/1, 184)

この記述においては、体験における全ての今は「以前の地平」および「以後の地平」を持つとされており、このことを軸にして考察が展開されている。まず考察されているのは「以前の地平」であり、これは把持的連続体のことと考えられる⁴⁰。なお、この引用の直前の節である§81においては、簡単なものであるとは言え、「把持の把持の連続的な相互内属 *Ineinander*」(III/1, 183) についての記述が見られるため、「以前の地平」も把持の自己意識的志向によって成立しているのだと考えられる。さてフッサールによれば、体験におけるどのような「今」も把持的連続体を伴っており、さらにその把持的連続体のそれぞれの位相も、過ぎ去っているとは言え、「今」として特徴づけられるのだという。当然、この過ぎ去った

⁴⁰ 上で扱った記述の直前の節である§81では把持についての手短な考察がなされており、§82の表題が「続き *Fortsetzung*」(III/1, 184)とされているように、§81と§82とは連続的な考察だと考えられる。そして、その§81の末尾には「以前 *Vorher* に対応するのは以後 *Nachher* であり、諸把持の連続体に対応するのは諸予持の連続体である」(III/1, 183)という記述が見られる。*Vorher* と *Vorhin* という若干の表記の揺らぎこそあるが、この記述と§81と§82の連続性を考慮し、このように解釈した。

「今」もまた把持的連続体を伴っている。したがってあらゆる過去の体験には、「時間的に先行してしまっている」ような諸体験が見出される、いわば過去地平の端とでも言うべき体験は存在しないのであり、したがって過去地平は無限に延長されると考えられているようだ⁴¹。さらに引用後半では、未来地平にも過去地平と同様の構造が認められるという趣旨の記述が見られる。ここから過去地平と同様の仕方で未来地平にも、いわば端が無い、つまり未来地平も無限に延長されるのだと解釈できる。これらを踏まえ、『イデーニ I』では体験流が「一つの『無限な』体験流」(III/1, 182) と呼ばれている⁴²。

このように『イデーニ I』においても未来地平・過去地平、そして体験流の無限性は記述されており、しかもその記述は、基本的には『ベルナウ草稿』におけるそれとほとんど同じなのである。これは本研究にとって注意すべき事実なのだが、しかしこれについては第二部で論じるとして、ここでは次のことだけ確認しておこう。すなわち、『ベルナウ草稿』においては予持・把持の自己意識的な働きに記述の焦点が当たり、連続的な予持・把持、およびそれによって成立する予持的・把持的連続体の無限性、ひいては体験流全体の無限性が記述されている。

以上より、中期時間論における予持概念の性格が明らかとなった。これまでの考察を総合すると、中期時間論における予持は考察の舞台としてヒュレー的領域が選ばれていたことから分かるように、将来に生じる具体的・規定的な与件内容ではなく、将来における意識の働きを予持していると考えられる。つまり自己意識的の性格を持ち、この正確によって無限に伸びる予持的連続体を形成し、さらに、同じく自己意識的志向を有する把持と絡み合うとされていると考えられる。では、この絡み合いは何をもたらすのか。次章ではこの絡み合いがもたらすものに迫っていく。

1.3. 『ベルナウ草稿』における体験流の時間的秩序

この章では、これまでの考察で確認してきた予持・把持の性格、および両者の絡み合いを踏まえ、それによって成立する意識の時間形式、原現前がその中において生じてくる体験流、「流れること」の時間的秩序に迫っていく。本研究の言う体験流の時間的秩序とは、体験流の進行を支配する秩序のことであり、端的に言ってしまうと、異なる瞬間における体験流の諸々のありようを貫く秩序であり、さらに突き詰めて言えば、同一の位相の異なる瞬間のあ

⁴¹ 『時間意識講義』でも過去地平の無限性に極めてよく似た議論がある (vgl. X, 69 f.)。ただし、『時間意識講義』において論じられているのは体験流ではなく客観的時間であり、また過去地平の無限性は想起の働きによってもたらされるとされている。

⁴² なお、『イデーニ I』でも体験流の全体を直観的に「把握」することは不可能とされ、これはただ「カント的な意味における理念」としてのみ与えられるとされている。(vgl. III/1, 166 f.)

りよう同士の関係を支配する秩序である⁴³。

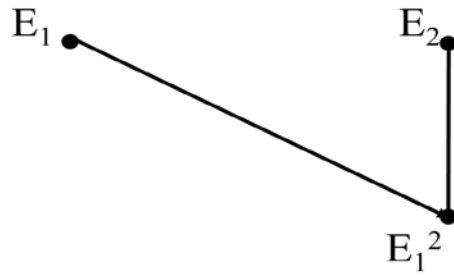
本章の議論の流れを予め述べておくと、第一節では、前章でその存在のみを確認した予持と把持との絡み合いをより詳しく考察していく。続く第二節では、第一節の考察を踏まえ、原過程における時間的な流れ、つまり体験流の一貫的連続性を示す。本研究の言う時間ないし体験流の一貫的連続性とは、時間が未来から現在、そして過去へと流れていく際の方向が全て一方向的であり、したがって未来→現在→過去の経過は完全に一貫的で連続的な経過として記述できるという性質のことを指す。体験流のこの一貫的連続性は予持と把持との絡み合いという事象から成立しているということを示す。最後に、第三節でこの時間的な流れが時間様相（未来、現在、過去）をも有するというを明らかにする。このとき、自己意識的な予持に二重の性格が認められることになるだろう。

本章における考察を開始する前に一つ付言しておく、予持と把持との絡み合いは上で挙げたものだけをもたらすのではなく、もう一つ重要なものとして、それぞれの時間位相の個性性をももたらす。予持と把持との絡み合いにより、各々の時間位相はそれぞれ唯一のもの（時間の一貫的連続性を踏まえれば、一度流れ去ってしまえば、二度とは戻ってこないもの）としての性格を得るのである。時間位相の一回性が予持と把持との絡み合いから示されたことで、フッサール現象学における個体は知覚対象に制限されないものとなり、これは彼の判断論にも影響を与えたと考えられる。ただし、この時間位相の個性性に関しては議論の都合上ここでは触れず、第二部で詳しく論じることにはしたい。というのも、初期時間論においてもフッサールは時間位相の個体化を論じているが、この論じ方は中期におけるそれとは異なっており、この差異は初期時間論と中期時間論の特徴を反映しているように思われるからである。

1.3.1. 絡み合いについての詳細な検討

絡み合いによって体験流の一貫性・連続性を説明する前に、そもそも絡み合いとは何かということより詳細に検討しておこう。前章では『ベルナウ草稿』において絡み合い、すなわち予持と把持が互いに志向し合うという事象が記述されていることを確認したが、これは具体的にどのような事象なのか。これを明らかにすべく、まず Nr. 2§1 の記述を確認していこう。

⁴³ これと関連して、同じ瞬間における異なる位相同士の関係を本研究では時間的構造と呼ぼう。すなわち、ある瞬間における予持的・把持的諸位相の関係などは時間的構造と呼ばれ得る。また、本研究の第一部第二章第一・二節で扱われている連続的予持・把持は、同じ瞬間における諸位相の関係についての記述として見れば時間的構造についての記述だが、ある瞬間の予持的連続体と別の瞬間の予持的連続体の関係、ある瞬間の把持的連続体と別の瞬間の把持的連続体の関係についての記述として解釈すれば時間的秩序の記述となる。

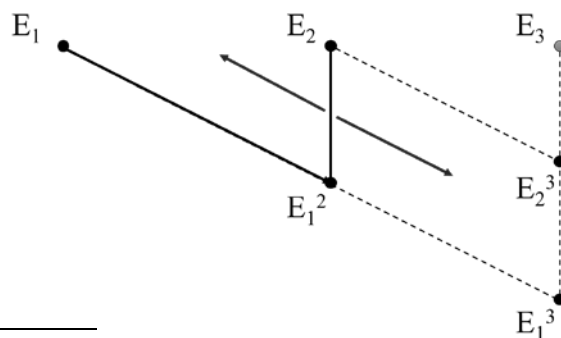


Nr. 2, §1 において、フッサールは予持・把持、およびこれらの間の絡み合いを時間図表上へ図示することを試みている。フッサールはまず、ヒュレー的経過における出来事の一部 (E_1 - E_2) が与えられ、現在 E_2 が与えられているという場面想定し、この原現前 E_2 の他に、これまでに過ぎ去った出来事の部分 (E_1 - E_2 から E_2 を除いた部分) も ($E_2E_1^2$ として) 把持的に保持されていることを確認している。ここまでは初期時間論の内容と同じであり、これは上のように図示される (上図参照) ⁴⁴。また、この段階ではまだ図示されていないが、将来生じてくるヒュレー的経過的な出来事区間に対する予持も想定される。さて、これらを確認した後、フッサールは次のようにして R 予持の記述に着手している。

さて E_2 において、来るべき経過へ向かう予持が存立する場合、〔つまり、〕 その経過のスタイルを通じて、また最も一般的にはその経過の質料様式を通じて予描される経過へ向かう予持が存立する場合、まず区間 $E_2E_1^2$ (過ぎ去ったものの把持) は $E_2E_2^3$ と $E_1^2E_1$ によって限定されている斜めの帯 **Streifen** によって間接的に示されうるような予持を伴わなければならない。／その前方への意識は $E_2E_1^2$ が絶えず沈み込んでいくであろうということに向けられている。したがって、この区間 [= $E_2E_1^2$] の各々の点は、今や E_1E_2 の対応する諸点へと後退する斜めの直線に関して単に把持的な意識であるだけでなく、下へ下げられた方向における、帯の印づけられた区間を貫いていく斜めの直線に関しては予持的意識でもあるのだ。

(XXXIII, 22)

上記は以下のように図示される (図参照)。以下、この図を参照しながら説明を行っていく。



⁴⁴ テキストでは E_1E_2 の間が直線で繋がれているが、本章第三節の議論を待たずにこの線を描くことは不適當と考えられたため、ここではこれを省いた。

引用冒頭では、まず「来るべき経過へ向かう予持」、すなわち将来生じるであろう原現前へ向けられている予持が想定されている。さて、 E_2 が原現前している時点において意識がこのような予持を有し、将来における出来事の原現前 E_3 が予持されている場合、「区間 $E_2E_1^2$ (過ぎ去ったものの把持)」が「 $E_2E_2^3$ と $E_1^2E_1$ 」とによって限定されている斜めの帯 **Streifen** によって間接的に示されうるような予持」を伴うのだという。つまり、現在把持的に所持されているもの ($E_2E_1^2$) が、左斜め上への方向についての把持を担うのみならず、右斜め下への方向についての予持を担うのだという。フッサールのやや飛躍のある説明の間を補うと次のようになる。すなわち、将来的な出来事 E_3 が予持されている場合、 E_3 以前にもやはり何らかの出来事が生じており、 E_3 以前の出来事は、 E_3 が原現前的に与えられる際には把持されている。くどいようだが、この場合の出来事はヒュレー的領域における出来事であり、目下の考察で問題になるのはこれらの出来事内容ではなく、出来事が生じるということそれ自体であり、またここで問題になる予持や把持も、内容ではなく原現前それ自体を志向するものである。したがってここでの原現前、およびそれについての予持・把持は恒常不断的に生じ、かつ生じることが疑いようの無いものである。さて、将来の時点 (E_3 が原現前してくる時点) においても意識が何らかの把持的連続体を有しているのであれば、少なくともそれは現在 (E_2 が原現前してくる時点) における把持的連続体を含んでいるはずである。なぜなら、「後続する把持は全ての以前の把持を志向的に含意している」(XXXIII, 10) からである。したがって、将来における原現前に対する予持が成り立つならば (そしてこれは現に成り立っているのだが)、予持されているところの将来の原現前は把持的な連続体を伴うのであり、この将来における把持的連続体は予持によって捉えられている (前章で登場した **R** 予持)。そしてこの **R** 予持が予持する将来の把持的連続体の連続体の一部は、現在保持されている把持的連続体が原過程の進行に合わせて沈下しつつ、将来においても保持されているであろう、という仕方で予持されているのである。フッサールはこの予持を $E_2E_1^2$ によって表現しようとする。すなわち図表上の E_2 における把持的区間 $E_2E_1^2$ は、 E_3 (ひいてはさらに遠い将来 E_K) におけるより沈下した把持的区間 $E_2^3E_1^3$ (ひいては $E_2^KE_1^K$) を先取りして表現しているとされるのである。それゆえ「この区間 [= $E_2E_1^2$] の各々の点は、[...] 下へ下げられた方向における、帯の印づけられた区間を貫いていく斜めの直線に関しては予持的意識でもある」と述べられるのである。

ここでフッサールの思索から離れて注目しておきたいのは、図表上のある区間が予持として特徴づけられるか把持として特徴づけられるかということが、もはや原現前との位置関係によって決まっていないという点である。たとえばここで問題になっている $E_2E_1^2$ は、図表上では原現前点 E_2 より下にある区間であり、絡み合いを考慮しなければ一義的に把持的な区間であったはずだ。ところが上でも確認した通り、**R** 予持が考慮されることによって、予持的な性格をも担うこととなり、それゆえ把持的区間としても予持的区間としても解釈されるようになっている。そして、この区間を予持として解釈するか把持として解釈するか

は、原現前的位相との位置関係ではなく、この区間をどの「方向」において解釈するかによって存している。すなわち、「 E_1E_2 の対応する諸点へと後退する斜めの直線」の方向、端的に言えば左斜め上への方向において解釈される場合には把持であり、「下へ下げられた方向」、つまり右斜め下への方向において解釈される場合には予持として解釈されるのである。当然、これは $E_2E_1^2$ だけでなく全ての意識区間に妥当するのであり、全ての意識区間は、見方によって把持的でも予持的でもあり得る。

上記の図表的な説明を離れ、もう少しだけ具体的な説明を試みよう。何かしらの原現前が原印象的に捉えられている際、それと共に先ほど原現前が生じたということが把持されており、またこれから原現前が生じるであろうことが予持されてもいる。さて、第一部第一章第二節でも確認したように、このような予持 - 原現前 - 把持という意識の働きそれ自体を意識は自己意識的に知覚している。つまり、上記の予持 - 原現前 - 把持という意識の働きそれ自体は原現前に捉えられているのであるが、この予持 - 原現前 - 把持を原現前に捉える自己意識は、原現前に捉えられる以前は予持されていたのであり、原現前に捉えられた後は把持される。つまり、そのつどの瞬間においては自己意識的に非現在の意識が意識されているのだが⁴⁵、ここで意識されている非現在の意識も、その意識にとっての非現在の意識を自己意識しているのである⁴⁶。つまり、原現前の経過の連続を捉えるために必要な意識の自己意識（これは予持 - 原現前 - 把持という構造を有する）は必然的に、いわば、この現在ではない現在から時間を眺めるような複数の視点⁴⁷をもたらすのである。

以上より、ある時点は、まさしくこの現在だけからではなく複数の非現在の視点から眺められている。そしてこれにより各々の時点は、それをどの方向から見るかに応じて二義的（予持的・把持的）性格を持つ。これについてはフッサール自身も次のように述べて認めている。

⁴⁵ フッサール自身も P 予持、R 予持、P 把持、R 把持から意識の非現在の自己意識を引き出していると考えられる。例えば、「したがって、今や変様は二重の変様である。一方ではある先行した意識の変様としてのその時々を、この意味においてさらに変様させる〔＝把持的に変様させる〕変様でありその結果、その意識はたった今あった意識についての意識になる」(XXXIII, 25、下線は引用者) という記述が見つかる。

⁴⁶ より分かりやすい例を挙げれば、私は、いつかの未来に今日のこの日を過去として意識していたことを構成することもできるし、反対にいつかの過去から今日のこの日を未来として意識していたことを構成することもできる。ここで重要なのは構成の内容の正確さやそのような構成が実際に行われたかどうかではなく、未来（あるいは過去）にとっての未来や過去が構成され得るということであり、予期ないし想起された非現在の時点からでもそこからさらに他の時点（例えば「今日のこの日」）を志向することが可能だということである。ただし、厳密に言えば、目下の議論において「未来」や「過去」という言葉を用いるべきではなく、上の例を用いることも本来は適切ではない。本研究は時間様相が成立する仕組みをまだ論じていないため、時間様相的な言葉はまだ用いてはならないからである。時間様相の成立は、本章第三節において論じられる。

⁴⁷ ここで視点と呼んだものを、本研究では後に自我として規定し直すことになる。これについては第三部の議論を参照せよ。

[...] 以下のように想定したとするとどうだろうか。すなわち、原過程が古い出来事に関わろうと、新しい出来事に関わろうと、各々の位相は、本質的に、(一つないし多数の出来事の意味において充実されている) ある先行した充実された時間区間の把持であるのと一体的に in eins、後続の出来事との連関においては予持だ、などと想定したとするとどうだろうか。その際には、各々の過ぎ去った時間区間の把持は(直観性などに関してよく知られた構造において) それ自身間接的な把持であり、把持の把持であり、同様に間接的予持だ、などということになる。しかしそれはまたより以前の予持の把持などでもあるだろう。なぜ以上のことには未だに困難が含まれるのであろうか? 実際、そこには何の困難も無いように見える。

(XXXIII, 27-28)

「各々の位相」は「把持であるのと一体的に…予持」であり、ある「過ぎ去った時間区間の把持」が「間接的予持」や「以前の予持の把持」であるとされている。これだけを聞けば不合理的なこの表現も、絡み合いを踏まえて眺めれば「何の困難も無い」のである。

1.3.2. 絡み合いによる体験流の一貫的連続性

前節の考察を踏まえ、前章で摘み残していた問題に取り掛かろう。すなわち、予持と把持の絡み合いによって、原過程(原現前が連続的に生じる過程)の流れ、体験流は如何にして一貫的な連続性を得るのか、という問題に答えていこう。

くどいようだが、前節の考察を大まかに振り返っておこう。予持は来るべき原現前や予持を志向するのみならず、来るべき把持をも志向する(R予持)。把持も同様に、過ぎ去った原現前、把持のみならず過ぎ去った予持をも志向する(P把持)。これらをまとめて言えば、意識は、異なる複数の時点において働く予持・原現前・把持(つまり異なる複数の時点における意識)を志向するのであり、これが『ベルナウ草稿』において予持と把持との絡み合いとして記述されていた事象なのであった。この絡み合いにより、意識には異なる複数の時点からの視点をもたらされることになり、これらの視点から眺められることにより、それぞれの時間位相は二義的(予持的・把持的)性格を持つようになる。以上が前節の考察の概略である。

ところでこの絡み合いに関して、ここでは二つのことに留意しなければならない。まず、さしあたり本章での考察に関係のない内容だが、上の議論では予持・把持の絡み合いにより様々な時点から時間を眺める視点をもたらされると述べたが、これは、どの時間位相も任意に現在として選ぶことができるとも言い換えることができる。しかしそうは言っても、やはりまさしくこの今こそが第一義的な現在であり、意識はこの第一義的な現在から出ることはいできない。この問題は後期時間論において詳しく論じられていると見られるが、中期時間

論の議論がこれについてどこまで自覚的であったかは定かではない。そして後述することになるが、この第一義的現在（あるいは「原様相的」現在）は時間の根源とも言うべき次元に位置しており、その意味でこの第一義的現在の問題は重要だと言える。このように、ここでは時間構成における最も根源的な次元への通路が開いているのだが、この問題は第三部で取り上げるとして、ここでは指摘のみに留めたい。

目下の考察においてより重要なのは、第二の留意点である。すなわち、各々の時間位相の性格は予持・把持の絡み合いによって確かに二義的になるのだが、この二義性は無秩序的なものではないのである。例えば三つの時間位相 A、B、C を想定し、A が原現前であるとき B は把持的位相、C は把持の把持的位相だとする。さて、それぞれの位相は件の二義的性格を持つのだが、これらの位相の性格は完全に無秩序に揺らいでいるのではない。例えば位相 B は A との関係において把持的性格を持ち、C との関係の中で予持的位相として特徴づけられるのであり、その逆（A との関係において予持的性格を持つ、または C との関係の中で把持的性格を持つこと）はあり得ない。A や C に関しても同様のことが言える。つまり、ある時間位相の二義的性格は、いわば、その位相をどの方向から眺めるかに応じて確定されるのであり、しかも性格が確定される仕方は全ての時間位相に関して同一なのである（その位相が把持している位相から眺められた場合には予持的性格を持ち、その位相が予持している位相から眺められた場合には把持的性格を持つ）。しかし、絡み合いおよびそれがもたらす時間位相の二義的性格は、如何にして体験流の一貫的連続性をもたらすのか。

仮に上記のような予持と把持の絡み合い、それによってもたらされる時間位相の二義的性格、あるいはそれを可能にする他の時点の意識を認めないとすると⁴⁸、ある時点において予持されている時間区間は予持的区間としての性格のみを、把持された時間区間は把持的性格だけを有することになる。つまり各々の時間区間は、その区間が持つ性格によって明確に区別されることとなるが（区別の境界点は原現前位相である）、その区別ゆえに両区間はあくまで異なる二つの連続体として理解されるのみであって、厳密に言えば両者の連続性は未だ示されてはいない。というより、（両区間は同質的ではないのだから）両者が連続的でない可能性すら否定はできない。ゆえに絡み合いを認めないままでは未来→現在→過去の連続性は示されておらず、ゆえに、ある位相が予持的区間を原現前に向かって進んでいき原現前を経た後把持的区間を沈降していく、などという記述も、厳密に言えばその正当性を担保されてはいないと考えられる。

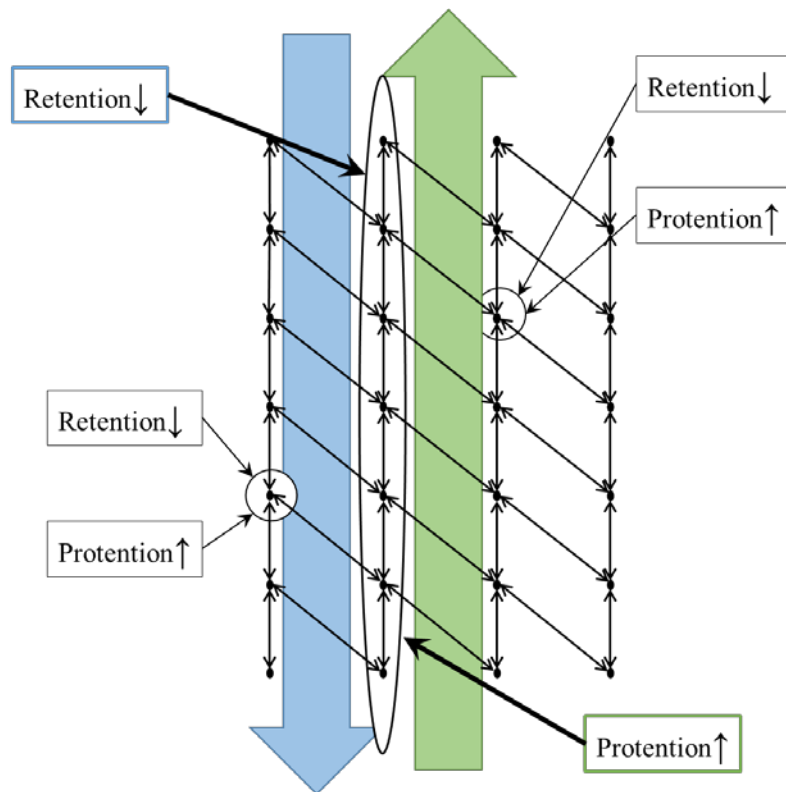
他方、絡み合いおよび時間位相の二義的性格を考慮する場合はどうか。例えば位相 A、B、

⁴⁸ もっとも、他の時点における意識を認めない場合、把持的・予持的な連続性も認めないということになるだろう。というのも、これらの連続性を成り立たせているのは、R 把持および P 予持といった意識の働きを捉える意識の働きであり、より正確に言えば異なる時点における意識の働きを捉える今の意識の働きだからである。〈異なる時点における意識〉を認めずして〈異なる時点における意識の働き〉を認めることは不可能だと考えられる。ゆえに本来は、把持・予持における連続性（つまり、予持・把持された諸位相における連続性、順序）を認めるということは他の時点における意識を認めることを意味している。

C を想定し、A→B→C の順に原現前化するという事態を想定しよう。この想定において B に注目し、B の意識のされ方の変化をその都度の原現前的位相との関係において記述したとすると、最初は予持的に、次いで原現前的に、最後には把持的に意識される、という仕方で記述されることになる。別の言い方をすれば、B が原現前する以前、B はその都度の原現前に「近づいてくる」動きをしていたのに、B が原現前して以後、B は原現前から「遠ざかる」動きをするようになる、と記述されるだろう。しかし絡み合いを認める場合、A との関係において B を記述すれば、A が原現前的位相であるときはもちろんのこと、B が原現前的であるときも、C が原現前的であるときも、一貫して予持的位相として記述されることになる。というのも、予持と把持の絡み合いを認めることは意識区間の二義性を認めることであり、これは把持的区間をも予持的に（あるいは予持的区間をも把持的に）解釈することだからである。別の言い方をすれば、B という位相は一貫して A という位相（がある位置）に「近づいてくる」、と記述できる⁴⁹。C も、B（および A）との関係において記述すれば、一貫して予持的な位相として記述することができ、この位相の動きを一貫的なものとして記述できる。他の位相についても同様であるし、全ての位相を把持的に性格づけ、それに基づいて全ての位相の動きを先ほどとは反対方向の動きとして記述することもできる。突き詰めれば、意識位相全体を一貫的な把持的・予持的連続として見るのが可能になるのだ。実際、フッサールは予持と把持の絡み合いを記述した後で、「我々は、それ自身において前進の方向に関しては予持であり、反対方向とそれの中にあるものに関しては把持であるような、意識のひとつの大きな流れ *Strom* を持つ」（XXXIII, 24）と述べている（次頁図参照）。

かくして、予持と把持との絡み合いにより、我々の体験流は一つの滑らかな連続体としてその姿を現す。静態的あるいは構造的に見れば、ある瞬間の意識においては予持的・把持的位相が予持・把持の志向的階層性・連続性によって連続的に秩序付けられている。そして、絶えず原現前的位相が生じることも考慮に入れると、それぞれの予持的位相は絶えず予持志向性が解除されていき、他方で、原現前的位相およびそれぞれの把持的位相は把持志向性が重層化していく。さらに、これまでの議論で明らかとなった絡み合いを考慮に入れると、かつての予持志向性は把持され、将来の把持志向性は予持される。すなわち、絡み合いを考慮しなければ原現前の際に解消されるように見える予持志向性、あるいは原現前以前の位相には掛かっていないように見える把持志向性が、絡み合いを考慮に入れば全ての位相で見出される。これによって、予持的諸位相の連続体を把持的連続体として解釈することや、その逆が可能になる。体験流には予持的志向性の脱重層化と把持的志向性の重層化という二つ動きがあるように見えるが、絡み合いを考慮することにより、この二つの動きは同一のものとして解釈できるようになるのである。

⁴⁹ もちろん、A という位相に「近づこうとする」というのは流れの方向を言い表すための表現であり、「近づく」（A と B の間の時間的距離が縮まる、したがって A と B との間にあったはずの位相のいくつかの流れの過程の中で消滅する）とか、「近づき、場合によっては追い抜く」（A と B との間の時間的順序関係が逆転する）とかいったことが含意されているわけではない。



1.3.3. 時間様相の成立

前章までの議論より、予持と把持のそれぞれの志向的連続構造および両者の絡み合いによって、一貫的な連続性を持った体験流が与えられることが明らかとなった。

しかし、予持と把持の絡み合いを認めた場合、また新たな問題が生じてくることになる。すなわち、現在の位相、ひいては未来および過去の時間区間を如何にして特徴付けるか、という問題である。初期時間論の枠組みにおいては、現在の位相とは予持的にも把持的にも変様されていない仕方で志向されている位相のことであり⁵⁰、未来的時間区間とは予持的に志向されている区間（過去の時間区間とは把持的に志向されている区間）のことなのであった。しかし予持と把持の絡み合いにより、全ての時間位相は予持された位相としても把持された位相としても解釈される。これは原現前の位相として例外ではなく、見方によっては予持（ないし把持）された位相として解釈され得る。つまり、予持的・把持的に変様されていない位相はもはや存在しない。しかし言うまでもなく、我々が経験する時間においてはやはりただ一つの位相が「特記づけられ *ausgezeichnet*」、まさしく現在として与えられる。原現前の位相はまさしく現在の位相として特記づけられているが、この特記づけは〈予持的にも把持的にも変様されていない〉ということによって行われるわけではない。では、この特記づけはどのように行われるのか。ある位相が現在の位相として与えられるのは如何にして

⁵⁰ 例えば「原印象は絶対的に変様されていないものである」(X, 67) という記述が見られる。

か。

フッサール自身もこの問題を自覚しており、Nr. 2, §3 において次のように述べている。

我々はその時、経過しそして単に把持的に変化する原与件の端緒、そして後続する予持の予持や予持の把持の端緒を全く持たない。そうではなくて、我々は、始まりとしては考察の始まりを持つのみなのである。我々は常に無限の過程のただなかに立っており、志向性の二重の枝であるような一つの位相を掴み出す。原与件は、その二重の枝において、志向性の契機として、ただ一つの特記づけ *Auszeichnung* を持つのである。残ったままになっている困難はこの際立ちに関するものである、あるいはそもそも、原過程における瞬間意識の異なる両枝の特記づけに関するものであるが、この枝には、原過程において再び特記づけられた境界点が伴う。

(XXXIII, 28)

体験流が過去にも未来にも無限の広がりをもっていることは前章で確認した通りである。また全ての位相は二義的（予持的・把持的）に解釈される、つまり予持・把持的に変様されていない、いわば、志向的に無垢の位相は無い。つまり、これまでの考察だけに基くと、体験流は、どの位相も志向的変様度に関してはのっぺりと均質的で、始まりも終わりも無い、まさに飴のように伸びたものだということになる。しかし言うまでもなく、その都度の意識においてはただ一つの原因前の位相、つまりまさしく今の位相が与えられている。そしてこの位相は他の位相と同質的には思われぬ。過ぎ去った位相や来るべき位相を今の位相だと誤認するという事は考えられぬだろう。となると、原因前の位相はやはりある種の仕方「特記づけ」られていると考えられるのだが、しかしこの特記づけは予持的・把持的に変様されていないということ、いわば、志向的に無垢であることによってなされるのではない。この特記づけについてはさらに次のような記述が見られる。

Ux⁵¹の中に、〔すなわち〕現象学的原過程 *das phänomenologische Urprozess* の諸位相の中に、我々は特記づけられたあるひとつの点 x を見つける。これはどのように特徴付けられるべきか。もしくは、それはどのように U…Ux の過ぎ去った出来事区間全体の頂点として、その区間の「充実」点として特徴付けられるべきなのか、そしてこの充実は、いかに普遍的な充実 *die allgemeine Erfüllung*、すなわち諸区間 U の全体が過程におけるそれらの〔=諸区間 U の〕全ての点に関してその充実において登場してくるような、そのような充実から区別されるのか。したがって、どのようにして充実のこの二重の意味 *Doppelsinn* は解明されるのか。以上のことは明らかにまた、予持の二重の意味を生

⁵¹ 「U」は *Urprozess* の略だと考えた。なお、この場合の *Urprozess* は〈原因前が生じてくる意識過程〉という意味で解釈した。また「Ux」というのは時点 x における「U」だと解釈した。これは、ある瞬間の意識（一連の予持的／把持的区間・原因前の位相）と同義であろう。

じさせる。Ux はまず、その [=Ux の] 全ての点に関して、全ての将来的な U - 区間 に 関係する予持であり、また別のときに [Ux は] ただ各々の上の⁵²点に関してのみ予持 であるような、しかも、根本区間 Grundstrecke の諸点についての (それどころか、将来的な諸々の出来事点のその [=根本区間の] 志向的対象性についての) 予持である ような、そのような予持なのである。

(XXXIII, 29、下線は引用者による)

引用冒頭では、「現象学的原過程」において「特記づけられたあるひとつの点 x」が見出されることが確認され、この点 x は『充実』点』として特徴づけられるのだとされている。この記述の直後、点 x がそれであるところの引用符付きの『充実』と、現象学的原過程の全ての位相がそれであるところの「普遍的充実」が区別される。したがって全ての意識位相が普遍的充実として生じる中で、点 x だけは普遍的充実としてだけではなく特別な besonder 「充実」としても生じてくるのであり、この普遍的な充実からは区別される特別な充実が「特記づけ」の正体なのだと考えられる。しかし、この「特記づけ」の特徴たる特別な充実とは何か。あるいはこの充実と対置される普遍的充実とは何か。これらについて考えるうえで手掛かりとなるのが、二重の充実に対応して登場する「予持の二重の意味」である。

引用に最初に登場する予持は、「全ての将来的な U - 区間に、その全ての点に関して関係する予持」とされる。本研究の前章の議論によれば、予持は将来における予持、原現前、把持を予持している。したがって予持は将来における意識の働きの全体を予持しているのであり、引用で最初に登場する予持もこの予持のことだと考えられる。さて、そうすると二つ目に登場する予持が「特記づけ」であるところの特別な充実に対応することになるが、この予持は「根本区間の諸点についての (それどころか、将来的な諸々の出来事点のその志向的対象性についての)」予持だとされる。

以上から、体験流においては自己意識的予持によって将来の意識全体が予持され、そしてその予持が充実されるという仕方でその都度の意識が生じてくる (この意識はその後、その全体が把持される)。そしてこの流れの中で、その働きに重なりつつも区別される仕方で、「根本区間」、将来における「志向的対象性」に対する予持が生じており、そしてこの特別な予持によって「特記づけ」がなされるのだという。以下ではこの特別な充実に迫っていこう。なお、以下では考察の都合上、普遍的な予持 (P 予持 + R 予持) を A 予持とし、問題となる特別な予持を B 予持とする。

続いて Nr. 2, §4 の記述を確認していこう。ここでは四つのステップで体験流が記述されており、1)、2)では体験流が無限に伸び広がっていること、この流れが一方向的であるということが確認されている⁵³。これまでの考察を踏まえると、この「Ux 諸系列の確固たる秩

⁵² これは、時間図表の水平線 (=原現前の系列) よりも「上」という意味であろう。同様の用法は、たとえば S.22, 23 など、時間図表についての説明の箇所に見られる。

⁵³ 例えば『永遠の』中断されない過程は逆転されないのであり、本質的に、各々の Ux は各々

序」(XXXIII, 31) は A 予持 (そしてこれに対応するいわば A 把持) によってもたらされたものだと考えられる。これらの「確固たる秩序」を確認した上で、フッサールは「したがって、これまでに我々は水平方向について何らの優位も未だ持っていなかった」(XXXIII, 32) と述べる。当該の箇所では各ステップに対応した時間図表が描かれているが、フッサールのこの自己評価の通り 1)、2) の図表 (vgl. XXXIII, 30, 31) には水平の線が描かれていない⁵⁴。これを受けて 3a) では「根本系列の優位、特殊的な *besonder* 「充実」、その [= 充実の] 空虚化との対比」(ebd.) が問題にされる。この「特殊的な『充実』」は、文脈から判断して、B 予持に対応する 充実 と考えられる。そしてこの問題提起の直後に、次のような記述が登場する。

Ux の意識書位相はある一つの変転する相対的な充実、核保持性 *Kernhaftigkeit* を持ち、各々の Ux は一つの、そして唯一の核保持性の最大を含むような位相を一つだけ持つ。核 *Kern* は任意に多様でありうる。多くの核が存在するとしても、各々 [の核] は問題の (我々が *原位相 Urphase* と呼ぶところの) 最大核保持性の位相において最大の充実を持つ。もしくは全体意識 Ux は、この Ux^m によって、これに関して、最大の充実を持つ。
(XXXIII, 32)

引用によれば、諸位相は「核」を持ち、そして核は「変転する相対的な充実・核保持性」を持つとされている。つまり、各々の核の充実度合いは絶えず変化し、その変化の中で互いに異なり合っているのであり、それぞれの Ux に一つしかない「原位相」において最大の充実を持つとされている。つまり、体験流の各々の位相が持つ核は絶えず変化しており、そしてその中でただ一つの位相の核だけが最大化し、その位相が「原位相」と呼ばれるのである。

上記の充実に関して、「核」という言葉が何を指すかを明らかにする必要があるだろう。これについて考えるために、一旦 Nr. 2 を離れ、Nr. 11⁵⁵ の §8 の記述を確認しておこう。§8 では原過程 (= 体験流) において現在が如何にして与えられるかという問題を予持との関連において扱っている。この文脈において「核」という言葉は次のように定義されている。

の Uy に対して、以前もしくは以後のものとして特徴づけられる。そして、たとえここではスペチエスが扱われているのではなく、『個体』が扱われているのだとしても、以上は秩序であり、数列 [上] の個々のもの間の秩序のように、不可逆なのである。」(XXXIII, 31) という記述が見られる。ここでは体験流が「永遠」 (= 無限) であり、各々の位相が以前・以後という順序を持っており、そして不可逆的な方向性を持つことが述べられている。

⁵⁴ 1) では無数の縦線のみが、2) ではそれらの縦線に加えて斜め線が描かれている。この斜め線は体験流の各位相の予持的志向がほどこけていく (あるいは把持的志向が重層化していく様子を表している、あるいは図表的に言えば、体験流の各位相が「沈下」していく様子を表している。
⁵⁵ テクスト Nr. 2, 11 は共に草稿群 LI 15 (1917 年 9 月半ば、Bernau) から成る。全集 XXXIII 巻の注記によれば、Bernau) と Nr. 2, 11 の元となる LI 15 は、厳密な成立順序こそはっきりしないものの、極めて近い時期に成立している。また、フッサールはそれぞれの草稿の表紙に他方への参照指示を付しており、実際にそれぞれは互いに近いものとして十分解釈可能である。

さて、原予持が過程において充実される場合、我々はまさに最初にある未充実の志向性を持つのであり、この志向性は、充実された志向性という性格を有する、についての - 意識 *Bewusstsein-von* へと移行するのである。しかしその時、我々は核と作用性格とを区別する。しかしここでの核とは、何らかの仕方で *anderweitig* 構成された統握内容なのではなく、いかなる媒介も無しに、充実において「それ [=対象] 自体」として意識されている、そのような対象それ自体なのである。そして、この絶対的に - 「それ自身」 - として - 意識されて - ある、とは、今 - として - 意識されて - ある、なのである。

(XXXIII, 226)

引用によれば「核」とは対象それ自身のことであるが、ただしこの「対象それ自身」とは、例えばラジオから流れてくる流行曲、あるいはそのイントロのドラム等といった「統握内容」ではないとされている。「内容」ではない「対象それ自体」が「核」なのだとなれば、「核」とは構成された対象の中に成素として見出されるものというよりも（成素として解釈した場合、それは結局何らかの意味で構成されているからである）、むしろ対象が与えられてくるということそれ自体なのだと考えられる。そして、この「核」が意識に与えられるということは、今の意識において生じるとされている（「この絶対的に - 「それ自身」 - として - 意識されて - ある、とは、今 - として - 意識されて - ある、なのである」）。なお、ここでフッサールは「核」が知覚や感覚においてのみ与えられるとは述べていないし、また「核」の定義を見てもこれは知覚・感覚においてのみ見られるものでは無い。したがってこれは、例えば空想などにおいても見られるものだと考えられる。

上記を踏まえ、再び Nr. 2 の記述に戻ろう。原過程 (= 体験流) のどの位相も核を持ち、その充実の度合いは位相によって様々なのであった。Nr. 11 の記述に基づくと、核の充実とは、対象が与えられてくる際の実感・手応えとでも解釈することができる。そして Nr. 2 の記述によれば、この充実、実感・手応えは「原位相」と呼ばれる位相において最大化するのだという。Nr. 11 の記述（「この絶対的に - 「それ自身」 - として - 意識されて - ある、とは、今 - として - 意識されて - ある、なのである」）も考慮すれば、核の充実（「核保持性」）が最大化する位相、つまり、対象それ自体が与えられてくる際の実感・手応えが最大化する位相、何かしらの対象がこれ以上ないほどにありありと与えられてくる位相、「原位相」とは今の位相なのだと考えられる。これは Nr. 2, §3, §4 の問題（現在の位相の「特記づけ」）との関連から見ても問題の無い解釈と考えられる。また、今という時間様相が、対象が与えられる際のありありとした実感・手応え⁵⁶に基づいて規定されるというのも、事象に則して

⁵⁶ この「実感・手応え」は知覚に固有なものではなく、想起や空想においても見られるものと考えられる。フッサールは『ベルナウ草稿』において個体化の問題を時間との関連で考察しているのだが、彼は想起や空想における個体性、ひいては想起や空想における時間形式というものを認めている。想起や空想においても時間性（というより疑似時間性）が見られるのであれば、その

十分妥当ではないだろうか。以上より、今の位相を特徴づける「特記づけ」をもたらす充実とは、核の最大充実のことだということが分かった。まとめると、Nr. 2, §4 の2)までで確認されたように、体験流の各位相は「Ux 諸系列の確固たる秩序」(XXXIII, 31)に支配され、不可逆的順序において秩序付けられて流れていき、その都度の瞬間において対象それ自体を絶対的にありありと受け取っている位相がただ一つだけ生じており、この位相が「原位相」あるいは今の位相として「特記づけ」られることになる。

これまでの議論では、それぞれの瞬間において核保持性が最大となる位相が見出される、という瞬間ごとの意識構造が明らかとなった。ではこの核保持性の最大化、すなわち充実、「特記づけ」が体験流において生じてくるのは如何にしてか。フッサールはこれを Nr. 2, §4 の3a)、3b)において論じている。彼の議論をかいつまんで説明すれば次のようになるだろう。すなわち、まず各位相の核保持性は原位相を頂点として予持側・把持側に向かって「強度的契機のようにゼロに向かって傾いている」(XXXIII, 32)、つまり原位相から予持側・把持側に向かって順に小さくなるように並んでいるのである。そして予持側に並んだ非 - 最大の核を擁する位相はどれも、「絶えず *terminus ad quem* としての最大点を参照させる志向性」(XXXIII, 33)、つまり核保持性が最大になる位相に対する志向性を持っている。明示的には述べられていないが、この志向性こそが先に述べた B 予持だと考えられ、この B 予持に導かれるようにして各々の核保持性は最大化していく。また、「時間構成する志向性の本質には、各々の最大の意識点（相関的に言えば、それ [=最大の意識点] の志向的相関者）はすぐに「貧弱化する *verarmen*」ということが存している」(XXXIII, 34)と述べられ、最大化した核保持性はすぐさま減少していくとされる。

以上が核保持性の最大化、「特記づけ」の仕組みに対するフッサールの説明である。ただ、本研究の見立てではフッサールの説明の順序はやや錯綜しており、それゆえ一見すると不適切な前提を含みこんだ説明のように見えてしまう。例えば、各位相の核保持性が連続的に小さくなっていくとされている点や、核保持性の最大化に向かう志向性、最大の核保持性が「貧弱化する」とされている点などは説明無しに唐突に登場してしまっている。しかし他方で、この不適切さはあくまで説明順序の不適切さと考えられ、これまでの考察結果を正しく配列すれば、核保持性が最大化する仕組み、すなわち体験流の進行において今の位相が特記づけられる仕組みを説明することは十分可能と考えられる。そこで以下では、本研究なりの仕方で説明を再構成した。

体験流の各位相が「確固たる秩序」に従って流れていくことは2)までで述べられていた。もし各位相がこの秩序に従うのであれば、これらが擁する諸々の核もこの秩序に従い、一貫的連続性において不可逆的に、そして無限に流れ去っていくということになるだろう。また先の Nr. 2, §4 からの引用によれば、全ての位相の核保持性は様々であり、しかも絶えず変化

時間性においても時間様相性（過去・現在・未来）が見られると考えられる。そして空想や想起における疑似時間様相が可能になるのであれば、これを可能にするものが空想や想起において確認できるはずだからだ。

しているのだという。したがって、ある瞬間に核保持性が最大になり原位相として特記づけられた位相も、件の秩序に従い、次の瞬間には把持的位相へと変転する。またこの位相の核保持性は、核保持性は絶えず変転するということから、最大から非最大へ変転する、つまり減少するのである。すなわち、どの位相も一貫的な連続性において変転していくということ、核保持性が最大化した位相が今の位相として特徴づけられるということ、そして各々の核保持性は絶えず変転するということとは噛み合っており、この噛み合いによりある位相が今の位相から把持的位相へと変転することとこの位相の核保持性が減少していくこととも不可分に結びつくだと考えられる。また、ある位相が予持的位相から今の位相へと変転してきたということと、この位相の核保持性が非最大から最大へと増大してきたということとも上記と同様の分ちがたさで結びついていると考えられる。まとめると、未だ核保持性が最大化していない位相は体験流の進行と連動してその核保持性を増大させていき、反対に核保持性が最大化した位相は体験流の進行とともにその核保持性を減少させていくのである。なお、フッサールは上記の核保持性の増大→最大化→減少のプロセスを時間図表上で表現しようとし、各瞬間の原位相を繋いだ直線で図表を折るという方法を考案している。Nr. 2, §5 には「したがって、我々はEEのところでは紙が折られ、EEに関して紙が紙面の上の方に持ち上げられるのを想像する」(XXXIII, 34-35) という記述が見られる。ここで言われるEEとは、原位相を繋ぎ合わせた直線、「原核直線 *Urkerengerade*」(XXXIII, 34) を指すと考えられる。これを踏まえると、時間様相まで考慮に入れた時間図表は立体的(山の形)になるのであり、この外見的特徴から、「原核直線」、つまり現在の位相を繋ぎ合わせた線は「稜線 *Kante*」(XXXIII, 35) と呼ばれている⁵⁷。ここにおいてようやく時間図表に横線が——厳密に言えば立体的な「稜線」だが——引かれるのである⁵⁸(下図参照、図は横向きになっている)。

また、やや話は逸れるが重要なことなので指摘しておく、上記の「原核直線」、「稜線」に関して、フッサールは「時間構成を行う意識の志向的な様式において際立たせられたこの稜線は、相関者として現象学的な時間を、[つまり] 持続し、それに際してある時は変転し、またある時は変転しない現象としての諸体験の時間を持つ。それ [= 現象学的な時間] は最大の核の連続体であり、しかも形式として考えられた時間なのである」(XXXIII, 35) と述べている。記述の内容から、この「現象学的な時間」は、体験において与えられてくる諸々の対象の形式としての役割を担っていると考えられる。Nr. 16 には「(流れるものが共に属する多様性の) 統一として、動かない、あるいは客観的な時間 が(その中において変化がた

⁵⁷ この「稜線」自体はいくつかの先行研究(例えば Kortooms[2002], p. 167, 168、Schnell[2002], S. 112、Dodd[2005], S. 133、De Warren[2009], p. 201 など)で指摘されている。

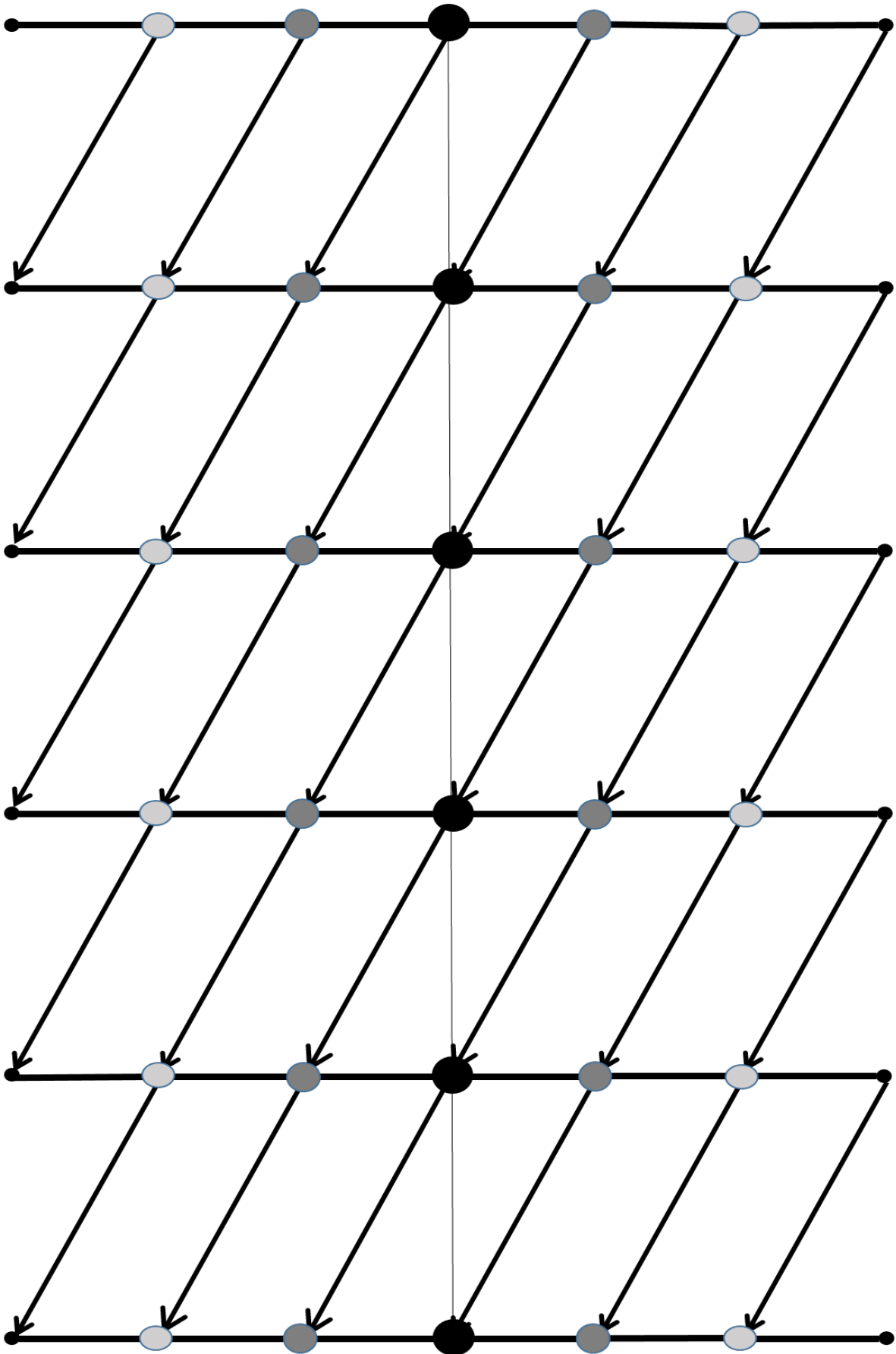
⁵⁸ 中澤[2007]では時間図表の書き順が確認されており、ここでも『ベルナウ草稿』の時間図表においては横線が最後に描かれるとされている。ただ、中澤はこの最後に描かれる横線を「意識流」としており、このことから『ベルナウ草稿』においては意識流の構成の記述が目指されていたとしている。この研究の結論に関しては本研究も同意するが、本研究は横の線を客観的時間として解釈した。また、中澤はフッサールが時間図表を立体的にしたことにも言及していない。

だ見かけの上でのみ不動性を超えていくような、そのような動かない「存在」の動かない形式として) 構成される」(XXXIII, 297) という記述も見られるため、この「現象学的時間」、つまり各瞬間の現在の位相を繋ぎ合わせたものは、「客観的時間」とも呼ばれていることが分かる⁵⁹。なお、初期『時間意識講義』でも「客観的時間」は諸対象の形式とされ (vgl. X, 113)⁶⁰、かつ、これは各瞬間における現在の位相を繋いだ、(図表的に言えば) 水平の線だとされている (vgl. X, 93)⁶¹。

⁵⁹ 諸対象は、この「客観的時間」における時間位置に措定されることで個体的な対象となる (これに関しては第二部第四章で論じる)。

⁶⁰ 「客観的時間は『存続的な』諸対象の形式であり、それらの変化やそれらにまつわるその他の経過の形式なのである。」(X, 113) とある。

⁶¹ 「現象学的時間の充実された点でもって (その現象学的時間の中に横たわっている感覚内容とその統握のおかげで) 充実された客観的時間の点が描出呈示される」(X, 93) とある。ただし、ここでは現象学的時間と客観的時間が異なるものを指している。おそらく、「現象学的時間」は図表で言えば縦線を指し、「客観的時間」は横線を指すと考えられ、縦線、「現象学的時間」における「充実された」諸々の点、すなわち諸々の現在の位相が横線、「客観的時間」を示す、という関係が記述されているのだと考えられる。



上記の核保持性の増大→最大化→減少のプロセスは件の秩序に従って絶えず生じており、例えば、位相 α が原位相ではなくなったとしても、次の瞬間には α に予持された位相 β の核保持性が最大化して原位相となり、さらに次の瞬間には β に予持された位相 γ が原位相となる。このように各々の位相の核保持性は、件の秩序に従って、予持的連続体において並んでいる順序に従って最大化していく。別様に言えば、核保持性の最大化を目指す諸位相が予持的位相として並ぶ格好になっているのであり、これこそが本研究が B 予持と呼び、フッサールが「絶えず *terminus ad quem* としての最大点を参照させる志向性」(XXXIII, 33) と呼んだ志向性の正体であろう。原位相という特異な点が体験流に設定されることで、この特異点との関係において予持的連続体は B 予持としての性格を有するようになるのだと考えられる。A 予持と B 予持は異なる二つの予持なのではない。A 予持の一部である P 予持が原位相との関係において B 予持としての性格を得るのであり、それゆえ両者は二重 *doppel* なのである⁶²。

核保持性の最大化、すなわち何かしらの対象がありありと与えられるという実感の最大化によって今の位相が「特記づけ」られるということ、このことが「確固たる秩序」の中で生じてくることにより、体験流において絶えずその都度の今の位相が特徴づけられ、しかもそれぞれの位相が順に今になり、その前後の位相、核保持性の増大のプロセスにある位相と現象のプロセスにある位相がそれぞれ未来・過去として特徴づけられる。かくして、体験流はようやく単なる一貫的な連続ではなく、未来から現在を経て過去へと至る一貫的な連続と呼ばれ得るようになったのである。なお、「核」が空想においても見出され得るものだということは先にも述べた。したがって、上記の核保持性の増大→最大化→減少のプロセスは空想においても見出され得るものであり、空想においても(空想なりの)過去・現在・未来という時間様相性が可能になるのだと考えられる。

1.4. 第一部のまとめ 中期時間論における予持概念と体験流の時間的秩序

以上、この第一部では中期『ベルナウ草稿』における予持概念を確認してきた。これまでの考察によれば、この予持はヒュレー的領域において働いており、それゆえこれを考察する

⁶² 本研究の序論では予持を「未来への志向」と定義したが、この定義も上記の核保持性やそれによって可能になる時間様相の議論を待つてようやく正当な定義と呼べるようになる。とは言え、核保持性の議論を挟んで初めて予持を「未来への志向」と定義できるということは、その逆、時間様相的なものを含まなければ「未来への志向」とは定義されないような、いわば純粋な予持が与えられるということの意味しない。核保持性、つまり何らかの対象がありありと与えられるという手応えは予持の発動と切り離せるものではない。上では、論述の都合から、自己意識的予持・把持の議論を小分けに論じたがこれらは本来知覚において一体的に働いているものだと考えられる。

ためにフッサールも考察の舞台としてヒュレー的領域を選んだのであった（第一章第一節）。このヒュレー的領域において働く予持（および把持）は特にその自己意識的な働きに関して記述されていた（第一章第二節）。予持・把持のこの自己意識的な働きにより、把持的連続体（第二章第一節）や予持的連続体（第二章第二節）、各々の連続体の無限の広がり（第二章第四節）、そして予持と把持との絡み合い（第二章第三節・第三章第一節）がもたらされ、一貫的な連続性（第三章第二節）と時間様相性（第三章第三節）を持つ無限の体験流（第二章第四節）が織りなされる。以上が予持（および把持）の記述によって『ベルナウ草稿』のフッサールが解明した内容だと考えられる。

以上で確認したように、フッサールは予持を記述することで体験流の時間的秩序を記述していたのだと解釈できる。すなわち体験流全体が従う流れの法則、ひいてはこの法則に従うことによって体験流がどのような姿で現れてくるかが、自己意識的な予持を手掛かりとして記述されていたのだと解釈出来る。当然ながら、時間的秩序の全てが予持の働きのみによって成り立っているわけではないし、また上で確認したものがその全てではない。しかし少なくとも言えることとして、『ベルナウ草稿』の記述は確かに体験流の核心に迫り、時間という事象の重要な側面のいくつかを明らかにするものではないだろうか。そしてそこで記述された体験流においては、予持は間違いなく重要な役割を果たしている。フッサールは弟子のインガルデンに対し、『ベルナウ草稿』を「主著」だと語ったとされているが⁶³、本研究の解釈するところから従えば、フッサールのこの自己評価はそれほど誇大なものではないのかもしれない。

さて、初期時間論と後期時間論で予持があまり詳しく記述されていなかったことは序論でも述べたが、これらの時期の時間論はどのようなものだったのか。踏み込んで問えば、『ベルナウ草稿』においては体験流の記述に不可欠の予持が初期や後期において冷たく扱われているのはなぜか。そもそもこれらの時期において記述されている予持は『ベルナウ草稿』で記述されていた予持と同じものなのか、差異があるとすればどのような点で異なっているのか。そして、予持を等閑視している初期や後期において問われている事象とは何か。第二部、第三部ではこれらの問題に迫っていく。

⁶³ インガルデンの証言によれば、1927年9月半ばに彼がフッサールを訪問した折、フッサールは最初に『時間意識講義』の原稿をインガルデンに見せたのだという。インガルデンはこのテキストの内容に感銘を受けたが、フッサールは『時間意識講義』について「かなり軽蔑的な意見を述べた」。そして『時間意識講義』よりも「はるかに重要なもの」として、ベルナウで手掛けた500-600頁の草稿の束をインガルデンに見せ、「これが私の主著だ。君にこれの印刷の準備をしてもらいたい」と頼んだのだという。『時間意識講義』の編集を最後に手掛けたのはハイデガーであり、1927年と言えばフッサールとハイデガーの決別が避けがたいものになりつつあった時期である。ゆえにフッサールの『時間意識講義』に対する辛辣な評価は、ハイデガーへの想いを映したものであるのだろう。しかしそれを差し引いても、インガルデンの証言から、フッサールは少なくとも1927年の秋頃までは『ベルナウ草稿』の考察を放棄しておらず、ぞれどころか、これを自身の時間についての思索の最高到達点だと考えていた、ということが窺い知れる。(vgl. Ingarden[1968], S. 154-155.)

第二部 初期時間論における予持概念

2.0. はじめに

序論でも述べたように、初期時間論（1890年代～1910年代前半）においては既に予持という概念およびそれに準ずるものが登場しているものの、その登場箇所は少なく、また記述自体もそれほど詳細なものではない。『イデーニ I』（1913年）およびそれ以前の『時間意識講義』（基になった講義は1904/1905年）の記述を見ると、予持と把持とは構造的類似性を持つとされている。この考えの下、予持についての記述は把持についての記述の流用で十分だと考えられていたようであり、初期時間論においては把持についての記述が目立つ。

では、初期時間論における予持はどのようなものとして記述されていたのか。初期時間論においても中期時間論で記述されたのと同じ予持が記述されているのだろうか、それともここでは性格の違う予持が記述されているのだろうか。仮に性格の違う予持が記述されている場合、それは果たして予持の記述として正しいのだろうか。端的に言えば、中期で記述されたものとは違う予持が初期で記述されている場合、初期の予持記述は誤りだったということになるのだろうか。そして、中期時間論の予持概念と同じにせよ異なっているにせよ、そのような予持概念は初期時間論においてどのような役割を担っているのか、より踏み込んで問えば、予持を必要としない初期時間論において問われているのはどのような事象か。第二部では以上を問うていく。

具体的な考察の手順は以下のとおりである。まず第一章では初期時間論における予持についての記述を通覧していき、予持の性格を探る。予め述べておけば、予持はある対象の将来的な知覚内容を志向（あるいは先取り）する志向性として描かれているということ、さらにそれと関連して、この予持は恒常性を持たないということが明らかになるだろう。また、このような予持が記述される際の考察の前提についても確認していく。予め述べておくと、『ベルナウ草稿』では体験流の時間的秩序の記述のために徹底した還元が行われ、考察対象がヒュレー的領域に制限されていたが、この還元は初期時間論の予持が登場する場面では見られず、むしろ予持を記述しやすいような仕掛けが施されていることが確認されるだろう。第二章では、初期時間論における対象知覚に制限された予持は、フッサールの時間論にとって破棄されるべき不要物なのか維持されるべき構成要素の一つなのか内容だったのかを吟味する。この考察のために、本研究は『ベルナウ草稿』の後の『受動的総合の分析』（1920/1921年）を確認し、このテキストにおいては『ベルナウ草稿』で確認されたような時間形式構成に関わる予持が維持されていること、他方で何らかの対象の将来における与件に対する志向についても考察が行われ、その志向も予持と呼ばれていることを確認する。つまり、中期『受動的総合の分析』においては初期の予持も『ベルナウ草稿』の予持も共に予持と呼ばれていることを確認する。第三章ではこれまでの考察も踏まえ、初期時間論における予持と中期時間論における予持の性格の違いを総括し、それに基づいて初期時間論と中期時間論で扱われていた事象をそれぞれ素描する。予め述べておけば、初期時間論におい

では個別の知覚対象の時間的な拡がりの成立が記述されていたのに対し、中期時間論ではそれらの時間的对象および知覚経験全てがその中に位置づけられるような、そのような時間形式そのもの（体験流、「流れること Strömen」）が記述されていたのだと考えられる。第四章は補論であり、初期と中期のそれぞれにおける時間位置の個体化という問題を扱う。フッサールはそれぞれの時期に時間位置の個体性の成立を論じているが、議論の内容は時期によって微妙に異なっているため、本章ではそれぞれの議論の内容と両者の差異を明らかにする。この差異についての考察も第三章の考察結果を支持するものになるだろう。

2. 1. 初期時間論における予持概念の特徴づけ

初期時間論においては既に予持と解釈できる事象が記述されているのだが、初期時間論の最初期から明確に予持 **Protention** という術語が用いられていたわけではない。すなわち、最初期においては、予持的事象と解釈できるものの「予持 **Protention**」という概念では記述されていない事象が記述されている。本研究はこれらの予持とは表現されていない概念も初期時間論における予持として捉え、それらに対する特徴づけを試みる。そこで、以下ではまず初期時間論において「予持 **Protention**」という言葉が用いられている場面の一つを確認し、そこで初期時間論における予持の特徴を素描する。次いで、他のいくつかの記述も確認し、先に見出した特徴が初期時間論の予持に広く見られる特徴であることを示す。最後に、以上の考察に基づいて、初期時間論の予持を中期時間論の予持とも比較しつつ特徴づける。その際、初期時間論における予持についての記述が持つある共通点についても触れる。本章では、以上の手順を踏むことで初期時間論において記述されていた予持概念がどのようなものであったかを特徴づけることを目指す⁶⁴。

2. 1. 1. 予持概念の基礎的特徴と初期時間論の予持概念に固有の特徴

まず、フッサール全集 X 巻に収められている 1907 年に書かれたテキスト Nr. 45 において登場する予持概念を確認してみよう。このテキストは編者のベームによって「意識流の二重化された志向性」と題されており、テキスト前半部では準現在化と現在化の違いが考察され、その過程で客観に向かう志向性と働きに向かう志向性が区別される。後半部では想起と予期 **Erwartung**⁶⁵に焦点があてられ、「想起と予期が本当に等置されうるかどうか」(X, 305)を

⁶⁴ 第二部第一章の議論は柳川[2017a]の議論をベースにしている。

⁶⁵ 予期 **Erwartung** は知覚が変様したものである準現在化の働きであり、一方予持 **Protention** は現在化の一部であり、両者は事象としては違うものである。ただし、『時間意識講義』においては予持が「第一次予期 **primäre Erwartung**」(X, 39)「予期直観 **Erwartungsanschauung**」(X, 55-56)などと表現されており、また、先でも述べたように『ベルナウ草稿』においては予持を予期として言い換えている。このように、言葉の上では予期が予持と等しいものである場合があり、注意が

考察することが重要であると述べられる。さて、問題の予持という言葉はそれらの記述に先立って、Nr. 45 の冒頭で登場している。そこで予持は次のように記述されている。

内在的な時間的客観、現にあるこの内在的な音 - 内容 *Ton-Inhalt* がまさにそうしたものであるのは、それ [=その音 - 内容] がその「顕在的な *aktuellen*⁶⁶」持続の間中來たるべきものを指し、過ぎ去ったものを遡って指す場合に限られる。当該の音 *Der Ton*、今意識されている音は、ある構成されるべき現象において、以下のような仕方です。すなわち、この構成されるべき現象がまさしくこの音の過ぎ去った経過を新たに準現在化する理念的な可能性を、まさしくこの音の過ぎ去った経過を準現在化の仕方です。再び構成する理念的な可能性を担保するという具合に、である。そして未来への絶えざる「志向」も同じ具合である。持続の顕在的な現在の部分は繰り返し新しい今を開始し、そして予持 *Protention* が音を構成する「諸現出」*Ton-konstituierende „Erscheinungen“* に付着する。[予持は] 音がまさに持続している間はこの音に向かう予持として充実され、かわりに何らかの新しいものが始まる時には、廃棄され変化する。

(X, 297、強調はフッサールによる)

この箇所では、内在的な時間的な客観、あるいは現にある内在的な音-内容が、時間的な性格を帯びるのは「來たるべきものを指し、過ぎ去ったものを遡って指す場合に限られる」ということ、つまり非現在のものを「指す」のでない限りは、時間客観（「音-内容」）は時間的な性格を帯びない、ということがまず述べられている。次いで、そのように非現在のものを指すというあり方が「まさしくこの音の過ぎ去った経過を準現在化の仕方です。再び構成する」ということ、つまり再想起を可能にするということが述べられている。そして引用

必要である。

⁶⁶ ここでの「顕在的に *aktuell*」という語は、(音 - 内容を捉える) 知覚という作用 *Akt* がまさにありありと活動している、という意味であろう。この語はたとえば、X 卷 Nr. 18 の想起と知覚が比較されている文脈においては次のように用いられている。「私が昨日の光り輝く劇場を想起するというのは、すなわち劇場の知覚の『再生』を行うということであり、したがって私にとって劇場が表象において現在のものとして漂っているということである。この劇場を私は像において思念しているが、しかしその際この現在 [=現在のものとして漂っている、想起された劇場の表象] は今の顕在的な諸知覚の顕在的な現在への関係において、それよりも以前にあるものとして把握されている」(X, 183)。ここでは知覚という *Akt* に焦点が当てられ、(現在想起されている) 昨日行われた知覚に対して、まさに遂行されている諸知覚が「顕在的」とされている。これに対し、『イデーニ I』(vgl. III/1, 71-73) では注意の向け換えによって生じる顕在性が扱われており、これは潜在性(地平)と対をなす。『イデーニ I』のこの顕在性も、上の引用箇所の顕在性も共に「現在」を指すと考えられ、その点では同じと言える。ただし『イデーニ I』における顕在性(注意が向けられているということ)は予持ないし把持を含まないのに対し、上の引用における顕在性(作用がまさにありありと働いていること)は予持ないし把持を含む。予持・把持もまさしく今、原印象(原現前)の作用と共に、知覚の一翼を担って働いているからである。この点において両者は異なる。

終盤になって「予持」という言葉が登場し、予持について若干の記述が加えられる。

引用を一読してまず分かるのは、フッサールが予持概念を、「未来への絶えざる『志向』」と表現していることである。この表現は、「予持」という言葉がこの箇所の中で最初に用いられる文の直前で用いられており、また **Protention** という術語は、志向性 **Intention** と、未来ないし前方を意味する接頭辞 **Pro** が合わさって成り立っている⁶⁷。したがって、この「未来への絶えざる『志向』」という表現が予持を表したものであることは明らかであろう。また引用部の最後の一文で、予持が「充実される **sich erfüllt**」ものであるということもわかる。よって以上から、予持とは未来への充実されるべき志向である、という定義を予持の基本的な規定として提出できるだろう。この定義はフッサールによって明確に打ち出されたものであり、予持の第一義的な特徴と言えるだろう。

しかし、この箇所はもっと詳しく解釈される必要があるだろう。以下では、この箇所で予持が具体的にどのようなものとして描かれているかを見極めるため、予持が「絶えざる未来への志向」と表現されているときの「未来」とは具体的にはどのようなものか、あるいはもっと端的に、予持は何を予持しているのか、という問いを立ててこの箇所を解釈していく。

引用部においては「来たるべきものを指す **verweisen auf ein Künftiges**」という表現と「未来への絶えざる『志向』」という表現、そして「予持」という表現が見られるが、表現の類似性から、これらは同じ事象を言い表していると考えられる。そのように考えると、予持が志向する未来は「**ein Künftiges**」と言い表されていることがわかる。**Künftiges** というのは **künftig** という形容詞が中性名詞化したものであり、未来そのもの (**Zukunft**) というよりは、来たるべき何らかのもの、未来において生じる何ものか、というほどの意味の表現であろう。しかしこれだけではほとんど何も分からない。

そもそも「来たるべきものを指す」という表現はどのような場面において出てきたものだろうか。引用部によれば、内在的な時間的な客観が「まさにそうしたものであるのは」、つまり、時間的な客観、音 - 内容が時間的なものとして性格づけられて受け取られるためには、「それ [= 音 - 内容] がその『顕在的な』持続の間中来たるべきものを指し、過ぎ去ったものを遡って指す」ということが必要になるのだという。つまり、「来たるべきもの」あるいは「過ぎ去ったもの」は、「顕在的」に持続している客観に時間的という性格を与えるために **verweisen** ないしは **zurückweisen** されるものなのである。したがってある客観が時間的な客観であるというのは、その客観が過去および未来に広がりを持っている、ということだと考えられ、「来たるべきもの」および「過ぎ去ったもの」は、時間客観、音 - 内容に時間的な広がりをもたらすものだということになり、今与えられている音 - 内容と同質のものだと考えられる。もし「来たるべきもの」が同質のものでなかったなら、これを **verweisen**

⁶⁷ **Protention** という言葉が **Retention** と同様、**Intention** という言葉に由来することは明らかであろう。ローマー[2004]は「予持する (**protendieren**) という言い方は、さしあたりは、把持する (**retendieren**) という言い方とまったく並行して選ばれたものである。それは同様に、『志向する (**intendieren**)』という言い方との意図的な類比において選ばれたもの」(196頁)と述べている。

しても広がりにはならず、単なる違うものの寄せ集めにしかならないからである。以上を考慮すると、「来たるべきもの」というのは、未来における音 - 内容ということになるだろう。

上で述べたことは、「[予持は] 音がまさに持続している間はこの音に向かう予持として充実される *sicherfüllt*」という表現からも裏付けられる。先ほど確認した箇所では予持が予持するものについて述べられていたのに対し、ここでは予持が充実されることについて述べられている。引用部によれば、予持が充実されるのは「音がまさに持続している間」であると述べられており、これは音が今まさに鳴り響いているときに予持が充実される、という意味だと解釈できる。ところで音が今まさに鳴り響いているというのは、音を聞いている主観の視点からすれば、音が顕在的に現れているということである。つまり、予持は顕在的に与えられた音 - 内容によって充実されるということになるだろう。フッサールにおける充実とは、空虚に志向されていたものが実際に与えられることであるから、予持が顕在的に与えられた音 - 内容によって充実されるのだとすると、未来への志向である予持が志向していたものは、未来という時間様態における音 - 内容、「やがて顕在的に与えられるであろう」という仕方で志向されていた音 - 内容であるということになるだろう。よってこの箇所からも、予持は未来という時間様態における音 - 内容を予持しているということが分かる。

以上より Nr. 45 においてフッサールは、予持について (a) 未来へと向かう充実されるべき志向であると規定していることが直ちに分かった。さらに予持が何を予持しているかという問いの下でこの箇所を検討していくと、(b) 予持が予持しているものは将来における音 - 内容、より一般的に言えば、知覚対象の将来における与件内容だということが分かった。

ところで、(a) と (b) の特徴は性格の異なるものであることには注意しておきたい。(a) がフッサールによって明示的に述べられているのに対し、(b) は (a) ほど明示的に述べられておらず、フッサールの記述を解釈・吟味していくことで初めて明らかになる特徴である。また、(a) と (b) を比較すると、(a) よりも (b) の方がより細かい特徴であると言えるだろう。以上二点から、予持の基本的な特徴 (a) が Nr. 45 の文脈で (b) のような形を取っている、という状況が見えてくる。実際、(a) の特徴は中期『ベルナウ草稿』の予持にも保存されていた反面、第一部の考察では (b) の特徴は見られなかったと言える。つまり、中期においても（そしておそらく後期においても）維持されている予持の基本的特徴 (a) が、初期時間論において (b) に変形している、という見通しが立つのである。よって、初期における予持概念を特徴づけるためには (b) の特徴を考察することが重要であるということになるだろう。

2.1.2. 初期時間論の予持概念に固有の性格の検証

(b) を吟味するにあたり、この特徴が初期時間論の他の箇所における予持概念にも見られるかどうかを検証しよう。以下ではその検証として、『時間意識講義』に収められているテキストの中でも、1904/1905 年のものとされる §14 および §16 における予持概念を解釈し

ていく⁶⁸。また、**Protention** という言葉では表現されていないが、1893年から1901年の間に書かれたとされている、X巻Nr. 12の中に登場する「直観的な予期 *anschauliche Erwartung*」(X, 167)を予持の萌芽的概念と見做し、これを解釈する⁶⁹。

まずは§14から確認してみよう。この節全体では「第一次想起」、つまり把持と「第二次想起」、つまり一般的な意味における想起の違いが述べられている。第二次想起については、現在化たる知覚と相似的でありながら、準現在化の働きであるという点において、知覚とは異なるということが述べられている。一方の把持は、知覚・現在化の場面において既に働いており、知覚に含まれるものとされ、それらのことから第一次想起と第二次想起が区別される。そして、その違いの解明の途中で予持が登場している。

たとえば、われわれが最近コンサートで聴いたあるメロディを思い出すとしよう。その場合、その記憶現象全体が適宜に変更されてはいるがそのメロディの知覚と全く同じ構造を持つことは明らかである。記憶も知覚と同様に一つの優先点を持ち、知覚の今の時点には記憶の今の時点が対応している。われわれは想像によってメロディの全体を閲歴し *durchlaufen*、最初に第一の音、次いで第二の音と順次それらを「疑似的に *gleichsam*」聞くのである。そのつど必ず一つの音（ないしはある音の位相）が今の時点に存在している。しかし先行した音が意識から消し去られたわけではない。たったいま疑似的に聞かれた音の第一次想起と、まだ聞こえない音の予期（予持）が、今現出し、疑似的にいま聞こえる音の統握と融合する。今点は意識に対して、記憶統握 *Erinnerungsauffassungen* の連続の中で成立する時間の庭を再び *wieder* もつことになる。メロディの全体記憶はこのような幾つかの時間の庭の、つまり以上で記述したようないろいろな統握連続体の、一個の連続体のうちに存立しているのである。

(X, 35-36)

この場面では想起についての記述が行われている。想起には「疑似的に」や「再び」といった言葉が表現するような性格が付着しているが、しかしそれを除けば知覚と同じ構造を持つのだということがここで表現されている。予持および把持は、その知覚と想起に共通する

⁶⁸ §24にも予持概念が登場するが、この草稿は1917年に由来するものである。そのため、本研究はここに登場する予持概念を中期時間論属するものと見なし、初期時間論の予持概念としては扱わない。『時間意識講義』の補遺(III, VI, IX, XIIに予持が登場する)に関しても同様である。補遺のテキストは一部を除いて1917年夏以降にフッサールとE. シュタインが共同で作成したものであり(vgl. X, 99)、初期のものとして扱うことは避けた。また、§40、§43、§44においても予持概念が登場するが、これらの草稿は成立時期が不明であるため、積極的に考察の素材として扱うことは避けた。なお、§14の結論部も1917年の草稿に依ると推測されているが(vgl. X, 36)、本節で参照した箇所は全て1904/1905年の講義草稿に由来する。

⁶⁹ これ以外にもNr. 1やNr. 3などに、「予持」という言葉では表現されていないものの、予持概念に類すると看做すことができるような事象についての記述がある。ただし、それらの記述では(a)の特徴が明示的な仕方では読み取れなかったため、ここでは考察の対象から除外した。

構造として登場する。

ここで述べられている予持の働きとは、引用によれば、「まだ聞こえない音」を予持し、把持されている、たったいま聞こえた音とともに「今聞こえる音の統握に融合する」ことであるとされている。つまり、予持は未来の音 - 内容を志向するものであり、把持は過去の音 - 内容に向かうものであるということが分かる。ゆえに、予持された音 - 内容と把持された音 - 内容が今の音の統握に融合するとき、今の音 - 内容と未来と過去の音 - 内容が一緒に把握されることになるだろう。ここでも予持は将来における音 - 内容に対する志向として特徴づけられていると考えられる。

上記の結論は、「庭」という概念を見ていくことでも明らかとなる。引用に立ち返ると、すでに述べたとおり、この箇所はあるメロディを想起する場面についての記述である。そのとき、「たったいま疑似的に聞かれた音の第一次想起と、まだ聞こえない音の予期（予持）が、今現出し、疑似的にいま聞こえる音の統握と融合する。今の時点は意識に対して、記憶統握の連続の中で成立する時間の庭を再びもつことになる」と述べられており、予持と把持は今の音を統握する働きに融合するのであり、この統握において「庭」が成立するとされる。ところで、庭を意味する *Der Hof* というドイツ語は、庭以外にも「暈」や「廷臣」や「農場」等と訳される言葉であり、あるものに付属してそれと一体をなすものを意味している。単語のこのニュアンスを合わせて考えると、非現在の音 - 内容が今の音 - 内容に対する「庭」として表現されるとき、過去や未来における与件内容が、今の与件内容に対して、周辺的なものとして結びつくという構図が表現されているのだと考えられる。つまり、この「庭」という言葉は、予持（そして把持）が非現在の音 - 内容を志向し、志向されたものは「庭」として今の時点のものに結びつき、それによって現在と非現在はある種のまとまりをもつようになる、という事態を表現しているのだと解釈できる。以上から、『時間意識講義』§14における予持概念にも (b) の特徴を見出すことができると結論付けられるだろう。

次に、§16の予持概念を解釈しよう。§16全体においては、非現在の音 - 内容を与える働きとしての把持ないし予持と、そのような非現在の音 - 内容を含まないような今この瞬間における与件を与えるものとしての、いわば狭い意味での知覚が区別される。ただし節の最後に至って、そのような現在は「理想的限界 *ideale Grenze*」(X, 40) に過ぎないと述べられる。

この節において予持は断片的に、しかも僅かにしか登場しない。以下は、そのうちの一つである。

「メロディの知覚」の場合、我々は今与えられている音と過ぎ去った諸音とを区別し、前者を「知覚された」音、後者を「知覚されていない」[音]と呼ぶ。他方で、我々は、知覚されているのは今の時点だけであるにもかかわらず、そのメロディ全体を知覚されたメロディと呼んでいる。我々がこのような言い方をする理由は、メロディの延長が知覚作用の延長において単に点の継続として与えられているから、というだけではなく、把持的意識の統一それ自身が、経過した諸音をなおも意識の内に「しっかり掴んで」

おり、そして統一的な時間客観、すなわちメロディ、に關係する意識の統一をさらに産出し続けるからである。メロディのような客観性はこの「知覚される」という形式以外では、原的な自体所与とはなり得ない。構成されている作用、今の意識と把持的意識から作られる作用は時間客観の十全的知覚である。このような時間客観は当然時間的な諸区別 *zeitliche Unterschiede* を包含しており、そしてそれらの時間的な諸区別はまさに原意識、把持、予持といった諸作用の中で構成されるのである。

(X, 38、強調はフッサールによる)

引用部の末尾を見ると、時間客観は「時間的な諸区別を包含している」とされており、その「時間的な諸区別」というものが把持や予持などによって可能になるとされている。では、この「時間的な諸区別」とは何か。引用前半ではメロディのような時間客観を捉える意識が記述されており、知覚の働きの広がり論じられている。この議論でフッサールは、まずメロディ全体の内、知覚されているのは今の時点（の音）のみで、メロディの今の時点以外は知覚されていない・過ぎ去った部分である、として考察を進めている⁷⁰。つまりここで言われているメロディあるいは時間客観は、今の時点の与件とそれ以外の時点の与件を含むものとして考えられているということがわかる。このことを踏まえると、時間客観が包含している「時間的な諸区別」とは、〈異なる時点における諸与件〉という意味に解釈できる。そして、先に確認しておいたように、この「時間的な諸区別」つまり〈異なる時点における諸与件〉が把持や予持によって可能になるとある。予持は未来方向への志向であるから、予持がかかわる〈異なる時点における諸与件〉というのは、未来の時点における諸与件ということになるだろう。ゆえにここでの予持概念にも (b) の特徴を見出すことができる。

最後に、1893年から1901年間に書かれたテキスト群のうちの一つであるX巻のNr. 12を検討しよう。ここでは「直観的な予期 *anschauliche Erwartung*」に注目する。

しばしば我々はある特定の体験の際にも、つまり周知のメロディ、あるいは、いわば繰り返されるメロディの際にも、直観的な諸々の予期 *anschauliche Erwartungen* を持つ。そのとき [=そのような直観的な諸々の予期を持つとき] 各々の新たな音が前方に [=未来に] *vorwärts* 方向づけられた志向を充実していく。我々はこの場合規定された予期 *bestimmte Erwartungen* を持つ。前方に *nach vorwärts* 方向づけられた統握がなければ我々は存在しないし、また存在できない。時間の庭 *Zeithof* は未来をも持つ。

(X, 167、強調はフッサールによる)

⁷⁰ ここで言われている「知覚」というのは、いわば、現にその時に鳴っている音を、鼓膜の物理的振動において、物理的な意味においてのみ捉える、という意味での知覚であろう。ただし後でも述べるように、このテキストでは、これとは異なる「知覚」が述べられているし、フッサールの時間論に、このような与件を物理的に捉えるという意味での知覚が登場するのは稀であろう。

考察に先立って、ここで述べられている場面は、「周知のメロディ」「繰り返されるメロディ」を知覚する場面であるということを確認しておかなければならない。フッサールは確かに「特定の体験の際にも auch」と述べており、これは「(未知のメロディを知覚する場合と同様) 特定の体験の際にも」という意味で解釈するべきであろう。ゆえに、彼はこの引用箇所の内容を、対象が既知であろうと未知であろうとすべての知覚体験に敷衍できると考えていたと推測できる。しかしこの箇所では、あくまで既知のものの知覚について語られているということは注意しておかねばならない。

さて一読して分かるように、この箇所には「予持」という言葉自体は出てこない。しかしこの箇所における「直観的な諸々の予期」(以下「直観的予期」と省略)について「各々の新たな音が前方に方向づけられた志向を充実していく」という表現がなされている。この表現から「直観的予期」が未来に向けられた志向であり、かつ充実されるものであることが分かるのであり、ゆえに「直観的予期」は第一章第一節で確認した予持の第一義的な特徴 (a) を持っていると言える。この「直観的予期」が知覚の際に与えられていることも考慮して、これが (a) の特徴を備えているということから、この「直観的予期」を予持概念の萌芽形態であると看做すことができる。

「直観的予期」は (b) の特徴を持っているだろうか。この志向は「各々の新たな音」によって充実されるとされている。引用で扱われているのはメロディが流れている場面であるから、新たな音というのは当該のメロディにおいてその都度の流れてくる音、つまり当該メロディの知覚においてその都度与えられる顕在的な音ということになるだろう。「直観的予期」が顕在的な音によって充実されるということから、「直観的予期」が未来への志向であることも考慮して、これが志向しているのは未来の音ということになるだろう。以上から、この箇所の「直観的予期」にも、これはまだ予持概念の萌芽形態に過ぎないにも拘らず、(b) の特徴を見出せる。

以上より Nr. 45 以外の箇所にも (b) の特徴を見出すことができたため、(b) の特徴は、初期時間論の予持概念に広く見られる特徴であると言えるだろう。かくして、初期時間論における予持概念は、(a) 未来への志向であるという大まかな性格は中期時間論における予持概念と共通であるものの、(b) 対象の将来の与件内容を志向するという固有の性格を持っているということが明らかとなった。

2. 1. 3. 初期時間論の予持概念が登場する記述の検証

以上から初期時間論における予持概念の特徴が明らかになったと言えるが、予持がこのような性格を持つものとして記述されているということは何を意味するのか。フッサールは、どのような問題意識の下で初期時間論の予持概念をこのように記述したのか。この問いについて検討するための準備として、これまでの考察で扱った記述を再度検討しよう。

例えば Nr. 45 には次のような記述があった。問題の箇所のみ改めて引用しよう。

[予持]音がまさに持続している間はこの音に向かう予持として充実され、かわりに何らかの新しいものが始まるときには、廃棄され変化する *sich aufheben und verändern*。
(X, 297)

この記述によれば、ここで記述されている予持は、ある対象についての知覚が持続している間だけ持続し、別の知覚経験が生じた場合には「廃棄され変化する」とされている。例えば、正午の鐘の音を聞いてお昼のラジオ放送をつけて流行りの曲を聴くとする。上での考察を踏まえると、鐘の音の知覚の際には（おそらく徐々に消えていくであろう）将来の鐘の音を、ラジオから流れてくる曲を知覚していた際にはその曲の将来のフレーズを志向する予持がそれぞれ発動していることになるだろう。つまり、ここで記述されている予持は、その都度の知覚経験ごとに、というより知覚対象ごとに発動する予持だとされている。つまり、ここでの予持は、言ってみれば、当該の「音」に対するものでしかない予持だというように制限されているのである。

これを踏まえて Nr. 45 の記述に関して、特定の対象（ここでは「音」）の知覚経験が記述されていることについて考察してみよう。『ベルナウ草稿』でのフッサールの記述によれば、経験においては、注意が向けられている主題的なものも、そうではない潜在的なもの・地平的なものも、（注意が働いている限りは）対象として構成され、意味を付与されているとされている（本研究第一部第一章第一節を参照せよ）。さて、フッサールが何かに対する知覚経験をその具体的な何か言及しながら記述している時、つまり何かを主題的な注意の下で知覚しつつその経験を記述している時、記述されている知覚経験においては対象構成的・意味付与的な志向性が働いていたのだと考えられる。その何かを「音」や「メロディ」として見なし、そのようなものとして書き留めることができているということが対象構成的・意味付与的な志向性が働いていることの何よりの証拠であると言えるだろう。そして、このような対象構成的な志向性の影響下にある場面で記述されている予持も、その志向性の影響下において記述され、目の前の知覚対象の構成のために働くものとして記述されたのだと考えられる。そしてこのような対象構成的な志向性の影響下にあるからこそ、ここで記述されている予持は、知覚対象の持続が終了した後も続いていくような、踏み込んで言えば、問題の対象以外の対象の知覚をも可能にする普遍的時間形式に資するような、そのような予持としては想定されていない。翻って『ベルナウ草稿』では考察の対象がヒュレー的領域に限定されており、そもそも目の前の対象の構成は問題になる余地は無かったと言える。本研究第一部でも確認した通り、『ベルナウ草稿』における予持は体験流の時間的秩序を成立させるものとして記述されているが、これを記述することが可能になった背景の一つとして、考察の対象がヒュレー的領域に限定されていたことを上げることができるだろう。

さらに、Nr. 45 では、考察の対象が明確に「音」の知覚だとされていることにも注目してみよう。ここではある知覚対象の将来における内容を捉える予持が記述されているのだが、

このような予持（と言うより予想）を行うことはなかなか困難ではないだろうか。例えば、鑑賞中の曲の次の旋律、初対面の人物が何を話し出すか、何かしらの事件の次の展開などを正確に予持することは決して容易ではないだろう。もちろんこれは決して不可能ではなく、そこで起きていることが何であるかを知っていれば、それもその事象に対する経験が豊かであるほど、また生じている事象が単純であるほど、完全に正確な予持は困難であるにしても、かなりの精度での予持が可能になるだろう。そして反対に、何が生じているかがよく分かっていないほど、あるいは生じている事象が複雑であるほど、件の予持は困難になっていくと考えられる。これに関して、フッサールは後年の『経験と判断』で、知覚対象における今は見えていない側面を予想する場合を取り上げ、「しかしそれ [= 予想 Antizipation] は予想として未規定的で一般的だが、[そうは言っても] 前もって親しんだものとしての典型的に規定されたものという様式において予想するのである」(EU, 32) と述べている。つまり、「類型」と呼ばれる、これまでの経験や知識から得られたその対象に対する了解 (ebd.) の枠の中で、上記の (b) の性格を持つ予持が働くとしてされているのである。

これを踏まえると、Nr. 45 でフッサールが「音」の知覚を考察の対象に選んだことが、(b) の性格を持った予持を記述するうえで都合が良いことが分かる。まず、記述されている知覚の対象は「音」であるとされており、それゆえ『経験と判断』での記述に従えば、この経験において働いている (b) の特徴を有した予持は「音」の類型に基づいて将来の与件内容を志向しているものと考えられる。さらに、ここに登場する「音」は一貫して単数形 (冠詞は *der* および *dieser*) で表記されている。ここでの議論にメロディは登場しないため、この単数形の「音」は、ある旋律における一音ではなく、鐘やブザーやサイレンのような単発的な音の持続 (鳴り始めて消えるまで) を指すと考えられる。仮にメロディを知覚する場合、(b) の性格を有する予持はメロディの類型の枠内で将来の知覚内容を捉えることになるのだろう。しかし一口にメロディと言っても幅広いジャンルが存在するため、メロディの類型に訴えたとしても将来の知覚内容を正確に予持するのはやはり困難であろう。また、仮にジャンルや、更には作曲者が分かっていたとしても、この困難は完全には解消されない。このように、対象によっては類型に訴えるだけでは将来の知覚内容を予持することが依然として難しく、それゆえ、このような対象の知覚においては (b) の性格を持つ予持が働きにくいのだと考えられる。しかし、「音」という対象には上記のような複雑さは無いように思われる。例えば銅鑼や鐘の音であれば、最初に強く鳴り響き、それから徐々に弱くなっていくであろうし、ブザーであれば同じ強さで一定時間持続した後、断ち切られるように終了するであろうし、サイレンであれば連続的な音程の上がり下がりが繰り返されるであろう。このように単発的な音の知覚の場合、対象の変化はそれほど複雑にはならない。我々が所持する類型は、その音の将来における与件内容についての精度の高い予持を可能にするに十分であり、幻滅する可能性はゼロではないにしても、(b) の性格を有する予持が活発に働く素地は提供できていると考えられる。

以上から、Nr. 45 においてはまず何かについての知覚が記述されているがゆえに、考察の

対象となっている経験を対象構成的・意味付与的志向性が支配し、予持もこの影響下で記述されているのだと考えられる。さらに対象が「音」という単純な対象に定められていることにより、類型に訴えて当該の対象の先行きを見通すことが容易になっている。このように、Nr. 45 の記述には、(b) の性格の予持が働きやすくなるような仕掛けが様々に施されている。

本章第二節で確認した Nr. 45 以外の箇所でも、フッサールは何かについての知覚を考察の対象としている。さらにそれだけではなく、いくつかの記述には奇妙な仕掛けがなされている。もう一度記述を確認してみよう。

まずは『時間意識講義』§14 から確認していこう。このテキストの冒頭には「たとえば、最近コンサートで聴いたあるメロディを思い出す場面を想定しよう」(X, 35) という一文が見られる。一読して分かるように、ここでも Nr. 45 と同様、対象が定まり、(Nr. 45 ほどではないが) 類型が利用できるような経験が記述の対象に選ばれているのだが、ここではさらに、想起が記述の対象に選ばれているということに着目すべきであろう。フッサールは想起を「準現在化 *Vergegenwärtigung*」として、「現在化 *Gegenwärtigung*」である知覚が変様したのものとして特徴づけており、踏み込んで言えば、「再生 *Reproduktion*」や「再想起 *Wiedererinnerung*」と呼ばれていることから分かるように、過ぎ去った知覚が「かつての」経験に変様したのものとして特徴づけている。言い換えれば、想起においては、時間様相以外は無なる成素もかつての知覚経験から変更されない。フッサールはこの箇所で「再び *wieder*」(X, 35) という言葉を用いているが、これも上記の事情を反映してのことと考えられる。この事情を踏まえ、フッサールは、かつての知覚を想起においていわば再演する場合も、その知覚がまさに現在化として現に働いていた場合も、時間様相以外の部分、すなわち予持 - 原印象 - 把持という構造、およびそれぞれの働きの様子は変化しないと考えていたようである。実際、フッサールは再想起の経験について、「適宜変更こそあれ、知覚と正確に同一の構造を持っていることは明白である」(ebd.) と述べている。

確かに、再想起と知覚は同一の構造を持つと言えるだろう。想起に際し、意識は想起された経験に「かつての」という性格を付すのみで、それ以外は経験内容に関しても、その経験の構造に関しても、かつての知覚経験においてそうであった通りに（少なくとも想起の主体はそのように信じる仕方）再生を行っている。そうでなければ、そこで行われているのは想起ではなく空想だということになるだろう。後年のフッサールもこの見解を翻しているようには見えない。この箇所でフッサールは上記の想起と知覚との構造的同一性に基つき、想起において (b) の性格を有した予持を見出し、これを知覚においても見出せるものだとしているのである。

しかし、こと (b) の性格を有した予持に関して、果たして想起と知覚との構造的同一性は成立しているのだろうか。例えば初めて聴く曲を知覚し、後にその時のことを想起する場面を例にして考えてみよう。最初にこの曲を知覚する時、私はその都度の音と件を原印象として受け取り、また受け取るや否やそれを「かつての」与件として把持している。また、第一部で確認した、体験流の時間的秩序の構成に資するような予持 - 原現前 - 把持の働き

も働いている。すなわち、意識がその都度到来する〈今〉を捉えるであろうということ、将来における意識の働きに向かう予持が、志向的連続性において、未来の方向へ（潜在的には）無限に伸びていく。同様に、過去における意識の働きに向かう把持が、志向的連続性において、過去の方へ（潜在的には）無限に伸びていき、そしてこれらの予持と把持が絡み合っている。これらの働きは最初に曲を知覚した時にも、またこの知覚経験が想起される時にも、同一の構造において見出される。

では、将来の知覚内容に対する予持はどうであろうか。確かに、最初に曲を知覚する際も、その曲のジャンルや作曲者、あるいは、少なくともそれが曲であることを知っていれば、件の予持が働く余地はあるだろう。しかし、そうは言ってもこの予持が高い精度において働くことは想定しにくく、それどころか、場合によっては全く働かないことさえありうる。他方、想起においては、すなわち、「想起あるいは空想においてあるメロディを一音一音上演させている」(X, 36) 場合は、上述の通り、想起におけるメロディはかつて知覚された通りにしか再生されないのであり、想起においてそのメロディの進行は想起の主観によって完全に把握されている。もちろん、メロディの進行を把握していない場合も考えられるが、この場合は想起における予持が問題になる以前に、そもそも想起という経験自体が不可能になる。つまり、想起における予持は、今再生している内容の次にどのような内容が来るかということについて幻滅することはない。ある曲を初めて聞いた時のことを臨場感溢れる仕方で想起したとしても、かつて初めてそれを知覚した時にあったはずの曲の未規定性は、想起された際にはもはや失われている。だとすれば、想起において将来の（疑似）知覚内容を捉える予持が働いているとしても、この働きは想起における対象が持つ既知性に基づいている可能性が払拭できず、この予持がかつての知覚においても働いていたとは必ずしも言えないのではないだろうか。

現に、1917年に書かれた『時間意識講義』の§24「想起における予持」には、次のような記述が見られる。ここでフッサールは、§14と同様、想起においても予持が見出されるとしたうえで、次のように述べている。

しかし、再想起する〔意識の〕プロセスは、これらの予持をただ記憶に従ってもう一度更新するというだけではない。これらの予持は〔再想起された場合には、既に一度到来したものを〕捕捉して持っているのであり、つまり、これらの予持は〔既に一度〕充実されたのであって、しかも我々は、再想起する時に、そうしたことを意識しているのである。再想起する意識の中での充実化は、再 - 充実化（まさに〔再〕想起措定の〔もたらす〕変様の中での）であり、かつまた、たとえ出来事知覚の根源的な予持が〔内容的に〕未規定だったとしても、そして〔その後に規定されるべき〕〈別様にある〉とか〈あらぬ〉が未定のままであったとしても、再想起するときには、我々は、そうしたことを全てを未定のままにしていない〈事前に設定された予期〉を持つのである——ただし「不完全な」再想起という形態は別であり、これは未規定な根源的予持とは別の構造を持つ。

とはいえ、この未規定な根源的予持も、再想起のうちに含まれているのである。

(X, 52-53、強調はフッサールによる)

引用においては、「出来事知覚の根源的な予持」、つまり知覚に際して働いている本来的な予持については「未規定」である場合も考えられることを指摘しつつ、知覚に際して予持が未規定であったとしても、想起における予持は上記の未規定的な事柄を「未定のままにしている」のだとしている。つまり、将来の与件内容を捉える際の規定性に関して、1917年のフッサール自身が、想起における予持と知覚における予持を区別しているのである。以上を踏まえれば、§14においてはかつての知覚経験を想起するという経験が記述の対象に選ばれているのだが、これは (b) の性格を持つ予持、対象の将来における知覚内容を捉える予持を記述する上で都合の良い場面設定である、と言える。

Nr. 12における場面設定は上記の二つよりもさらに露骨である。この箇所でも、冒頭では「メロディ」の知覚経験が問題になっていることが表明されており、この点で Nr. 45, §14 と同じ場面設定が行われていると言える。さらにそれだけではなく、ここではメロディが「周知の」、あるいは「繰り返される」メロディだとされている。「周知の」メロディであるということは、当然そのメロディ進行はフッサールに知られているのであろう。また「繰り返される」メロディの場合、このメロディは決まったいくつかのフレーズを繰り返しているであろう。確かに、細かい記憶違いや繰り返しの断絶により将来のメロディの予持が失敗する可能性は否定できないが、そうは言っても、少なくとも将来の知覚内容についての予持は活動しやすくなっていると考えられるし、またその精度も高くなるものと考えられる。やはりこの箇所でも (b) の性格を持つ予持を見出しやすい仕掛けが施されている。

例外的に§16では上で確認したほどの仕掛けは見られない。確かにここでも冒頭で記述の対象が「メロディの知覚の場合」に限定され、この点ではやはり先に挙げた箇所と同様の設定がなされている。しかし、ここで言われている知覚対象は「メロディ」であり、これは単発の音などと違って変化が複雑である。ゆえにここでもメロディの類型は発動しているとは考えられるが、この類型は対象の将来における知覚内容を予持する上で、それほど有効な枠組みを提供するとは思われない。また、ここで想定されているメロディには、「周知の」などといった規定も特に見られず、かつて知覚したメロディを想起している場面が想定されているわけでもない。したがってこの場面では、(b) の性格を持つ予持を捉えやすくするような仕掛けは見られず、この場面におけるメロディには未規定性が多分に含まれていると言える。

ただし、件の予持を記述しやすくするための仕掛けが施されていませいか、この箇所には、問題と言うほどではないにせよ、記述に若干のブレが見られる。本章第二節で確認した記述をもう一度引用しておこう。

「メロディの知覚」の場合、我々は今与えられている音と過ぎ去った諸音とを区別し、

前者を「知覚された」音、後者を「知覚されていない」〔音〕と呼ぶ。他方で、我々は、知覚されているのは今の時点だけであるにもかかわらず、そのメロディ全体を知覚されたメロディと呼んでいる。我々がこのような言い方をする理由は、メロディの延長が知覚作用の延長において単に点の継続として与えられているから、というだけではなく、把持的意識の統一それ自身が、経過した諸音をなおも意識の内に「しっかり掴んで」おり、そして統一的な時間客観、すなわちメロディ、に關係する意識の統一をさらに産出し続けるからである。メロディのような客観性はこの「知覚される」という形式以外では、原的な自体所与とはなり得ない。構成されている作用、今の意識と把持的意識から作られる作用は時間客観の十全的知覚である。このような時間客観は当然時間的な諸区別を包含しており、そしてそれらの時間的な諸区別はまさに原意識、把持、予持といった諸作用の中で構成されるのである。

(X, 38、強調はフッサールによる)

本章第二節でも確認したように、引用の末尾では時間客観が包含している「時間の相違」が「原意識、把持、予持といった諸作用の中で構成される」とされているが、その直前の箇所ではそのような時間客観を捉える「十全的知覚」は「今の意識と把持的意識」から成るのだとされている。つまり、知覚された対象は予持によってもたらされる「時間的な諸区別」を含むのに、それを捉える働きに予持は含まれていないのである。また、引用前半においても、さらにはこの節全体においても、把持および知覚（この節に限って言えば、これは原印象・原現前と同義であろう）についての記述があるのみで、予持についての記述はほとんどない⁷¹。しかし、§14⁷²でフッサールは想起と知覚の構造的同一性を主張し、かつまた想起においては (b) の性格を持つ予持が見出されると主張していた（つまり、暗黙的に知覚においても件の予持が見出されると主張していた）ことを踏まえるならば、§16の知覚についての考察で予持についての言及がほとんど見られないのは少々不自然と言える。この不自然な無視のされ方は、(b) の性格を持った予持を記述するための仕掛けが§16に施されていないことに起因するのではないだろうか。すなわち、ここで考察の対象に選ばれている経験におい

⁷¹ 「予持」という言葉が登場するのは引用箇所以外では次の一か所だけである。「〈知覚〉という言い方を〈[時間的な] 所与性の諸区別〉——時間客観はこうした諸区別をもって登場するのだが——に關係づけるならば、そのときに知覚に対立するのは、ここで登場する第一次想起と第一次予期（把持および予持）であり、この場合、知覚と非-知覚〔=把持および予持〕は連続的に〈ひとつの内に他のひとつ〉というように移行する。」(X, 39) ここでも、予持（および把持）は時間客観の「時間的な諸区別」をもたらすものとして想定されているが、ここでは本論で確認した引用とは違い、予持-原印象-把持の間の連続的移行に言及がある。もっとも、この直後に知覚の構造およびその連続性がより詳しく論じられる際には、予持は無視されている。

⁷² 全集 X 巻の編者である R. Boehm によれば、§14の第一段落（本研究が引用した箇所もここに由来する）は 1904/1905 年の講義草稿 [37] と [38] に由来し (vgl. X, 35)、§16 も 1904/1905 年の講義草稿 [38] - [40] に由来する。この事情を踏まえると、両テキストの間には、連続性とまでは言えないまでも、少なくとも無視しにくい関連性があると言える。

ては件の予持がうまく働かないため、この箇所での知覚分析には予持が登場していないのではないだろうか。しかし他方でフッサールは、別の考察では構成された時間的对象に将来の与件内容が含まれることを洞察しており、それゆえその成果を§16においても利用しているのではないのだろうか。もちろんこの説明は仮説に過ぎず、フッサールが単に不注意で予持を記述し忘れていただけである可能性も否めない。しかし、ここで記述されている予持があくまで対象の将来における知覚内容を捉えるものであり、そしてここで言われているメロディが既知のものでないとするれば、この知覚経験において上記の予持が働くことは難しいと考えられるのであり、そのように考えるのであれば、むしろこの知覚経験の考察に際して件の予持が記述されていないことは自然であり、フッサールの記述も（時間的对象の「時間的な差異」に予持的な部分を含めた点以外は）正しかったとさえ言える。

これまでの考察を整理しよう。まず本章第一節、第二節の考察から、初期時間論における予持概念は (a) 未来へ向かう志向性であるという点では中期時間論の予持と共通していると言えるものの、中期においては見られなかった、(b) 対象の将来における与件内容を志向するという性格を有していることが分かった。さらに本章第三節の考察では、フッサールが上記のような (b) の性格を有した予持を記述する際には、①何か主題的な注意を向けて知覚する場面を考察の舞台に選んでいたことが明らかになった。①によってフッサールが記述していた知覚経験では対象構成的・意味付与的志向性が働いていたと考えられ、予持もこの働きに資するように、つまり対象構成の際に将来における与件内容を提供する仕方で働くように観察されたのだと考えられる。加えてフッサールは、②知覚経験の対象を明示し、加えて③対象を既知のもの（単発の音、「周知の」あるいは「繰り返される」メロディ、想起されたメロディ）としていた。②③の仕掛けにより、(b) の性格を持った予持がより働きやすくなり、フッサールもそれだけこの予持を記述しやすくなったのだと考えられる。反対に、③'対象の既知性が薄い知覚を扱った記述 (§16) においては、(b) の性格を持った予持は登場するものの、記述としての一貫性を欠いていた。ここから、対象の既知性が薄い知覚経験においては (b) の性格を持った予持は働きにくい、少なくともそれほど目立って働くことはないのだと考えられる。以上が⁷³、これまでの考察から明らかになった初期時間論で記述されていた予持概念の実態である。

⁷³ 本章で確認した以外にも、例えば§40でも予持が登場している。簡単にまとめると、§40では、通常の対象（メロディや風景）ではなく、それらを捉える「通常の意味での諸体験」（X, 84）が対象として知覚され構成される場面が問題となり、その際の時間性が論じられている。これらの意識作用に対する知覚・構成に際しても把持と予持は働いているとされ、予持は、「まさにその内容 [=意識作用] が持続する限りにおいて」（*ibd.*）持続するとされている。やや曖昧だが、ここでも予持の充実をもたらすものが対象（意識作用）の「内容」とされており、この予持も (b) の性格を有していると言えるのかもしれない。

2.2. 初期時間論の性格、中期時間論の性格

前章までの考察により、初期時間論における予持概念は、対象の将来における与件内容を捉え、知覚において対象構成・意味付与に資する仕方として記述されていることが分かった。では、初期時間論において記述されていたこのような予持は、本研究第一部で確認した予持と異なっているのか、それとも同じなのか。また、本研究は時期ごとの予持の性格から各時期の時間論の性格に迫る研究である。これを行うためには初期と中期の予持の性格の比較と差異化をより詳細に行っていく必要があるだろう。この観点の下、以下では初期時間論の予持がどのような点で中期時間論の予持と異なっているかを考察する。

以上を明らかにしていくため、本章では次の手順で考察を進めていく。まず第一節では、初期と中期の予持の差異を、これまでの考察に基づいて明確化する。具体的に言えば、中期時間論で記述されていた予持とは違い、初期時間論で明示的に記述されている予持は対象構成・意味付与に関与するのみで体験流時間秩序の構成には関与していない、ということを示す。しかし事実として、フッサールは初期においても体験流についての考察を行っている。本研究第一部によれば、体験流の時間的秩序の成立には予持が不可欠であるが、初期時間論には体験流の時間的秩序に関与しない予持しか登場しない。では、初期時間論において体験流はどのように記述されていたのか。第二節から第四節ではこの問題を扱うため、初期の『時間意識講義』において体験流がどのように論じられていたのかを確認する。予め述べておくと、初期時間論では体験流の統一が問われており、体験流の時間的秩序は問題になっておらず、それゆえ中期時間論的な予持は登場しなかったのだと考えられる。ただしこの考察の途上においては、初期の体験流についての考察では、予持が暗黙的な仕方では考慮されていた、という可能性が吟味される。この吟味により、初期時間論の後半から自己意識的予持（ただしこれはもっぱら予持的連続体を形成するのみで、把持との絡み合いは記述されていない）が暗黙的に記述されていたことが明らかになるだろう。さて以上の考察から、初期時間論の後半から『ベルナウ草稿』にかけて自己意識的予持が記述され、与件志向的予持は後景に退いたという事情が浮かび上がってくるが、では与件志向的予持についての記述は間違いだったのだろうか。本研究の答えは否である。これを示すために第三節では、与件志向的予持が中期『受動的綜合の分析』（1920/1921年）でも扱われていたことを示す。これにより、初期時間論における予持の記述は、確かに素朴な面や未熟な面を含んではいたが、決して間違いではなかったこと、それどころか中期においても追及されるほど重要な問題であったことを示したい。他方で、『受動的綜合の分析』では中期『ベルナウ草稿』で記述された体験流の時間的秩序の構成に関与する予持も登場していること、つまり、初期の予持が再び扱われたからと言って『ベルナウ草稿』で記述された予持が放棄されたわけでもないということも示されるだろう。

2.2.1. 初期時間論の予持と中期時間論の予持の差異

まず、これまでの考察に基づいて、初期と中期の予持を比較してみよう。

前章の考察を総合すると、初期時間論において記述されていたのは、主題的に知覚された対象の構成を補助するような仕方働き、しかも知覚されている対象にある程度の既知性がある場合にしか働かない予持だったと考えることができる。他方、中期『ベルナウ草稿』で記述されていた予持は、対象構成的・意味付与的な志向性よりも根源的な領域を支配する時間的秩序の成立に関わっていた予持であり、これは恒常不斷に働くものとして記述されていた。以上を踏まえると、両者は異なるものであると言えそうである。

両者の差異に関して、以下では各々の予持概念が記述されていた場面を手掛かりとしてさらに追究してみよう。本研究第一部第一章第一節の考察によれば、中期『ベルナウ草稿』においては、対象構成に先んじて働くより根源的な時間的秩序を考察するため、特殊な還元によってヒュレー的領域と呼ばれるものが考察の舞台として設定されていたのであった。他方で、初期時間論における予持についての記述では、前章での議論でも確認したように、対象構成的・意味付与的な志向性が極めて強く働いている場面が考察の舞台として選ばれていた。中期『ベルナウ草稿』においてヒュレー的領域が考察の舞台として選ばれた理由が、体験流の時間的秩序を記述するため、であったことを考慮するなら、初期における考察の舞台がヒュレー的領域ではなかったことから、初期時間論で記述されていた予持は体験流の時間的秩序の構成には関与しない予持だったのではないかと考えられる。現に、全集 X 巻の中で *Erlebnissfluß*、*Zeitfluß*、といった言葉が用いられている箇所は多々あったが、それらのうち *Protention* という言葉と一緒に登場しているのは Nr. 45 だけである。しかも Nr. 45 においてさえ、予持は冒頭で記述されているだけで（前章で扱った箇所がそれであるが）、体験流との関連づけは実質皆無と言って良い。したがって、初期における実際の記述を見るに、初期時間論の予持は対象構成において（それも条件が揃った場合に）のみ働き、中期『ベルナウ草稿』で記述されていた予持とは違い、体験流の成立、厳密に言えば体験流の時間的秩序の成立には関与していないという仮説が立つ。

なぜ初期において記述されていた予持は体験流の時間的秩序の構成に関与しないのか。フッサール自身はこの問いに直接答えているわけではないのだが（というよりこのような問いさえ立ててはいないのだが）、その理由としては、体験流の時間的秩序の構成には恒常的な働きだけが関与できると考えられるのに、初期の予持は恒常的な働きではない、というものが考えられる。体験流・意識流に関しては、例えば『時間意識講義』の§34-35 においては体験流・意識流が「絶対的に時間構成する流れ」(X, 73) や、「この絶対的な、すべての構成に先立つ意識」(ibid.) と表現されている。また『イデー I』では「この現象学的時間、すなわち、一つの体験流における（一つの純粹自我の体験流における）一切の諸体験のこの統一的な形式」(III/1, 180-181) という表現が見つかる。ここでは「私の」体験は全て体験流に属し、その体験流に属す全ての体験は「統一的な形式」である「現象学的時間」に服するのだという。体験流・意識流についてのフッサールの定義には多少の揺らぎがあるものの、

少なくとも、いかなるときも不断に流れゆくとされているという点では一致していると言えるだろう。ゆえに体験流がそのようなものである以上、これを統御する時間的秩序はいかなるときにも構成され、機能していなければならない、そしてそのような時間秩序を構成する働きもまた常に働いていなければならない。しかし、初期の予持は恒常的に働いてはいないと考えられ、それゆえ初期の予持は体験流の時間的秩序の構成には関与できないと考えられる。

実際、彼の記述を見ると初期の予持は恒常的に働きうるものではないということが示唆されている。例えば、前章第三節でも確認したように『時間意識講義』§16においては既知性の薄いメロディの知覚経験が考察の対象として選ばれており、予持についてのここでの記述は、既知の対象の知覚を扱った他の箇所との記述と比べてあやふやなものになっていたものであった。また同じく前章第三節で確認したように、1917年に書かれた§24では、「根源的に構成するプロセス」に含まれる予持、すなわち「根源的予持」と、想起において再生的に見出されたそれとを区別している⁷⁴。言い換えると、かつてその知覚を一度経験しているがゆえに既に充実されている予持は、根源的な体験に含まれる予持として認められていない。より端的には、これも前章第三節で確認した箇所であるが、Nr. 45では「音がまさに持続している間はこの音に向かう予持として充実され、かわりに何らかの新しいものが始まるときには、廃棄され変化する」(X, 297)という記述が見られる、つまりここでの予持には断絶の可能性が考慮されているのである。このように、これまでに確認してきた予持は限定的な場面で働くものとして、つまり常に働くわけではないものとして記述されていると言える。

また初期のフッサール自身が予持を恒常的な働きと考えていたかどうかを措いておくとしても、その性質上、初期の予持は恒常的に働くようには思われぬ。改めて確認すると、初期の予持は (b) 対象の将来における与件内容を志向するという性格を有する。つまり、例えば何かの曲を聴いている時に、次のフレーズや次の一音を捉えるのがこの予持である。これは二重の意味で非恒常的である。まず、フッサール自身の記述が示唆しているように、この予持の発動には満たすべき条件があると考えられる。例えば、知覚対象がどの程度既知のものかに応じてこの予持の働きの精度は変化するだろうことは先にも指摘した。さらに、例えばコンサートで既知の曲を聴くという事例を想定すると、ここでは確かに曲の将来の与件内容を捉える初期時間論的な予持を見出すことができるかもしれない。しかし仮に曲の将来の内容が予持できたとしても、その曲の後に継起的に生じる内容（その曲が終わった後のMC）や、その曲と同時的かつ無関係に生じる出来事（演奏の最中の咳）を予持するこ

⁷⁴ しかも後者の予持は「前もって方向づけられた予期 Erwartung」(X, 53)とも表現されている。例えば『ベルナウ草稿』の Nr. 1 など、Erwartung が Protention の代わりに用いられる場合も無くはないが、区別されたもう一方の予持が「根源的 ursprünglich」と形容されていることを踏まえれば、少なくとも、この Erwartung という言葉が後者の予持の非根源性を表現している、と解釈しても的外れではないだろう。

とはやはり困難なのではないだろうか。つまり、初期時間論的な予持は目下の対象に対する知覚の枠内でのみ働き、この枠を超えて働くことが極めて難しい（というより不可能）なのだと考えられる。これは日常的な経験に照らしてもうなずけるのではないだろうか。つまり、初期の予持は、限られた条件の下でしか働けないという意味で非恒常的である。

もう一つ指摘しておきたいのは、この予持は必ずしも充実するわけではなく、その意味で非恒常的だという点である。先の例にあてはめて言えば、コンサートで既知の曲を聴く場合、確かにその曲の将来の与件内容が予持されているかもしれないが、しかしだからと言って志向されている内容が実際に生じ、この予持が充実されるわけではない。例えば演者のミスやアレンジ、あるいはこちらの記憶違いなどによって予持が幻滅を味わう可能性は決して小さくはない⁷⁵。予持が幻滅を味わった後にしばらく新たな（初期的）予持が生じない場合もあれば、間髪を入れず新たな予持が生じる場合もあるかもしれない。いずれにせよ、少なくとも言えることとして、新しい予持は必ずしも常に生じるわけではない。そしてこの幻滅の可能性は、理論上、いついかなるときも存している。以上はあくまで既知の対象を知覚する場合の話である。当然、既知性の薄い対象を知覚する場合には予持が幻滅する可能性は高くなるであろうし、幻滅の後に新しい予持が生じる可能性も低くなるだろう。

以上をまとめると、初期時間論において記述されていた予持は、発動できる場面が限られており、また常に幻滅・断絶の可能性に曝されている、という二重の意味において非恒常的なのだと考えられる。このことは、フッサールの記述からも、事象からも読み取れることだと言える。全ての体験の統一としての体験流の普遍的秩序としての時間的秩序を構成する働きは恒常的に働いていなければならないのであり、それを踏まえると、非恒常的な初期の予持は体験流の時間的秩序の構成には関与できないと考えるべきであろう。

2.2.2. 初期時間論における体験流と予持①（『時間意識講義』 §§34-39 の議論）

しかし、初期時間論において記述されていた予持が体験流の時間的秩序の構成には関与しないものだというのは、少し奇妙なことのように思われる。というのも、まず事実として、初期においても体験流は記述されていた。実際、『時間意識講義』にも体験流という言葉は既に用いられており、また体験流とほぼ同義と見られる意識流や流れといった言葉も同様に用いられており⁷⁶、当然これらの言葉が使用されている箇所では体験流についての考察が行われていると考えられる。他方で、本研究の第一部によれば『ベルナウ草稿』においては体験流の核心に迫る記述が見られ、その記述においては中期時間論的な予持が重要な役

⁷⁵ ここで言われている幻滅に「美的な喜びや不快」（XI, 87）は含まれない。つまりここで問題にしている幻滅とは、音の不在や音程の違いや強弱や楽器の違いなどによる、知覚内容にのみ関与する幻滅であって、それらの要因によって引き起こされる演奏の美醜についての幻滅、つまり、価値判断などの高次の意識作用が関与する幻滅はここでは問題になっていない。

⁷⁶ フッサールは「～流」や「流れ」という意味で *Strom* と *Fluss* やこれらの動詞形を用いるが、本研究では両者の間に区別は設けなかった。

割を担っていたのであった。以上を踏まえると、中期時間論的な予持が登場しない初期時間論における体験流についての記述は誤りであったか、少なくとも中期時間論におけるそれを未熟にしたものだったということになるのだろうか。

この疑義について検証するために、初期時間論における体験流についての記述、ここでは『時間意識講義』§§34-39 (§34 は 1907-1909 年に成立したテキスト、§§35-39 は 1911 年以前には成立していなかったと推定されるテキストに由来している、vgl. X, 73) に着目する。

まず『時間意識講義』第三章の冒頭§34 においては、それまでに確認されたもの(客観的時間⁷⁷)において見出される諸事物 *Dinge*、「様々な段階の構成する現出多様体、先経験的時間における内在的諸統一」⁷⁸、「絶対的な時間構成する意識流」(X, 73) が挙げられている。次いで§35 ではそれらのものが、構成された客観的時間を基準として、客観的時間において構成されるものと、客観的時間それ自体を構成する「一つの流れ⁷⁹」(X, 74) とに区別されている。§36 の記述も併せて解釈すると、構成されるものは客観的時間において固有の時間位置を占め、その「持続 *Dauer*」を持つのに対し、構成する流れは客観的時間位置を持たず、それゆえ構成されるものと同じ意味では持続していない。この点において構成されるものと究極的な構成する流れである体験流・意識流とは区別される。しかし「流れ」という表現されていることから分かるように、体験流は(構成されるものの「持続」とは異なるものとしての)「統一性」と「連続性」を有しており、§§37-39 ではこれらが論じられている。§37 の冒頭では、把持的諸位相を伴った知覚作用の現在点(=今の位相)、およびその連続について語ることが「流れ」の諸契機について語ることなのだとされている(vgl. X, 75)。文脈から判断するに、ここで言われている「流れ」は意識流を指すと考えられ、それゆえここでの意識流とは原印象 - 把持的連続体とされていることが分かる。続く§38 では、例えば音楽を鑑賞しながら会話をする場合のように、体験流の一つの位相において複数の「原感覚 *Urempfindung*」(=感覚与件)が生じる可能性が指摘されるが(vgl. X, 77)、これらの複数の流れ *Flüsse* も結局はただ一つの流れへと統一されると述べられており、この統一の原理が論じられる。これについてフッサールは次のように述べている。

⁷⁷ 本研究における「客観的時間」とは、「すべての事物や出来事、物体やそれらの心的な性状、心と心的な状態が、その時間のなかで、それぞれ特定の時間位置——精密時計によって規定可能である時間位置——をもつところの その時間」(X, 7) である。つまり、各々の時点が(場合によっては「過ぎ去った」や「来たるべき」という性格を持つにせよ)現在として性格づけられるような時点の連続から成る単線的時間のことであり、時間図表上で言えば原印象・原現前の位相を繋ぐことで成立する(唯一の)横線のことである。これはフッサール時間論の各時期に共通の定義として考えることができる。

⁷⁸ 『内的時間意識の現象学』立松訳の訳注によれば、この先経験的時間とは経験の諸対象を構成する志向的諸体験および感覚内容の時間のことだとされており、ここに登場する「現出多様体」や「内在的諸統一」は客観的時間における諸事物(諸対象)を構成する志向的体験として解釈されている(立松訳 226 頁を参照せよ)。谷訳の訳注においても「現出多様体」や「内在的諸統一」が客観的時間における諸事物を構成するという構図が見られる(谷訳 353 頁を参照せよ)。

⁷⁹ ここでの「流れ」は *Fluß* だが、本研究では *Fluß* も *Strom* と同義で解釈した。

諸々の原感覚の多数の系列が始まり、そして終わる限り、我々は多数の流れ〔=個別的な知覚経験の経過〕を見出す。しかし、〈今〉の〈もはや - ない〉への変転の法則、他方で〈まだ - ない〉の〈今〉への変転の法則が全て〔の流れ〕に対して個別に生じているのではなく、むしろ〈今〉の共通形式、共通性 *Gleichheit* のような何かしらのものが総じて流れの様態の中に存立している限りにおいて、我々は〔それらの流れを〕結びつける一つの形式を見出す。

(X, 76-77)

知覚においては複数の感覚与件が与えられ得るのであり、それらの与件は各々が時間的秩序に従って持続していく。つまり諸々の対象のその持続の数だけ、それらを支配する時間的秩序、その時間的秩序が支配する経過としての「流れ」が見出されるように思われる。ここまでは引用の前で確認したとおりである。しかし引用によれば、これらの諸々の流れは全て「〈今〉の〈もはや - ない〉への変転の法則、他方で〈まだ - ない〉の〈今〉への変転の法則」という同一の形式（時間的秩序、§38 の表現では「内在的時間 *immanente Zeit*」(X, 77)) を共有している。それゆえ諸々の流れはこの同一の形式によって「結び付けられ」ているのであり、それぞれが別個のものとして見られていた諸々の流れは一つの大きな流れの一部だということになる。このように§38 では同一の形式、すなわち「内在的時間」によって同時並行的⁸⁰な複数の個別的な知覚経験の経過が統一されるということが指摘される。さらにこの文脈で二種類の「〈一緒 *Zusammen*〉」(X, 78) が区別される。すなわち同じ位相において生じた諸感覚の「一緒」と、同じ瞬間において意識されている諸々の意識位相（ここでの記述では原印象的位相と把持的連続体の諸位相）の〈一緒〉である。なお、「流れる〈先 - いちどき〉と、諸々の流れの印象的な〈いちどき〉とを区別することができる」(ebd.) とあることから、前者の〈一緒〉は「いちどき」、後者は「先 - いちどき」と呼ばれ⁸¹、また前者は「同時性」の基礎であり、後者は「時間的継起」の基礎とされている (vgl. Ebd.)⁸²。し

⁸⁰ ここでの「同時」とは、同じ位相において生じている、という程度の意味合いであり、客観的時間・宇宙的時間は前提されていない。

⁸¹ ただし、フッサールは他の箇所では諸々の意識位相同士の関係、つまりここで「先 - いちどき」と呼ばれているものを「いちどき」と呼んでいる。第一部第一章第二節 24 頁を参照せよ。

⁸² 両者を基礎として客観的時間における「同時性」、「時間的継起」が構成されるため、いずれも客観的時間における同時性とは区別される。ただし、同時性の基礎たる「いちどき」は、場合によっては客観的時間における同時性と事象的に重なることもあるだろう。例えば、音楽を聞いている時に台所でガシャンという音がし、台所に駆け付けたところ、吸盤式フックにつられていたおたまが落ちているのを発見した、という例を考えよう。台所の様子から件の音はおたまが落ちた時の音だということが推論され、知覚されていない「おたまの落下の光景」が件の音、およびその時に聞いていた音楽の一音と同じ客観的時間位置に、後から、措定されることになる。これは客観的時間における同時性だと考えられる。しかしガシャンという音とその時に聞いていた音楽の一音は、知覚において、体験流の同じ位相に位置づけられたものとして根源的に構成されている。これは「いちどき」だと考えられる。したがって、この例においてガシャンという音とその時に聞いていた音楽の一音は、客観的時間において同時的だとも、根源的に「いちどき」だとも解釈され得る。

かし、「同時性と時間的継起は相関的かつ不可分に構成されなければならない」(ebd.)ともあるように、両者は区別されつつも一体となって働く。何かと何か相前後しているということ、時間的継起のうちにあるということは非同時だということであり、反対に、何かと何か同時だということは、相前後する関係にないという意味で時間的継起のうちには無いということであり、このように考えても両者が相関的かつ相補的だということは妥当であろう。これらのうちの〈先-いちどき〉に関しては「この〈先-いちどき〉がどのようなものを、我々は以前の分析から知る」(X, 79)と述べられ、〈先-いちどき〉は原印象と把持的連続体との関係であるとされている。すなわち、把持的連続体の各位相は「それ以前の今の把持的意識(以前の今の「最初の記憶」)となっている」(ebd.)、つまり志向的連続性を成しており、そしてこの把持的連続体は今の位相、原印象の位相に結びついているとされている。これは本研究第一部第二章第一節で『時間意識講義』§31から読み取った内容と同一と見て良いだろう。かくして§38では、たとえ複数の〈いちどき〉的な流れが見出されたとしても、これらは同一の〈先-いちどき〉という時間秩序を共有するがゆえに、一つの流れへと統一される様子が記述されている。最後に、§39では「究極的な構成する意識流の統一性」が問題となる。フッサールは節の冒頭で「究極的な構成する意識流の統一について知るということは、いかにして可能であるか」(X, 80)という問いを立て、さらに次のように述べている。

一つの完結した(一つの持続的な出来事過程、もしくは客観に相応する)流れが経過し去った状態にある場合、それでも私は眼差しをその流れに向け戻すことができ、そしてそのように現れているように、記憶においてそれ〔=流れ〕は一つの統一性を構成している。したがって意識流〔それ自体〕も、明らかに、意識において一つの統一性として自らを構成している。それ〔=意識流〕において、例えば、音の持続の統一性が自らを構成する場合、それ〔=意識流〕自体がしかし再び〈音-持続-意識の統一性〉として自らを構成するのである。そしてこの時、我々はさらに次のようにも言わなければならないのだろうか。すなわち、この統一性〔=意識流の統一性〕は〔音の持続の統一性と〕全く類比的な仕方では自らを構成し、そして、この統一性はやはりまた〔音の持続の統一性と〕全く同様に、一つの構成された時間系列であり、それゆえやはり〔客観的〕時間的な〈今〉、〈先ほど〉、〈後ほど〉が語られねばならない、と。

(ebd.)

この引用冒頭においては、意識流それ自体がその統一性を有しており、しかも「私は眼差しをその流れに向け戻すことができる」と述べられているように、広義の対象性としての統一性を有していることが確認される。ただ、意識流は「絶対的な時間構成する意識流」(X, 73)であるため、これ自体の統一性はメロディなどのような一般的な対象の統一性の構成と同様には論じられ得ない。何故なら、仮に意識流の統一性も一般的対象の統一性と同様にそれとは別の構成する意識によってもたらされている場合、そこに登場する構成する意識の統一性を問う場

合にはさらにそれを構成する意識が必要とされ、これが無限に続くからである（引用では疑問文で終わっているが、これは反語的表現と考えられる）。したがって、意識流の統一は構成される客観の統一とは異なる仕方で成り立っていると考えられる。

この意識流の統一を説明するために、フッサールは二重の把持について論じている。これまでも確認したように、把持においては与件についての志向と自己意識的志向の二重の志向性が見出され⁸³、そして、把持的連続体は後者の自己意識的把持によって形成されるのであり、それゆえ把持的諸位相の連続は自己意識的把持によって貫かれ、連続体として統一されている⁸⁴。また、§37の冒頭にもあったように、この箇所想定されている意識流とは原印象的位相も含めた把持的連続体のことなので、結局のところ、意識流は自己意識的把持によって貫かれ、統一されていることになる。かくしてフッサールは次のように述べる。

したがって、我々の思うところでは、把持的な諸変転の恒常性のおかげで、また、その把持的諸変転が、恒常的に〈恒常的に先行している諸把持〉の把持であるという事態のゆえに、意識の流れにおいては、流れそれ自体の統一が一つの一次元的な疑似 - 時間的秩序として自らを構成してくる。

(X, 82)

知覚経験においては与件に対する把持と自己意識的な把持が二重に重なって働いている。前者の働きが対象の統一を構成するのといちどきに、後者が対象を構成する意識それ自体を統一している。つまり「一つだけの意識流、唯一の意識流においてこそ、音 [= 知覚対象] の内在的な時間的統一性が構成され、しかもまた、いちどきに、意識流それ自体の統一性が自らを構成する」(X, 80) のであり「意識流がおのれ自身の統一性を構成する」(ebd.) のだ。以上が §§34-39 の議論の概要である。なお §40 以降では、体験流によって構成される、体験流よりも高次の構成物である「内在的「諸内容」の層」(X, 83) が問題になる。

以上の確認から分かるのは、§§34-39 においては確かに意識流 (= 体験流) が論じられているが、ここでは特にその統一が論じられており、そしてこの統一を論じるにあたっては自己意識的な把持が重要な役割を果たしている、ということである。

⁸³ §39 において、前者は「内在的客観の構成に資する、すなわち音の構成に資する志向性、つまり、我々が（たった今感覚された）音 [= 音与件] の第一次記憶、あるいはより明示的には、まさに音の把持と呼ぶ志向性」(X, 80) と表現され、後者は「流れのうちにあるこの第一次記憶 [= 音与件の把持] の統一性にとって構成的な志向性」(ebd.)、「流れ去った〈音 - 把持 [それ自体]〉の把持」(X, 81) と表現されている。

⁸⁴ §39 においてこの自己意識的把持は「縦の志向性 *Längsintentionalität*」(ebd.) とも呼ばれている。この「縦の志向性」が「流れの進行の中で自分自身との恒常不断の合致統一にある志向性」(ebd.) と表現されていること、また、「縦の志向性」と対を成す「横の志向性 *Querintentionalität*」が、音に注意を向ける場合に問題になっていること (vgl. X, 82) 等から、縦の志向性 = 自己意識的把持として解釈した。

2.2.3. 初期時間論における体験流と予持②（体験流の二つの統一）

体験流の統一を論じているのは§38と§39であるが、一口に「統一」とは言っても、それぞれの意味するところは異なっている。まず、§38において論じられているのは複数の流れが唯一の体験流へと統一されるという意味での統一であり、単純に言えば合流的統一化である。他方、§39において問われているのは、「究極的な構成する意識流の統一について知るといふことは、いかにして可能であるか」(X, 80) という問いにも表れているように、体験流がいかにして体験流それ自体に対して統一的な流れとして現れてくるかということ、つまり、体験流それ自体の自己統一化が問題となっているのである。

このようにそれぞれの節では異なる「統一」が問題となっている。そしてそれぞれの文脈において自己意識的把持の志向性、およびそれによって可能になる把持的志向性の重層化の変転が重要な役割を果たしているのだが、想定される「統一」が異なる以上、自己意識的把持が担っている役割自体も異なっている。まず、§38で論じられているのは複数の流れの合流的統一化であるが、これは各々の流れが〈先-いちどき〉という同一の形式を共有していることにより成立する。すなわち、全ての流れは同一の秩序に従うものとして結局は同一の経過現象と見なされるのであり、それゆえここでの〈先-いちどき〉は複数の流れを同一のものたらしめる共通の性質として機能している。他方、§39で論じられているのは体験流それ自体の自己統一化であり、ここでは二つの条件が満たされねばならない。すなわち、(1) 体験流の諸位相が統一化されていなければならない、別言すると諸位相間に分ちがたい関係性がもたらされていなければならない、また(2) この統一性が体験流自身によって生み出されねばならない。この二つの条件を満たすのが把持の自己意識的志向である。自己意識的把持はかつての把持を捉えるため、志向された把持の中にはさらに以前の把持が含まれており、以下これが続くことによって把持的連続体が成立する（これは第一部第二章第一節で確認した）。この成り立ちからも分かるように、把持的連続体における諸位相は単に自らの前後の位相とのみ関係を結んでいるのではなく、把持の志向的階層構造によって連続体における全ての位相と関係を結んでいる。このように連続的志向性は把持的連続体全体を貫いており、把持的諸位相は互いに強固に関係づけられた仕方で統一されている。そして、この統一は自己意識的志向により、まさに意識流それ自体によりもたらされている。ゆえに、把持の自己意識的志向は(1)(2)の条件を満たし、体験流の自己統一化を可能にする。

さて、以上で確認した体験流の二種類の統一においては、確かに把持の自己意識的志向が重要な役割を果たしていた。順に確認していくと、まず§38では、合流的統一に必要な共通の形式として自己意識的把持とそれがもたらす〈先-いちどき〉が記述されていた。この議論をよく見ると、ここでの統一化において重要なのは〈先-いちどき〉の全ての流れに対する一般性であって、〈先-いちどき〉、あるいはより一般的な言い方をすれば体験流の時間的秩序が如何にして成立しているかではない。例えば、議論の途中では同時並行的な原感覚、「諸々の原感覚の〈一緒〉の全体」が「諸々の〔時間的〕意識様態の恒常的な一つの連続体へ、経過完了性の諸様態の恒常的な連続体へ変転するという法則、そして、この同一の恒常

性において原感覚の常に新しい〈一緒〉が原始的に生じ、恒常的に、またもや経過完了性へ移行していくという法則」(X, 77)に従うとされている。この「法則」は本研究第一部第三章で問題にした体験流の時間的秩序と等しいものと考えられるが、§38においてこの法則の成り立ちは考察されていない。また、〈先-いちどき〉について「この〈先-いちどき〉がどういうものかを、我々は以前の分析から知る」(X, 79)という記述も見られるが、これも体験流の時間的秩序の成り立ちを問うては投げやりな言い方ではないだろうか。このように、§38においては体験流の時間的秩序が如何にして成り立ったかを深く追究する記述は無く、ただその普遍性のみが問題になっている。また、§39の議論においては体験流の自己統一化、すなわち、体験流が如何にして自らの統一性を自ら構成するかが考察されており、そして、自らの統一性を自らで構成するというこのあり方に把持の自己意識的志向が深く関与していた。この議論では把持における再帰的な側面、つまり、自らで自らの統一を構成するということが問題になっていたのであり、統一された体験流がいかにして流れていくか、つまり体験流の時間的秩序はどのようなもので、それが如何にして成り立っているかはさほど問題になっていないと考えられる。例えば§39の第二段落においては把持的志向の重層化についての記述と解釈できる記述が見られるが(vgl. X, 81)、これも§38の記述と同様、あまり深くは追究されない。何より、この直後の第三段落の冒頭では「したがって Demnach [...] 把持的な諸変転の恒常性のおかげで [...] 意識の流れにおいては、流れそれ自体の統一が [...] 自らを構成してくる」(X, 82)と述べられており、結局把持的志向の重層化は「流れそれ自体の統一」に資するものとして扱われている。このことから、§39の記述においては、体験流の時間的秩序が如何にして成立しているかよりも、体験流の統一が問題になっていたのだということが分かる。

2.2.4. 初期時間論における体験流と予持③(予持の不在)

ところで、上で確認した§38にも§39にも把持のみが登場し、予持は登場していなかった。最後にこの不在について考えておきたい。

まず上記の考察から、§38, 39においては体験流の統一が問題になっているのであって、(中期『ベルナウ草稿』では問題になっていた)体験流の時間的秩序の成り立ちについては問題になっていない、ということを目指したい。ゆえに、両者が扱う問題は互いに異なっているのだから、中期の議論で必要とされていた予持が初期の議論でも必ず必要ということにはならない。これが当該箇所において予持が不在である理由のひとつ目である。

さらに、§38, 39の考察を支配していたと考えられる暗黙的な問題意識も、予持の不在に関係している。例えば、§39の冒頭では「究極的な構成する意識流の統一性について知るといことは如何にして可能か」(X, 80、傍点は引用者)という問いが立てられており、§39では体験流の自己統一化が問題になっていることが読み取れる。しかしさらに踏み込んで、なぜこの自己統一化が問題になるのかと問えば、この引用の「意識流の統一性について知る」

という表現からも覗えるように、ここでフッサールが、意識流をひとまとまりの対象として考察の俎上に載せることは可能か、ということ暗に問題にしているからだと考えられる。体験流が観察、正確には反省され記述されるためには、その前提として、体験流が意識それ自身に対して対象性 *Gegenständlichkeit* として与えられていなければならない⁸⁵。現象学は意識に与えられたものを記述する哲学であるから、これに依拠して体験流を問題にする以上、体験流が意識に対して対象として与えられるか否かについて問うておくことは当然必要だと考えられる。その意味においてこの暗黙的問題意識は妥当と言えるだろう。この暗黙的な問題意識は「〈先 - いちどき〉の内に含まれた〈過ぎ去った意識経過の把持的意識〉の全体を、私は一望の下に見出して捉えることができるのか」(X, 82、傍点は引用者)という問いや、「それ [= 体験流] において、必然的に、その流れの自己現出が存立しているのとなければならず、そしてまた、そのことからして、流れそれ自体が、必然的に、流れることにおいて把捉可能でなければならない」(X, 83、傍点は引用者)という表現から見て取れる。また、§38でも「我々はいまや反省によって唯一の流れを見出しているが、この唯一の流れは多数の流れに区分される。しかし、それでもこの多数性は統一性を有しており、この統一性が、一つだけの流れについて語ることを許し、要求するのである」(X, 76、傍点は引用者)や「我々は以前の体験の変様である体験を、総じて、ただ持っているというだけではない。我々はまなざしをその体験のなかに振り向けて持つことで、その変様された体験のなかで、以前は変様されていなかった体験をいわば「見る」ことができる」(X, 79、傍点は引用者)という表現が見られる。§39ほど露骨ではないにせよ、これらの表現からも同じ問題意識を見て取れる。つまり『時間意識講義』では、反省するまなざしに対して体験がどのようにして反省の対象として一つにまとまるか、如何にして体験流は反省の対象として統一されるかということが問題になっていたのだと解釈できる。

ところで、§39では体験流の統一について「記憶 *Erinnerung* の中でそれ [= 流れ] は一つの統一性を構成している」(X, 80)と記述されており、また§39に付された補遺 VIIIでは体験流の統一性が「流れるものに向かうまなざしを伴った遡行的想起」(X, 116)によって確認されるとある。また、§38においても「諸々の原感覚の - 〈一緒〉としての〈一緒〉であるところのものは、経過完了性の様態においても〈一緒〉であることをやめない」(X, 77)という記述が見られ、過ぎ去った体験流の統一性が問題になっていることが分かる。これらの記述を見るに、少なくとも当時のフッサールにとって、体験流を反省するというのは実際に経過した体験流を反省するということであつたと考えられる。§39および§40に付された

⁸⁵ §36の冒頭には、「かくして、時間構成する諸現象が時間のなかで構成される諸現象とは原理的に異なる諸対象性であるということは、明証的である」(X, 74-75)という記述が見られる。この直前の§35は、その表題の通り、構成される諸対象と構成する流れとの区別を論じており、その文脈を踏まえれば上記の一文の強調点は「対象性」という言葉にではなく「異なる」という言葉に置かれるべきであることは明らかであろう。しかしここでフッサールは、さしたる議論も無く、体験流を素朴に対象性として認めているように見える。本研究の目下の議論を踏まえると、この記述はやや先走ったもののようと思われる。

『時間意識講義』の補遺 IX⁸⁶においても反省について同様の考え方が示されている。

経過し去った位相を把握 Griff において所持することにより、私は現在のな〔位相〕を生き抜くのであり、それ〔=過ぎ去った位相〕を——把持のおかげで——「付け加えて」取り込むのであり、(予持において) やって来ているものへと向けられるのである。／しかし、それ〔=過ぎ去った位相〕を把握において所持しているがゆえに、私はそれ〔=過ぎ去った位相〕へと新たな作用においてまなざしを向けることができる。この作用は、——経過し去った体験することが新たな原与件において産出され続けている、つまり、印象であるか、あるいは既に終結されて全体として「過去へと退いている」かに応じて——反省(内的知覚)と呼ばれるか、もしくは想起と呼ばれる。

(X, 118)

引用では把持の働きが「把握において所持する」と表現され、この把持の働きにおいて捉えられているものに対しては「反省」か「想起」を行うことができるとされており(「反省」を行うか「想起」を行うかは、「まなざし」を向けられる体験が今なお継続中か、完全に過ぎ去っているかに依るとされている)、体験を反省することができるのは、その体験が把持において保持されているからだとされているのである。つまり、ここでは把持が反省を可能にしているという構図が成り立っているのであり⁸⁷、それゆえ『時間意識講義』§38、§39 やその同時期(1907-1909年頃)に反省・記述の対象としての体験流の統一が問題になった際、把持が積極的に記述されたのだと考えられる。過去、つまり与えられたものに対する志向である把持に対し、予持は未来、つまり未だ与えられていないものに対する志向である。それゆえ予持には経過しつつある体験流を留め、これを反省にもたらず役割は期待できず、反省の対象たる体験流の統一が問われていた§38、§39 では記述されなかったのだと考えられる。

ただし、『時間意識講義』の§38、§39 に予持が登場しない理由としては、予持と把持との間には構造的な類似性が見られるから、というものも考えられる。すなわち、予持と把持とは構造的に類似であるため、把持において見出されたもの(自己意識的志向、それによって可能になる志向的連続体としての〈先-いちどき〉、〈先-いちどき〉の一般性)は予持においても見出され、それゆえ予持についての記述は省略された、という可能性も考えられる。つまり、記述が無いだけで、フッサールは体験流の統一を考察する際に予持をも考慮に入れ

⁸⁶ ただし、補遺 IX は 1917 年夏以降に成立したと考えられるため (vgl. X, 99)、補遺 IX の内容を直ちに §39 と同時期のフッサールの考えだとはできない。ただ、補遺 IX には §39 と類似した内容が見られ、また時期のズレはあるにせよ、やはり補遺 IX は §39 に付された補遺である。以上を踏まえると、補遺 IX は 1917 年夏以降に成立した 1907-1909 年の思索の再現であると推定される。「再現」なので当時の思索そのものではないにせよ、それほど著しく異なるものではないと考えた。

⁸⁷ 上でも扱った『時間意識講義』の補遺 IX においては、より端的な「したがって、意識が対象にされ得るということを、我々は把持に負っている」(X, 119) という記述が見られる。

ており、(中心的な役割を果たすわけでは無いかもしれないが) 予持もやはり体験流の統一に関与している、という可能性が考えられるのである。

予持と把持の構造的類似性に関しては、例えば『イデー I』(1913年) §77 では予持が把持の「正確な対応物」(III/1, 163) とされている。また §81 においては「把持の連続体」と「予持の連続体」が対応するとされている。本研究第一部第二章第四節でも述べたように、§81 では(簡単ではあるが) 自己意識的把持が記述されており、したがって「把持の連続体」も「予持の連続体」も、自己意識的志向によって可能になる志向的連続体を指すと考えられ、自己意識的志向についても構造的類似性が成り立っていると記述されていることが分かる。続く §82 では体験流の無限性が論じられており、この体験流には予持的連続体から成る未来地平も含まれるとされている。したがって、『イデー I』の時期においては予持も体験流を構成するものとして考慮に入れられていると考えられる。さらに、『時間意識講義』 §38, 39 より少し早く成立した §26 (1907-1909年⁸⁸) では、予持が「予期直観 Erwartungsanschauung」、把持が「想起直観 Erinnerungsanschauung」と表現されつつ、「予期直観は逆立ちした想起直観」(X, 55-56) と表現されている。§38、§39 にはこのような予持と把持との構造的類似性を示す記述は無いが、上記の §26 における記述は同時期のものである。ゆえに §38, 39 においても予持と把持の構造的類似性が想定され、あくまで暗黙的にはあるが、予持にも自己意識的志向などの性質が見出され、予持も体験流の統一に関与していると考えられていたという可能性が考えられる。実際、『ベルナウ草稿』において予持と把持は構造的には類似的だとされていた(これは本研究第一部第二章で確認した)。また、体験流の反省の対象としての統一という条件を度外視するのであれば、つまり体験流を統一的に反省できるか否かではなく体験が散逸せずまとまっている理由⁸⁹を問題にするのであれば、把持だけではなく予持も体験流の統一に関与するとしても、不自然ではないように考えられる。

2. 2. 5. 1907 年以降における暗黙的な自己意識的予持

以上を踏まえると、早ければ 1911 年頃(『時間意識講義』 §38, 39)、遅くとも 1913 年頃(『イデー I』)には、暗黙的には言え、自己意識的な予持が体験流の統一についての議論に関与していたということになる。さて、本研究では「初期時間論」における予持は、対象の将来における与件内容に対する予持として特徴づけられ、体験流の構成には参与しないと結論付けたのであったが、しかし、ここまでの考察により、初期(1890年代から 1910年代前半)の一部の時期では体験流の構成に、暗黙的には言え、参与する予持が登場している。またこの予持は、把持と同様、自己意識的志向を有している、つまり予持という意識

⁸⁸ Vgl. X, 422.

⁸⁹ ただし、予持と把持のみに依拠して体験流が統一されるわけではない。諸体験は全て「私の」体験として特徴づけられ、そのようなものとして統一されると考えられる。したがってこの統一には諸体験の極としての純粹自我が関与しているが、これに関しては第三部で触れる。

の働きそれ自体を予持するとされており、これは本研究第二部第一章で特徴づけたものとは異なっている、それどころか第一部で特徴づけた中期の予持に似ているとも言える。各時期の予持概念の特徴づけを志向する本研究にとって、これは見過ごせない問題であり、このもつれた事情は整理されなければならない。

まずテキストの成立時期を確認しておきたい。前章では全集 X 巻 Nr. 12, 45、『時間意識講義』§14, 16 の記述を確認した。そして、それらのテキストで予持について明示的に記述されている内容から、これらの予持を、対象の将来における与件内容を志向する予持として特徴づけたのであった。これらのテキストの成立時期は、Nr. 12 が 1893-1901 年、§14, 16 が 1904/1905 年、Nr. 45 が 1907 年となっている。さらに、本章では『時間意識講義』の§26、§§34-39 や『イデーニ I』における体験流についての記述を確認し、体験流の統一の構成に参与する予持が暗黙的に想定されている可能性に行き当たったのであった。これらのテキストの成立時期は、§26, 34 が 1907-1909 年、§§35-39 が 1911 年以降、そして『イデーニ I』が 1913 年となっている。これらの成立時期から見ると、1904/1905 年頃までは自己意識的予持ではなく与件志向的な予持が記述されており、他方で、1911 年以降、遅くとも 1913 年には自己意識的予持を（少なくとも暗黙的には）考慮に入れていたのだと考えられる。ただ、1907 年頃に関しては、§26 では予持と把持（正確には予期直観と想起直観だが）の類似性が指摘されている一方で、Nr. 45 では与件志向的な予持が記述され、自己意識的志向に関しては記述されていなかった。1907 年には既に把持の自己意識的志向が指摘されており、また Nr. 45 では、想起などの準現在化作用に対する意識作用が問題となっており、厳密に言えば予持や把持におけるそれとは異なるとは言え、ここでは自己意識的な働きが扱われているとも解釈できる。これらを踏まえると、仮に 1907 年当時のフッサールが自己意識的予持に気づいていたのだとすれば、Nr. 45 で予持を記述した際にそれについて言及するのが自然であったと推測される。しかし実際には Nr. 45 に自己意識的予持についての記述は無く、このことを踏まえると、1907 年では未だ自己意識的予持に気づいてはいなかったと考えるのが妥当だと考えられる。このように、重視するテキストやそのテキストの解釈の仕方によって、1907 年頃にフッサールが自己意識的予持を見出していたかどうかについての推定はズレてしまうため、自己意識的予持が発見された精確な時期の特定は困難だと言わざるを得ない。ただ、初期のフッサールが予持に対してそれほど関心を向けていなかったことも考慮するならば、自己意識的予持の発見は当時の彼にとってそれほど重要ではなかったと考えられる。おそらく、1907 年頃のフッサールは自己意識的予持に気づきつつも明示的には与件志向的予持を記述していたのではないだろうか。そう考えると、1907 年頃は与件内容志向的予持の明示的記述から自己意識的予持の暗黙的記述への移行期、いわば汽水域だと考えられるのであり、自己意識的予持への精確な移行時期を特定するのは不可能であり、また特定することにそれほど意味も無いのかもしれない。いずれにせよフッサールは、早ければ 1907 年頃から、遅くとも 1911 年以降には自己意識的予持を考慮に入れていたのだと考えられる。

次に、初期における自己意識的予持と中期における予持を比較しておきたい。改めて確認

しておく、1907年以降に把持との類似性に基づいて暗黙的に記述されていた自己意識的予持は予持それ自身を志向し、それによって予持的連続体を形成するのであった。自分自身を志向する予持は中期『ベルナウ草稿』でも見られ、その予持も志向的連続体を形成するとされていた。ただし中期の予持は、将来の予持のみならず将来の把持をも予持するとされており、この絡み合いによって体験流の時間的秩序が成立する（本研究第一部第二章・第三章）。1907年以降の予持は自己意識的予持であったとは言え、これは把持と絡み合うものとしては記述されていなかったと考えられる。現に、先にも確認したように、初期の体験流についての考察では体験流の統一が問題になっており、絡み合いによって可能になる時間的秩序は問題になっていなかった。また、初期の体験流についての記述では把持のみが記述されるか（『時間意識講義』§38, 39 など）、把持が記述された後で予持も同様である旨が付け加えられるか（『イデーニ I』§81 など）のいずれかであった。仮に、初期でも上記の絡み合いが記述されていたのなら、少なくとも、予持・把持の一方しか記述されないのは奇妙であろう。また、絡み合いが記述されていたのならば、両者の記述は互いに食い込みあったものになるはずであり、一方のみを記述した後にそれと独立にもう一方が登場するという記述にはならないはずである。まとめると、奇妙ではあるが、初期時間論の1907年以降では自己意識的予持が記述されていたとは考えられるが、これは把持と絡み合うものではなかった、別言すると把持から独立した自己意識的予持だったのだと考えられる。したがって、これは中期『ベルナウ草稿』において記述されていた予持と似ているとは言え、やはり区別されるべきものであろう。

以上より、初期から中期にかけての予持の変遷が明らかになった。すなわち、1907年頃までに記述されていた予持は対象の将来における与件内容を志向するものであり、これは体験流の統一にも時間的秩序にも関与しない予持であったと考えられる。しかし、1907年以降、遅くとも1913年の『イデーニ I』においては、暗黙的にはあるが、把持と絡み合わない自己意識的予持が記述されており、これは体験流の統一の構成に関与していると考えられる。これは体験流の時間的秩序の構成には関与できないと考えられ、『ベルナウ草稿』（1917年）で把持と絡み合う予持が記述されるまで、体験流の時間的秩序は記述されていなかったと考えられる。ただ、そうは言っても1907年以降に記述されていた予持が『ベルナウ草稿』における予持と近い。ゆえに1907年以降の暗黙的な予持は、『ベルナウ草稿』の予持から区別されるとは言え、『ベルナウ草稿』の記述を準備したのだと考えられる。

2.2.6. 『受動的総合の分析』における予持概念

以上の考察で、初期時間論における予持は、対象の将来における与件内容を志向するものから、把持と絡み合わないとはいえ自己意識的な志向へと変遷したことが分かった。そして1907年以降に暗黙的に記述されていた予持は、1917/1918年の『ベルナウ草稿』で記述され

るものと厳密には同じではないとは言え、それに繋がっていくものなのであった。

では、将来における対象の与件内容を志向する予持、対象構成に関与する予持は、1907年以降では放棄されてしまったのだろうか。つまり、この予持についての記述は間違いだったということになるのだろうか。本研究はこの問いに対して否と答える。フッサールは1920/1921年冬学期に『論理学』、1923年夏学期に『現象学特殊問題』、1925/1926年冬学期に『論理学の根本問題』というタイトルで講義を行っている (vgl. XI, xiii)。これらの講義においては狭義の論理学の基礎としての知覚や直観の経験が扱われており (vgl. XI, xiii-xv)、この文脈において意識の非能動的な働き (連合、触発、覚起など)、つまり受動性の領域に関する問題が扱われている。これらの考察は全集 XI 巻『受動的総合の分析』に収められている。ここに収められたテキストのいくつかに予持が登場しているのだが、そこで記述されている予持には初期の1907年以前に記述されていたものと同じ、少なくとも類似した特徴がみられる。つまり1907年以前に記述されていた予持、すなわち対象の将来における与件内容を志向する予持は、把持と絡み合いそれにより体験流の時間的秩序の構成に関与する予持が『ベルナウ草稿』で記述された後にも維持されていたのだと考えられる。

『受動的総合の分析』において1907年以前の予持が記述されていることは、例えば§19における記述からも明らかであろう。

諸々の予持の種類の [もつ] 諸表象を観察すると [分かるのだが]、それら [=表象] はもとより、その中でそれら [=表象] が原法的に生じてくる発生的総合にしたがい、对象的に方向付けられた表象なのである。

(XI, 79)

まず§19においては志向と充実の関係が改めて問い直されている。この文脈において「空虚表象」が問題となり、その関連で予持について言及がなされている。したがってそれを踏まえると、引用の「諸々の予持の種類の諸表象」とは、予持一般がその志向において所持することになる表象のことだと考えられ、この表象が「空虚表象」の一例として取り上げられているのだと考えられる。そして予持が持つこの「表象」が、「对象的に方向付けられた表象」、対象に向けられた表象だとされているのである。

続く§20においても類似的に解釈できる表現が見られる。§20も§19における志向と充実の問題が扱われている。節の冒頭では「志向はその対象に向けられており、それ [=対象] への単なる空虚な向思念 *Hinmeinen* であろうとはせず、それ [=対象] 自体へ [向かおうとする]」(XI, 83) と述べられているように、ここでも対象に向かう志向とその充実が扱われているようだ。この文脈において予持が登場している。

把持とは異なり、予持はその根源に従って本質的に思念志向である。より正確に言えば、そのことによって予持は、先 - 志向 *intentio*、すなわち未来へと向けられた志向として、

前に向けられた思念や志望 *Strebung* として解釈されねばならない[……。我々は予持を、予料的で先把握的 *vorgreifend* な思念することとも呼ぶ。定立性、しかも変様されていない定立性において、我々はあれやこれやの表象内容についてのある種の信念を持つが、その信念というのは現在において印象的に与えられたものを現在において信念するというものではなく、信念において、将来的な知覚それ自体において初めて示されるものについての先思念 *Vormeinung* としての *als* 先把握 *Vorgriff* を遂行する、そのような信念なのである。

(XI, 86)

まず、引用の冒頭では予持が「未来へと向けられた志向」だと述べられている。この特徴は初期と中期の両方の予持に見られた特徴である（本研究第二部第一章第一節を参照せよ）。次いで、引用の後半では予持が「先把握的な思念すること」とも呼ばれている。この先把握という働きは、引用末尾では「先思念」と同格視されている。そして、この先思念は「将来的な知覚それ自体において初めて示されるものについての」ものであるとされている。つまり整理すると、将来の知覚において与えられるものを思念するという働きと先把握という働きが同格のものとして考えられており、そしてこの先把握という働きは予持を特徴づけるものとして考えられているのである。そしてそもそも上記の記述は対象構成の場面を前提として考えられており、それゆえ上記の「将来的な知覚それ自体において初めて示されるもの」というのは、対象の将来における知覚が与える与件内容だと解釈できる。したがって、ここで語られている予持は将来における対象の与件内容を志向している予持だと考えられるのであり、これは1907年以前に記述された予持と同じ性格を有していると言える。

このように、『受動的綜合の分析』では将来における対象の与件内容を志向する予持が記述されているのだと考えられる。この与件志向が如何にして生じるか、予持は如何にして規定された予描になるかについて、ここでは事細かに追究しない。しかし後続の議論との関係から、ここで把持によって予持が規定されるという記述を確認しておきたい。例えば、§40では「何らかの a、例えば一つの音」の経過が知覚されるという場面について、次のような記述がなされている。

既に基本的なものにおいて、想起が——したがって最も広い意味において言えば、まず最も根源的な把持が予持に対して先行している。したがって、新しい印象的な諸位相の絶えざる融解 *Einschmelzung* において、この根源的な生成することにおいて、何かしらの a、例えば一つの音がある本質条件に対応する連続的な繋がり経過である場合、直ちに、ある未来地平が、つまり予期地平が共に現に存在するのである。先々の生成 *Fortwerden* は、それまでの生成との類比において、同じ連続的な経過様式にしたがって予期される。[……] したがってある必然的な動機付けが問題となる。起こったこととしての把持的に意識されて存在していることに適う仕方で、同じ様式の新しいものが「予

期されうる」。

(XI, 186)

引用では、ある時間的对象が知覚される際の「予期地平」、つまり予持的地平が記述されている。この記述によれば、対象の将来的なありよう（「先々の生成」）は「それまでの生成との類比において、同じ連続的な経過様式にしたがって予期される」。つまり対象を途中まで知覚しているとき、この対象のそれ以降のありようは把持において保持されているそれまでのあり方に応じて先取りされるのである。ここでは把持された内容が「必然的な動機づけ」をもたらすのであり、こう言って良ければ、過去のありようが未来へと投影されているのである⁹⁰。

『受動的綜合の分析』において1907年以前の予持と同じ性格の予持が記述されていると考えられる根拠がもう一つある。その根拠というのは、このテキストでは予持の「幻滅 *Enttäuschung*」が考慮されているという点である。

前章第一節でも論じたように、将来における対象の与件内容が予持されている場合、この予持は幻滅を被り得ると考えられる。例えば、何らかの曲の次のフレーズを先取りすることが上記の予持の具体例として考えられるが、知らない曲もしくはうろ覚えの曲を聴く場合、あるいは良く知った曲でもアレンジやミス等が発生し得る生演奏を聴いている場合などでは、先取りしていたフレーズが現実には演奏されないということ、つまり上記の予持の幻滅ということが生じ得る。『受動的綜合の分析』においてはこのような予持の幻滅が考慮されており、それは例えば以下のような記述からうかがえる。

知覚の対象の根源的構成は、諸志向において（外的知覚の場合は統覚的統握 *apperzeptive Auffassung* において）遂行される。それら [= 諸志向] は、本質にしたがって、予持的な予期の信念の幻滅を通じていついかなるときも様相化 *Modifikation* を経験しており、この様相化は、相反する仕方でも方向づけられた諸々の志向がその際に本質的に重なり合っていくのと一体的に、発動している。

(XI, 32)

引用は§7からのものである。§5からは「様相 *Modus*」が問題を扱われており、その文脈で引用でも「様相化」が問題になっている。フッサールによれば、「新たな知の獲得」たる知覚は「顕在的、あるいは潜在的な予期」を伴って進行するのであり、この予期は斉一的 *einstimmig* に充実されたり、完全にあるいは部分的に幻滅したりする (vgl. XI, 25-26)。予期

⁹⁰ ここで記述されていた把持による予持の動機づけは、本研究第一部に登場した把持と予持の絡み合いと同じものではないと考えられる。予持と把持の絡み合いは〈未来における過去〉や、〈過去における未来〉をもたらすが、ここでは単に将来の与件内容の予期が想起によって補助されているに過ぎない。つまり、体験流の時間的秩序に関わるような事柄ではないと考えられる。

のこのような充実・幻滅により、予期されていた対象は、存在しない（「否定 Negation」）、や疑わしい（「疑念 Zweifel」）といった「様相」を受け取る。§5以降ではこの「様相化」が扱われており、引用もその文脈における記述である。ここでは「知覚の対象の根源的構成」が扱われ、そこにおいて「予持的な予期の信念の幻滅」が登場する。外的知覚におけるこの「構成」が「統覚的統握」において生じるとされていることから、ここでの「構成」とは、何らかの意味づけられた対象を構成する働きを指すと考えられる。そのような構成が複数の志向性の中で生じるとされているが、これらの志向性は予持的な予期の幻滅によって様相化されるのだという。つまり、何らかの意味づけられた対象が知覚において構成される際、この知覚は予持⁹¹によって対象を先取りしている。この予持は幻滅をも経験し得るのであり、そしてその幻滅ないし充実は対象の様相化をもたらすのだとされている。

「予持」という表現こそ登場しないが、§4にも充実しない可能性のある予持についての言及と見られる記述がある。

ある対象が知覚にもたらされ、その知覚過程においてその対象がそれについての継続的認識のうちにもたらされるとき、我々は、経過した過程によって先行呈示され、この先行描出によって瞬間的な知覚の位相に結びついているそのつどの空虚地平と、先行描出無き空虚な可能性の地平とを区別しなければならない。その先行描出〔という作用があるということ〕は、一般的な意味の枠組みを伴う空虚な志向が現にあるということの意味している。そのような先行描出する志向の本質には、適切な仕方ですそれに属している知覚の方向が採られる際に、〔その志向を〕を充実するより詳しい規定、あるいは以下で述べるように、その反対物として、幻滅や意味の破棄や打消しが生じるはずだ、などということも属している。しかし、上記のような一定の先行描出を持たない部分的地平も存在する。つまりある規定され先行描出された可能性と並んで、対立的な可能性が存立しているが、何ものもその可能性〔の規定のために〕和す *sprechen für* ことは無く、その可能性は常に開かれたままに留まっている。例えば星空の知覚に際して、私の視界の中で流れ星などのような何かしらの光って見えるものが閃くとする。これは純粹に知覚の意味付与それ自体から言って、その意味に関して先行描出されていないが、まさにそのことによって開かれたままにされている完全に空虚な可能性なのである。

(XI, 21-22)

⁹¹ 「予持的予期 *protentional Erwartung*」を上では予持として解釈したが、これを準現在化としての予期、つまり予持とは区別されるものとして解釈する可能性も考えられる。ただし本研究は、三つの理由からこの可能性を採らなかった。第一に、*protentional* という形容詞が付されている。第二に、『ベルナウ草稿』Nr. 1でも見られたように (vgl. XXXIII, 8)、フッサールは予持を予期と呼ぶことがある。そして第三に、上記は知覚における諸志向性の働きについての記述であり、それゆえ、ここに登場する「予持的予期」は知覚の一翼を担う働きであると考えられる。以上の理由から、「予持的予期」は準現在化である予期としてではなく、現在化としての知覚の一部である予持として解釈すべきだと考えた。

引用では、対象を「継続的認識」において知覚するという場面、すなわち一定期間にわたる特定の対象についての知覚過程が想定されている。この知覚過程においては二種類の空虚地平が見られるとされており、その一方は「経過した過程によって」規定された「先行描出」を伴った空虚地平であり、もう一方はそのような「先行描出」を伴わない空虚地平である。ここでは予持という言葉こそ出てこないが、知覚の経過過程が論じられていること、つまり知覚における与件が時間的継起において・時間的秩序にしたがって生じているという場面が想定されていると考えられること、そしてそのような知覚過程という場面において「充実」（そして後から述べるように「幻滅」）が述べられていることから、ここで登場する「空虚地平」は予持的地平を指すとも解釈できる、少なくとも予持的地平にも十分適用可能な事象が記述されていると考えられる。このような二種類の「空虚地平」のうちの一方、すなわち「先行描出」を伴っている方は、その充実の際して、対象についてのより詳しい規定を受け取ったり、あるいは充実せずに「幻滅や意味の破棄や打消し」を被ったりする可能性を持つとされている。このように、ここでも予持が幻滅する可能性が論じられていると解釈できる。

以上のように『受動的総合の分析』では、対象の将来における与件内容を志向する予持と見られるものが記述されており、それに関連して、この予持が充実しない可能性が論じられており、この「幻滅や意味の破棄や打消し」についての議論との関連において「様相化」が議論されている。

ところで、『受動的総合の分析』で記述されている予持は一種類だけではない。すなわち、このテキストでは、中期『ベルナウ草稿』において記述されていた予持も記述されているのだと考えられる。このことは、例えば上記の§4 の引用からも見てとれる。引用では二種類の予持的地平と見られる空虚地平が記述されていた。それらのうち、上で扱わなかった方はそれ以前の知覚の経過に関わらず「その意味に関して先行描出されていないが、まさにそのことによって開かれたままにされている完全に空虚な可能性」を捉えるのだとされている。つまりここでフッサールは、将来の知覚の内容を予め規定しつつそれを空虚に志向するという予持とは別に、対象的な意味規定を予め何も与えないような予持を想定しているのだと考えられる。そしてこの後者の予持は、何らの規定も伴わない仕方で働くという特徴から、意味付与されていないヒュレーの領域で働く、『ベルナウ草稿』における予持と類似のものだと考えられる。未規定的な予持についての同様の記述は、上記以外にも§46 の冒頭などで見られる（「流れゆく意識は、確かに恒常的に一つの予持的地平を前方へと投げかけている。しかし、次のことは見て取られ得ない。すなわち、未来に対して真なる存在の規範が拘束的な規範として確立されていると言っても良いほどに、この先行描出が規定され力のある *zwingend* ものにならなければならないということは、見て取られ得ないのだ」(XI, 211)⁹²）。

『ベルナウ草稿』では、志向している与件内容に関して完全に未規定的な予持が記述されて

⁹² より詳しく言えば、ここでは未規定的な予持と、それが何らの規定も伴わない仕方で未来へと投げかけられているということが記述されている。

いたと考えられるが、これを論じる際にフッサールは、かつての経験などによって予持が規定される可能性を排除している (vgl. XXXIII, 12)⁹³。しかしこれは裏を返すと、『ベルナウ草稿』で記述されていた完全に未規定な予持とて、かつての出来事などによって規定され得るということである。フッサールは『ベルナウ草稿』において、与件内容に関して完全に未規定的な予持を扱い、この予持の働きにおいて予持の自己意識的な側面を見て取った。この側面は予持が規定され、例えば幻滅などの可能性を内包することで確かに見えにくくなると考えられるが(だからこそフッサールは『ベルナウ草稿』ではこれを省いたのだろう)、しかしそうは言っても消え去るものでは無いだろう。過去に基づいて将来を規定的に予持する場合、そこで予持された将来の出来事にも時間的秩序は見られるはずだ。したがって『受動的総合の分析』と『ベルナウ草稿』で記述されている予持同士は、等しくはないが、しかし地続きなのだと考えられる。

ただ、意味付与しない仕方将来の対象を志向するという特徴だけでは、『ベルナウ草稿』において記述されていた予持と同じだと断定することはできない。というのも、確かに上記は『ベルナウ草稿』の予持の特徴の一つではあるが、しかし『ベルナウ草稿』の予持の最も重要な特徴は、これが把持と絡み合い、それによって体験流の時間的秩序を構成するというものである。

上記のような特徴を持つ予持についての明確な記述は、『受動的総合の分析』においては見出されない。というのも当該のテキストにおいては、対象構成の問題、あるいは控えめに述べても、体験・経験における与件内容にまつわる問題が論じられていると考えられ、時間構成の問題は必ずしも主題的には扱われていないからである⁹⁴。例えば、§27の冒頭では、「連合 Assoziation⁹⁵」(これは『受動的総合の分析』の主要問題の一つだが)を扱う際に「我々

⁹³ 「予持は確かに相対的に規定され得るのであり、それはある規定された出来事が予期される場合である。上記は、その出来事が既に与えられたか、その出来事の前に同じ出来事が出来事として与えられたということを前提している。その時それ [= 予持] は前想起なのであり、過去のものへと向かう再想起の変様なのである。上記を分析することは格別に重要な主題であろう。[しかし] ここではそのような混乱を含まないような根源的な構成が問題になっている。したがってここで我々は次のような出来事を想定する。すなわち、前想起によって予描されること無しに、予描された時間出来事として登場する、[すなわち] ある時間構成的なプロセスによって充実されるような、そのような空虚な志向によって予描されて登場する、そのような出来事である」(XXXIII, 12) という記述がある。

⁹⁴ 例えば§29では諸対象の「原秩序」(XI, 135)や「秩序形式 *Ordnungsform*」(XI, 139)について記述があるものの (vgl. XI, 135, 139)、ここではその概要が語られるのみで、それが如何にして構成されているかについては記述されていない。また、§30では時間位置の同一性 (vgl. XI, 142-145) について言及があるが、ここでもその成り立ちは論じられていない。

⁹⁵ §26冒頭では「連合」という標題は、我々に対して、絶えず意識一般に属している、内在的発生の形式と合法則性を表示しているが、これは心理学のように、客観的、心理物理的な因果性の形式、[つまり] 人間的、および動物的な心的生において、再生や再想起が因果的に規定される、その法則的な様式なのではない。我々は現象学的還元の内枠を動くのであり、この内枠においてあらゆる客観的な現実性やあらゆる客観的な因果性は『括弧に入れられる』(XI, 117)と述べられている。また、この直後では知覚や再想起における「ノエマ的成素」(XI, 118)が問題になっており、それを踏まえると、ここで言われている「再生や再想起」というのは、具体的な内容を

は最初の出発点を探し求める必要は無い。根源的な時間意識において連続的 *kontinuierlich* に作動している綜合は、自明なこととして前提されている」(XI, 125) のだとされている。この「最初の出発点」、あるいは「根源的な時間意識において連続的に作動している綜合」は直後の箇所、意識において生成するあらゆる客観性の基礎とされており (vgl. Ebd.)、記述内容からしてこれは体験流の時間的秩序を成立させる意識の働きを指すと考えられる。また同じ節の末尾では、時間意識が「一般的な形式を確立する意識であるにすぎない」(XI, 128) とされ、この分析は「抽象的な分析」(ebd.) であり、「内容的なものを捨象している」(ebd.) とされている。そしてまさにそれゆえに「流れゆく現在や現在の統一的流れの、何かしらの仕方で内容の特質に関係するような、必然的な綜合的諸構造」(ebd.) の分析には不適切だとされている。このように§27 では連合の問題が扱われるにあたって、体験流の時間的秩序の構成の問題が区別され不問にされている。もちろん、ここで体験流の時間的秩序の議論と区別されているのはあくまで連合だが、「何らかの仕方で内容の特質に関与する」という特徴は、例えば「様相化」や「触発 *Affektion*」のような事象にも共通するものだと考えられる。したがって、『受動的綜合の分析』の他のいくつかの主題が扱われる際にも、時間分析に対する同様の区別と自明視が行われているのだと考えられる。この事情のため、『受動的綜合の分析』では、体験流の時間的秩序の成立に関与する、『ベルナウ草稿』で記述されていた予持と把持の絡み合いについての明示的な記述があまり見当たらないのだと考えられる。

ただ、明示的な記述こそ見当たらないものの、予持が時間的秩序の成立に関与すること、あるいは把持と絡み合うということについての間接的な記述であれば、いくつか指摘することができる。例えば§18 (1925/1926年の冬学期講義に由来 (vgl. XI, 446)) には、「時間流の原発生」についての論述において「我々は把持だけではなく、予持についても語らねばならなかった。知覚分析において、この点に関してそれ [= 知覚分析] は時間的所与性についての分析だったのだが、我々は、把持の役割に対して本質的に新しい予持の役割に注目し、それをいくつかの特徴において記述してきた」(XI, 73) と述べられ、時間流の発生において予持が把持の派生物としての役割ではなく、固有の重要な役割を果たすとされている⁹⁶。

以上より、将来における対象の与件内容を志向するような予持は、1907年を境にあまり記述されなくなるものの、これに極めて類似した予持が1920年代の『受動的綜合の分析』において記述されている⁹⁷。また『受動的綜合の分析』で与件志向的な予持が記述されてい

伴う再生や再想起だと考えられる。つまり、具体的内容を伴った再生や再想起がいかんして意識において動機づけられて生じるか、という問題が「連合」というテーマの下で扱われているのだと考えられる。

⁹⁶ ただ、この箇所では「予持的未来地平」(ebd.) やこれをもたらす「予持的な連続性」(XI, 74) についての言及があるのみで、予持と把持の絡み合いについての明示的な言及はない。

⁹⁷ とは言え、『受動的綜合の分析』では言及されていた予持の幻滅の可能性が、『時間意識講義』では言及されていなかったのであり、この点も踏まえれば、『受動的綜合の分析』では『時間意識講義』よりも包括的で成熟した議論が展開されていると言えるだろう。

るとは言っても、この時期に『ベルナウ草稿』で記述された予持が放棄されたわけではない。テキストが扱う問題の性格上、『ベルナウ草稿』で記述されていた予持はほとんど登場していないが、それでもテキストのところどころでこの予持とおぼしきものが見られ、それゆえこの予持は1920年代にも維持されているのだと解釈できる。

2.3. 第二部のまとめ 初期時間論の主要問題と中期時間論の主要問題

前章までの考察から、初期時間論から中期時間論にかけての予持概念の変遷と、それぞれの時期の予持概念の差異が明らかとなった。改めて確認しておこう。

まず第一章では初期時間論の中でも1890年代から1907年のテキストを確認し、これらのテキストで記述されている予持が、対象の将来における与件内容を志向するという性格を共通して持っていることを明らかにした。また第二章第一節では、与件志向的予持が体験流の構成に関与しないことを確認した。同章第二節から第四節では、『時間意識講義』における体験流についての記述を確認し、特に第四節では、『時間意識講義』§38, 39で体験流の統一が論じられる際、自己意識的把持とそれによる把持の志向的連続体が登場するのみで、予持が登場していなかったことを確認した。この予持の不在は、体験流の時間的秩序の記述には把持と絡み合う自己意識的予持が不可欠だとした第一部の考察と一見対立するように見える。つまり体験流の記述に対する予持の重要性に関して、本研究の第一部と第二部が対立しているように見えた。そこで本研究は、予持が無くても初期における体験流の記述が可能であった理由を探った。本研究はこの理由を二つ想定した。

まず、一つ目の理由は問題の違いである。第三節でも明らかになったように、§38, 39において論じられているのは体験流の時間的秩序、つまり体験流がどのような秩序の下で流れているかではなく、体験流の統一、すなわち諸々の体験がどのように（体験流として）一つに統一されるかであった。つまり§38, 39は、（同じ体験流を扱っているとは言え）厳密に言えばやはり『ベルナウ草稿』とは違う問題を扱っており、それゆえ『ベルナウ草稿』では不可欠だった概念が必要とされていないのだと考えられる。またより詳しく見れば、§38, 39で論じられていたのは体験流が反省の対象としてどのように統一されるかであり、問いの性質上、未だ与えられていない未来に対する志向である予持よりも、既に与えられた過去を引き留める把持が注目されたのだとも考えられる。

第二の理由は、件の予持の不在は、実際は見かけ上のものに過ぎない、というものである。すなわち、フッサールは予持と把持とを構造的に類似的なものと想定しており、把持に認めたのと同様に、予持にも（暗黙的にとはいえ）自己意識的な側面を認めたのだという推測が成り立つ。この推測が正しければ、自己意識的な側面を持つ（把持と絡み合わない）予持は、（記述を省略されているため、それほど重要な役割を担っていないと考えられるが）体験流の統一にもある程度関与していると考えられる。この自己意識的な予持、およびそれがもた

らす予持の志向的連続体は、1911年頃には未だ暗黙的であるが、『イデーニ I』においては明示的に記述されている。なお、この予持は自己意識的性格を有しているという点で中期『ベルナウ草稿』における予持と近いが、その反面、把持と絡み合うものとしては描かれておらず、やはり『ベルナウ草稿』で記述されていたものからは区別されるべきだと考えられる。また『ベルナウ草稿』で把持と絡み合う自己意識的予持が記述された後も、与件志向的予持は破棄されることなく維持されていたのだと考えられ、与件内容や対象についての志向が扱われている『受動的総合の分析』において、再度、与件志向的予持が登場している。以上を整理すると、初期から中期にかけて想定されていた予持は以下の図のようになっていると考えられる。

1890年代～1907年	1907年頃～1911年	1913年頃	...	1917年頃	...	1920年代
与件志向的予持						...
	自己意識的予持	(絡み合いなし)				...
				自己意識的予持(絡み合いあり)		...

このような予持の移り変わり、およびそれぞれの時期における予持の性格の違いからは、次のことが窺える。まずこれまでの考察から、その統一にせよ時間的秩序にせよ、体験流について何らかの記述を行おうとすれば、自己意識的な側面を持つ予持が必要になると考えられるが、このような予持は早く見積もっても1907年頃までは登場していなかった。他方、1907年頃までに記述されていた予持は与件志向的なものであり、これは時間的に持続している対象の構成について論じる際に必要なものだと考えられる。この移り変わりを見ると、フッサール時間論の主要な問題が、初期から中期にかけて、まず1907年を境に対象構成の問題から体験流の問題へ、次いで1913年以降を境に体験流の統一の問題から体験流の時間的秩序の問題へ移行したのだと推測できる。『受動的総合の分析』においては対象構成についての問題も扱われているが、このテキストでは体験流の時間的秩序にも目配せがあり、またフッサール自身が当該のテキストの問題と体験流の時間的秩序についての考察を区別している (vgl. XI, 125, 128)。そのため、『受動的総合の分析』が書かれた時期 (1920年代) には対象構成の問題と体験流の問題とが併存していたのだと考えられる (第二章第六節参照)。

さらに上記の『受動的総合の分析』の事情から、より重要なことを窺い知ることができる。すなわち、『受動的総合の分析』の時期 (1920年代) においても、つまり『ベルナウ草稿』で把持と絡み合う自己意識的予持が記述された後でも、フッサールは与件志向的な予持を放棄していない。それどころか、それをなおも「予持」と呼び、これを用いて対象に対する志向性や与件内容に関する考察を行っている。与件志向的な予持を扱っていない『ベルナウ草稿』においてさえ、この予持について語ることを「格別に重要な主題」(XXXIII, 12) だと述べていた (そして後に『受動的総合の分析』で論じたというわけだ)。整理して言えば、

初期の前半（時間的対象の構成）、初期の後半（体験流の自己統一化）と中期（体験流の時間的秩序の自己構成）では主に扱われている問題が異なっているが、しかし初期の前半で扱われていた問題は初期の後半の問題や、中期の問題が登場してきた後でさえ放棄されず、それどころか再び論じ直されてきている。つまり、初期～後期における予持についての記述の変遷、ひいてはそれが反映する主要問題の移り変わりは、初期の考察が誤っており、中期の考察がその修正として登場してきた、わけではないことを示している。もし初期の考察が単純な誤りであったのなら、『受動的総合の分析』における論じ直しを説明できなくなるだろう。各時期の問題は互いに異なっているが、しかし少なくともフッサールにとっては、これらのいずれかだけが正しかったのではなく、それぞれが時間という「多面的」事象の相異なる顔だったのだと考えられる。

以上より、この第二部では、各々の時期で主に記述されていた予持の特徴を明らかにし（1907年頃までは対象の将来における与件内容を志向する予持、1907年頃から1913年頃には把持と絡み合わない自己意識的予持、1917年頃以降は把持と絡み合う自己意識的予持）これらは完全に同じではないものの、地続きであることを示した。これをもとに、初期の前半では主に時間的な対象の構成が、後半では体験流の自己統一が、中期以降は体験流の時間的秩序の自己構成が論じられていることを明らかにした。そして各時期の問題はそれが主題的に扱われた時期以降も放棄されておらず、それゆえ少なくともフッサールにとっては、それぞれの問題・それらに取り組む中で見て取られたものは、時間という事象に迫るうえで欠かすことのできないものだったのだと考えられる。

2.4. 【補論】初期と中期における時間位置の個体化

前章までの議論で初期時間論における予持概念の変遷とそれらの特徴が明らかとなり、そしてこれらが中期『ベルナウ草稿』に登場する予持と連続的ではありつつもやはり区別されることが分かった。そして以上から、1907年以前の初期時間論では時間的対象の構成が、1907年以降の初期時間論では体験流の自己統一化が扱われていること、これは中期『ベルナウ草稿』で扱われていた体験流の時間的秩序とは異なるものであることが示された。

しかし、上の議論は各時期の予持概念の性格の違いのみをその論拠としている。そこで本章では、予持概念とは異なるいわば補助的な視座を導入し、その視座からも初期および中期時間論の性格付けを行い、その考察によって前章までの考察の補強・補足を行う。

この補助的視座として、本研究は時間位置の個体化の議論を採用する。そもそも個体化の問題とは何か。例えば、机の上に二つのバナナがあるとしよう。仮にこれらの品種や色や形などのあらゆる性質が同じであったとしても、これらはやはり二つの別々のバナナである。哲学用語を用いて言えば、これらは質的には同一でも数的には同一ではなく、それぞれ別の

個体なのである。ここで見たように、性質を同じくする対象（バナナ）がそれぞれ別の対象として現れてくるのが個体化であり、この個体化の原理や根拠を扱うのが個体化の問題である。フッサールはしばしばこの個体化の問題に取り組んでおり、ある対象は特定の時間位置に位置づけられることで個体化する、と考えていたようである。すなわち、フッサールにとって対象の個体性の根源とは時間位置の個体性だったのである⁹⁸。後でもう一度確認するが、対象は客観的時間における特定の時間位置に位置づけられることで個体化するのだが、これはそれぞれの時間位置がそれ自身で既に個体化しているためであり、各々の対象は時間位置の個体性に依拠する仕方では個体化するのである。現に『時間意識講義』では、「時間のなかでの客観の同一性〔＝個体性〕の解明は、時間位置の同一性の解明なくしては与えられない。」(X, 64)とされており、対象の個体化の問題よりも根源的な問題として時間位置の個体化の問題が登場してくる。すなわち時間位置は、他の何にも依ることなく、如何にしてそれぞれ異なり合っており、また如何にしてその異なりは常に同一のものとして維持されるのか、という問いである。対象のように他の何かの個体性に依拠して個体化するのであれば、個体性の根源は時間位置の個体性には無いことになる。また時間位置が互いに異なり合っていないければ（すなわち同じ時間位置が複数存在する、時間位置が一回的では無いのであれば）、あるいはそのような異なりが維持されないのであれば、そのような時間位置に措定したところで対象に個体性が与えられることは無いだろう。

この時間位置の個体化は主に初期 - 中期⁹⁹にまたがって論じられ、また時期ごとに異なる様相を呈している。この変遷もフッサールの気紛れに依るものとは考えにくく、ここから、時間位置の個体化の議論も彼の各時期の時間論の特徴を反映しているという見通しが立つのであり、それゆえ上で述べた補助的視座として時間位置の個体化に着目することは適切だと考えられる。また、後で確認するように、『ベルナウ草稿』において時間位置の個体化は予持および把持との関連において論じられている。それゆえ、時間位置の個体化は本研究が主たる視座として選んだ予持概念との浅からぬ連関を持つものだと考えられ、その意味

⁹⁸ このことは例えば谷[1998]においても指摘されている（325頁参照）。ただし、フッサールは時間的な規定さえあれば完全に個体を規定できると考えていたわけではない。例えば複数台の監視カメラの映像のように、目の前で同時に複数の出来事が生じる（そして同時に終了する）といったことは我々の経験においてはありふれたことであり、このような事例からも個体の規定には空間的な位置規定もまた欠かせないことは明白である。フッサール自身もこのことに意識的であったと見られ、『ゼーフエルト草稿』の終盤では「空間は性質の最下の種差を個体的な性質へと「成す」」(X, 251)と端的に述べている。また、後で確認するように、『ベルナウ草稿』では対象の個体性が「コトイマ hic et nunc」によって与えられるとされている。まとめると、個体を完全に規定するには時間的な位置規定と空間的な位置規定の両方が必要であるが、しかし、だからと言って両者は対等ではなく、時間的な位置規定の方がより根源的だとされているとまとめられるだろう。なお、空間も考慮に入れた個体化議論としては Summa[2014]が詳しい。この研究では『ベルナウ草稿』の内容もかなり正確に踏まえられている。

⁹⁹ なお本研究は扱わなかったが、『イデー II』においても個体化の問題が扱われており、対象の個体性の根源として「個体的主観性」(IV, 299)が記述されている。これに関しては中村[2007]が詳しく論じている。

でも時間位置の個体化議論を（予持概念の）補助的視座として採用することは適当だと考えられる。

2.4.1. 初期『時間意識講義』における時間位置の個体化（議論の背景）

そもそもフッサールはなぜ時間位置の個体性という問題を考えようとしたのか。

この問題が考察される§31の直前、§30（§30, 31は両方とも1905年の草稿に由来）では、様々な志向的体験における対象志向の同一が論じられている。すなわちかつての知覚対象が過去へ退き、想起されたとしても、それらにおいては同一の対象が措定されているとされ、そのための条件が論じられている。例えば（便宜的に歴法的な表現を用いて言うと）18日の夕食を19日に想起する場合、18日の知覚と19日の（それどころか今後任意に繰り返される）想起においては全て同一の対象が志向されるのである。フッサールによれば、これはその対象の内容とその「時間規定」（X, 63）に基づくのだという。

非時間的に把握された諸々の統握与件は、客観を、そのスペチエス的な存立成分に関して構成するのであり、そしてその存立成分が保持されたままに留まる場合、我々は既にある同一性について語ることができる。しかし先に語られていたのが対象への関係の維持だったとすれば、それは次のことを意味していたのである。すなわち、対象がそのスペチエス的な存立成分においてのみ保持され続けているのではなく、個体的な対象として、したがって時間的な規定を伴って時間の中を沈退していく時間的に規定された対象として保持されているということの意味していたのであった。

(X, 63)

確かにその対象の内容、「存立成分」が維持されていれば、それによって対象の内容的な同一性は担保される。例えば献立やその時の味等を覚えてさえいれば、内容が同じ対象（焼魚定食）を志向することはできる。しかしこれは単に内容的に同じ対象を志向しているだけで、個体として同一な対象（まさしく「18日に食べた焼魚定食」）を志向していることにはならない。個体的に同一な対象を志向するためには、内容的同一性だけでなく、それが措定されている時間位置の規定における同一性も必要なのである。すなわち、フッサールによれば、時間位置はそれぞれ同一性・個体性を有しており、対象はそのような時間位置に措定されることで、いわば時間位置の同一性・個体性に依拠する仕方でも同一性・個体性を得るのである。当然、時間位置のこの同一性・個体性はいかなるときも保持されるのだという。

しかし、ある時間位置が同一のままに留まる（これは一種の〈不変〉と解釈できる）とは言え、時間は常に流れている（こちらは一種の〈変化〉と解釈できる）。つまり、時間位置においてはある種の不変化と変化が両立しているように思われるのであり、極端に言えば「二律背反 Antinomie」（X, 64）にも見えるのだが、この両者は如何にして両立するのか。

§31 ではこれらの問題が扱われている。まとめると、経験対象の同一性の根源たる時間位置の同一性の構成が問題になっており、さらにフッサールはこの時間位置の同一性の構成を、ある種の〈変化〉の中である種の〈不変化〉が生じること、として見ているのだ (vgl. X, 64)。

以上のような問題設定の下、§31 における考察が展開していく。フッサールはまず〈変化〉について、次のように述べている。

現象学的に見ると、今点 [=今として性格付けられた位相] だけが顕在的 *aktuell* な今として、しかも新たな今として性格づけられて存在しており、先ほどの今点は [把持的] 変様を被ったのであり、さらに先ほどの今点はさらなる変様を [被ったのであり]、そしてこれがつづく、ということが現に成り立っている。この変様の連続体は、統握内容に関わるとともにその統握内容のうえに築かれる [対象] 統握に関わる変様の連続体であり、こうした変様の連続体が音の [時間的な] 延び広がり意識を——すでに延び広がった部分が絶えず過去に沈下するというをともなって——産み出すのである。

(X, 65)

引用によれば、各瞬間においては、一つの点だけが顕在的な今として存在している。そしてそれだけではなく、かつて顕在的な今として特徴づけられていた諸々の今点も、今この瞬間、把持という志向において変様された仕方で保持されている。さらに、「先ほどの今点は変様を被り、もっと先ほどの今点はさらなる変様を被る、そしてこれがつづく」というように、把持的諸位相は相異なる度合いの変様を被っており、それらが「変様の連続体」を成すのだという。§31 においてはこの連続体が如何にして生じることがやや曖昧だが、記述内容からして、これは自己意識的把持から成る把持的連続体のことを指すと考えられる。かつての今点は保持されて存在してはいるが、しかし把持的な変様を被った仕方で保持されて存在しているのであり、この変様を被ることをフッサールは「過去に沈下する」と表現している。

このように各時間位相は上記の変様を被った仕方で保持されるが、本研究第一部第二章第一節でも確認したように、把持的な変様は内容的な変化をもたらさない。例えば「今」の *ff* のドの音は変様を被ることで「さっきの」や「さっきのさっきの」*ff* のドの音になるが、しかしいくら変様を被ったところで *ff* が *mp* になったりドがシになったりすることはない。フッサールは§31 でも把持的変様のこの側面に言及しつつ、次のように述べている。

恒常的な流れにおける統握の恒常的な変化は、統握の「何として」には、つまり [客観の] 意味には関与しないのであり、それ [=恒常的な流れにおける統握の恒常的な変化] は新たな客観や新たな客観位相を思念するのではなく、新たな時間点をもたらすのではない。そうではなく、それ [=恒常的な流れにおける統握の恒常的な変化] は絶えず同じ時間点を伴った同一の客観をもたらすのである。顕在的な今はそれぞれに一つの新たな時間点を作り出す。なぜなら、各々の顕在的な今はある新しい客観、あるいはむ

しろ、変様の流れにおいて一にして同じ個体的な客観点として保持されるような、そのようなある新しい客観点を作り出すからである。[…][顕在的な今という]現象が過去へと退いていくとき、今は過ぎ去った今という性格を得るが、しかしそれは同一的な今であり続ける。ただしその都度の顕在的な、また時間的に新しい今との関係において過ぎ去ったものとしてそこに立つのである。

(X, 65-66)

まず引用の冒頭では、把持的変様が対象の内容には変化を与えないことが確認されている。そしてこの確認に引き続いて、把持的変様は時間位置の同一性に対しても影響を与えないこと、さらに重要なこととして、この同一的時間位置は「今」において成立すること（「顕在的な今はそれぞれに一つの新たな時間点を作り出す」）が述べられている。「今」において時間位置の個性が成立する理由は次のように説明される。

[内容上] 同一的な今の感覚 *Empfindung* と別の今の感覚はある異なりを、もっと正確に言えば、絶対的な時間位置に対応する現象学的な異なりを持つ。この異なりこそが、「これ」の個性の源泉、したがってまた絶対的な時間位置の個性の源泉なのである。変様の各位相は「その本質において」、[感覚された時と] 同じ性質の内実、同じ時間的契機を（たとえ変様されるとしても）もつ [=保持する]。

(X, 66)

引用によれば、仮に内容上同じであったとしても、感覚はそれぞれ現象学的な「異なり」を持ち、さらにこれは「絶対的な時間位置に対応」し、「絶対的時間位置の同一性の源泉」だとされている。つまり、時間位置は、それが顕在的な今になった際に与えられる感覚が担う「異なり」によってその同一性・個性を付与されるのだという。時間位置は、顕在的な今において、感覚の「異なり」によって同一性・個性を得るのだという。ただし、「同一的な今の感覚と別の今の感覚」でさえ「異なり」を持つとされていることから、この「異なり」は感覚の内容に依拠するものではないことが分かる¹⁰⁰。むしろこの異なりは形式的なものとされ、さらに次の引用にも見られるように、時間位置の個性のみならず顕在的な今を特徴付けるともされている。

ここで「個体的」と呼ばれている当のものは、感覚の根源的な時間形式、あるいはこう

¹⁰⁰ これに関しては、「ある原印象を他の原印象から区別するのは、根源的な時間位置としての印象が持つ、個性化する契機であり、この根源的な時間位置としての印象は、感覚内容の性質やその他の質料的な諸契機とは、その根本的本質において異なったものである」(X, 67-68)という記述も見つかる。このようにフッサールは、時間位置の個性は感覚内容によってもたらされるという考えを再三否定している。

も言えるが、根源的な感覚の時間形式のことであり、ここでの文脈でいえば、そのつどの今点があつ時間形式、しかも、ただそのつどの今点だけがあつ時間形式のことである。そうは言っても、本来的には、今点それ自体のほうが根源的な感覚によって定義されるべきであり、そのことからして上記の文章は、ただ何が問題にされているのかについての〈指示〉としてのみその妥当性が認められるべきである。印象をファンタスマから区別するのは原本性 *Originalität* という性格である。そこで、その印象の内部で原印象を際立たせなければならない。この原印象に対して、第一次的な記憶意識 [= 把持的意識] における諸変様の連続体が存立している。原印象は絶対的に変様されていないものであり、それ以外の全ての意識や存在にとっての源泉である。原印象は、今という言葉が意味するところのものを、その内容に持つ。

(X, 67)

引用前半では『個体的』と呼ばれている当のもの、つまり個性の根源たる「異なり」が「感覚の根源的な時間形式」と呼ばれている。この感覚形式を持つことができるのは「そのつどの今点」だけであり、それゆえにこれはその都度の顕在的今を特徴づけるのだという。つまり感覚こそが顕在的今を顕在的今たらしめる（つまり、時間様相性もたらず）とされているのだ。後半では顕示的な今が「原印象」と呼ばれ、これがどのように特徴づけられるかが述べられている。まず「印象」全体がファンタスマから区別される。ここで言う「印象」の内部において「原印象」と「第一次的な記憶意識における諸変様の連続体」が見出され、またこれは「ファンタスマ」（これは空想や想起の成素とされている）と区別されるため、この「印象」は知覚的経験における意識位相全般を指すと考えられる。「印象」はファンタスマから区別されるが、この区別は「印象」の「原本性」によるとされている。すなわち、ファンタスマを成素としする空想や想起等は準現在化の作用であり、これは現在化の作用たる知覚の変様物なのであり、ゆえに知覚の成素たる「印象」はファンタスマに対して原本としての地位を持つのである¹⁰¹。さらにその「印象」の中でも、原印象は「絶対的に変様されていないもの」として把持的諸位相から「際立たせられる」のである。つまり、原印象は二重の意味で変様されていないのであり、この非変様性、原本性によってこそ原印象は今の位相を今の位相とするのである。

以上をまとめると次のようになる。意識経験のどの瞬間においても、顕在的今においては絶えず何らかの感覚が与えられている。感覚は原印象として受け取られ、感覚・原印象はその原本性、非変様性によって時間位置を顕在的今たらしめる働きを持つ。他方で、それぞれ

¹⁰¹ フッサールは知覚を現在化 *Gegenwärtigung*、空想や想起や予期を準現在化 *Vergegenwärtigung* とし、後者を前者の変様物だとしている。例えば、『時間意識講義』§15 では想起のプロセスが「知覚プロセスの準現在化変様」と呼ばれている (X, 37)。また、『時間意識講義』補遺 II ではどの準現在化作用も「空想現出」を持ち、これが統握の質料としてファンタスマを持つとされている（「したがって我々は知覚現出と空想現出を区別する。後者は統握質料 [として] 『ファンタスマ』 (感覚の準現在化的変様) を含み、最初のもののは感覚 [を含む]」 (X, 102)。

の感覚は「感覚の根源的時間形式」と呼ばれる異なりを担っている。この根源的感覚形式は各々の感覚によって異なっており、さらにこれは把持的変様においてもなんら変化しないとされている。各々の時間位置はこの根源的感覚形式を受け取り、それにより個性性を得る。つまり、その都度の感覚は今という時間の様相性と時間位置の個性性を与えるのである。

ちなみに、§31の議論において確認されているのは時間点の個性化であるが、フッサールによれば「過去への沈下における時間点の個性性の保持をもってしても、我々は未だなお、統一的、均質的、客観的な時間の意識を持つには至らない」(X, 69)のだという。つまり、時間位置を個体的なものとして保持するだけでは、個体的時間位置の連続たる「客観的時間」が意識に与えられることにはならないとされ、§32ではこの客観的時間が如何に構成されるかが論じられている。この内容は本研究には必ずしも関係するわけではないが、念のために以下で大雑把な内容を確認しておく。

把持的に変様してしまった個体的な時間位置は、「再生的想起 *reproduktive Erinnerung*」(X, 70)によって¹⁰²「時間直観のゼロ点」(ebd.)にされる、つまり顕在的な今として、準現在化、あるいは再生されるのである。再生されたかつての今は「変様の連続体」を伴っており、我々はこの「変様の連続体」におけるかつての今を選び、再び今として再生させることができる。フッサールは、この手続きに関して「明証的に、際限なく続けられ得るものとして考えられ得るし、目下行われている想起がじきに働かなくなるとしてもそうなのである」(X, 70)と述べ、この手続きが無限に繰り返される可能性が担保されていると述べている。また上でも確認した通り、根源的感覚形式が時間位置に付与した個性性は損なわれることが無いため、この手続きにおいて登場するかつての今、および「変様の連続体」は全て時間位置的個性性を持っている。以上から、再生によって我々は(過去方向に)無限に遠く広がり、かつそれぞれの時間位置が個性性を持つような客観的時間を獲得するのである。

雑駁に要約すれば、再生によってかつての今を、過去方向に、どこまでも飛び石のように辿っていくことで客観的時間が形成される、というのが§32で述べられている客観的時間の構成のメカニズムである¹⁰³。

¹⁰² なお、フッサールは「直観的な〔想起〕と同様、空虚な志向の形式における〔想起〕も」(X, 69)このような再生の役割を担えると述べている。つまり不明瞭な想起であっても、あるいは具体的な内容が無い想起であったとしても、この手続きを行ううえでは何ら問題はないのである。客観的時間の構成における内容的に空虚な再生の関与を認めなかった場合、我々が構成できる客観的時間の長さは、どんなに大袈裟に見積もっても、自分の年齢と同じぐらいになるだろうが、これは明らかに奇妙である。けだし、客観的時間構成における再生に関して重要なのは、順繰りに把持系列を辿っていくということであり、過去の出来事の具体的な内容思い出すことはさほど重要ではないのだろう。

¹⁰³ この議論は谷[1998] (384-386頁)においても詳しく解説されている。なお、谷は上記の再生における「変様の連続体」、つまり把持的連続体の各位相同士が重なり合っていくということについて、フッサールが用いた「ずれた合致 *Überschiebung*」という語を用いつつ説明しているが、本研究はこれを割愛している。

2.4.2. 初期『時間意識講義』における時間位置の個性化議論の吟味

このように、『時間意識講義』§31 においては時間位置の個性性が感覚に依るという議論が展開されている。しかし、この議論を採用して感覚によって時間位置の個性性を説明する場合、いくつかの事象の説明が困難、もしくは不可能になるように見える。以下では空想における時間性と未来の時間性に関して、上記の議論の問題点を明らかにする。

まず、感覚が時間位置の個性性を付与するという枠組みでは、感覚が働いていない現象、例えば空想における時間位置の個性性を説明するのは困難だと考えられる。「諸知覚の根底には感覚が横たわっており、諸々の空想の根底には感覚的なファンタスマが横たわっている」(XXIII, 11) とあるように、空想は感覚ではなくファンタスマから成る。さらに 1904/1905 年の空想に関する講義では、感覚とファンタスマが対比されつつ「それに対しファンタスマ、空想の感覚的内容は自らを非現在のなものとして与える」(XXIII, 80) と述べられている。したがって上記を総合すれば、空想には根源的感覚形式が無いのだから、空想における時間には顕在的な今が無く、また空想における位置には個性が無いということになるだろう。しかし、空想においては個体的な時間位置が無いというのは本当だろうか。空想の時間にもそれなりの時間経過があり、そしてその経過においては、各瞬間は一回的ではないだろうか。『不思議の国のアリス』では現実では到底考えられないことが起きる。しかしそれでも、帽子屋のお茶会と赤の女王の裁判は、少なくとも、異なる瞬間に生じた出来事として与えられている。また、たとえ完全に同じ出来事が何度も繰り返される様子を空想したとしても、その様子を「何度も」とか「繰り返される」等と表現できるのであれば、それらの同じ内容の出来事は相異なる時間位置に位置づけられていることになる。この場合もやはり時間位置は一回的である。

もちろん、ファンタスマにも根源的感覚形式を、言うなれば疑似 - 根源的感覚形式を認めてしまえば、『時間意識講義』の枠組みを空想の時間位置の個性性の説明にまで広げることが可能なかもしれない。しかし、ファンタスマさえも「感覚」と呼ぶような拡大解釈において、従来の意味での感覚に当初の重要性が残るか疑問ではある。少なくとも、そのような拡大解釈を行う場合、時間位置の個性性をもたらすものを感覚の形式と呼ぶのは、もはや不適切であろう。

上記の拡大解釈で空想における時間位置の個性性の問題を解消したとしても、顕在的な今において時間位置の個性性をもたらされるという点に別の問題がある。というのも、時間位置の個性性が顕在的な今において成立するという枠組みの下では、未だ顕在的な今にはなっていない、例えば未来の時間位置は個性性を持たないことになるだろう。しかし、これは受け入れ難い帰結である。未来の時間位置が個性性を持っていないとしたら、将来に繰り返されることが予測される同じ内容の対象は（時間位置の個性性が成立していないのだから）、繰り返される複数の出来事ではなく、同一の（したがって一回の）出来事として予測されるのか。というより、将来の時間位置が個体的なものとして与えられていないのならば、将来の時間位置がそれぞれ異なること、ひいては未来地平の広がりとは与えられないのか。上記の

問いに対する答えは「否」以外にあり得ない。明らかに将来の時間位置も個性を持つはずである。そしてそうである以上、狭義の感覚が時間位置に個性を付与するという枠組みは破棄されるべきである。

では、例えば予期などが未来の感覚を先取りし、それによって未来の時間位置に個性が付与されている、という拡大解釈を行うのはどうだろうか。つまり、予期された感覚、予期のファンタスマにも個性を付与する権能を認めるという拡大解釈を行うのはどうだろう。しかしこの拡大解釈は破綻をきたす。まず、本稿第二節でも確認したように「今点それ自体のほうに根源的な感覚によって定義されるべき」(X, 67) とされるため、定義上、感覚と顕在的今がズレることはない。またそれでも未来の感覚の先取り(感覚を未来へと疑似的にズラすこと)が可能だと仮定しよう。その場合、未来の時間位置には予期的感覚によって予め個性が与えられ、その時間位置が顕在的今になったときに、再度、感覚がその時間位置に個性を付与するのだろう。さてこのとき、予期的感覚が与えていた時間位置の個性と、顕在的今において感覚が改めて与える個性とは当然同一でなければならない。しかしそう考えると、時間位置に個性を付与しているのはむしろ感覚に先行する予期的感覚であり、感覚は予期的感覚の働きをなぞっているに過ぎないということになる。つまり、時間位置一般の個性の根源は予期的感覚であり、顕在的今における感覚は時間位置の個性の根源たる資格を失うと考えられる。では、予期的感覚こそが時間位置の個性の真の根源なのか。しかし、感覚が個性の根源としての地位を失う場合、その感覚から拡張された予期的感覚も時間位置に個性を付与する権能を失うことになるだろう。以上を踏まえると、顕在的今において感覚が時間位置に個性を付与するという議論では、未来の時間位置の個性は説明不可能だと考えられる。

したがって、感覚が時間位置に個性を付与するという枠組みは、一度知覚された時間位置の個性、およびそこに位置づけられた対象の個性を説明するうえでは問題がないが、それ以外の個性を説明することはできないものとなっている。言い換えれば、この枠組みは知覚とその想起に対してのみ有効だったのであり、『時間意識講義』§31 においては時間位置一般の個性を普遍的に説明する枠組みは提示されていないのだと言える。

2.4.3. 中期『ベルナウ草稿』における時間位置の個性化①(明示的記述の確認)

時間位置の個性化の問題は中期『ベルナウ草稿』においても論じられている。

まず事実から確認していこう。『ベルナウ草稿』においてこの問題が扱われていることは、例えば次のような記述から窺い知ることができる¹⁰⁴。

¹⁰⁴ 引用以外にも「もし我々が音の知覚という言葉の下で音の持続性を根源的に構成する意識というものを理解しなければならない、あるいはそのようなものを理解してよいのであれば、不変の知覚というものは不可能であったろう。なぜなら、時間対象的な構成の時間図表からは次のことが出てくるからである。すなわち、構成を行う意識の各々の位相は確かに各々の他の位相に類

では時間位置の同一性とは何か、あるいは瞬間的現在の唯一的な源泉点を伴って永遠に流れゆく諸々の過去のこの二次元的な連続体に対する、一つの一次元的な線形連続体としての時間の同一性とは何か。

(XXXIII, 293、下線は引用者による)

また、『ベルナウ草稿』においても時間位置の個性性は客観の個性性の源泉とされている。この点も『時間意識講義』と共通している。

したがって、内在的な内容をそれ [=内在的な内容] の個性性において再認識する wiedererkennen¹⁰⁵ということは、それ [=内在的な内容] を絶対的な時間位置において再認識するということの意味している。二つの完全に同等な個体が時間位置によって区別されるのであり、したがってそれらは決して完全に同等ではありえない、[言い換えると、] 時間形態においてはなおそれ [=完全に同等] であり得るが、[時間] 位置においてはもはやそうではありえない。

(XXXIII, 331、下線は引用者による¹⁰⁶)

他方で『ベルナウ草稿』では、空想的時間の時間位置¹⁰⁷に個性性が認められている¹⁰⁸。

時間の本質が空想において私に与えられる。そして多くの空想においては一つの同一的な空想においてそうであるのと同様に、「時間的持続」、時間点という存在者が個立化 sich vereinzeln している。

(XXXIII, 335)

似しているということ、しかし、二つの位相は決して完全には同じにはなり得ないということ、である。」(XXXIII, 109、下線は引用者による) という記述が見つかる。この記述については後で改めて触れる。

¹⁰⁵ この箇所の直前では再想起が話題に挙がっており (vgl. XXXIII, 330)、それを受けてこの引用では再想起の対象の個性性が問題になっていると考えられる。したがってこの引用に登場する「再認識」は再想起と同義と考えられる。

¹⁰⁶ 引用以外にも、例えば「個体的に存在するものとしての「存在するもの」、〈一つの〉時間位置に結びつけられているもの、そしてその時間位置によって個体化されているもの。」(XXXIII, 278) という記述が見つかる。

¹⁰⁷ 少なくとも、『ベルナウ草稿』では空想的客観の個性性が認められている。これはベルネ[2004]においても指摘されている (25、38 頁を参照せよ)。

¹⁰⁸ 引用以外にも、例えば「ある空想、それはしたがって諸々の空想のある任意の「連関」に及ぶのである [...]。そのような空想世界の内部で、我々は (疑似 - 現実性としての) 各々の個体的な空想客観のために、各々の時間点や各々の時間持続にとってのある「個体的な」個立化 Vereinzelnung を持つのである。」(XXXIII, 336) という記述が見つかる。

また、『ベルナウ草稿』と同時期の草稿では、未来の時間位置の個性性を認めていると解釈できる記述を見つけることができる。

個性化点、そして個性化するもの(延び広がり)はココトイマとして、今 - 此処として、そして再想起において個性化される、過ぎ去った、そして繰り返して過ぎ去った(あった)今と此処として与えられるのであり、ここでは絶えず新しいものの連続体において与えられるのであり、[つまり] 新しい今と此処を、あらゆる再想起様態において、必然的にそれ [=新しい今と此処] の区別において同一的なものとしてもたらしつつ、そうするのである。方位付けの諸様相による時間構成に立ち戻るとその区別は明証的なものとなる。また、無限の体系の形式、果てしない地平の形式が [同様に] 明証的なものとなる。我々はその地平の中へと眼差しを向け、絶えず新しい、未だ経験されていない此処と今 についての必然的な予期を獲得するのである。¹⁰⁹

(D8, 5a „2“、下線は引用者)

引用では「個性化点 *Indiviationspunkt*」、つまり個性化をもたらす点が「ココトイマ」という時間点・空間点として、絶えざる時間的な経過の中で生じるとされており、「無限の体系の形式、果てしない地平の形式」を形成するとされる。ここまで確認してきた内容から判断するに、ここで言われている「イマ」とは対象の個性性の根拠としての時間点であり、この時間点はそれ自身で個性化しているものと考えられる。この体系の連関において「未だ経験されていない此処と今」、すなわち未来の時間点が必然的な仕方では予期されるのだという。この体系に関しては後で触れることになるが、とにかくここでは「未だ経験されていない」位相も「個性化点」(つまりそれ自身で個体的な点)として与えられると記述されていることが分かる。

以上を総合すると、『ベルナウ草稿』においても時間位置の個性化は問題になっており、個体的な時間位置はそこに位置づけられる諸対象の個性性の根源として考えられている。上記の点は『時間意識講義』との共通点だが、他方で『ベルナウ草稿』における時間位置の個性性は空想における時間位置にも、また未来の時間位置にも成立しているとされており、この点で『時間意識講義』におけるそれとは異なり、普遍的に妥当する枠組みが用意されていると考えられる。

¹⁰⁹ Gegeben ist der Individuationspunkt und ein Individualisierendes (eine Andehnung) als *hic et nunc*, als Jetzt – Hier und als in Wiedererinnerungen sich individualisierendes vergangenes und immer weiter vergangenes (gewesenes) Jetzt und Hier, und hier im Kontinuum eines immer Neuen, das neue Jetzt und Hier, in allen Erinnerungsmodalitäten sich als identisch in seiner Unterschiedenheit notwendig ergebend. Im Rückgang auf die Zeitpunktkonstitution durch die Orientierungsmodalitäten wird die Unterschiedenheit evident; und evident wird die Form des unendlichen Systems, des endlosen Horizonts, in den hineinblickend wir eine notwendige Erwartung von immer neuen, noch unerfahrenen Hier und Jetzt gewinnen.

2.4.4. 中期『ベルナウ草稿』における時間位置の個体化②（議論の再構成）

では、その枠組みとはいかなるものか。『ベルナウ草稿』において、時間位置の個体化はどのように説明されているのか。残念ながら、『ベルナウ草稿』にはこれについての明確な記述が見当たらない。そのため以下では、『ベルナウ草稿』における時間位置の個体化議論を推定的に再構成していく。とはいえ、まずは明示的な記述を確認していくべきであろう。

例えば、Nr. 16, §2 の直前の§1¹¹⁰の末尾では「過去」¹¹¹、すなわち事実としての諸々の出来事の連続体である「一つの二次元的な体系」(XXXIII, 293) と、これの同一性を規定する、時間位置の連続体としての「一つの一次元的な線系連続体」(ebd.) が指摘されている¹¹²。§2

¹¹⁰ 本研究には直接関係しないが、以下で Nr. 16, §1 の内容を大雑把に確認しておく。まず冒頭では「単に可能的なこの同じ selbe 対象が（そして各々の可能的対象もそうなのだが）同様に現実的対象でもありうる。反対に各々の現実的対象について、それ [= 各々の現実的対象] は必ずしも現実的に存在する必要はなく、単なる可能性でもあり得た、と言いうる」(XXXIII, 289) と、同じ内容の対象が知覚や空想をまたいで成立することが確認されており、これは「個体的本質」(XXXIII, 290) を同じくする複数の対象が時間・空間的位置や現実・疑似 - 現実を異にして現象しているのだと解釈される (vgl. XXXIII, 289-290)。これを確認した後、空想における個体性と「唯一の現前」(XXXIII, 291)、つまり知覚における個体性が分けて論じられる。空想に関しては前提になっているものが「関連し合う」(XXXIII, 290) 空想か、「関連し合わない」(XXXIII, 291) 空想かによって対象や時間位置の個体性、あるいは時間位置の順序関係を論じることができるか否かが変わることが確認されている (vgl. 290-291)。なお、空想における時間位置の個体性に関しては Nr. 19, 20 でより詳しく論じられている。他方、知覚における個体性に関しては、対象が「持続するもの das Dauernde」(その延び広がりには「持続 Dauer」、それが時間区間に延び広がることは「Dauern」) (XXXIII, 291) と表現され、この「持続するもの」は「あらゆる変転を貫いて同一の相関者」(ebd.) である特定の時間位置に指定されること、この指定が現在において生じること (ebd.)、この指定によって諸々の「持続するもの」は事実として区別されること (vgl. XXXIII, 292) 等が確認される (vgl. XXXIII, 291-292)。これらの考察を通じて「個体性の、事実性の、現存在における区別の根源点」(XXXIII, 292) としての時間位置が問題となる。各々の時間位置は「今」として規定されており、これは「原本的現在の流れの線形連続体」(XXXIII, 293)、あるいは§2 の表現だが、「一つの一次元的な線系連続体 Linearkontinuum」(ebd.) を形成するとされている (なお、時間位置が今として特徴づけられるということについて、第三部で再度論じることになるだろう)。他方、諸々の「過去」、事実として生じた諸々の出来事も、連続し合い、関係し合うことで「一つの二次元的な体系」(ebd.) を形成するとされており、先の「一次元的な線形連続体」はこの「二次元的な体系」を規定するとされている。つまり事実として生じた諸々の出来事を時間位置の連続的体系が規定するのである (vgl. ebd.)。

¹¹¹ フッサールは Nr. 16 において、現在および過去の対象の個体性を論じるのみで、未来の対象の個体性は（少なくとも明示的には）論じていない。というのも「事実としてのある内容と、[...] 区別された事実としてのある区別された内容を最も根源的に所持すること、あるいは把握することというのは、根源的な現前の顕在性において遂行されるのであり、内容の原本的現在の意識において遂行される」(XXXIII, 292) とあるように、フッサールは対象が「最も根源的に所持」され、特定の時間位置を与えられるのは現在においてだと考えていた。したがって、未だ現在になっていない未来の対象は個体、ここで言う「事実」には数え入れられていないのだろう。

¹¹² なお、ここでは事実としての出来事が同じ時点で複数生じる可能性が考慮されている (vgl. XXXIII, 291)。ゆえに、上記の「二次元的な体系」は単線的ではなく複線的な連続体となるのであり、言ってみれば「幅」を持つ。他方、これを規定する「今」としての時間位置はどの瞬間においても一つであり、それゆえこの時間位置の連続体は「幅」を持たない単線的なものとなる。フッサールの言う「一次元的」「二次元的」という言葉は、おそらく、上記のような含意を持つ。

ではこれを受け、節の冒頭で「では時間位置の同一性とは何か、あるいは瞬間的現在の唯一の源泉点を伴って永遠に流れゆく諸々の過去のこの二次元的な連続体に対する、一つの一次元的な線形連続体としての一つの時間の同一性とは何か」(XXXIII, 293) という問いが立てられている。もっとも、節の大部分では「現存在」(XXXIII, 294) や「事実的な存在」(ebd.)、「持続すること」「持続」(XXXIII, 295) などと表現される個体的客観が問題になっており、対象の個性との関連で時間位置の個性が登場することはあっても、時間位置の個性化は問題になっていない。

Nr. 16 における時間位置の個性化の議論の不在はどのように解釈されるべきであろうか。まず考えられるのは、ここでは初期と同様の(根源的感覚形式による)時間位置の個性化が想定されており、それゆえ時間位置の個性化の議論が省略されているという可能性である。しかし Nr. 16, §1 の冒頭では、知覚と空想にまたがる同一的内容の対象が論じられ、さらに空想における対象の個性も論じられている¹¹³。翻って、初期において主張されていた根源的感覚形式に依る時間位置の個性化は、前節での指摘によれば、空想における時間位置の個性化を何の留保も無しに直ちに説明できるものでは無かった。もちろん、根源的感覚形式に多少の拡大解釈を施した可能性も否めないが、Nr. 16 には根源的感覚形式についての言及が一度も無く¹¹⁴、これを踏まえると、やはり初期の枠組みはここでは用いられていないのだと考えられる。だとすると考えられるのは、これよりも前に既に時間位置の個性化については説明が完了しており、ここではそれについて論じる必要が無かった、という可能性である。その可能性を考慮に入れて他のテキストにも目を向けてみると、Nr. 6 において次のような記述が見つかる。

もし我々が音の知覚という言葉の下で音の持続性を根源的に構成する意識というものを理解しなければならない、あるいはそのようなものを理解してよいのであれば、不変の知覚というものは不可能であったろう。なぜなら、時間対象的な構成の時間図表からは次のことが出てくるからである。すなわち、構成を行う意識の各々の位相は確かに各々の他の位相に類似しているということ、しかし、二つの位相は決して完全には同じにはなり得ないということ、である。

¹¹³ Nr. 16, §1 の内容に関しては前頁註 108 を参照せよ。

¹¹⁴ 正確に言えば一か所、「内在的な諸客観において、より正確に言えば、諸々の感覚対象において、我々は次のことを研究することができる。すなわち、〈今 - ある〉が個体的な現存在と、〔つまり〕意識の流れにおいて相互に入れ替わり合い、新たに登場してくる諸々の内容の区別 Unterschied と、如何にして連関するか、ということ我々は研究することができるのである」

(XXXIII, 292、下線は引用者) という記述が見られる。この箇所少し前でフッサールは「まず、その内部において様々な個体の相等性が登場してくる、そのような唯一の現前 [= 知覚] の場合について考察してみよう」(XXXIII, 291、強調は引用者) と述べて考察を知覚に限定している。したがって、上記の「諸々の感覚対象において」〈今 - ある〉と個体との関係が論じられるという記述も、上で述べた限定の下にあると考えられ、「感覚対象において」しかこの問題を論じられないということは意味していないと考えられる。

引用の後半では意識の位相が、互いに類似的でありながらもそれぞれ異なっていると記述されており、ここでは時間位相・時間位置の個性が（極めて簡素にはあるが）言及されていると考えられる。時間位相は、たとえ互いに類似的ではあっても、互いに異なっている。だからこそ、それらの位相に位置づけられる意識作用¹¹⁵もまた一瞬一瞬異なるものとなり、「不変の知覚というものは不可能であったろう」とされているのである。しかしさらに興味深いのは、この時間位置の個性が「時間対象的な構成の時間図表」から見出されると述べられている点である。つまりこの引用によれば、時間位置の個性化は時間図表を用いた記述において既に示されていたのだという。実際、Nr. 2（このテキストには 10 の図表が登場している）には時間位置の個性性に関する次のような記述が見つかる。

時間の意識とは、その各々がただ現実的な今、もしくは過ぎ去った今、あるいは来るべき今としてのみ意識されうるような諸々の点の推移の意識なのである。そして原過程の各々の瞬間は（各々の位相 U_x は）、一つの顕在的な今の意識であり、同時に連続的なたった今あったという性格、今しがたという性格を伴った、把持的に意識された今の連続体の意識なのである。その際、各々の今しがたは変様されて意識された一つの今なのである。そして、今として充実され、（前想起のおかげで）来るべき今とあらかじめ呼ばれ得る未来にとっても同様である。／それ Das は客観的な、現象学的な点としての現在なのであり、経過においてはふち $Kante$ 、（もしくは稜線意識の相関者としては）構成された統一、現在の様態における時間なのだが、ただしそれは直観性が十分である限りにおいては、の話である。時間点¹¹⁶それ自身は同一的であり、所与性の様々な様態において自らを呈示しつつ、その形式に関して同一なのである。時間は、必然的に現在、過去、未来の方向づけの形式において構成されなければならないような同一的な対象性の形式なのである。

(XXXIII, 35-36、下線は引用者)

一読して分かるように、ここでは時間点の同一性が論じられている。また、「時間は […] 同一的な対象性の形式なのである」とあるように、ここでの時間点も対象の同一性の根源として考えられている。さらに引用の前半では、「過ぎ去った今」や「来るべき今」も含んだ

¹¹⁵ Nr. 6 はフッサール自身によって『現象学的時間』における諸々の対象としての諸作用」と題されている。表題の通り、このテキストでは意識作用が意識の対象となる際、その意識作用がいかなる時間的構造を持つか、ヒュレー的経過が有する時間性とどの点で異なりどの点が共通するかが論じられている。本文の引用もこの文脈での記述である。

¹¹⁶ この箇所動詞は *ist* であり、「時間点 *Zeitpunkt*」は単数形である。それゆえこの内容は、全ての時間点が同一である、ということではなく、一般的に、時間点はその固有の同一性を有している、ということになる。

諸々の今が想定されており、その想定を引き受ける形で「客観的な、現象学的な点としての現在」、あるいはそれらの現在の推移としての「稜線 […] 構成された統一、現在の様態における時間」が登場し、先にも述べたように、その時間における時間点の同一性が論じられている。つまり、ここでは過去・現在・未来における時間点が過ぎ去った今・まさしく今・来るべき今として特徴づけられ、その同一性・個性が言及されているのである。ただし、ここでもこの時間点の個性がなぜ主張されているのかは曖昧である。少なくとも言えることとして、上記の記述はどうかこの§5までのNr.2の議論に依拠していると考えられるが、フッサール自身の明示的記述が見当たらないため、上記の記述の根拠を正確に特定することは諦めなければならないだろう。ゆえに、以下は本研究なりの再構成であり、あくまで考えられる可能性のひとつでしかないことを断っておかなければならない。

初期において考えられていた時間位置の個性化は、感覚において今の時間様相において生じるとされていた。これに対し、『ベルナウ草稿』では、予持・把持およびこれらの絡み合いによって予め全ての時間位置が個性化される、という枠組みが(暗黙的に)呈示されていると考えられる。例えば、連続する三つの位相 $a \rightarrow b \rightarrow c$ を想定しよう。まず c が原現前のとき、三つの位相の把持的変様の度合いは R^2a, Rb, c と表現できる (R は把持的変様を、 R の次数は変様の度合いを表す)。これらは次の瞬間には把持的に変様してそれぞれ R^3a, R^2b, Rc となり、以下これが続いていく。本研究第一部第二章第一節でも述べたが、把持的変様は全ての位相に対して一様にかかるため、 a と b 、 b と c の把持する・されるという関係は常に維持されるのであり、数式的に言えば、 a, b, c のそれぞれに掛かる R の次数の関係は常に一定であり、より一般的に表現すると、各々の位相の把持的変様の度合いは $R^{n+2}a, R^{n+1}b, R^n c$ と表現できることになる ($n \geq 0$)。また第一部第二章第二節でも確認したように、未来地平では予持の変様度合いは徐々に小さくなるため、三つの位相の予持的変様の度合いは、 $P^n a, P^{n+1} b, P^{n+2} c$ と表現できることになる。さらに予持と把持が互いに絡み合うことにより、全ての位相は予持的にも把持的にも解釈されるのであった。したがって、上では三つの位相が過去地平を進んで行く場合と未来地平を進んで行く場合を分けて考えたが、絡み合いを考慮に入れば三つの位相はいかなるときも $R^{n+2}a, R^{n+1}b, R^n c$ であり、同時に $P^n a, P^{n+1} b, P^{n+2} c$ であるということになる。この場合に重要なのは、次数としての n に具体的にどのような数が入るかではなく、次数同士の関係である。時間図表のどこを進もうと、あるいは諸位相の時間様相が何であろうと、三つの位相の関係は常に同一であり、例えば b は常に a を把持し c に把持される (あるいは a に予持され c を予持する) 位相として定義されることになる。当然これは全ての位相に妥当するのであり、全ての位相は予持と把持、およびそれらの絡み合いにより、いついかなるときも同じ順序で並んでおり (ただしそれぞれの時間様相は変化していく)、互いが互いによって常に同一的に規定されていることになる。時間位置の個性は、位相同士のいついかなるときも同一の順序関係によって成立している。なお、上記は体験流における諸位相の個性化であり、厳密に言えば客観的時間の個性化ではないのだが、体験流から客観的時間が構成される際にも上記の各位相の個性性は維持されると考えられ、

したがって上記はそのまま客観的時間における時間位置の個性をも説明する。以上が本研究の推定する、『ベルナウ草稿』の枠組みから可能な時間位置の個性化である。

先にも述べたように、フッサールは時間位置の個性化が如何にして生じるかを明確には記述していないため、上記の議論が『ベルナウ草稿』で論じられていたという確証はない。ただ上記の議論には、初期の議論では説明できなかった将来および空想の時間の時間位置の個性性を説明できるという利点がある。まず、上記の枠組みには予想的連続体の位相間の順序も織り込まれており、そのため将来の時間位置は現在や過去の時間位置と一緒に個性化する（というより、全ての時間位置がまとめて個性化しなければ上記の枠組みは成り立たない）。したがって位相間の順序による時間位置の個性化という枠組みは、将来の時間位置の個性性も説明することができる。またフッサールは、初期時間論から空想と知覚における時間構造の同一性を指摘しており¹¹⁷、これは中期『ベルナウ草稿』まで放棄されていないと考えられる。つまり、予持・把持およびそれらの絡み合いは（「疑似 - quasi-」として変様されはするが）空想においても成立しており、それゆえ疑似 - 過去、疑似 - 現在、疑似 - 未来の諸位相の順序も（空想における）出来事過程の経過においては変化しないのであり、それゆえ上の枠組みは空想における時間位置の個性性を説明することができる¹¹⁸。

¹¹⁷ 例えば『時間意識講義』§19には「具体的な知覚はいずれもみな、そのような下降の全体的な連続体を内含している。しかし、再生、空想意識もまったく同じ下降を要求するが、ただし、まさに再生的に変様された仕方ですそれを要求するのである」（X, 47）という記述が見られる。ここに登場する「下降」とは把持的変様の重層化を指すと解釈され、把持的構造が空想にも成立しているということが記述されていることが分かる。

¹¹⁸ ただしフッサールは、空想的時間位置の個性化には条件が付くとしている。『ベルナウ草稿』Nr. 19においては「一つの空想、それはしたがって諸々の空想のある任意の「連関 *Zusammenhang*」を包括するだろう。その諸々の空想は、まさにその固有の意味を貫いて、一つの可能的な直観的に統一的な、その中において一つの空想世界が相関者として調和的に構成されてくるような、そのような諸々の空想である。そのような空想世界の内部で、我々は（疑似 - 現実性としての）各々の個体的な空想客観のために各々の時間点や各々の時間持続にとってのある「個体的な」個立化 *Vereinzelung* を持つのである。我々はそのようなものをまずもって空想の最も狭い統一において、すなわちある現前において所持するのであり、その中で等しいものが個体的に区別される。」

（XXXIII, 336）と述べている。この引用では諸々の空想の「連関」が問題になっている。諸々の空想がこの「連関」を結ぶとき、そこでは一つの空想世界が構成されるのだという。そしてこの「連関」が成立している場合、その内部では時間位置、ひいては対象の個性性が成立するとされている。反対に上記の連関が無い空想における時間位置、すなわち互いに無関係の空想における時間位置同士は連関を持たないとされ（vgl. XXXIII, 291）、これらの空想においては時間位置の個性性は成立しないと考えられる。つまり、それぞれの空想には確かに空想的時間が存しているが、しかし空想同士が連関を持たなければ空想における時間は別々の時間であり、それらの時間における時間位置同士の関係を論じることは無意味である（これは Bernet[2004]も指摘している。38、39 頁を参照せよ）。この意味で、知覚における時間がいついかなるときも唯一のものとして与えられるのに対し、空想における時間位置は必ずしも確定的ではなく、「絶対的」ではないとされている（「しかしながら単なる虚構においてはあるものが必然的に欠けている。[すなわち]絶対的な時間位置、「現実的な」時間 [である]」（XXXIII, 328））。

2.4.5. 初期と中期の時間位置の個性化の議論の比較、検討

ここまでの考察を整理してみよう。まず、初期『時間意識講義』では意識において絶えず生じる感覚によって現在の位相が決定され、その位相の個性が生じるとされている。この枠組みでは、一度感覚が生じた現在および過去の時間位置の個性は説明できるが、感覚が生じていない将来および空想の時間位置の個性は説明できないことになる。少なくとも、管見の及ぶ限り、初期時間論では将来および空想における時間位置の（それどころか対象の）個性は論じられていなかった。他方で中期『ベルナウ草稿』では、あくまで本研究の推定ではあるが、予持・把持およびそれらの絡み合いによって意識位相（＝時間位置）同士は不変の順序関係を形成し、この順序関係が時間位置に個性・同一性を付与している、という説明がなされていたのだと考えられる。また仮にこの説明が誤りであったとしても、少なくとも『ベルナウ草稿』の記述から、将来の時間位置や空想的時間の時間位置（ひいてはそこに位置づけられる対象）にも個性が認められていることが分かった。

上記に関して示唆的なのは、初期の議論で将来や空想の時間位置の個性に対する不備が見逃されているという点である。仮に初期のフッサールの関心が時間そのものの特性としての時間位置の個性・個性化であったのなら、未来の時間位置の個性を説明できないということ（そもそも未来の時間位置に言及すらしないこと）、そして1917年までこの不備に気が付かなかったというのは不自然ではないだろうか。だとすると、フッサールの関心は時間それ自体にあったのではなく、別のところ、つまり、知覚において生じる時間的対象の構成にあったからではないだろうか。実際、フッサールは確かに『時間意識講義』の§31の冒頭で「客観的時間についての意識や、まずもって〔当面の課題として〕同一な時間位置の意識が生じるのは如何にしてか」(X, 64)という問いを立てているが、この直後に「上記は、個体的で時間的な諸対象や諸経過の客観性の構成についての問いと、最も緊密に連関している」(ebd.)とも述べている。これは、時間位置の個性化を時間的対象の構成の問題との関係で問題にするのだというフッサールの見通しを表す記述であり、当時の彼の関心が時間的対象の構成にあったことを示していると考えられる。また、知覚における時間的対象の個性のみを問題にしている限り、空想および将来の時間位置の個性は論じる必要が無く、それゆえ初期の時間位置の個性化議論でも特に問題は無い。しかし中期では体験流の普遍的な時間的構造が問われるようになったため、初期の知覚の対象のみに妥当する枠組みが廃棄されたのだと考えられる。

このように初期・中期の時間位置の個性化の議論やその議論の妥当範囲、そしてその変遷からも初期時間論と中期時間論の問題の違いが明らかとなる。すなわち、初期では対象がどのように時間において特定の位置を占めるものとして構成されるかということが議論され、他方、中期ではそのような対象が与えられてくる体験がどのような時間的秩序の下にあるか、対象一般に個性を与える時間的秩序とはどのようなもので、それはどのように生じてくるかが論じられている、ということが明らかとなった。この結果も、第二部第三章で示した、初期時間論と中期時間論の問題についての考察を支持するものと言えるだろう。

第三部 後期時間論における予持

3.0. はじめに

序論でも述べたように、後期時間論では予持概念はあまり記述されていない。この状況は、本研究第二部で確認した初期時間論の状況と似ているようにも見える。しかし、中期『ベルナウ草稿』において予持概念があれほど詳細に記述されており、そしてその記述に基づいて体験流の時間的秩序が記述されていたことを踏まえると、後期時間論では予持がほとんど無視されているというのは注目すべき事柄のように考えられる。というのも、同じ「予持を無視する」という状況でも、『ベルナウ草稿』以前の初期時間論におけるそれは、単に予持の重要性が発見されていなかったためだとも考えられる¹¹⁹が、後期時間論のそれは、『ベルナウ草稿』の詳細な記述を意図的に無視した結果だと考えられるからである。では、後期時間論で『ベルナウ草稿』の記述が無視されている理由とは何か。フッサールの単なる気まぐれという可能性を考慮に入れなければ、ここで考えられる可能性は二つだろう。すなわち、一方は(1) 中期『ベルナウ草稿』で記述されていた内容が誤りで、後期では中期と同じ問題が、中期とは別の仕方では扱われているという可能性であり、もう一方は(2) 後期ではそもそも中期とは別の問題が扱われており、それゆえ中期の問題を扱うのに必要だった予持概念も扱われなくなっているという可能性である。本研究は(1)の可能性を否定し(2)の可能性を採る、すなわち、中期の記述は間違っておらず、少なくともフッサールは後期においても中期の考察結果を維持しており、そしてそのうえで後期では中期とは別の問題に取り組んでいる、というのが本研究の仮説である。第三部ではこの仮説の検証を行う。

具体的な考察は次のように進められる。まず第一章では『C草稿』のいくつかのテキストを確認し、テキストの内容も踏まえながらそこで見られる予持の性格を確認していく。これにより、中期で記述されていた予持が、簡素にはあるが、後期『C草稿』においても維持されていること(したがって上記の(1)の可能性が否定されること)が確認される。さらに、それらのテキストでは予持についての記述が主導的な役割を果たしておらず、別の問題が主題になっていること(したがって(2)の可能性が肯定されること)を確認する。

3.1. 後期『C草稿』における予持概念

後期『C草稿』において予持が記述されている箇所は限られている。『C草稿』の大部分はフッサール全集資料版の第VIII巻に収められているが、この巻で「予持」や「予持的」という言葉が一度でも登場するのは、Nr. 3, 21, 24, 25, 28, 32, 49, 54, 55, 61, 62, 64, 67, 69, 79

¹¹⁹ これまでの総括も兼ねて、初期時間論における「予持を無視する」という状況を正確に表現すれば次のようになるだろう。すなわち、初期時間論においてフッサールは予持の重要性に未だ気づいていなかったし、また初期において彼が試みていた記述(知覚対象の時間的拡がりの成立の記述)も件の予持の働き無しで十分可能だった、というのが本研究の見立てである。

においてであり、さらにこの中で「予持」ないし「予持的」という言葉が2回以上登場するのは Nr. 21, 32, 49, 62, 79 だけである¹²⁰。これらの中で予持の役割や機能についての記述が見られるのは Nr. 21, 32, 62 である。また、全集 XXXIV 巻には『C 草稿』の一部の C5 草稿が収められており、この草稿においても予持についての記述が見られる。よって、以下ではこれら四つのテキストに依拠して、後期時間論における予持の実態を探っていく。

3. 1. 1. 後期『C 草稿』における予持についての記述

まず Nr. 21 の記述から確認していこう。このテキストは 1930 年 8 月のものであり、編者の D. ローマーが付けた表題にもあるように、ここでは超越論的主観性の過去・未来地平、そしてそれを背景として眠りと覚醒、ひいては死の問題が扱われている (vgl. Mat. VIII, 87)。上記の問題を扱う中で、流れゆく知覚における予持・把持の働きが論じられている。予持についての記述には、例えば以下のようなものがある。

知覚現在は流れつつ - 前方へと流れ行くような知覚現在であるだけではない、つまり、前方へと未来に向けられているだけ、したがって生き生きした現在それ自身のうちに横たわっているような最も根源的な未来をそれ自身のうちに伴うだけ、ではない。知覚現在は、そう、他方で、流れ去っていくのであり、この向けられてあることの予持的ではなく把持的な変様なのである。[...] 現在には、未来 - へと *Auf-die-Zukunft-Hin*、が横たわっているのである (もちろんここでは志すこと *Tendieren*、意志的な自我 - 努力は思念されていない)。「ついさっき」には、変様として、ついさっき - 未来へと - 存在して - いた *Soeben-auf-die-Zukunft-hin-Gewesen-Sein*、が横たわっている。

(Mat. VIII, 93)

引用の前半では「知覚現在」、つまり知覚における現在の位相が、未来地平 (それも「最も根源的な未来」と呼ばれる地平) を伴い、それにより知覚作用が「流れつつ - 前方へと流れ行く」ことが確認されている。そして引用後半では、この反対として「流れ去っていくこと」、ないし「把持的な変様」が登場しており、このことから前半に登場する未来地平が予持的な変様によるものとされていることが分かる。さらに引用後半では『『ついさっき』』においては、

¹²⁰ なお、『C 草稿』の全ての草稿が全集資料版 VIII 巻に収められているわけではなく、全集 XV 巻には C1 草稿 (Nr. 38)、C3 草稿 (Nr. 7)、C11 草稿 (Nr. 11, Beilage X)、C16 草稿 (Nr. 32, Beilage XX, XXI)、C17 草稿 (Nr. 19, 20) が、全集 XXXIV 巻には C2 草稿 (Nr. 20)、C3 草稿 (Nr. 11)、C5 草稿 (Nr. 9)、C7 草稿 (Nr. 25)、C16 草稿 (Nr. 19, 24)、C17 草稿 (Nr. 10) がそれぞれ収められている。これらのうち *Protention* ないし *protentional* という言葉が複数回使用されるのは XXXIV 巻の Nr. 9 のみである (上記の言葉が一度でも使用されているテキストは、XV 巻では C17 草稿 (Nr. 20, vgl. XV, 350)、C16 草稿 (Beilage XX, vgl. XV, 355)、XXXIV 巻では C7 草稿 (Nr. 25, vgl. XXXIV, 386) である)。

変様として、「ついさっき - 未来へと - 存在して - いた、が横たわっている」とある。つまり、知覚現在には「未来 - へと」、予持的志向が結びついているのだが、この知覚現在が把持的変様を被り「ついさっき」になったときには上記の予持的志向も同様に把持的変様を被り、「ついさっき - 未来へと - 存在して - いた」になるとされており、予持の把持的変様、あるいは P 把持が記述されているのだと考えられる。引用前半の予持的地平についての記述も併せて、この箇所の記述は中期『ベルナウ草稿』とほとんど同じ（ただし極めて簡素であり、R 予持についての記述も除く）記述だと解釈できる。

中期『ベルナウ草稿』と同様の記述は他の箇所にも見られる。まず予持的連続体に関しては、次のような記述が見つかる。

この原現象的な二面的地平 [=把持的地平と予持的地平] が、ここでは核ないし流れゆく核現在（素朴な知覚現在、原印象的）との連関において地平と呼ばれる。しかし、両地平はある別の意味で満たされている *ausgefüllt*。すなわち第二次的な志向性でもって、[つまり] 今（今の各々の点と具体的に流れる諸々の原印象）に属するたった今 - 意識の連続性でもって満たされているのであり、その連続性それ自身は流れゆく共現在であり、予持の全体的連続性にも同様のことが言える。

(Mat. VIII, 94)

この引用では予持的地平と把持的地平について、把持的地平に焦点を当てた仕方で記述がなされている。引用前半においては両地平が「核ないし流れゆく核現在」、つまり知覚与件によって満たされていることが確認されるが、その直後から後半にかけて、両地平は「第二次的な志向¹²¹」によっても「満たされている」と述べられる。すなわち知覚現在に付随する非 - 現在の地平は、自己意識的志向性の連続体によって成立するとされており、この事情が予持的地平にも把持的地平にも妥当するとされている。したがって、ここでも志向的連続体を形成する予持についての言及を確認することができる¹²²。

¹²¹ 「第二次的」という表現はブレンターノから受け継がれたものであり、これは意識それ自体に対する自己意識的構造を指すものだと考えられる。これに関しては本研究第一部第一章第一節も参照せよ。

¹²² 他にも「したがって我々はその時、傾向的なものにおいて *im Tendenziösen*、原現象的な充実における予持的な流れることと、絶えず予持的な志向、しかも絶えず予持的な地平を予描している志向との区別を持つなどということになる。他方で、その時々には充実する今点の、鳴りやんでいき、そしてそれと共に絶えず変様していく変転としての把持的な流れ去り [もある]。また予持的な前方へ志向することの流れ去りや、今という形式においてそれ自身で充実されるものの流れ去り [もある]。そして流れ去り、鳴りやみはそれ自身で絶えず流れ去り、それ自身で鳴りやむのであり、それは終わりなく、完全に空虚な非区別性まで絶えず充実と際立ちを失いつつそうなるのである。」(Mat. VIII, 94) という記述が見られる。引用部の前半では予持が「原現象的な充実における予持的な流れること」と「絶えず予持的な志向」とに区分されている。記述が簡素で曖昧ではあるが、これらは予持的連続体における異なる部分を指していると考えられる。これは予持自身を予持することにより絶えざる志向的連続体を形成する予持についての記述だと

上記は『ベルナウ草稿』において記述されていた予持と同じだと考えられる記述であるが、このテキストでは『時間意識講義』や『受動的綜合の分析』のものと同じと解釈できる予持も見られる。

生き生きした知覚現在の核構造は、それ〔＝生き生きした知覚現在〕の特別性に対応しつつ把持における核構造を構成する、〔すなわち、〕流れることにおいて構成される新鮮な過去（例えば、把持的変転において構成された統一であるような統一的メロディ）を構成するのである。その時、場合によっては広い意味において現在と呼ばれるような一つの継起的全体が生じてくるのであり、〔例えば〕現在的に鳴り響くメロディが生じてくるのである。この「新鮮な過去」はその構造を未来として前方へと投げるのである。その構成された過去に適する仕方未来は合地平的に予描されるのであり、それ〔＝未来〕は、把持的な意識様式の変転が、構成を行う意識様式としての予持的なものの中へと登場してくることで、予描されるのである。連合的な合原法則性——それは受動的に期待されたものに合致するものとしての将来的なもの、受動的な予描である。

(Mat. VIII, 95)

引用では、知覚の時間構造（把持・現在・予持）の中で「新鮮な過去」としての時間的对象が構成されるという場面が問題になっている。記述によれば、知覚は対象の把持された経過を「前方へと投げる」のであり、それによって未来が予描されるのだという。これは本研究第二部第二章第六節で確認した把持によって規定される予持と極めて近いものだと考えられるのであり、それゆえここでは『受動的綜合の分析』に登場していたものと類似の予持が記述されているのだと考えられる。以上より Nr. 21 に登場する予持は、どれもかつて記述されたことのある予持だと言える。

Nr. 32 の記述も確認しよう。これは 1932 年 7 月 9 日に書かれたものであり、フッサール自身が付した表題にもあるように、超越論的エゴの自己時間化が論じられている。ここでは「今 *Jetzt*」と「さっき *Soeben*」と「来たるもの *Kommende*」というエゴの時間的な広がり、これらを取りまとめる原基的 *primordial* なエゴのあり方が論じられている（詳しくは本研究の第三部第二章第三節で論じることになるだろう）。上記の時間的な広がりとの関係で予持（および把持）が登場する。

考えられる。すなわち、前者は予持の志向的連続体においてその都度の原現前によって充実されている部分を指し、後者はそれ以外の、原現前によって充実されずに空虚なままに留まる部分の予持的地平を指すと考えられる。これは『ベルナウ草稿』の Nr. 1 で確認できる記述だと考えられる（vgl. XXXIII, 9, 10, 本研究第一部第二章第二節を参照せよ）。さらに、より明示的な記述として、その後の箇所では「予持的な前方へ志向することの流れ去り」が記述されている。ここに登場する「流れ去り」は把持的変様を指すと考えられるため、先に指摘した箇所と同様、ここでも P 把持が記述されていることが分かる。なお、引用の後半では「流れ去り、鳴りやみがそれ自身で流れ去る」という事象、つまり把持の把持についての記述も見られる。

したがって我々は原基において瞬間的な現実的知覚の一性 *Einheit* を所持するのみならず、それ [=現実的知覚] との統一において把持的な意識を、さっき *Soeben* についての意識を持つのであり、予持的な意識を、まさにいま来ているもの *Soeben Kommende* についての意識を所持している。しかしさっき *Soeben* は一つ *eins* なのではなく、一つの恒常的形式の一つの全体的連続体なのである。

(Mat. VIII, 129)

引用では知覚の時間的な広がり記述されている。知覚においては瞬間的な現在の意識を持つだけではなく、これと結びつく把持的意識および予持的意識を所持するとされている。この箇所では予持が「まさにいま来ているものについての *vom Soeben Kommende*」と表現されており、予持的に意識されているものにも *Soeben* という言葉が当てられている。それゆえ引用末尾の *Aber das Soeben ist nicht eins* という一文も単に把持についてのみに妥当するものではなく、予持にも妥当するものと考えられる。よって引用では、志向的連続体を形成し、現在の位相に結びついた未来地平を形成する予持が記述されていると考えられるのであり、これは『イデーニ I』や『ベルナウ草稿』で記述されていた自己意識的予持と同様の予持が記述されているのだと解釈できる（本研究第一部第二章第二節、第四節を参照せよ）。このテキストでは他にも、S. 129¹²³, 131¹²⁴で「予持」「予持的」という言葉を用いた記述がなされているが、これらの記述でも、今へと来たろうとするもの、まさにそのようなものとして今が変化したものが予持という言葉で表現されている。つまり、このテキストにも中期までの内容を超越するような記述は無いと言える。

Nr. 62 についても同様である。これは 1934 年の 2 月 15 日に書かれたものであり、再想起や連合といった、過去の対象ないし出来事を再生される際の意識経験が問題になっている。この文脈において、予持・把持が登場する。早速以下で見ていこう。

根源的に「事態は次のようになっている」。流れにおいて私は充実領野を伴って流れゆく現在を持つのである、〔すなわち、〕把持的、そして予持的地平を持つのである——流れにおいて志向が（志向全体が）把持化されつつ、今 *Jetzt* がそれ [=志向全体が把持

¹²³ 「今しがた流れ去ってしまった、あるいは今しがた流れてきている諸々の知覚の把持と予持を伴った同時性におけるこの知覚することの現在」(Mat. VIII, 129) という記述が見られる。

¹²⁴ 「原基の流れゆく存在は連続的な原準現在化諸様相——第一段階の準現在化諸様相による存在なのである。しかしながら、これらの諸様相（把持的、そして予持的諸様相）において変転してしまっている、そして変転しているような、そのような原今へと立ち返る場合、我々は同一的なもの内容として流れゆく恒常的な世界知覚を優先させてしまっていた」(Mat. VIII, 131) という記述が見られる。ここで言われている「原基」や「世界知覚」については第三部第三章で確認すると、ここでも「今」が連続的に変化したものとしての予持的・把持的地平が論じられていると解釈できる。同じページの「把持的、そして予持的に変転する原今」(ebd.) という表現も同様の事態を指すと考えられる。

化されていくこと] と一体的にその把持へと (移行しつつ、) 予持が連続的に充実化されつつ (規定されつつ) [私は把持的、そして予持的地平を持つ]。

(Mat. VIII, 265-266)

引用は「Ursprünglich:」という言葉で始まっており、そのことからこの箇所は根源的経験、すなわち知覚についての記述だと考えられる。この箇所でも、知覚における現在の位相は非現在の地平を有しており、予持は未来的地平を形成する働きとして記述されている。ここで予持的地平は「連続的に充実化され」と述べられており、その都度の予持的地平は充実された一点とそれ以外の空虚な部分を持つのだと考えられる。これは『ベルナウ草稿』Nr. 1 (vgl. XXXIII, 9, 10、本研究第一部第二章第二節を参照せよ) で記述されていた内容と同じものだと解釈できる¹²⁵。

さらに上記の引用の直後、次のような記述が確認できる。

[また] この流れゆく生じること **Geschehen** それ自体がこの構造とそれ [=流れゆく生じること] のその都度の内容において把持化され、そして予持化されつつ、[この流れゆく生じることが] その都度の今として (その地平と共に具体的に) 充実されつつ [私は把持的、そして予持的地平を持つのである]。まさに上記と共に、流れることにおいて、瞬間的な全体把持、今位相そして全体予持が、この全体 [=全体把持、今位相そして全体予持] それ自身が流れることから区別され得るのであり、この全体の諸々の把持等々において区別され得る。[...] 各々の全体位相はまさに「今」ある、各々 [の全体位相] は今の契機としてその全体予持を所持するのであるが、しかし未来 - 「志向」等として所持するのである。

(Mat. VIII, 266)

この引用は前の引用に直接つながっている。引用前半では「流れゆく生じること」、つまり前の引用で記述されていた、予持的・把持的地平を伴う現在が流れにおいて意識に与えられることそれ自体が、「把持化され、そして予持化され」るのだとされている。つまりこの中では、今に伴う予持的・把持的地平それ自体が予持・把持されるのだと考えられる。引用の末尾でも「全体予持」つまり連続的予持が今に一つの継起として含まれることが確認されて

¹²⁵ 同様の記述として「(絶えざる流れゆく原現在の契機としての) 各々の具体的な現在において我々は、他方で充実位相たる今でもって予持を (予持によって) 現実化しながら、「彗星の尾」たる把持を持つのである。流れることにおいて、新しく登場してくる充実は明らかに、変転する予持との絶えざる総合の中へと登場してくる。」(Mat. VIII, 267) というものが見つかる。ここでも、予持的連続体における充実した一点 (とそれ以外の空虚な部分) が区別されている。また S. 270 には「瞬間的な具体的現在の把持化 (そして同時に予持化) の、前進的に流れつつ拡張されていく連続体」という表現が見られる。記述が簡素なため曖昧な点も残るが、これも自己意識的予持・把持が形成する予持的・把持的連続体を指す表現だと考えられる。

おり、これを踏まえると、この引用では R 予持や P 把持（および R 把持や P 予持）が記述されているのだと考えられる。これも『ベルナウ草稿』における記述のうちに同様のものを見つけることができる（vgl. XXXIII, 13, 14、本研究第一部第二章第三節を参照せよ）¹²⁶。

さらに、与件志向的な予持についての記述も見られる。

再想起において、私は絶えざる予持において未来に向かって生きるのである。そして、
〔知覚における〕予持がそうであるように、次に予描されたものが、不完全に規定されつつ、〔それでも〕充実される、しかししばしば〔最初に思い描いたのとは〕「別様に」
（まさに一般的な存在論的形式においてではあるが）〔充実される〕。遠地平〔に
は〕曖昧〔である〕。

(Mat. VIII, 266)

引用冒頭に「再想起において」とあることから、ここで記述されているのは再想起における予持であり、つまりここでは知覚における予持の働きを、後から再想起する場面が記述されている。この予持に関しては、「別様に」充実される可能性が示唆されており、「遠地平」、すなわち時間的に遠く隔たった出来事の予描が「曖昧」とされている。以上を踏まえると、ここでは 1907 年以前や『受動的綜合の分析』に登場する、与件志向的な予持が記述されているのだと考えられる（本研究第二部第一章および第二章第六節を参照せよ）¹²⁷。

また、やや特殊な形ではあるが、与件志向的な予持についてのものと見なせる記述もある。

¹²⁶ 同じ内容の記述として「そして、ある位相の予持的な地平は、流れることにおいて把持化しつつ、単にこの予持的な地平に留まるのではない。そうではなくて、それ〔＝予持的地平〕は、それ〔＝予持的地平〕に後で充実を与えるようなものとの綜合において登場してくるのであり、そしてこの綜合でもってそれ〔＝予持的地平〕は自らを把持化するのである。」(Mat. VIII, 267) というものが見つかる。ただし、ここで記述されているのは「予持的地平」の「把持化」、つまり P 把持のみである。

¹²⁷ 議論の本筋からはやや逸脱するが、これを「再想起における予持」として見る場合、ここにはこれまでの議論には見られなかった点がある。本研究第二部第一章第二節でも扱ったように、『時間意識講義』§14 や§24 では再想起における予持が記述されていたが、これらの箇所では記述されていた予持は「再 - 充実化」(X, 53) されるものとして記述されており、再生であるということに由来する既知性が強調され、再想起における予持の幻滅は、少なくとも明示的には記述されていなかった。しかし、知覚において与件志向的な予持の幻滅の可能性が存在し、そして再想起がかつての経験の再生であるならば、再想起においては予持の幻滅も再生されるはずである。他方、上の引用では予持の幻滅が再生される可能性にも言及があり、その点でこの記述はそれまでのものとは一線を画すと言える。もっとも、全集資料版 VIII 巻の Nr. 62 には「しかしながら、私は今の顕在的な再想起においてその都度の予描を伴った、充実されていない予期地平を、そうは言っても予描として未だ充実されない仕方を持つのみではない。私は私の、目指された、せいぜい（個々のものにおいて、まさに予描において）望まれ erhofft、そしてそうは言っても見知らぬ、未規定的な、『知られざる』未来を持つのみではない。むしろ、未来は既にあったのであり、既に完全に規定されていたのであり、まさに既に生じた過去であり、『以前のもの』に対する『以後のもの』として存在している」(Mat. VIII, 266-267) という記述が見られるのであり、再想起における予持が既に規定されてしまっている、という考えは、後期においても維持されている。

自我の能動性 *Aktivität* は予持的に方向付けられており、未来へと、直接的に方向付けられており、そして、将来的に遂行されるべき諸作用を伴った、錯綜した諸々の投企において方向付けられている。

(Mat. VIII, 268)

この引用は知覚ではなく、知覚よりも高次の能動的意識作用を問題にしていると考えられ、それゆえ単なる知覚与件ではなく、何らかの意識作用や行為（「将来的に遂行されるべき諸作用」）を志向し、それが実際に与えられることで充実する予持が記述されていると考えられる。これは意識作用や行為それ自体を知覚する際のある種の与件志向的予持だと考えられる。すなわち、将来の意識作用や行為が知覚されることにより充実したり幻滅したりする予持だと考えられる¹²⁸。以上より、Nr. 62 においても中期までの内容を超え出るような記述は無かったと言える。

最後に、全集 XXXIV 巻の Nr. 9 (C5 草稿) の記述を確認しよう。このテキストは 1930 年の夏に書かれたものとされており、「原生き生きとした現在」(XXXIV, 162) への現象学的還元が論じられている。予持と把持は、この還元が明らかにする「根源的に流れゆく存在」(XXXIV, 165) を構成するものとして登場している。

このテキストにおける予持についての直接的な記述には、例えば次のようなものがある。

純粹な、絶対的な現在は、その多様な「いちどき *Zugleich*」それ自身において、一つの連続性を含んでいる。それ [=一つの連続性] において登場してくる個々の諸契機を、[すなわち] それ [=一つの連続性] における合知覚的な、したがってそれ自身で再び絶対的に現在的な諸体験を、超越論的自我の絶対的に現在的な諸体験と呼ぶ場合、それら [=絶対的に現在的な諸体験] には、さっきあった今についての意識としての諸体験が属する。それらは把持的諸体験と呼ばれる。同様に、絶対的な現在の構成要素 *Gegenwartsbestand* には仮定的な諸傾向が、[つまり] 将来的なもの、やって来ているものがその中において先意識される *vorbewusst* ような諸体験としての予持的諸体験が属している。

(XXXIV, 166-167)

引用では、絶対的な現在の構成要素として「予持的諸体験」と「把持的諸体験」というもの

¹²⁸ ただしこの知覚には知覚の主体である主観性の能動性が関与すると考えられ、その点においてここで記述されている場面は中期までで想定されているものと異なるのかもしれない。しかし仮にそのような想定がなされているとしても、それでここでの予持に新しい特性が付け加わると思われえない。引用の後ろではしばらく予持についての記述は見られないため、ここで記述されている内容は曖昧なのだが、しかし詳しい記述が省かれているということからも、ここでは特に新しい内容は述べられていないのだと考えられる。

が想定されている。把持的諸体験においては「さっきあった今」が、予持的諸体験においては「将来的なもの、やって来ているもの」が意識されているのだとされている。それゆえ、ここに登場する予持・把持は、自己意識的働きによって志向的連続体を形成し、現在に結びついた未来地平・過去地平をもたらすものと考えられる。「予持」ないし「把持」という言葉は使われていないが、引用の前の段落では、把持的諸位相や把持されているという状態が *Soeben* という言葉で表現され、これを用いて把持的変様についての記述が行われている。これによれば、今の位相（「原今 *Urjetzt*」）は「さっきあった *Soeben-Gewesen*」へと絶えず変様するのだが、この変様に際しては、今の位相と「いちどきに」意識されていた「さっき - あった、は〔原今の変転と〕同じ仕方においてさっき - さっき - あったへと変転する」（XXXIV, 166）とされている。この記述を見るに、ここで *Soeben* という言葉を用いて記述されているのは、自己意識的把持によって構成される把持の志向的連続体である。そして、これと対を成すものとして「連続的な未来の地平」（*ebd.*）が登場しており、この記述との連関において引用箇所が登場する。したがって、ここでは予持の志向的連続体とそれを可能にする自己意識的予持が記述されているのだと解釈できる¹²⁹。同様の予持は『ベルナウ草稿』や『イデーニ I』でも見つかる（本研究第一部第二章第二節、第四節を参照せよ）。以上より XXXIV 卷 Nr. 9 においても、中期までの予持の記述を超え出るようなものは見られないということが出来る（ただし、「予持的」という言葉が用いられている記述がこのテキストにはもう二か所あるが、ここではまだ扱わない）。

以上より、後期『C 草稿』における予持についての記述は、そのほとんどが（というより確認してきたものは全て）中期までに確認されていたものだということが分かった。さて、初期と中期のそれぞれの予持の性格は相異なっており、そしてそれと対応して、それぞれの時期で扱われていた問題も異なり合っていたのだ。では、中期以前のものと同じ予持が記述されている後期時間論においては、中期以前のものと同じ問題が扱われているということになるのだろうか。後期において確認された、中期までの予持記述の再演は、何を意味しているのだろうか。

¹²⁹ 上の引用以外にも予持についての同様の記述が見られる。まず、上記の引用の直後では「第一の志向的諸体験はここで原現在の諸体験として、そして原現在を超越する諸体験として証示されており、それらは「把持的諸体験と予持的諸体験」という標題を担っている。それら〔＝把持的諸体験と予持的諸体験〕は一つの中心的体験核から放射している。この体験核は把持でも予持でもなく、我々はそれを体験現在の源泉点と呼ぶ。」（XXXIV, 167）という記述が見られる。ここでも予持（および把持）は現在に結びつく予持的（把持的）地平を形成するとされている。さらに後ろの箇所では「再 - 準現在化」（XXXIV, 170）が問題になっており、そこでも「原本的な現在化のように流れつつ存在しており、そしてそれ〔＝現在化〕の志向的に変様する繰り返しとして、過ぎ去った現在を、あたかも新しく、それ〔＝過ぎ去った現在〕の流れの把持的予持的諸変様において生きぬくような、そのような再 - 準現在化」（XXXIV, 170）という記述がある。ここでは想起において再生された知覚構造における予持的・把持的変様が問題になっている。簡素な記述のためやや曖昧だが、ここで言われている予持的・把持的変様も、現在が被るものであり、来るべき今やかつての今の連続体から成る予持的・把持的地平を形成するものと考えられる。

3. 1. 2. 後期における予持の希薄さ

当然ながら、中期までの予持記述が後期において繰り返されているからと言って、後期において扱われている問題が中期までの問題と同じであるということにはならない。というのも、この第三部冒頭で述べたように、後期においてフッサールは予持をそれほど重要なものとしては扱っていないと考えられ、それゆえ後期時間論を性格づけるためにはこの意図的な等閑視まで考慮に入れる必要があると考えられるからである。後期で予持が等閑視されているという事実は、『C 草稿』において予持が論じられている箇所少なからず窺い知ることができるが、予持についての記述が見られるテキストに立ち戻ることでも確認できる。すなわち後期においては、単に予持が論じられている箇所が少ないだけでなく、予持が論じられた場合にさえ予持は中心的なものとしては扱われていないのである。以下で順に確認していこう。

例えば Nr. 21 を確認してみよう。このテキストは編者により a), b), c) の三つの部分に区分されているが、a) の冒頭では「超越論的主観性としての […] 我々」(Mat. VIII, 89) が持つとされる「将来的な生の全体表象」(ebd.)、あるいは個別的な諸目的を秩序づけるような「生の目的」(Mat. VIII, 90) に方向づけられた「将来存在 Hinfortsein」(Mat. VIII, 89) が話題に上っている。このような個々の人間主観が持つ未来について、「規定された、一義的に確固たる見込みなのか」(Mat. VIII, 90) という問いが立てられるが、これに関しては直ちに否という答えが与えられる。つまり、ここでは人間主観が持つ未来の不確定性が主張されており、これが過去の一義性との対比において、「私は - できる Ich-Kann」(ebd.) との関係において論じられている。すなわち、記憶違いや忘却等によって確かに過去も一義的に決まらない場合があるが、しかしそれでも主観は自らの「私は - できる」によってかつて実際に体験されたことを取り戻すことができるとされている¹³⁰。他方で未来の出来事の内容を予描する場合、これは「前想起、前期待」(Mat. VIII, 91) によってなされ、それゆえここには過去に対する振る舞いと類似する点もあるとされるものの¹³¹、結局のところ、未来は確定されない

¹³⁰ 「私の過去やなにがしかの個々の区間や個々の諸経過の記憶の全体は、未規定的であり得るし、それ [= 記憶の全体] の様相存在 So-Sein に関して疑わしかったり単に思い込まれているだけであったりし得るのであり、私は、それがどうであったか、という多くの諸可能性の間で揺れ動き得るのであるが、しかし、私は私の過去を、解明しつつ、追跡することができる kann のであり、私は私の諸々の再想起を常に完全にすることができるのであり、「本当にあった」ことを結局は取り戻すことができる。私の自由、私の能力 (私はできる) の下には、もちろんこれ [= 能力] はしばしばこれでもかと妨げられるのだが、既にそれ自身で、あらかじめ存在しているものへの接近が横たわっている」(Mat. VIII, 90) と述べられている。

¹³¹ 「さて、未来は過去の前 - 投企であり、したがってそこには類似的なものが妥当する。」(Mat. VIII, 91) と述べられている。

ものとされている¹³²。上記の未来の不確実性、非現実性¹³³が指摘された後で、「生き生きした現在」(Mat. VIII, 93)で意識されている未来が問題となり、前節で確認した予持についての記述が登場してくる。根源的経験(=知覚)の一部としての予持の構造を確認しつつ、最終的にフッサールは次のように述べている。

しかし私が存在する、[つまり]私が根源的な現在において存在する一方で、まさに自己能与によって、根源的に直接的な未来だけが証示されるのであり、その未来というのは、現在それ自身において横たわっている未来に他ならないものであり、前進する流れにおけるそれ自身において絶えず現実化する未来である。私の過去から、あるいはその他何らかの仕方で帰納的に前もって描かれているような、遠く広い *weite und ferne* 未来というのは、それがまさに予描である限りにおいて、それが単に合前想起的に与えられる限りにおいて、予想なのである。私が生きていであろうか否かということを、私は確かな仕方では知らない。私が生きていという、そのことを私が体験し、体験してしまった場合、その場合にのみ私は疑いようの無い確実性を持つことが出来る、あるいはある現実的な経験確実性を持つことが出来るのである。未来の現実的な経験、自己能与的な未来の現実的な経験というのは、直接的な現在化(それによって未来は未来であることをやめてしまう)を超えて存在するのではない。

(Mat. VIII, 96)

引用冒頭で登場する「根源的に直接的な未来」は、「現在それ自身において横たわっている」、あるいは「前進する流れにおけるそれ自身において絶えず現実化する」等の特徴から、予持的地平を指すと考えられる。引用ではこの予持的地平との対比で、「遠く広い未来」が論じられている。フッサールによれば「遠く広い未来」はそれまでの経験や知識によって「帰納的に」予描されており、それゆえ確固たる確実性、現実性を持ち得ない。現在化された時にのみこれは確実性・現実性を持つが、「それによって未来は未来であることをやめてしまう」。したがって、未来は本質的に不確実・非現実的にしか与えられないとされている。この引用の直後から c)の議論が始まり、ここでは上記の不確実な未来との関連において、死や眠り、また死の反対のものとしての誕生が論じられている¹³⁴。

¹³² 「未来は、それ [=未来] が私に対して、各々の現在において、私の前想起の能力によって接近可能なような原本的な経験の領野なのではない、[つまり、] 私に対して今、その時々現在の現在において接近可能な、あるいは理念的に接近可能な現実性の領野なのではない。」(Mat. VIII, 92) という記述が見られる。

¹³³ この文脈においてフッサールが言う未来の非現実性とは、未来が無であるとか、空想されたもの(疑似-現実)であるなどということの意味しているのではなく、未だ存在措定されていないという意味だと考えられる。したがって、より適切に言えば「未現実」という言葉で表現すべきかもしれない。

¹³⁴ ここで論じられている眠り、ひいては死・誕生というのは、客観的世界における事實的自我の眠り、死、誕生ではなく、超越論的主観性のそれらだと考えられる。そのような死は「思考不

以上をまとめると次のようになる。このテキストで扱われているのは超越論的主観性が有する未来の不確実さである。そしてこれを論じるための前段階として、超越論的主観性の最も根源的な経験における未来の構造が論じられることになり、そのために予持についての記述（というより再確認）が行われていた。そして上記がひとたび明らかになると、予持は論じられなくなっている。実際、c)において「予持的」という言葉は一度しか用いられていない¹³⁵。つまり、確かにこのテキストでは予持についての記述が見られるが、しかしここで予持は中心的に論じられるべきものとして登場しているのではなく、他の問題を論じるための前段階の議論で必要とされて登場しているに過ぎないのである。

他のテキストにおいても事情は同様である。Nr. 62を確認してみよう。このテキストでは「現在の能動性 *Aktivität* による能動性の目覚めさせ *Weckung*」、つまりかつての自我・主観性による能動的振る舞いが現在の能動的振る舞いにより再想起¹³⁶にもたらされるということが扱われている (*Mat. VIII*, 264)。そのため、このテキストの前半では再想起についての後期時間論に至るまでの考察が再確認されている¹³⁷。この文脈においてフッサールは、知覚と再想起の構造的類似性の確認によって再想起が過ぎ去ったものの再生であることを指摘し、再想起において再生されるものとしての知覚の構造を論じている。先に確認した予持についての記述もまさにそこで登場している。確かに、予持を伴う知覚の構造が論じられてはいるが、しかしこれは知覚が、再生されるものであり、また自我の能動性の基礎を成すからであろう。むしろ問題になっているのは、把持的地平において「覆い隠し *Verdeckung*」 (*Mat. VIII*, 264) の下にあるものがどのように「暴露 *Entdeckung*」 (*Mat. VIII*, 266) にもたらされるかであり、かつての自我の相動性が現在の自我の能動性において再生されること、つまり「自我総合」 (*Mat. VIII*, 268) がどのように生じているかである。また、上記を論じるにあたり、議論の途中で意識流についても言及がなされるのだが (vgl. 269-270)、ここでも

可能」 (*Mat. VIII*, 97) とされ、そのような死（および眠りや誕生）をどのように現象学的に記述するかという問題、いわば現象学の限界問題が扱われている。

¹³⁵ c)において「予持的」という言葉が用いられているのは次の記述においてである。「私が入眠してしまっている場合、そのときにもまだ、-の諸現出、-の諸側面、などなどが合意的にそこにあるのだろうか？もちろん、同時に、「完全に観察されない」背景の問題、現前領野に属する、しかしまた堆積してきた把持的または予持的な背景の問題もある。ある種の仕方において、私は相関的にこの背景へと入眠するのである」 (*Mat. VIII*, 100)。ここでは、入眠している際に与えられている経験がどのようにして構成されるかが論じられており、そこで想定される問題の一つとして予持・把持的背景が登場している。ここで予持・把持は主観的には論じられておらず、たまたま言及されているに過ぎない。

¹³⁶ 「現在において立ち止まる活動性は、過去において覆い隠され、把持化において変転する、類似的なものにおける活動性を活動的に目覚めさせるのである。まさにそれと共に『覆い隠しが廃棄される』のであり、より良く言えば、振り向けることが『繰り返す』の中において充実しつつ変転していくのであり、その中において繰り返された現在が『直観的な像』として、そして『繰り返された』活動性（現実的な活動性の様態）として登場してくる。すなわち、再想起である」 (*Mat. VIII*, 265) と述べられている。

¹³⁷ 大まかに区分しておくとして、S. 264 から S. 265, Z. 14 までは連合を論じ、S. 265 から S. 267 末尾までは再想起と知覚の構造的類似性を論じていると解釈した。

意識流それ自体は問題になっていない。むしろこの流れに対して立ち止まり、この流れを構成する「立ち止まる具体的現在における立ち止まる自我」(Mat. VIII, 269)が問題になっている。まとめると、このテキストにおいて問題になっているのは、体験流において与えられたかつてのものを現在の自我が如何にして再生するかであり、より突き詰めて言えば、流れに対して立ち止まる自我である。そしてこれを論じるにあたり、体験流の時間的秩序、つまり「流れること」を構成する予持・把持は、重要なものとしては扱われていないのである。

最後に XXXIV 卷の Nr. 9 も確認しておこう (資料版 VIII 卷 Nr. 32 に関しては後で扱う)。このテキストでは「原生き生きした現在」への段階的な現象学的還元が論じられているようだ。テキストの冒頭では還元によって「世界信念の主題的遂行を私が遮断すること」(XXXIV, 162)が目指され、「私にとって常に一つの世界が、この世界が存在するという、それ [= 世界] が私にとって存在し、私の覚醒した生の連続的で全体として斉一的な経験から、私にとって、この存在する [世界] として妥当するという」(ebd.)、さらに世界の側の時間性としての「客観的時間性」(ebd.) や、過去や未来における世界が解明されつつ、最終的には遮断される。フッサールにとって「世界の存在、世界経験の射程は私の主題ではない」(XXXIV, 164) ののである。というのも、超越論的経験は「それによって自我は超越論的な、純粋な [自我として]、そして私の純粋な生きることとして、独立的な存在妥当へと至ることができるのであり、しかも、自然的な生やそれ [= 自然的な生] の経験や判断成果に由来するいかなる前提からも完全に独立した仕方 [独立的な存在妥当へと至ることができる]」(XXXIV, 164) ような経験とされているからである。ゆえに世界の遮断が行われた後に残るものは「超越論的自己経験」(XXXIV, 164) ということになる。

したがって、超越論的自我とは超越論的な自己経験、まずもって超越論的な自己知覚の所与性である。その際、超越論的に知覚されたものは私の超越論的現在である。それ [= 超越論的現在] は、特記づけられた意味において直接経験されている。それ [= 超越論的現在] は、原原本的に *uroriginal* それ自身に対して存在しているものとしての自我を、それ自身として直接的に把握することなのである。

(XXXIV, 164)

引用では、超越論的自我が「超越論的な自己経験、まずもって超越論的な自己知覚の所与性」、つまり、超越論的自我が超越論的な自己知覚によってもたらされるのだとされており、また、この時に知覚されるものは「超越論的現在」だとされている。つまり超越論的自我は、まずもって超越論的現在において与えられるとされており、超越論的自我と超越論的現在は不可分に結びついている。

ただし、この節では直ちに上記のような超越論的現在・自我 (これは「原原本的現在」(XXXIV, 165) と呼ばれる) が考察されるのではない。フッサールは上記のような現在と自我を、「主題的に知覚する方向づけられてあること」(ebd.) から区別し、まず後者の考察

から行っている。原原本的現在・超越論的自我は「反省以前に」既にあり、また「主題的に知覚する方向付けてあること」も「自覚されざる現在」(ebd.)だとされる。しかし超越論的自我はこの自覚されざる現在としての「方向づけられてあること」において既に働いており、それゆえ超越論的自我は「方向づけられてあること」よりもなお根源的とされる(vgl. Ebd.)。

上記の二者のうち、最初に問題になるのは「方向づけられてあること」である。これは「流れる、したがって変転する現在」(ebd.)として特徴づけられ、この時間的変転の構造は現在の「志向的変様」(XXXIV, 167)、つまり連続的な予持的・把持的変様として記述されている(この予持・把持の記述は前節で確認した)。ただ、フッサールは次のように述べて、この予持的・把持的変様を考察しないようにしている。

志向的含蓄、つまり把持的な、そしてまたそれと一体的に予持的な「時間化」、この時間化により、超越論的自我は自身に対して、超越論的自我がそれ〔＝超越論的自我〕の流れる原現前において原現前的な志向性を体験する、というような仕方でのみ現在の自我なのであり、また現在の自我たり得るのであるが、そのような時間化の志向的な全体的構造についての、各方面への、そして更なる深みへと達するような開示には、我々はここでは踏み込んでいかない。

(XXXIV, 168)

引用には「把持的な、そしてまたそれと一体的に予持的な『時間化』」というものが登場している。引用の直前までは予持的・把持的変転についての記述がなされており、「時間化」はこれを指すものと考えられる。引用では、このような予持的・把持的時間化を通じて超越論的自我が現在の自我として生じてくると述べられているが、しかしフッサールはここでそのような予持的・把持的時間化の開示には「踏み込んでいかない」としている。また、この引用の直後の段落では、予持と把持の絡み合いについて¹³⁸、「方法論的に、ある種のエポケーおよび超越論的還元によって、人は、この相互内属 *Ineinander* の理解がまずもってもたらしてくる混乱から解放される」(ebd.)と記述されている。つまり、この文脈で予持および把持は「ある種のエポケー」によって括弧に入れられるべきものとされているのである¹³⁹

¹³⁸ 「したがって我々は、流れゆく原現前の記述において、それ〔＝原現前〕において志向的に構成された、それ〔＝原現前〕において『暗黙的に』横たわる超越論的であった *Gewesenheit* と、超越論的あるであろう *Seinwerden*、流れ去っていった *verflossen*、そして到来する *kommend* 現前の超越論的あるであろうに行き当たる」(XXXIV, 168)と述べている。「予持」「把持」という言葉はないものの、文脈から判断するに *Gewesenheit*、*Seinwerden* がそれぞれ把持、予持に相当すると考えられる。また *verflossen*、*kommend* もそれぞれ把持、予持を指すと考えられ、「流れ去っていった、そして到来する現前の超越論的あるであろう」は予持と把持の絡み合いを表現していると考えられる。

¹³⁹ この少し後ろでも、把持的地平や再想起、さらには現在の中でも現在において世界として与えられている「世界現在」が括弧入れの対象になるとされ(vgl. XXXIV, 170)、これに引き続いて「予持的な未来、そして場合によっては前想起において前準現在化された未来に関しても同様

140. この「エポケー」の後、「内在的な時間、それ〔＝超越化する生〕の過去や未来を伴った体験流」すらも「第一の超越」として構成するような、自己超越化的な超越論的自我およびその自己超越化的生が登場するとされているが (vgl. XXXIV, 171) ¹⁴¹、詳しくは記述されないままここでの議論は切り上げられている。しかしこの超越論的自我が何であれ、これを考察するうえで予持および把持は重要視されていないようだ。

3. 1. 3. 中期時間論の予持と後期時間論の予持

以上をまとめると次のようになる。まず、後期『C 草稿』の一部の箇所 (資料版 VIII 卷の Nr. 21, 32, 62、および XXXIV 卷の Nr. 9) では予持についてのまとまった記述が見られた。しかし、これらはどれも中期時間論までに記述されていた内容と同じものであり、ここでは後期に固有の性格を持った予持は記述されていなかった。さらにこれらのテキストを確認すると、そのいずれにおいても予持は中心的な役割を果たしておらず、他の主題的な問題を論じるうえで必要なタイミングでのみ登場していた。これらのことから、①後期においても初期・中期における予持についての考察、初期で扱われた時間対象の構成や中期で扱われた体験流の構成という問題領圏は維持されているということ、また②後期においては予持についての考察を必要としないような問題領圏が扱われていることが分かる。①が明らかになったことにより、フッサール時間論が様々な側面を持つことはある程度示されたのかもしれないが、しかし②には未だ解明の余地が残されている。すなわち、後期において扱われていた問題領圏が未だ曖昧なままである。そしてこれが明らかにならない以上、フッサール時間論の諸側面の関係を論じることはできないのであり、諸側面の関係を解明できないのであれば、フッサール時間論の「多面性」を示すこと、すなわちフッサール時間論は様々な側面を持ち、なおかつそれらの諸側面が互いに関連し合って「時間」という事象を表現している、ということを示すことができなくなる。

ただ、先の考察を思い返してみれば、後期において扱われている問題領圏についてはある程度の見通しが立つ。すなわち、Nr. 21 では超越論的主観性の未来が、Nr. 62 では自我の活動性における再想起が、そして XXXIV 卷の Nr. 9 では自己超越化的生、およびその生の主体である超越論的自我が問題にされていた。これらに共通する要素として、超越論的主観性

である」(ebd.)と述べられている。

¹⁴⁰ ただしここで言われる「エポケー」とは未来的・過去の地平を、あたかも目玉焼きから自身を切り離すように、現在から切り離すことを意味しないし、それゆえ点的で純粋な現在を取り出すことが目的でもない。フッサールは明確に述べていないが、たとえ「現在」であっても、未来的・過去の地平と並び立つようなものであれば、ここでは「エポケー」の対象になるだろう。ここで「エポケー」の後に残るのは、未来的・過去の地平およびそれらに並び立つ一位相としての現在をそれ自身において取りまとめる、より根源的な「現在」であろう。これに関しては第二章第三節で考察する。

¹⁴¹ 第二の超越化として構成されるのは「客観的世界」(XXXIV, 171)である。なお、この箇所は Held[1966]においても論じられている (vgl. S. 89)。

あるいは自我を挙げることができるだろう。もちろん、本章の議論では上記を十分に論じて来なかったし、また仮に本節での読解・議論が十分だったとしても、上で扱ったテキストにおいて後期『C 草稿』における自我の議論が全て尽くされているわけではない。さらに、そもそも『C 草稿』における自我概念の内実を解明しきることは本研究の目的に適うとも限らない。本研究はフッサール時間論の「多面性」を示すことをこそ目指しているのであり、そのために各時期の問題領圏の間に連関が存在することを示さなければならない。これまでの考察では、各時期の問題領圏はいずれも予持との関連において明らかにされていた。だとすれば、完全な解明にこそならないのかもしれないが、後期の自我を予持との関連において論じれば、各時期の問題領圏同士の間には予持を媒介とした連関が見出されるのではない。以上の見通しの下、最後に本研究は予持との関連において自我の解明を行う。

3.2. 中期時間論と後期時間論における自我概念の比較

前章までの考察で、後期でも初期や中期の予持についての記述および各時期の問題領圏が保持されていること、そして後期では予持の記述を必要としない問題領圏としての自我が扱われていることが分かった。この章では、各時期の問題領圏を関連付けるうえでの予備考察として、予持との関連における自我の解明を行う。

しかし、上記の解明は直接的な仕方では困難であろう。というのも、後期における自我は予持についての言及を必要とせずに論じられていたからである。そこで本研究では、予持が詳細に論じられていた中期『ベルナウ草稿』における自我を媒介とする。すなわち、『ベルナウ草稿』で論じられている自我を予持との関連において明らかにし、この中期の自我との関連において後期の自我を明らかにする。また、後期の自我を扱う際には、後期の中でも予持についての言及が比較的多く見られたテキスト（主に資料版 VIII 巻の Nr. 32）を扱う。

『ベルナウ草稿』において自我は Nr. 14, 15 において主題的に扱われ、極としての、『超』-時間的 (XXXIII, 277)、同一的・単一的自我として記述されていると考えられる（これについては第一節で扱う）。Marbach[1974]¹⁴²や田口[2010]¹⁴³も Nr. 14, 15 の元の草稿 (LI 17, L I 20) を参照しているが、『ベルナウ草稿』の他の箇所、特に個体化の議論においても自我という言葉は散見される。しかもそこでの議論を再構成してみると、先述の Nr. 14, 15 とは違い、この自我は（対象とは異なる仕方では言え）各々の時間位置に対応するとされ、それゆえこれは非・単一的な自我だと解釈できる（これについては第二節で扱う）。ただし『ベルナウ草稿』のフッサールは、特に後者の自我を自覚的・主題的には論じていなかった。そのため、これらの自我同士の関係は明らかにされてはいない。

他方、同様の二種類の自我、すなわちそれぞれの時間位相に対応する自我と一つの体験流

¹⁴² Vgl. Marbach[1974], S. 216, 295-297, 321.

¹⁴³ 田口[2010]、93-95 頁を参照せよ。

に対応する単独的自我という二種類の自我は、『C 草稿』においても見出すことができる。本章においては『C 草稿』Nr. 32における二種類の自我を確認する。このテキストにおいてフッサールは現在を二種類に分けており、やや不明瞭ではあるが、それらの現在に対応させる仕方で二種類の自我を記述している（これについては第三節で扱う）。このテキストでは、フッサールは自我の二種類のあり方に自覚的であり、その点において『ベルナウ草稿』の記述とは異なっている。最後に第四節では、『ベルナウ草稿』と『C 草稿』における上記の目線の違いを扱う。

3. 2. 1. 『ベルナウ草稿』における同一的・単一的自我

まず、『ベルナウ』において同一的と特徴づけられている方の自我を、Nr. 14, 15 から確認していこう。Nr. 14 は「私の体験流と自我」と題され、題名の通り体験流と自我との関係が論じられている。まず§1 では体験流の時間的構造が論じられる。この記述によれば、体験流は大まかに分けて三層¹⁴⁴から成り、その最下層は「根源的感觉性」(XXXIII, 275)の領域とされる。高次の層はそれよりも下の層を前提とし、そして最下層の根源的感觉性の領域において構成されている時間秩序、「ある確たる形式の、内在的時間の形式の、一つの流れる連続体」(XXXIII, 274)を受け継いでいる。この階層同士の序列関係ゆえに、根源的感觉性の領域を支配する時間秩序は「必然的に第一の時間秩序」と呼ばれている(vgl. XXXIII, 275)。このような構造を有する体験流において「最も広い意味において私に実的に与えられる全てのもの」(XXXIII, 274)が見出される。上記を確認した後、§2 では次のように述べられる。

我々がとりわけ体験流において持たないものは、自我それ自体、同一的中心、体験流の内実全体がそこへと関連付けられるような極、あれやこれやの内実によって触発され、その結果この内実に対してあれやこれやの仕方でふるまい、その内実を能動的に形成するような自我である。[...] 自我は、あらゆる体験、そして、体験それ自体の志向性の中に存在的に含まれるすべてのものにとっての同一的な極として、そして必然的に「超」- 時間的な自我として、全ての時間系列にとっての極なのである。その自我とは、それに対して時間が構成され、それに対して時間性が、体験領域の志向性における個体的に唯一的な対象性が現に存在するような、しかしそれ自身は時間的ではないような自我である。

(XXXIII, 277)

¹⁴⁴ 三層とは、(a)「一つの自我と自我的なもの全ての抽象 *Abstraktion*」によって見出される「根源的感觉性」の領域、(b)自我および「自我 - 極化 *Ich-Polialisierung*」の顧慮により見出される「触発と反応の領域」、(c)より高次の能作も考慮することで見出される「能動的知性 *intellectus agens* の領域」である (vgl. XXXIII, 275-277)。

体験流における全てのものは何らかの志向性において現れてくるが、ここでの自我は、それらの志向性全てがそこへと収斂されていくような極として想定されている。この極としての自我は二つの性格を持つとされている。第一に、自我は同一的な極としてあらゆる体験と対象に相対しており、対象や体験の多様さに関係なく、常に①同一的、こう言ってよければ単数的とされている。第二に、極としての自我は、体験およびそれを支配する時間に相対するため②『超』-時間的」とされている。ただしNr. 15の記述も踏まえると、これは自我が時間性を全く持たないという意味ではないことが分かる。

Nr. 15でもまず§1で体験流の構造が確認され、次いで§2で「数的に唯一の主観極」(XXXIII, 286)たる自我が記述されている。なお、§1冒頭では体験流の「必然的形式」が「現象学的時間」と呼ばれるという旨の記述が見られ(vgl. XXXIII, 281)、先述の体験流の時間秩序は「現象学的時間」とも呼ばれ得ることが分かる。Nr. 15とNr. 14は基本的に同様の議論を展開しているが、Nr. 14に比べてNr. 15では、自我が自我自身によって反省されるという点が新しく主張されている。すなわち、確かに自我は全ての体験とそこで与えられる対象に相対しているが、これは直接的には確認されず、「後追的なものであるような反省〈において〉のみ、そして時間流において流れ去っていくものの限界としてのみ、自我は把握可能なのである」(XXXIII, 287)。つまり極としての自我は、自我がまさに生き生きと活動している最中ではなく、その体験から少し遅れた反省において、自我それ自身に相対する一種の客観として与えられ、それゆえ自我は主観としての性格のみならず客観としての性格も帯びている。これについては次のような記述が見つかる。

しかし、自我はやはりそれ自身で次のような主観なのである。すなわち、それに対して他の全ての内在的なものが客観であり、同時にそれ自身がそれ自身に対して客観であるような、そしてその場合には自我がそれ自身を、内在的な時間の形式において、内在的な対象として見出すような、そのような主観なのである。

(XXXIII, 285)

引用では自我が自我それ自身に対して客観であり、さらに「内在的な時間の形式において」見出されるとされている。つまり、自我は反省において単に客観として現れるのみならず、他の対象とは違う仕方ではいへ、時間において現れるのである。フッサールの説明を整理すると次のようになる。我々(自我)が自身の体験を反省する場合、どの体験においても、何らかの対象が自我極との何らかの関係において存立している、ということが見出される。このとき、自我極もまた反省する自我に相対する客観として見出される。さて、Nr. 14にもあったように、体験およびその中で見出される対象は、体験流に含まれるものとして時間秩序の下にあり、ともに時間性を有する。極としての自我は上記のような時間的体験・対象の相関者として、これらに随行する仕方で見出され、かくして反省において「自我は時間において活動しているものとして登場してくる」(XXXIII, 284)。ただ既に確認したように、自我

は単に時間において登場するのみならず、全ての体験にとっての同一的極、「あらゆる作用（そして諸触発）の同一性点」（XXXIII, 287）として登場する。確かに自我は対象や体験に随行する仕方では時間の中で見出されるが、時間の中で変転するものとしてではなく、常に同一的な自我として見出される。それゆえ、自我は時間の中にありながら（ゆえに「超 - 」が付くものの「時間的」とされる）、それでいて時間の支配下にはない（ゆえに「時間的」とは言え「超 - 」が付く）。以上から、極としての自我は如何なる時も同一的・単一的であり、『超』 - 時間的」とされる。

3. 2. 2. 『ベルナウ草稿』における非 - 単一的自我

以上で確認してきたのは『ベルナウ草稿』 Nr. 14, 15 における自我であった。ところで、同じ時期の別の箇所でも、明示的な記述でこそないが、自我についての記述が散見される。その中の一つは例えば以下のようなものである。

「各々の」純粹自我に対して、[...] その自我の現実的で内在的な対象である（一度そうであった、さらに今現在としてそうである）ものが決定されるのである。[あるいは、] 任意の内在的に可能的な内容が実在することをそれぞれ任意に設定すること Ansatz に対して、「各々の」純粹自我が、その内在的に可能な内容が真理を持つかどうか、それに対応してある内容がその内在的な存在領域において現実に眼前にもたらされうるかどうかを決定する。

(XXXIII, 330)

この引用では、「現実的で内在的な対象」が「純粹自我」との関係において設定される旨が記述されているが、自我という言葉に対して「各々の jedes」という冠詞が（強調の引用符付きで）付されており、ここから、ここでの自我は非 - 単一的なものとされていることが分かる。ただし、これを前章までの各々の体験流に相対する極としての自我が非 - 単一集まったものだとして解釈する場合、ここでは他の自我を想定しておきながら、対象の措定にそれらの他の主観は参与しないと主張しているように見える。つまり、他者の存在を認めながら、対象の措定は間主観的にではなく、ただ各々の自我によって個別的行われるという、ある種の独我論的主張がなされているようにも解釈できる。またこの自我が、例えば『イデー II』などで記述されている内世界的な、時間・空間的に局所化されている自我¹⁴⁵だと解釈する場合、自我に付された「純粹」という形容詞が不自然である。これらの解釈を回避するので

¹⁴⁵ 『イデー II』では「純粹自我ないしは超越論的自我」（IV, 120）と区別されるものとして、「人格的な主観性」（IV, 185）が記述されている。自我の同様の区別は『デカルト的省察』にも見られる（「同一的極、そして諸々の習慣性の基体としての自我」と、「モノイド」あるいは「全き具体性において受け取られたエゴ」（I, 102））。

あれば、ここでは前章で確認してきた同一的・単一的な自我、各々が各々の体験流を持つような極としての自我の寄せ集めという意味ではない意味での「非 - 単一的」自我が語られていることになる。では、この非 - 単一的自我とはいかなる自我か。対象の措定が「『各々』の純粹自我」に対して行われるとはどういうことか。以下では、この非 - 単一的自我が（暗黙的にはあるが）登場する『ベルナウ草稿』の個体化議論をごく簡単に再構成し、これを入り口としながら問題の自我を論じる。

3. 2. 2. 1. 対象の個体化と時間 - 空間的位置規定の体系

本研究の第二部第四章でも扱ったように、『ベルナウ草稿』では個体化の議論が扱われている。この問題を主題的に扱っているのは Nr. 16-20 だが、他の箇所でもこの問題についての散発的な言及が見られる。

さて第二部第四章第三節でも確認したように、『ベルナウ草稿』でも、対象は特定の時間位置を占めることで個体となり、さらに特定の空間位置を占めることで個体として完全に特定されると考えられている¹⁴⁶。この考えの下、Nr. 17 では「個立化 *Vereinzelung* とはココトイマ *hic et nunc* による個体化 *Individuierung* である」(XXXIII, 300) と述べられている。「ココトイマ」とは個体化の際に対象に与えられる時空間的位置のことを指すと考えられる。個体化が「ココトイマ」によるとされるため、ここでは時空間の規定が「個体化ノ原理 *principium individuationis*」(ebd.) たる「トデ・ティ *tode ti*」(ebd.) と見なされている。「空間 - 時間形式」を「トデ・ティの普遍的な「形式」」(ebd.) とするなどの言い換えが見られるが、これも上記の事情から理解できる。

さらに「トデ・ティ」としての諸々の時空間的位置は互いに無関係ではなく、相互に規定し合いながら、全体で一つの体系を形成するとされている。

我々は次のようにも言わねばならない。すなわち、本質法則的に全てのトデ・ティ規定は一つの統一形式を、一つのそれ自身で規定され、それ自身で閉ざされた全体性を形成している。その全体性はその関係的本質法則を持つのであり、その関係的本質法則によってそのような全体性として規定されるのである。空間と時間の諸公理こそがこの本質法則であり、それらに従ってこそ時間と空間は全体性なのである。

(XXXIII, 301)

引用によれば、全ての「トデ・ティ規定」たる時空間的位置は「関係的本質法則」という時空間的位置同士の関係についての法則（「空間と時間の諸公理」）を持ち、この法則により全ての時空間的位置は統一的に規定されている。これに関しては、より端的な「トデ・ティの多様体

¹⁴⁶ 本研究第二部第四章 104 頁の註 96 を参照せよ。

は「[...] 一つの確定的多様体である」(XXXIII, 302) という記述もあり、全ての時空的位置規定は相互に規定し合い、そうすることで一つの体系、「空間 - 時間形式」を成すとされている。

ところで、対象がなぜ特定の時間・空間位置に置かれることで個体化するのかと言えば、それはこれらの時間・空間位置がそれら自身により個体化しているためである。では如何にして時間位置は個体化するのか。本研究は既に第二部第四章第四節においてこの時間位置の個体化が『ベルナウ草稿』でどのように記述されていたかを確認している。改めて簡単に確認しておく、体験流の一つ一つの位相は互いに予持的・把持的關係を取り結んでおり、この關係は体験流の進行に関係なく維持されている。それゆえ全ての位相は互いに互いを規定し合い、いついかなるときも同じ順序を保っており、この不変の順序關係によって全ての位相は個体性を獲得する。そして、このようにして獲得された各位相の個体性は「イマ」の連続体として、客觀的時間として構成される際にも維持される。以上が、本研究が推定した時間位置の個体化の仕組みであった。さて、上で確認した Nr. 17 からの記述によれば、客觀的な時間・空間位置は「空間と時間の諸公理」によって全体性として規定されるのだが、フッサールはこの「諸公理」が具体的にどのような内容であるかをあまり論述していない¹⁴⁷。本研究の第二部第四章第四節で推定された時間位置の個体化の仕組みと「空間と時間の諸公理」がどのような關係にあるかについての明示的な記述は無いが、これらの「諸公理」の支配が及ぶのはあくまで客觀的時間に対してであり、体験流にはこれらの「諸公理」は妥当しないものと考えられる。したがって、まず体験流の各位相が予持・把持によって個体性を付与され、そのようにしてそれぞれが個体化された位相が「イマ」として並ぶことで客觀的時間が成立し、その客觀的時間にはある種の幾何学的「諸公理」が妥当することになる、という事情になっているのだと考えられる。

以上より、話を時間に限定してまとめると次のようになる。対象は時間的諸公理によって支配された時間体系における時間的位置「イマ」に置かれることにより個体化するのだが、この個体化は諸々の「イマ」の個体性によって可能になる。「イマ」は本来、体験流の今の位相であり、体験流の各位相は予持と把持によって不変的な順序關係を与えられることで個体化し、この個体性が「イマ」にも受け継がれている¹⁴⁸。

¹⁴⁷ 「時間の連続体や、まずもって時間区間一般の理念に属するような公理の全てを体系的に立てるとするのは必要なことなのかもしれない。しかしながら我々はその連続体の構成にとって特別に重要ないくつかの公理で満足しておくことができる。」(XXXIII, 306) と述べられている。この記述の後、フッサールは時間の「無限性の公理」(ebd.)、すなわち各々の具体者が時間的に任意に延長され得るということや、「諸々の時間 はそれ自身で量であるということ」(XXXIII, 307) について記述を行っており、これらを「特別に重要ないくつかの公理」としているのだと考えられる。しかし、少なくとも上記の「諸公理」だけでは、時間位置の個体性を導出することは不可能だと考えられる。おそらくこれらの「諸公理」は、自然的な世界における客觀的時間を支配する、一部幾何学的な諸公理なのだと考えられ、ゆえにそれぞれの時間位置の個体化をもたらすのはこれらの諸公理よりもっと前の段階においてだと考えられる。

¹⁴⁸ なお Nr. 16 の§1 の末尾から§2 冒頭にかけて、個体としての「諸々の過去」とそれが位置づけ

3.2.2.2. 顕在性と非一単一的自我

では対象は如何にして「ココトイマ」に置かれるのか。次の記述を見てみよう。

この顕在的 *aktuell*¹⁴⁹に措定を行う意識は内在的な原本意識としておのずから顕在的に措定的なのだが、この意識は内容の時間位置を原始的に措定し、ある時間位置の形式において、内容を措定する

(XXXIII, 292)

引用では、意識に与えられた内容が位置規定を得る仕方が、特に時間位置に関して述べられている。引用によれば、「顕在的に措定を行う意識」、「原本意識」が、ある対象（ここでは「内容」とされている）を何らかの時間位置に措定するのだという。つまり、対象は顕在的・原始的なものとして意識に与えられたとき、まさにその「今」に位置づけられるのである。引用の直前ではより明確に、「何らかの対象を最も根源的に所持あるいは把捉すること」が遂行されるのは「内容の原始的現在の意識において」だとされている (*ebd.*)。「原本意識は時間位置を『今』として措定する」(*ebd.*)¹⁵⁰のであり、それゆえフッサールは体系を成す諸々の時間位置を「イマ」と呼んでいたのだと考えられる。

さて、時間的体系のどの点にも何らかの対象を措定することができるのならば、そして、その措定に際してどの対象も顕在的・原始的なものとして与えられるのならば、全ての時間位置には、当該の時間位置とそこで与えられる対象を「まさしく今」とするような顕在性が

られるところの「時間位置」が論じられている (*vgl.* XXXIII, 293-294)。この「時間位置」は上の議論で言うところの「イマ」だと解釈できるが、Nr. 16 ではこの「時間位置」の連続体が「一つの『客観的な』時間の連続体」(XXXIII, 294)とされている。このことから、特に「イマ」の体系は客観的時間として特徴付けることができる。同様の記述は『時間意識講義』においても確認できる (*vgl.* X, 64)。客観的時間は「動かない」などと形容され、「(流れるものが共に属する諸多様体の) 統一として、動かない、あるいは客観的な時間が構成されてくる」のは「無限に『流れゆく』時間」においてだとされる (XXXIII, 297)。これについても同様の記述が『時間意識講義』において確認できる (*vgl.* *Ebd.*)。現象学的時間は体験流の時間秩序の別名であったが、これはさらに「内在的時間の形式の一つの流れる連続体」(XXXIII, 274)とも呼ばれていた (前節 136 頁を参照せよ)。つまり、「流れる時間」は現象学的時間、体験流の時間秩序だと解釈でき、ここから、現象学的時間において「イマ」の体系、客観的時間が構成されてくるという関係が明らかとなる。

¹⁴⁹ ここでの顕在性は措定という働き *Akt* がまさにその遂行の最中にあるということを表現しており、例えば『イデーナ I』(*vgl.* III/1, 71-73) で扱われたような、注意の向け換えによって生じる、潜在性 (地平) と対になる顕在性は意味していない。以下の顕在性も全て同様である。

¹⁵⁰ 上記は、本研究第一部第三章第三節で確認した時間様相が成立する際の仕組みと微妙な関係にある。上の箇所を確認した議論によれば、時間様相はそれぞれの位相が持つ核保持性の増大→最大化→減少のプロセスに基づいて決定されるのであり、そして核保持性とは何らかの対象を受け取る実感・手応えだと考えられ、これが最大化した位相が今の位相として特記づけられるのであった。つまり、現在という位相を特徴づけるのは何らかの対象を受け取っているという意識のありようであり、そのように特徴づけられた現在において与えられた対象が当該の「イマ」に位置づけられるのである。

それぞれに想定されるはずだ。映画鑑賞の経験を例にしよう。上の議論を踏まえれば、この映画の各シーンはそれぞれ異なる時間位置に措定され、それぞれの措定はそれぞれを顕在的・原始的に受け取る原本意識において行われる、ということになるだろう。さてこのとき、あるシーンを顕在的なものとして受け取りまさにその「イマ」に措定する顕在性と、別のシーンを顕在的なものとして受け取りまさにその「イマ」に措定する顕在性は互いに異なっている。一方のシーンを顕在的に受け取る際のその顕在性は、その時他方が顕在的に与えられていないことを突きつけるものであり、逆もまた然りである。あるいは、一方のシーンを措定する顕在性は他方を措定することはできず、逆もまた然りである¹⁵¹。したがって全ての時間位置には、そこで生じる出来事をその時間位置に措定するような、当該の時間位置およびそこに措定される対象を「まさしく今」とし、それ以外を「かつての」あるいは「来るべき」「今」とするような、そのような、ある一つの時間位置に対する特別な近さがそれぞれに必要なのである。では、この顕在性が如何に特徴づけられるかと問うならば、これはある認識主観、「自我」にとっての顕在性として規定されると考えられる。

一つのコトイマは、その生き生きした現在と顕在的身体（もしくは方位づけのゼロ点）を伴った一つの自我を前提としている

(XXXIII, 300)

引用では「一つのコトイマ」と「一つの自我」との関係が述べられており、前者が後者を前提する、つまり「一つのコトイマ」が成立するためには「一つの自我」が必要になるとされているのである。そしてこの自我には「方位づけのゼロ点」、つまり時間的・空間的な位置づけの基準点たる「その生き生きした現在と顕在的身体」が伴うとされるが、これは上で問題にしていた、対象の措定のために必要な顕在性のことだと解釈できる。つまり、話を時間に限定すると、ある「イマ」にはその点を「まさしく今」とする「方位づけのゼロ点」が必要であり、この「ゼロ点」を伴う「一つの自我」を必要なのである。ゆえに、もちろん措定される個体的対象とは違う意味でだが、措定を行うこの自我もまたある特定の時間位置に分ちがたく結びつけられている¹⁵²。さらに言えば、「イマ」の体系は、各々の「イマ」を顕在的に捉える自我の集合を必要とする。これらの諸自我はあくまでその「生き生きした現在」によって区別されるのであって、各々が持つ対象・体験の内容に関して区別されているわけではない（本章冒頭の引用で自我が「純粹」自我とされていたのも、この事情によると考えられる）。この各々の時間位置とそこに位置づけられる対象を「まさしく今」として

¹⁵¹ これは Johnstone[1996]がリクールから One's Flesh という概念を借りつつ論じようとした事象とも関係する。

¹⁵² D8 草稿の未公刊部分には「次のように言うことができるだろう。同一的な客観的時間空間性への関係が諸々の主観それ自身を個体化する Man könnte nun sagen: die Beziehung auf dieselbe objective Zeiträumlichkeit individuiert die Subjekte selbst.」(D8, 6b) という記述が見られるが、これも上記の議論に基づいて理解されるべきであろう。

捉える、「イマトココ」の体系と対応して存在する自我の集合（というより体系）こそが、『ベルナウ草稿』で暗黙的に語られている非 - 単一的自我である。

本研究第一部第二章・三章でも確認したように、『ベルナウ草稿』では自己意識的な予持・把持が記述されていたが、これらも非 - 単一的自我を示唆している。まず、知覚は予持的・把持的地平を有しており、これは来るべき予持を志向する予持、過ぎ去った把持を志向する把持によって可能になっているのであった。またそれだけではなく、予持は来るべき把持を、把持は過ぎ去った予持をも志向しており、この予持と把持の絡み合いにより、体験流の全ての位相は予持的にも把持的にも解釈され得るようになり、体験流全体は一貫的な連続性を得るのであった。かくして体験流は将来にも過去にも無限に延び広がり、かつ一貫的連続性を有した流れとして構成される。さらに、それぞれの位相は核保持性を、すなわち何らかの対象を受け取る手応えのようなものを有しており、これが最大化した位相が今として特記づけられるのであった。この核保持性の将来における最大化は、上記の体験流の時間的秩序に則って生じてくるのであり、この核保持性との関連において連続的予持・把持は来るべき、あるいは過ぎ去った核保持性の最大化（何らかの対象がありありと与えられたという手応えの最大化）を、つまり来るべき、あるいは過ぎ去った今を志向するものとなり、体験流に時間様相が与えられることになる。以上が『ベルナウ草稿』における自己意識的予持・把持の全容であるが、まとめてしまえば予持は来るべき、把持は過ぎ去った、予持・核保持性・把持を志向している。さらに踏み込んで言えば、自己意識的予持・把持は非現在的な位相で働く意識それ自体を志向しているのであり、それゆえここでも各々の位相における主観性・自我の存在が示唆されていると言える。

かくして、『ベルナウ草稿』で記述されている二種類の自我のそれぞれの性格と、両者の差異が明らかとなった。すなわち、話を時間に限定して上記の議論を総合すると、二種類の自我は共に、全ての時間位置において体験・対象に随行する仕方で見出される。この点は両者の共通点と言えるだろう。ただし、第一節で扱った自我は全ての体験や対象に対する同一的な極として見出され、そのため変化しない、時間の支配を撥ねつける『『超』 - 時間的』な自我として見出される。あるいは、全ての時間位置に対して同一の関係を結んでいる、全ての時間位置から等しく近い（あるいは遠い）とも言えるだろう。他方、第二節で扱った自我は、各々が特定の一つの時間位置を顕在的なものとして捉えるため、その顕在性に関して時間位置ごとに区別され、少なくとも単一的に統一されることを拒絶するものとして、しかも各々が特定の一つの時間位置に対して分かちがたく結びついたものとして解釈される。別言すれば、非 - 単一的自我の各々は特定の一つの時間位置に対して特別な近さを持ち、その対象・体験の内容によってというよりは、この特別な近さをどの時間位置に対して持つかによって相互に区別される。以上から、二種類の自我は、時間位置および体験流に対する関係に関して相異なるのだと考えられる。

このように時間に対する異なる関係を持つ二種類の自我は、時間の構成においても当然

異なる役割を担っている。一方で、現象学的時間であろうと、客観的時間であろうと、時間は何らかの統一として与えられる。この時間の統一の事実に向けたとき、どの瞬間にも同一的なものとして随行する極としての自我が必然的なものとして見出されてくる。他方で我々は絶えず流れ続ける体験流の中で生き、現象学的時間において絶えず新しく現れてくる「最も広い意味において私に実的に与えられる全てのもの」(XXXIII, 274)に相対し、その際にそれらを客観的時間における相異なる「イマ」に位置づけている。まとめて言えば、時間の中で生きるということは絶えず異なる瞬間を現在としていることであり、どの瞬間も現在たり得る(少なくとも現在として想定され得る)のである。ただしどの意味での時間であっても、そしてたとえ想定の中であっても、現在たり得る時間位置はその都度ただ一つである。時間はこのような特記づけられた現在をその都度ただ一つだけ持ち、なおかつ全ての位相がそのような現在たりうる。この現在の唯一性とその設定の自由に着目した場合、各々の時間位置において見出される自我は必然的に(その顕在性に関して)相互に区別されることになる。ここで見出されるものこそ非-単一的自我である¹⁵³。

ただし、『ベルナウ草稿』においてこれらの自我はあくまで時間、というより体験流との関連においてのみ論じられており、特に非-単一的自我はそれぞれの記述の解釈を通じて初めておぼろげにその姿を現す程度である。また同一的自我に関しても、確かに、極としての性格を持つこと、また時間および体験流を構成する自我であり、それゆえ「超」-時間的という性格を持つことは明らかとなった。しかし他方で、体験流を構成するこの自我はどこに、というよりもいつ存在しているか、いつ体験流を構成しているのかということ、つまりこの自我がどこに、というよりもいつに座を占めているかに関しては曖昧になっている。他方、後期『C草稿』Nr. 32ではこれらの自我についての考察はより自覚的・主題的となり、自我がいつに座を占めているかという点がまさに明らかになる。すなわちそれは「現在」である。

3.2.3. 『C草稿』Nr. 32における二種類の現在、二種類の「私」

まず、『C草稿』Nr. 32の内容を確認するところから始めよう。

このテキストはフッサール自身によって「超越論的エゴの自己時間化」と題されている。冒頭でフッサールは「流れることへの還元」(Mat. VIII, 127)、つまり体験流の時間的秩序に従って現在が絶えず与えられてくる、根源的な知覚への立ち返りをを行っている。この体験流

¹⁵³ 中山[2005]においても『ベルナウ草稿』における自我概念のある種の多義性が論じられているが、ここで指摘されているのは極としての同一的自我(これに関しては本研究も賛同する)と、「習慣性」を担い、具体的内容を持つようになった自我(中山はこれをモナドと呼ぶ)である。ただ、中山は「触発」という言葉をよすがとして『受動的総合の分析』の議論を引き合いに出しているのだが、『受動的総合の分析』はともかく、『ベルナウ草稿』において触発についての記述がどれほど力を持っているか、またそれが『受動的総合の分析』と同じ文脈で展開されているのかについては疑問を禁じ得ない。

の時間的秩序に支配された知覚において、「世界的なものと世界それ自身とが、同じもの、存在しているもの、妥当しているもの、確かなものとして意識される」(ebd.) のだとされている。「流れることへの還元」によって、「流れゆく、私は - 世界を - 意識 - している〔〈私は - 世界を - 意識して - 存在している〉〕の傍観者としての私」、そしてそれと一体的にその相関者として存在している「統一的意識において存在している世界」、一言で言えば「絶対的原基 *Primordium*」へと立ち返ることが、このテキストにおけるフッサールの狙いである。

知覚に関して、フッサールはこのテキストで二種類の知覚を区別している。すなわち、その都度生じては消える「個別知覚 *Einzelwahrnehmung*」(Mat. VIII, 129) と、個々の個別知覚を貫いて恒常的に、「普遍的に *universal*」(Mat. VIII, 127) 続いていく「世界知覚 *Weltwahrnehmung*」(ebd.) の二種類である。つまり世界知覚の恒常的進行の中で、その都度、個別知覚が継起的あるいは同時的に生じているのだという。これらの世界知覚と個別知覚は両方とも、「恒常的な固定的形式〈今 - さっき - 来る *Jetzt-Soeben-Kommend*〉」(Mat. VIII, 128)、言い換えると予持 - 原印象 - 把持から成る時間的構造を持つとされる。このことから「流れること」における『原基的な』エゴは二重の〈今 - 現実的に存在する〉を所持し、同時性 *Simultaneität* において二重の別々存在 *Sondersein* を所持している」(ebd.) とされる。つまり現在において自我は、一方で、その現在において同時的に生じている諸々の個別知覚の今を所持している¹⁵⁴。つまり、自我は絶えず世界に対して知覚的に関わるなかで、何かを見たり、聞いたり、その他様々な知覚をしばしば同時に行っており、これらの個別的な知覚のそれぞれの今(「別々存在」)がこの現在において、「同時に」、現実的に存在するものとして所持されている。他方で、現在における自我は、世界知覚それ自身が持つ時間的構造における諸々の非 - 今および一つの今を所持している¹⁵⁵。つまり世界に対する知覚的な関わりそれ自体が、諸々の過ぎ去った今、来るべき今、そしてまさしくこの今といった諸々の位相(「別々存在」)をこの現在において、「同時に」、というより「いちどきに」所持しているのである。このように、世界知覚の現在は二重の「同時性 *Simultaneität*」(諸々の個別知覚の今の世界知覚の現在における同時性(=同時的存立)と、世界知覚それ自身の時間的構造における今と非 - 今との同時性(=共存立))を有している。これ以降の記述では第二の同時性(=今と非 - 今との共存立)および世界知覚の時間的構造に焦点が当てられる。この

¹⁵⁴ フッサール自身の表現では「1)今現実的であるのは瞬間的な全体的知覚 *die momentane totale Wahrnehmung* である。そしてこれの中において同時に *simultan* 今現実的であるのは、この瞬間的今に属している諸々の別々知覚(もちろん原基の諸契機としての諸知覚であり、したがってそれらの諸知覚における知覚された世界的なものの諸契機ではない)である」(Mat. VIII, 128) とされている。

¹⁵⁵ フッサール自身の表現では「2)全体知覚 *Totalwahrnehmung* は瞬間的に今現実的な知覚として原始的な流れの中の一つの位相である。さっき終わった、そしてさらに絶えず流れ去って行っていったある個別的な知覚は、流れ去っていくものとして意識されたままに留まっている。なので、〈さっき〉へと流れ去っていく知覚についての意識も今なお現実的であり、『通り過ぎてしまった *vorübergegangen*』知覚が今は現実的ではないにもかかわらず、各々の今現実的な知覚と一体的に同時的な *simultan* 現実性なのである」(Mat. VIII, 128-129)

時間的構造としては、現在が予持・把持の志向的連続体を、つまり未来・過去地平を伴っていることが指摘されている（vgl. Mat. VIII, 129, これに関しては前章第一節で確認した）。

ところで上記のような世界知覚における意識存在、つまり「恒常的な流れることにおける存在としての、『原基的な』存在」（ebd.）に関して、フッサールは二つの特徴づけを行っている。すなわち、原基的な存在は一方で「絶えず新しく自分 - 自身を - 変様させることにおける存在」（ebd.）として特徴づけられるのだという。すなわち、原基的な存在は自分自身を絶えず変様させ、さらにそのような変様の結果生じたもの（「変様 - から - 生じた - 存在 Aus-Modifikation-entsprungen-Sein」（Mat. VIII, 128））でもあるのだという。つまり原基的な存在とは、変様の運動それ自体でもあり、それとともに、変様によって生じた非 - 単一的なものでもあるのだという¹⁵⁶。もっとも、このことは世界知覚が時間的な構造を有し、この時間的構造における非 - 現在が「同時的に」、「いちどきに」与えられているということから比較的容易に理解できる。原基的な存在に関する特徴づけとして一層重要なものは、次の引用で示されている第二の特徴づけである。

「原基」として私は流れることの中で立ち止まる多次元的な現在なのである。この現在において、私の原基的な生き生きと流れていく過去が連続的に「準現在化」されているのであり、そして同様に私の原基的な未来も〔この現在において連続的に「準現在化」¹⁵⁷されている〕。私はその中において、原様相的な今において世界を知覚しつつ存在しているのだが、しかし同時に *zugleich* 私は絶えざる同時的な *simultan* 変様において世界を知覚していた *Welt wahrgenommen habend* という仕方で存在しているのであり、なので私は世界が持続していくのを知覚しつつ存在しているのであり、連続的にそれを知覚していたという仕方で、〔さらには〕知覚してしまっていた、等々という仕方で存在しているのである。

(ebd.)

引用一文目でフッサールは「原基」を「私」、そして「流れることの中で立ち止まる多次元

¹⁵⁶ このテキストでフッサールは *Ich* やその動詞を、複数形ではなく単数形にしている。ゆえにここで「複数的」という言葉を使うことは避けた。残念ながら、この点に関して、テキストの記述に基づいて明快な答えを出すことはできなかった。あくまで憶測の域を出ないが、ここでフッサールが想定している過去や未来における自我というのは、確かに私の現在を「超越」してはいるものの、それでも完全には複数化、つまりこの私から完全に切り離されてはいないのかもしれない。つまり、私と完全に別個のものとは考えられないのだが、反面でそれらに対する言及無しで記述を済ませるには、あまりにこの私から離れてしまっている、まさに「超越」してしまっているのだろう。当然、これらは「他者」ではない。なぜなら、『デカルト的省察』（vgl. I, 153）などで述べられるように、他者とは自我の固有の領分には還元できない体験を持つ者のことであるが、ここで論じられる「超越」としての非 - 現在的な「私」の知覚する世界は、まさにこの私の体験流に属するからである。

¹⁵⁷ この場合の「準現在化する *vergegenwärtigen*」とは、「現在化」の変様としての「準現在化」ではなく、現在 *Gegenwart* ではなくなる、という意味での「準現在化」だと考えられる。

的な現在」と同格視している。「流れることの中で立ち止まる」という性質に関しては後で論じるとして、まず「多次元的な現在」という性格を論じていくことにする。この二つ前の段落では「多次元的な現在」が「全ての位相において同時に *simultan* 充実され、流れることにおいて、この全体性の志向的な変様の生き生きさにおいて存立している」(ebd.)と説明されており、ここから「多次元的な現在」とは、予持的・把持的連続体をも「いちどきに」所持しているような、そのような現在のことだと考えられる。さらに、第一の特徴づけにもあったように、このような原基＝私＝多次元的な現在は「絶えず新しく自分 - 自身を - 変様させることにおける存在」として特徴づけられるのであり、したがって変様していく運動それ自体であり、また変様の結果生じた非 - 単一的な存在でもある。ゆえに引用においても「私は世界が持続していくのを知覚しつつ存在しているのであり、連続的にそれを知覚していたという仕方で、[さらには]知覚してしまっていた、等々という仕方で存在している」と述べられている(ここでは「私」の把持的変様しか登場しないが、「未来」への敷衍も可能と見て良いだろう)¹⁵⁸。つまり世界知覚の未来・過去のそれぞれの位相においては、その都度の位相において知覚された世界が意識されているのであるが、それと相關的に世界をまさしく知覚している私が存在している。ここでの私は確かに互いにバラバラなわけではない。しかし他方で、例えば過去において知覚されていた世界は私によって今知覚されているのではなく、あるいは今の私によって知覚されているのではない。かつての世界は私がかつて知覚した世界であり、したがってかつての世界にはかつての私に対応している。これは来るべき世界についても言えることである。世界の時間的なありようは、今の私によって単独的に知覚されているのではなく、その都度の世界を生き生きと知覚している非 - 現在の私および現在の私が「同時に」、もしくは「いちどきに」現在において立ち並ぶことによって成立する。以上のように、引用では原基として現在から変転しつつ、現在を超越し、現在のみに拘束されていない自我のあり方が記述されているのだと解釈できる。

しかし、フッサールの記述はここでは終わらない。先にも述べた通り、予持的・把持的諸位相やそこにおいて世界を知覚している私というのは、「同時に」、現在において与えられているのだが、もしそうであるなら、この「同時的」・いちどきの取りまとめを行う何者かが存在するはずである。あるいは「多次元的な現在」が成り立つとき、この「多次元性」において、来るべき今としての未来や過ぎ去った今としての過去に並び立つまさしくこの今としての現在と、そもそもこの「多次元性」をそれとして成り立たせる現在は区別されるはずである。あるいは、ここまでの議論では明らかになっていない、過ぎ去った・来るべき・まさしくこの・諸今とこれらの取りまとめを行う根源的な現在との極限の「同時性」がある

¹⁵⁸ 同様の記述として、「私は、私が私の現在の存在を超越するというような仕方で存在している」(Mat. VIII, 129)や、「なので私は、原様相的な現在〔「原様相的な現在」については後で論じる〕として、共同における連続的な過去と未来における私の時間性の中で具体的に存在しているものとしての私と共にあるのであり、私の時間的な存在〔＝ありよう〕を私の現在において担っているのである」(Mat. VIII, 130)といったものを挙げるができる。

はずだ。フッサールはこれについて以下のように述べている。

瞬間的な変様されていない現実性、私の瞬間的な今 - 現実的に - 存在することの全体は再び一つの原因相 *Urmodus* を含んでいる。それは、世界を瞬間的に根源的に現在化するような世界知覚である。この〈原因相〉は諸々の志向的ヴァリエーションの同時性の極限である。[...] なので私は、原因相的な現在として、共同における連続的な過去と未来における私の時間性の中で具体的に存在しているものとしての私と共にあり、私の時間的な存在を私の現在において担っているのである。持続していく現在としてのこの現在は絶えず流れてゆく存在であり、流れつつ、常に現在 - 存在なのである。その現在 - 存在は時間的な存在を現在の過去や未来として自身のうちに構成して持っており、以下のような仕方で流れつつ構成しているのである。すなわち、現在が新しい現在となるように、現在が〈さっき〉へと流れ去ってゆくように、これが〈さっき〉の〈さっき〉などなどへと流れ去ってゆくように〔構成しているのである〕。

(*Mat. VIII, 130*)

引用においては「世界を瞬間的に根源的に現在化する」ような「原因相」が記述されている。先に引用の後半を見ておくと、「原因相的な現在」としての私は、「共同における連続的な過去と未来における私の時間性の中で具体的に存在しているものとしての私と共にあり、私の時間的な存在を私の現在において担っている」のだという。つまり、先にも述べた未来・現在・過去においてその都度世界を知覚している私の共同的な立ち並びは、「私の現在」において担われており、原因相的な現在としての私はそれらを「自身のうちに構成して持っている」のである。この取りまとめは「世界を瞬間的に根源的に現在化するような世界知覚」とも表現されており、またこれを行う私は「常に現在 - 存在なのである」ともされている。つまり、この取りまとめを行う自我はまさしくこの現在に「立ち止まって」、過去にも未来にも「超越」しない。そしてこの根源的な取りまとめは、現在において「瞬間的に」行われているのであり、この取りまとめがそこで行われる「現在」（これはこの取りまとめを行う「現在」でもあるのだが）は、過去や未来と並立していないという点で、核保持性によって特記づけられる仕方で与えられるような、体験流における一位相としての「現在」からは区別される。しかしそうは言っても、取りまとめが行われる「原因相」はやはり現在において働いているのであり、この点で「原因相」は絶えず体験流における一位相たる「現在」の、いわば垂直下にある。この意味において「原因相」は体験流の現在の位相に附いて「流れている」。かくして「原因相的な現在」であり「私」であるものは、「流れる」(*Mat. VIII, 130*)という性格と「立ち止まる」(*Mat. VIII, 128*)という性格の両方を持つことになる。

以上のように、このテキストでは「原因相的な現在」、あるいは「瞬間的な原現実性」(*Mat. VIII, 130*)と、それに含まれる「超越」(*ebd.*)としての来たるべき(予持的)・過ぎ去った(把持的)・まさしくこの(原現前的)「今」とが区別され、そして両者は共に「私」として

も性格づけられている。すなわち、このテキストでは性格・レベルの異なる二種類の自我・主観性・現在が記述されているのだと解釈できる。他方で、これらは明確に区別されるような仕方で働いているのではない。今の「超越化」も、それらの根源的な取りまとめも、「原基」としての「私」もしくは「現在」において生じているのであり、両方の運動が現在において一体的に生じていること、両方の運動が一体的に生じる現在をフッサールは「原基」と呼んでいる。「原基」における両方の運動の一体性を重視すれば、先に述べた二種類の自我・主観性・現在は必ずしも截然と区別されるものではないと考えられる。このように、「原基相的な現在」としての「私」・自我と「超越」としての諸々の今における「私」・自我とは「原基」において一体的に見出されるのだが、しかしその一方で両者は、少なくともそのレベルにおいては区別され得る。

なおこの引用の後にも少し記述が続いている。まずフッサールは、上記の記述にいくつかの欠けている点（「志向的合致と統一性形成」「歴史」(Mat. VIII, 131)）があったことを指摘しているが、これには深入りせずに「なお更なる時間化」(ebd.)の問題に移っている。これまでは、世界知覚における「第一の時間化」、「原基の非変様的な存在形式としてのとどまることのない流れることによって実現する、一つの連続的な時間化」(ebd.)が記述されていたのだが、フッサールによれば「世界知覚の恒常性において私が生きている間はずっと、私は同時に諸々の想起、立ち戻り想起、先想起を持つことができる」(ebd.)のだという。つまり、「私」は単に世界知覚においてのみ生きているのではなく、これと共に諸々の想起的作用を遂行することもできるのである。この想起的諸作用において、世界知覚の「原基相的な現在」としての「私」はまさしくこの今に立ち止まっているのであるが、しかし「私」はこれと共に再想起をも行うことができるのであり、したがってこのときに「私」は別の現在を生きることになる。フッサールはこれを「これ [=世界知覚] は、現在の意識それ自身における原現在において存在しつつ、しかしながらそれ自身において現在 - ではない意識へと超越しつつ、ある完全に別の仕方における非現在のものの準現在化なのである。」(Mat. VIII, 131-132)と表現している。したがってここには、世界知覚における予持的・把持的「超越化」とはまた別の「超越化」が生じ¹⁵⁹、「想起でもって、いわば自己時間化、そして自己時間化による世界時間化というテーマの新しい章が始まる」(Mat. VIII, 131)とされる¹⁶⁰。

完全に同一ではないが、上記のような自我・主観性・現在の区別と類似の事柄はこれまでに確認してきた後期のテキストでも確認できる。例えば Nr. 62 では、かつての自我の活動性を現在の自我の活動性において再想起するという場面が考察されていたが (vgl. Mat. 264, 268f.)、これは Nr. 32 で記述されていた「なお更なる時間化」と同じものであろう。また、

¹⁵⁹ これは XXXIV 卷 Nr. 9 で論じられていた「第一の超越化 [内在的時間]」「第二の超越化 [客観的世界]」(XXXIV, 171)、ひいては Held[1966]が論じていたものとはまた別のものである。

¹⁶⁰ ここでフッサールは再想起のみを主題的に論じているが、S. 131 では「前想起」、すなわち過去の出来事に基づく予期にも言及しているため、この議論は未来にもある程度応用可能であろうし、また少なくとも理論上は空想にも応用可能であろう。

全集 XXXIV 卷 Nr. 9 で論じられていた予持的・把持的「時間化」と、これを括弧入れすることによって見出される自己超越的な超越論的自我、およびその自己超越的な生が記述されていたが、これも上で扱った「超越」としての諸々の今と「原様相的な現在」との関係と同一のものであろう。ここで扱った二種類の自我・主観性・現在が後期の本質的かつ唯一の問題だと主張するつもりは無いが、ごく簡単に見たように、少なくともいくつかの箇所ではこの問題が論じられていることは間違いない¹⁶¹。

3.2.4. 中期・後期における自我概念の比較

以上の考察から、中期『ベルナウ草稿』における自我概念と後期『C草稿』における自我概念（の一端）が明らかになった。以下で両者の比較を行ってみよう。

まず、両テキストとも二種類の自我について記述を行っている。すなわち『ベルナウ草稿』においては体験流を構成する同一的・単一的自我と、個体化に際して対象を各々の「イマ」へと指定する、それぞれの時間位置において見出される非 - 単一的自我が論じられていた。他方で『C草稿』では、「原基」としての現在において、「超越」としての諸々の今、およびそれらの今において世界を知覚する「私」と、自身のうちにそれらを根源的に取りまとめる、流れつつ立ち止まる「原様相的な現在」、およびそれとしての「私」が区別されていたのであった。したがって両テキストは共に、広く言えば、単一の自我と非 - 単一的な自我という二種類の自我を扱っているのであり、この点は両テキストの共通点として指摘できる。

ただし両者の間には論述上の相違も見受けられる。先にも述べたように『ベルナウ草稿』においてフッサールは、特に非 - 単一的自我を明示的には論じておらず、それゆえこの自我が単一的自我とどのような関係にあるのかは曖昧なままに留まっている。他方で『C草稿』は「超越」としての諸々の今および私は「原様相的な現在」としての私・現在において取りまとめられ担われるという関係が記述されていたのであり、フッサールにとってこの関係は、少なくとも主題的ではあった。つまり両テキストの間には、二種類の自我に対して自覚的か否かという相違点が見られると言える。あるいは、中期時間論のフッサールは自我・現在の多義性は無頓着であったのに対し、後期のフッサールはこの多義性に対して注意を払い、これを細かく区別していた、とも言える。

中期時間論のフッサールの非 - 単一的自我への、ひいては自我・現在の多義性への無頓着

¹⁶¹ ここで扱った「原様相的な現在」としての「私」と、「超越」としての諸々の今としての「私」に関しては田口[2004]でも論じられている。本研究の論述では曖昧になってしまったが、田口も指摘するように、上記の二種類の自我は「産出モデル」（20 頁）、すなわち一方が他方を実在物として産出するという関係、したがって互いが互いに対して独立的な関係なのではなく、むしろ一方が無ければ他方も無いという仕方で互いを指し示し合うように存在している。また上記と関連して、「超越」としての今や私が志向的変様として生じたときに、「原様相的な現在」は、一見上記のような今・私の一つようになってしまう（田口はこれを「逆変様」（17 頁）と呼ぶ）。以上に関して、本研究は田口の見解に従う。

は、明示的に記述されていたはずの同一的自我の記述にも影響を及ぼしている。というのも、『C 草稿』における「原様相的な現在」としての自我・現在が「流れる」(Mat. VIII, 130) および「立ち止まる」(Mat. VIII, 128) という二つの性格を持つのに対し、『ベルナウ草稿』の同一的自我は「立ちとどまりそして留まる」(XXXIII, 280) と性格づけられており、「流れる」という性格についての言及が無い、という点において両者は異なっているからである。これは、『ベルナウ草稿』の同一的自我がその「超」 - 時間性、すなわち体験流を構成する者としての性格のみを記述されていることに由来すると考えられる。そもそも、『C 草稿』の議論を振り返ってみると、原様相的自我・現在が「流れる」とされていたのは、これが「常に現在 - 存在」(Mat. VIII, 130) であるから、すなわちこの自我が常に体験流におけるその都度の今の位相の垂直下で働いているからである。つまり「流れる」という性格は、この自我が常に「現在」で働くがゆえにもたらされたものなのである。一方で、『ベルナウ草稿』における同一的自我は体験流には含まれない、そしてそれゆえに超時間的で「立ち止まる」とされていたのであった。この「立ち止まる」という性格は『C 草稿』の原様相的自我にも見られる。しかし『ベルナウ草稿』では、この自我が現在において働くという点は記述されていないのであり、だからこそ「流れる」という性格が記述されなかったのだと考えられる。

上記に対しては、両自我は実際のところ別の自我であり、それゆえ両者の性格は異なっているのだという反論があり得る。確かにその可能性は考えられるかもしれない。しかし仮に両者が厳密には相異なるものとしても、『ベルナウ草稿』の自我が（「立ち止まる」という性格と共に）「流れる」という性格を有していないのは依然として注目に値する。何故なら（「立ち止まる」という性格と並んだ）「流れる」という性格が記述されていないということは、この自我が常に現在において働いているというありようが見て取られていないということの証左に他ならないからである。つまりここでの問題の本質は、同じ自我が同じように記述されていないという点ではなく、『ベルナウ草稿』のフッサールは自我がまさしく働いているその現場を見ようとしているわけではないという点にある¹⁶²。むしろ『ベルナウ草稿』の議論を想起してみると、自我は体験流においては見当たらないものとして登場してくるのであり、我々の眼前にある体験流を構成した者として、敢えて強い表現を用いれば、想定されて登場しているのである。これに対し、後期の議論ではまさしくこの現在において働く原様相的な現在としての自我のありようが主題的に扱われている。そして、この原様相的な自我の現在におけるありように迫っていく中で、そのような現在・自我と重なりつつもそれからは区別されるどころの「超越」としての非 - 単一的自我が記述されるに至っている。つまり、根源的な自我の追究により、この自我と対になる非 - 単一的自我までもが記述の俎上に載ることになったのである。

¹⁶² もちろん後期時間論のフッサールとて、生き生きと働く自我そのものをまさにその生き生きさにおいて観察できたわけではないのだろう。多くの研究（例えば Held[1966]、谷[1998]、Liangkang, [1998]、新田[2001]、榊原[2009]、田口[2010]、など）、そしてフッサール自身が後期の自我の「匿名性」(Mat. VIII, 7, usw.) と、これに迫る上での反省の重要性を指摘している。

以上から、『ベルナウ草稿』のフッサールの主たる関心はあくまで体験流にあり、自我はこの体験流についての議論に係る限りでのみ登場していたということが分かる。他方の『C草稿』Nr. 32では、考察の照準は最初から「現在」および「私」に合わせられており、これらのレベル差を極めて敏感に吟味している。そして『ベルナウ草稿』で扱われていた予持・把持から成る体験流の時間的秩序は、ここでは中心的な問題ではない。これらを総合すると、体験流が主題的に扱われていた中期では自我の問題にそれほど関心が払われていなかったこと、反対に現在において働く自我、自我が働いている現在が主題的に扱われている後期では、体験流の問題は後景に退いてしまっている、という事情が浮かび上がってくる¹⁶³。

3.3. 第三部のまとめ 中期時間論における主要問題と後期時間論における主要問題

以上の考察から、中期時間論と後期時間論の予持概念、およびそれぞれの時期で扱われていた問題が明らかとなった。以下で順を追って確認していこう。

まず第一章では、全集資料版のVIII巻より、1930年8月に書かれたNr. 21 (C4草稿)、1932年7月に書かれたNr. 32 (C7草稿)、1934年2月15日に書かれたNr. 64 (C13草稿)、また同じく『C草稿』のテキストとして、1930年夏に書かれた全集XXXIV巻のNr. 9 (C5草稿)を確認し、これらのテキストにおいて予持がどのようなものとして記述されているかを確認した。この確認を通して、『C草稿』では大きく分けて、①現在の位相に結びつく、志向的連続体的地平を形成する予持 (vgl. Mat. VIII, 93, 94, 129, 131, 265-266, 267、およびXXXIV, 166-167, 168, 170)、②把持と絡み合う予持 (vgl. Mat. VIII, 93, 94, 266, 267、およびXXXIV, 168)、③対象の将来の与件内容を(把持などの力を借りて)志向する予持 (vgl. Mat. VIII, 95, 266, 268)、という三種類が記述されていることが分かった。これらはいずれも中期までのテキストにおいて記述されていたものであり、後期に固有の予持の性格は記述されていないことが分かった(第一章第一節)。

さらに後期では、単に予持の登場箇所が減少し新しい性格が記述されなくなっただけでなく、予持について比較的まとまった記述がなされている箇所でも予持には主題的な関心が寄せられていなかった。すなわち、VIII巻のNr. 21では超越論的主観性の未来、特に死や眠り、そしてそれらとの関連において誕生が、Nr. 32では「原相的現在」(Mat. VIII, 130)としての自我が、Nr. 62ではかつての自我の活動性を現在において再生する自我、「立ち止まる具体的現在における立ち止まる自我」(Mat. VIII, 269)が、XXXIV巻Nr. 9では自己超

¹⁶³ しかしそうは言っても、『ベルナウ草稿』の自我考察があったからこそ、フッサールは後期において原相的現在・現在の考察に向かうことができたのである(そうでなければこの問題があるということすら気づけなかったろう)。この意味で『ベルナウ草稿』はやはり後期『C草稿』の先駆けと見做すことができるのであり、この意味で和田[2003]の指摘は正鵠を射ている。

越化的生 (vgl. 171) が問題になっており、予持 (および把持) は上記の問題の前段の議論で登場するのみで、中心的には論じられていなかった (それどころか、XXXIV 卷 Nr. 9 では「ある種のエポケー」(XXXIV, 168) の対象になるとすら述べられている (vgl. XXXIV, 168-170)) (第一章第二節)。以上の議論に基づくと、二つの事情が見えてくる。まず第一章第一節の考察から、①後期でも中期までに記述された予持の諸性格 (内容志向的性格、自己意識的性格)、ひいてはそれらが働く場面 (内容志向的予持が働いている時間的対象の構成の場面、自己意識的予持が働いている体験流の時間的秩序の自己構成の場面) は基本的に維持されていることが分かる。また第二節の考察から、②予持についての記述は後期の考察においては必要とされておらず、ゆえに、記述のために曲がりなりにも予持を必要としていた初期や中期で扱われていた問題とは異なる問題が主題になっていることが分かる。

これに関して本研究は、第二節までで扱ったテキストの内容や先行研究の内容から、上記の後期に固有の問題が主観性・自我の問題であったと推定した。そこでこの自我の問題を初期や中期との連関の中に位置づけるべく、第三節では全集資料版 VIII 卷 Nr. 32 の二種類の自我を、中期『ベルナウ草稿』における二種類の自我との比較において明らかにした。この比較を通じ、①両テキストは、体験流の各位相に対応するいわば非 - 単一的自我と、体験流の諸位相あるいは諸々の今を取りまとめるような同一的自我という二種類の自我が記述しているという点で共通していること、②しかし『ベルナウ草稿』では非 - 単一的自我が曖昧なままに留まり、そのため非 - 単一的自我と対を成す同一的自我が現在における働き、これが体験流の進行においてまさに現在において働いているありさまが見落とされていること、の二つが明らかとなった。

以上を総合すると中期時間論と後期時間論は次のように特徴づけられる。すなわち、中期時間論では体験流が論じられていたが、これの構成者としての自我には関心が向けられていなかった。他方、後期では中期の体験流に関する考察、および初期や『受動的綜合の分析』における時間的対象の構成についての考察は確認される程度に留められ、体験流の構成者としての自我が「現在」において働くさまに考察の照準が合わせられている。ただし Nr. 32 の内容から、ここで言われている「現在」とは未来→現在→過去と流れていくような、別言すれば未来や過去と同列に並ぶような現在ではなく、これらを自身のうちに根源的に取りまとめ、まさに上記のような時間的秩序に置くような、時間様相の根源という意味において「原様相的な」、現在なのである。

結論

以上で本研究の全ての考察は完了したことになる。最後に、本研究の考察から分かることと、今後の課題として残ってしまったことを確認し、論を閉じたい。

まず、本研究はフッサール時間論の各時期で記述されていた予持概念を確認し、各時期の予持概念が記述される頻度、性格、および性格の変遷を明らかにし、これを手掛かりとしてフッサールが各時期の時間論でどのような問題を扱っていたかを考察した。これらの考察によれば、最も予持が頻繁かつ詳細に記述されていた中期時間論においては、自己意識的な予持および把持によってもたらされる体験流の時間的秩序の自己構成が問題となっていた。これに対し、まだ予持があまり記述されていなかった初期時間論においては、時間的に延び広がった仕方と与えられてくる時間的対象が如何にして知覚・構成されるかという問題が扱われており、予持はこの文脈において、将来における対象の与件内容を先取りする志向性が見なされていた（より細かく言えば、1907年までは上記の時間的対象の構成の問題が扱われ、1907年以降は自己意識的予持が、暗黙的にではあるが想定されるようになり、これと対応して1907年以降は体験流の自己統一が扱われている）。他方で、後期時間論において記述されている予持はほとんど（というより本研究が確認した限り、全て）中期時間論まで確認されたものであり、しかもその記述も主題になっている他の問題の前段としてのみ扱われ、議論の中心に関わってはいなかった。このことから、後期で扱われる問題の事象的深さは中期までの問題が持つそれとは異なることが分かった。また後期のテキストを実際に紐解いてみると、ここでは予持的・把持的な諸々の今（ひいてはそれらの今に対応する私）の広がり、その流れには属することなく、自身のうちにおいて取りまとめるような、そのような流れつつ立ち止まる原様相的現在・自我が論じられていたのであった。したがって、まず以上から各時期のフッサール時間論は異なる問題を扱っていたことが分かる。

また先にも少し述べたが、上記の諸問題は互いに事象的深さを異にしている。すなわち、いついかなるときも働く予持・把持によって成立する体験流の時間的秩序を基準とすると、把持および規定された予持による時間的対象の構成は、上記の体験流の時間的秩序に依拠した仕方で行われる。また他方で、後期においては上記の体験流を可能にするものとして、一方的な仕方ではないにせよ、それを根底で支える原様相的現在・自我が論じられていた。つまり、最も根源的な事象として原様相的現在・自我（後期）があり、それによって可能になるものとして、自己を統一化する体験流（1907年以後の初期）の時間的秩序（中期）があり、この秩序に従って時間的対象が構成される（1907年以前の初期）。予持に着目することにより、このような事象間の連関が明らかとなった。

さらに、フッサール時間論は各時期で異なる問題を扱っているが、これは初期よりも中期、そして中期よりも後期が優れているという意味での「進化」を意味しているわけではない。というのも、フッサールはそれ以前の問題を後の時期になっても維持しているからである。

以前に扱われた問題は、以後の議論によって刷新され破棄されるものでもなければ、以後の議論の内に回収されるものでもない。それどころか、以前の問題が重要なものとされることすらあり、この事情を見るに、各時期で扱われている問題は、事象的な深度の違いこそあれ、少なくともフッサールにとってはどれも維持されるべき重要なものであったのだと考えられる。したがって以上の議論から、フッサール時間論の各時期の問題は、事象的深度を異にしつつも、互いに連関し合い、そして各々が他を以って代えがたい重要性を有しているということが明らかとなった。

さらに上記に加えてもう一つ確認しておきたいのは、上記の問題を扱ったフッサールの実際の歩みである。すなわち本研究では説明の都合上、体験流の時間的秩序の成立の仕組みから確認したが、フッサール自身は、時間的対象の構成（初期）→体験流の時間的秩序の成立（中期）→原様相的現在・自我（後期）という順番、つまり事象的深度を徐々に深くしていく仕方で上記の諸問題を扱っている。では、フッサールがこれ以外の順番で上記の諸問題を扱った可能性はあったのだろうか。つまり、時間的対象の構成に眼差しを向ける前に体験流の時間的秩序を記述する、あるいは何よりも先に原様相的な現在・自我が目飛び込んでくるといったことはあったのだろうか。本研究はこれに対して否と答えよう。例えば、原様相的な現在・自我は、自身のうちで未来・現在・過去を取りまとめるものであったが、これは未来・現在・過去の広がりを与えられて初めてまなざすことのできるものであろう。また、体験流の時間的秩序は体験において与えられる全ての対象を支配する秩序として記述されるが、これに出会うためにはまずもってそれに支配されている対象に出会っていなければならないだろう¹⁶⁴。現象学という哲学を、あらゆる前提を遮断して我々の日常的経験から出発し、目の前のありのままを一つ一つ記述していく哲学として定義することができ、かつフッサールがその意味での現象学に忠実であったのだとすれば、現象学者フッサールにとって時間論の歩みは、彼が実際にそうしたように、事象の深度を徐々に深くしていくような歩みでなければならなかった。確かに上記の諸問題の間には事象的な深度の違いがあり、ゆえに後期の問題は最も根源的で、反対に初期の問題は最も表層的と言える。しかし初期の問題は、まさしく表層的であるがゆえに、何よりも最初に我々が時間と出会う場面である。反対に、中期・後期の問題（そして、ことによると存在するかもしれない、フッサールが扱えなかった更なる問題）は、それよりも表層的な場面を越えた後にしかあらわれてこない。つまり表層的な問題に出会わなければ根源に至ることはできないのであり、その意味において、後期の問題は中期を、中期の問題は初期を必要とする。現象学者フッサールの歩みそれ自体が、まさに事象的な根源性とは別の基準に依拠する重要性、現象してくることそれ自体をもたらす端緒という意味での重要性をも暴露していると考えられる。

まとめよう。フッサール時間論のそれぞれの時期では、時間的対象の構成（1907年以前

¹⁶⁴ 多くのすぐれた研究は、フッサール現象学のこの一步一步の歩み、フッサールの手法の深化と事象の深化の対応を指摘している。谷[1998]や榊原[2009]は研究の冒頭でそれを指摘しているし、榊原[2009]や Kortooms[2002]は研究全体がそのことを踏まえたものになっている。

の初期)、体験流の自己統一化(1907年以後の初期)、体験流の時間的秩序の成立(中期)、これらを根源的にとりまとめ構成する、流れつつ立ち止まる現在・自我(後期)という異なる問題が扱われており、これらは互いに連関し合っており、また互いに異なる事象的根源性と、現れの端緒性を持っている。これらは互いに還元不可能であり、これで全てではないのかもしれないが、時間という「多面的」な一つの事象の諸側面を表しているのだと考えられる。以上が本研究の結論の一つ目である。

本研究はフッサール時間論の各時期の特徴を浮き彫りにするために予持概念に着目し、それにより各時期で扱われている問題の特徴づけを行うことができた。しかし、予持概念に着目して明らかになったことはそれだけではない。フッサールは予持概念を『ベルナウ草稿』で最大限に詳しく記述したが、これは予持それ自体に関心があったからではなく、体験流を支配する時間的秩序を、かみ砕いて言えば、絶えず意識に何らかの今が否応なく与えられてくる様子を記述するためであった。予持概念の記述を追うことにより、本研究はこの仕組みの、全てではないにせよかなりの部分を明らかにできたと行って良い。すなわち予持・把持の自己意識的な働きにより、体験流は過去・未来へ無限に延び、両者が絡み合うことで体験流は一貫的な連続性を獲得する。また、体験流の各位相の順序は予持的・把持的連続体において常に同一的に維持されており、この不変の順序により、体験流の各位相は個体化することになる。さらに、この連続性の中で、それぞれの瞬間において何かしらの対象それ自身、「核」が絶対的に与えられるという意識が生じることにより、体験流には現在という時間様相が、さらにそこから未来や過去という時間様相が生じる。まとめると、体験流の無限性、方向性、瞬間の一回性、様相性という時間的諸特徴を、意識は来るべき・まさしく今の・過ぎ去った意識それ自体を自己意識するというに基づいて説明したと言える。

さらに上記に関して踏み込んで言えば、自己意識的諸志向は、今の意識と共に、かつての意識のありようや来るべき意識のありようを捉えているのだと解釈できる。つまり、上記の時間的諸特性を備えた体験流が立ち現れるとき、後期『C草稿』でも言われていたように、意識は自身の立脚する現在から「超越」し、その非-現在の意識との共同において存立しているのである。この意味において、体験流が構成されて存在するという事は、時間的に複数のパースペクティブが共存しているということを含意している。確かに、体験流は「私の」体験流であるし、上記の複数のパースペクティブも掛け値無し他者ではない。なぜなら、私固有の領分には還元され得ない者というのが他者の定義であるが、上の複数のパースペクティブが体験する「今」はこの私の体験流に属するからである。しかし他方で、上記の非-現在の意識をこの私と完全に同一だとも言い切れない。なぜなら、私の意識はまさしくこの現在にあるからである。意識に対して絶えず今が与えられることにより、体験流の時間的秩序が立ち現れ、それによって上記の、互いに完全に別だとも完全に同じだとも言いきれない曖昧な多性が生じる。絶えず今が与えられることによって、私の体験は完全には自閉せず、拡散していくことになる。

以上の、体験流の無限性、方向性、瞬間の一回性、様相性という時間的諸特徴は意識の自己意識的構造によって成り立つものであり、またこれらの時間的諸特性、時間的秩序が成立しているというまさにそのことにより、意識は完全に自閉することが不可能になる。以上が本研究の二つ目の結論である。

しかし、結局本研究を通して分からなかった点多々ある。すなわち、本研究は予持概念に着目して各時期の時間論を特徴付けることを試みた研究であり、そして予持概念は初期・後期においてはあまり熱心には記述されていなかった（もっとも、だからこそ本研究は予持概念に着目したのであるが）。したがって、本研究の手法では時間的対象の構成や流れつつ立ち止まる現在・自我の詳しい内実を解明するには至らなかったものであり、これらの解明が今後の課題として残ってしまったことは認めなければならないだろう。ただ、今後の見通しという意味も含めて本研究の見解を述べれば、この不備は、時間が「多面的」であり、またフッサール時間論が（不完全とは言え）時間事象の「正確な」スケッチであるなら、ある種必然的なものであると考えられる。すなわち、このように問おう。時間の多種多様で互いに関連し合う諸側面がフッサール時間論のうちに記述されているのだとすれば、彼の時間論を一望の下に収め、しかも全ての諸側面を鮮やかに描き出せるような視座の設定は果たして可能だろうか。そのような視座の設定に関して本研究は懐疑的である。フッサール時間論、ひいては時間という事象は、絶えざる追究、「饒舌」に応じてその無数の顔を見せる。仮に予持ではなく把持を、あるいは「現在」や「自我」を視座として選んだとしても、いずれかの時期を見落とす、あるいは各時期の特徴が見えづらくなる、あるいは選んだ概念自体が手に余る多義性を持ってしまうことになるのではないだろうか。残念ながら、この見解も今の段階では仮説に過ぎない。どこかに時間を屈服させる「一言」があるのか、それともやはり時間を相手に無限の「饒舌」を重ねなければならないのか、まだ分からない。いずれにせよ、時間のもたらす「絶句」には抗い続けなければならない。

参考文献（直接言及していないものも含む）

1. フッサール全集（Husserliana. Edmund Husserl Gesammelte Werke）

Bd. I: *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge*, hrsg. Von Stephan Strasser, 2. Auflage, Neudruck, Den Haag, Martinus Nijhoff, 1973. [=I]

（邦訳）『デカルト的省察』、浜渦辰二訳、岩波書店、2001年。

Bd. III: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Erste Buch: Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*, neu hrsg. Von Karl Schumann, 1. Halbband: Text der 1. -3. Auflage, Den Haag, Martinus Nijhoff, 1976. [=III/1]

（邦訳）『イデー I-I』、『イデー I-II』、渡辺二郎訳、みすず書房、1979年、1984年。

Bd. IV: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Zweites Buch: Phänomenologische Untersuchungen zur Konstitution*, hrsg. von Marly Biemel, Den Haag, Martinus Nijhoff, 1952. [=IV]

（邦訳）『イデー II-I』、『イデー II-II』、立松弘孝・別所良美・榊原哲也訳、2001年、2009年。

Bd. X: *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins (1893-1917)*, hrsg. von Rudolf Boehm, Den Haag, Martinus Nijhoff, 1966. [=X]

（邦訳）『内的時間意識の現象学』、立松弘孝訳、みすず書房、1967年。

『内的時間意識の現象学』、谷徹訳、筑摩書房、2016年。

Bd. XI: *Analysen zur Passiven Synthesis. Aus Vorlesungs- und Forschungsmanuscripten 1918-1926*, hrsg. von Margot Fleischer, Den Haag, Martinus Nijhoff, 1966. [=XI]

（邦訳）『受動的綜合の分析』、山口一郎・田村京子訳、国文社、1997年。

Bd. XV: *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität. Texte aus dem Nachlass. Dritter Teil: 1929-1935*, hrsg. von Iso Kern, Den Haag, Martinus Nijhoff, 1973. [=XV]

Bd. XIX: *Logische Untersuchungen, Zweiter Band, Erster Teil: Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*, hrsg. von Ursula Panzer, The Hague/ Boston/ Lancaster, Martinus Nijhoff, 1984. [=XIX/1]

（邦訳）『論理学研究 2』、『論理学研究 3』、立松弘孝・松井良和・赤松宏訳

Bd. XXIII: *Phantasie, Bildbewusstsein, Erinnerung. Zur Phänomenologie der Anschaulichen*

Vergegenwärtigungen. Texte aus dem Nachlass (1898-1925), hrsg. von Eduard Marbach, The Hague/ Boston/ London, Martinus Nijhoff, 1980. [=XXXIII]

Bd. XXXIII: *Die Bernauer Manuskripte über das Zeitbewusstsein (1917/18)*, hrsg. von Rudolf Bernet und Dieter Lohmar, Dordrecht / Boston / London, Kluwer Academic Publishers, 2001. [=XXXIII]

Bd. XXXIV: *Zur Phänomenologischen Reduktion: Texte aus dem Nachlass*, hrsg. von Sebastian Luft, Dordrecht / Boston / London, Kluwer Academic Publishers, 2002. [=XXXIV]

2. フッサール全集資料版 (Husserliana Materialien)

Bd. VIII: *Später Texte über Zeitkonstitution (1929-1934). Die C-Manuskripte*, hrsg. von Dieter Lohmar, Dordrecht, Springer, 2006. [=Mat. VIII]

3. フッサール全集以外の著作

Husserl, Edmund, *Erfahrung und Urteil Untersuchungen zur Genealogie der Logik*, ausgearbeitet und herausgegeben von Kudwig Landgrebe, Prag, Academia Veragsbuchhandlung, 1939.

(邦訳)『経験と判断』、長谷川宏訳、河出新社、1975年。

4. その他の文献 (外国語→日本語の順)

Brentano, Franz [1968], *Psychologie vom empirischen Standpunkt. Mit ausführlicher Einleitung, Anmerkungen und Register*, hrsg. von Oskar Kraus, Hamburg, Felix Meiner.

De Warren, Nicolas [2009], *Husserl and the Promise of Time: Subjectivity in the Transcendental Phenomenology*, Cambridge, Cambridge University Press.

Dodd, James [2005], "Reading Husserl's Time-Diagrams from 1917/18", in *Husserl Studies*, Vol. 21, No. 2, Springer, 111-137.

Hart, James, G [2006], "The absolute ought and the unique individual", in *Husserl Studies*, Vol. 22, No. 3, Springer, 223-240.

Hare, Caspar [2007], “Self-Bias, Time-Bias, and the Metaphysics of Self and Time”, in *The Journal of Philosophy*, vol. CIV, No. 7, Journal of Philosophy 350-373.

Held, Klaus [1966], *Lebendige Gegenwart*, Den Haag, Martinus Nijhoff.

(邦訳)『生き生きした現在』、新田義弘・小川侃・谷徹・斎藤慶典 共訳、北斗出版、1997年。

Ingarden, Roman (ed.) [1968], Husserl, Edmund, *Briefe an Roman Ingarden. Mit Erläuterungen und Erinnerungen an Husserl*, Den Haag, Martinus Nijhoff.

(邦訳)『フッサール書簡集 1915 - 1938 フッサールからインガルデンへ』、桑野耕三・佐藤真理人訳、せりか書房、1982年。

Johnstone, Albert [1996], “Oneself as Oneself and Not as Another”, in *Husserl Studies*, Vol. 13, No. 1, Springer, 1-17.

— [2003], “Self-Reference and Gödel’s Theorem: A Husserlian Analysis”, in *Husserl Studies*, Vol. 19, No. 2, Springer, 131-151.

Kortooms, Toine [1994], “Following Edmund Husserl on one of the paths leading to the transcendental reduction”, in *Husserl Studies*, Vol. 10, No. 3, Springer, 163-180.

— [2002], *Phenomenology of Time*, Dordrecht/ Boston/ London, Kluwer Academic Publishers.

Larrabee, M, J [1994], “Inside Time-consciousness: Diagramming the Flux”, in *Husserl Studies*, Vol. 10, No. 3, Springer, 181-210.

Marbach, E [1974], *Das Problem des Ich in der Phänomenologie Husserls*, Den Haag, Martinus Nijhoff.

Mensch, J, R [1999], “Husserl’s Concept of the Future”, in *Husserl Studies*, Vol. 16, No. 1, Springer, 41-64.

Ni, Liangkang [1998], “Urbewußtsein und Reflexion bei Husserl”, in *Husserl Studies*, Vol. 15, No. 2, Springer, 77-99.

— [2005], “Urbewußtsein und Unbewußtsein in Husserls Zeitverständnis“, in *Husserl Studies*, Vol. 21, No. 1, Springer, 17-33.

Rodemeyer, Lanei, M [2006], *Intersubjective Temporality*, Dordrecht, Springer.

Sakakibara, T [1997], Das Problem des Ich und der Ursprung der genetischen Phänomenologie bei Husserl, in *Husserl Studies*, Vol. 14, No. 1, Springer, 21-39.

Schnell, Alexander [2002], “Das Problem der Zeit bei Husserl. Eine Untersuchung über die husserlischen Zeitdiagramme“, in *Husserl Studies*, Vol. 18, No. 2, Springer, 89-122.

Summa, Michala [2014], *Spatio-temporal Intertwining: Husserl's Transcendental Aesthetic*, Springer.

Zahavi, Dan [2011], “Objects and Levels: Reflections on the Relation Between Time-Consciousness and Self-Consciousness”, in *Husserl Studies*, Vol. 27, No. 1, Springer, 13-25.

アウグスティヌス、『アウグスティヌス著作集 5 卷 II』宮谷宣史訳、教文館、2007 年。

ロヴェッリ、カルロ[2019]、『時間は存在しない』、富永星訳、NHK 出版。

榊原哲也[2009]、『フッサール現象学の生成 方法の成立と展開』、東京大学出版会。

田口茂[1996]、「フッサールの「モノド」概念——相関と現実化——」、『現象学年報』、第 11 号、日本現象学会、193-204 頁。

——[2004]、「〈私〉の比類なき増殖——フッサールにおける志向的変様論とモノド化の問題」、『現象学年報』、第 20 号、日本現象学会、15-27 頁。

——[2010]、『フッサールにおける〈原自我〉の問題』、法政大学出版局。

——[2014]、『現象学という思考』、筑摩書房。

田島節夫[1996]、「自己言及性と現象学」、『現象学年報』、第 12 号、日本現象学会、89-104 頁。

谷徹[1988]、「隠れたる自然——現象学と非現前の思惟——」、『現象学年報』、第 4 号、日本現象学会、101-114 頁。

——[1993]、「時間の深淵への問い」、新田義弘他 編集『【岩波講座】現代思想 6 現象学運動』所収、岩波書店、81-119 頁。

——[1996]、「フッサール現象学と目的論」、『現象学年報』、第 11 号、日本現象学会、139-153 頁。

——[1998]、『意識の自然』、勁草書房。

富山豊[2015]、「フッサール初期時間論における過去の構成と過去の実在性」、『現象学年報』、第 31 号、日本現象学会、171-178 頁。

中澤栄輔[2007]、「時間意識と時間図表」、『現象学年報』、第 23 号、日本現象学会、185-193 頁。

中村拓也[2007]、「フッサール現象学における個性と時間性」、『現象学年報』、第 23 号、日本現象学会、195-202 頁。

中山純一[2005]、「フッサールにおける個性化の問題」、『現象学年報』、第 21 号、日本現象学会、145-149 頁。

新田義弘[2001]、『世界と生命 媒体性の現象学へ』、青土社。

ベルネット、ルドルフ[2004]、「実在的時間と想像的時間——ベルナウ草稿による時間的個性化——」、『フッサール研究』、第二号、和田渡訳、25-42 頁。

真達大輔[2006]、「ベルナウ草稿における未来予持と時間の始まり」、『現象学年報』、第 22 号、日本現象学会、173-176 頁。

武藤伸司[2013]、「『ベルナウ草稿』における未来予持と触発——意識流の構成における未来予持の必然性を問う——」『現象学年報』、第 29 号、日本現象学会、157-165 頁。

——[2018]、『力動性としての時間意識』、知泉書館。

村田憲郎[2017]、「『時間意識についてのベルナウ草稿（1917/18）』を読む」、『フッサール研究』、第 14 号、フッサール研究会、201-217 頁。

柳川耕平[2017a]、「フッサール初期時間論から中期時間論への予持概念の変化」、『フッサール研究』、第 14 号、フッサール研究会、29-45 頁。

——[2017b]、「『ベルナウ草稿』における二重の予持」『現象学年報』、第 33 号、日本現象学会、101-109 頁。

山崎庸佑[1989]、「自己と時間」、『現象学年報』、第 5 号、日本現象学会、39-56 頁。

吉田聡[2017]、「生成する時間 『C 草稿 時間構成についての後期テキスト（1929 - 1934）』を読む」『フッサール研究』、第 14 号、フッサール研究会、218-234 頁。

吉田伸夫[2020]、『時間はどこから来て、なぜ流れるのか？ 最新物理学が解く時空・宇宙・意識の「謎」』、講談社。

ローマー、ディーター[2004] 「フッサールのベルナウ草稿につながる予持の分析——予持は何を“予持”するのか?」、『フッサール研究』、第二号、浜渦辰二訳、191-206 頁。

和田渡[2003]、『『ベルナウ時間意識草稿（1917/18）』の読解——自我（作用）と意識流（自我の生）の絡み合いの探求』、『現象学年報』、第 19 号、日本現象学会、87-96 頁。